

語り継ぐ 3

幼稚園年長で体験した阪神・淡路大震災を

高校 3 年生の言葉で語る

兵庫県立舞子高等学校

環境防災科 3 年

発刊にあたって

学校長 中杉隆夫

防災の心や防災思想・災害文化を専門に学ぶ「環境防災科」が本校に誕生してから、今年度で5年目を迎えている。

設置のきっかけとなったのは、平成7年1月17日の阪神・淡路大震災であった。高速道路や鉄道の線路が折れ曲がり、私たちが誇りに感じていた神戸の美しい街並みは、瞬時にして無機質な土色と化し、無残な姿をさらしていた。あちこちで火柱が上がり、不気味な黒煙が厳寒の冬空を覆い尽くしていた。そして、何よりも六千名を超す尊い人命が失われた。

その日から十有余年の歳月が流れた今日、記憶や体験の風化という言葉が巷間で囁かれ、私たちの日常の中にもその実体が静かに、無意識裡に根を下ろし始めているように思う。あの震災とは何だったのか。名状しがたい現実を前に、私たちはそこから何を学び、これからどう生きていくべきなのか、改めて、そんな想いにとらわれる。

ところで、この『語り継ぐ』は、3年間の学習の成果をまとめる「卒業研究」の一環として編まれたものであり、環境防災科第3期生の震災体験や震災への思いを綴ったものである。

大仰に言うなら、震災の教訓が風化してやまないことに対する生徒たちの「否（ノン）」という意思表示でもある。自然とは何か、社会とは何か、災害とは何か、家族とは、絆とはどんな意味をもっているのか。根源的な大人たちへの問いかけとともに、多くの同世代に生きる若い人たちへのメッセージでもある。

この文章を書いた諸君は、震災当時、多くが幼稚園児であった。未曾有の衝撃を鮮明に憶えている者もいれば、幽かな記憶を辿り、心の有り様をつむいだ人もいた。しかし、それらが直接経験であったにせよ、間接経験だったにせよ、多くの生徒たちが、家族や両親をはじめ、地域や街角のおじちゃん、おばちゃんたちの協力を得ながら、自分の目や耳で捉えた大震災の教訓を再構成し、成長への糧にしようと努めていることである。

震災は、確かに大きな犠牲と試練を私たちにもたらしたが、その中から立ち上がる知恵や勇気を与えることも忘れなかった。そのことを、若い世代の生徒諸君が、地道にかつ真剣に学び、「いのち」の大切さを体得してくれていることを心強く思う。

今後も、こうした震災の教訓を「つなぎ」「伝え」「広げる」営みが、より多くの人々の心に根付き、社会の防災思想や減災文化として育っていくことを心から願うとともに、本誌が阪神・淡路大震災の語り部として些かなりともお役にたてれば幸いである。

平成18年9月26日

も く じ

題名	名前	震災時の住所	ページ
発刊にあたって	中杉 隆夫		2
人生を変えた出来事	浅田 悠貴	神戸市西区美賀多台	4
忘れていく記憶	東 英奈	和歌山市毛見	7
一生きえることのない悪夢	淡立 裕司	神戸市須磨区	11
記 憶	池原 彩乃	神戸市須磨区中落合	14
これから生きていくために・・・	伊藤 光希	島根県松江市春日町	19
こんなこともあったんだ	岩井 雅人	神戸市須磨区妙法寺	23
「怖い体験、貴重な体験、忘れてはいけない体験」	翁 明德	神戸市須磨区東白川台	28
未来への防災メッセージ	大西 健太	神戸市兵庫区北逆瀬川町	31
災害から学んだこと	勝見 久美子	中国	35
語り継ぐ―神戸が揺らいだ日	神谷 晃平	神戸市垂水区星陵台	40
遠い昔に起こったこと	河上 悟	神戸市西区伊川谷町	44
震災の記憶	川口 潤	神戸市須磨区禅昌寺町	49
家族の大切さ	神戸アーノルド優人	アメリカ合衆国ニューヨーク州	53
僕の震災体験	北野 友輝	神戸市長田区腕塚町	57
私の震災体験と教訓	木村 仁美	神戸市西区伊川谷町	60
地震から11年	坂本 舞	神戸市須磨区高倉台	64
人生とは旅である。旅とは人生である。	鮫島 和博	神戸市垂水区多聞台	68
あの日から11年	島本 裕也	神戸市垂水区星陵台	73
阪神・淡路大震災から生まれたの	鈴木 美穂	神戸市垂水区西脇	78
阪神・淡路大震災	西川 安國	神戸市東灘区住吉台	83
私と阪神・淡路大震災	則元 麻依	神戸市垂水区清水が丘	87
僕が見た震災	橋本 聖司	神戸市須磨区車尾鼻	92
神戸の光	松尾 智也	神戸市東灘区魚崎	96
傷 跡	松本 容史子	神戸市西区美賀多台	101
あの日の記憶	宮内 奈苗	神戸市垂水区福田町	106
生きていこう	森崎 龍太	神戸市長田区上池田	111
僕の震災体験	山本 竜平	神戸市垂水区南多聞台	115
命と絆	山脇 茜	神戸市須磨区白川台	119
震災が僕に教えてくれたこと	横峯 誠悟	神戸市西区学園西町	124
阪神・淡路大震災と僕	吉田 傑	神戸市垂水区桃山台	129

人生を変えた出来事

神戸市西区美賀多台
浅田 悠貴

【何不自由ない生活】

僕は生まれてからずっと、この神戸に住んでいる。僕が住んでいる住宅街は、普通の住居が並ぶ、普通の住宅街だ。そんな中で僕は、なに不自由なく生活してきた。好きなときに電気を使うことができるし、いつでも水を飲むことができる。そんな快適な環境で生活していたので、そんな日常が当たり前だと思っていた。阪神・淡路大震災が起こるまでは…。

【時間の止まったあの時】

あの日、僕はいつものように1階の和室で寝ていた。このとき母と妹も同じ部屋で寝ていて、父だけが2階の寝室で寝ていた。僕は、一生忘れることができないアレが足をしのばせながら近づいてきていることなど知る由もなく、ぐっすりと眠っていた。あの5時46分、あの突き上げるような揺れで僕は起きた。今まで体験したことも無いような激しい揺れ。本当に怖かった。ただただ怖くて、頭まで布団をかぶることくらいしかできなかった。隣に寝ていた母は、「神様、助けてください」と何回もつぶやいていたような気がする。実際には10秒くらいしか揺れていないのだが、僕にはもっと長く揺れているように感じられた。あのときのことは、多分死ぬまで忘れることはないだろう。

【被害】

しばらくすると、地震の揺れが収まった。すると両親はリビングの様子を調べに行った。僕は、またあの揺れが来るのではないかと不安だったので、親にぴったり引っ付いていた。リビングは、一見いつもと変わったところはなかった。しかし、台所や食器棚はすごいことになっていた。食器棚はかろうじて扉は開いていなかったものの、中の食器が嵐に巻きあげられたように散乱していたし、台所にある箆立てや調味料のビンなどが乱雑に倒れていた。僕は、何がどうなったのかわからなかったの、ただおたおたしていた。それに気づいた両親は、僕に「大丈夫やから、もうちょっと寝てなさい」と言ってくれた。僕は、その言葉に素直に従った。しかし、布団に入った後もしばらくは寝ることができず、また地震が起こるのではないかという不安でがたがたと震えていた。

【翌日】

僕は、朝の7時に起こされた。もちろん幼稚園に行くためである。起きてきたときにはリビングや台所は大方片付いていた。ただ、食器棚のほうは、扉を開けると雪崩のように落ちてきそうだったので、両手に毛布を持って受け止めていたが、数枚のお皿が落ちてしまった。そのような光景を見ながら、僕は朝食の焼いていないパンを食べていた。このとき、電気はもちろんガスも出ていなかった。水は、朝から出ていたようだ。後で聞いた話によると、僕の住んでいる家の周りも、水は止まっていなかったらしい。もちろん全部が全部止まっていなかったわけではない。ほかの丁目では、断水しているところがあったと、父は言っていた。電気とガスもこの日のうちに復旧したが、ガスは配管にひびが入っていたりしてガス漏れしたら危ないということで、しばらくの間は使わなかった。

幼稚園のほうはというと、結局休みになったらしい。電話が使えない状況で、どのようにして情報が入ってきたかということ、母が友達のお母さんに教えてもらったらしい。友達のお母さんからその友達の

お母さんというように、てんてんとしながら連絡が回っていたのだ。しかし、回ってきた情報は、「幼稚園が休みになった」と「元町のほうが大変なことになっている」の2つだった。「元町のほうが大変なことになっている」という言葉を聞いたとき、まだ幼かった僕にはどんなに大変なことになっているか、想像すらできなかった。

【戦慄】

1月17日のお昼、家族そろって昼ごはん（といっても、たまたま買っていた菓子パンなのだが...）を食べていると、父が「もしかしたら、電気が戻っているかも」とテレビをつけた。すでに電気は戻っていたらしく、テレビはいつもと同じように番組を映し出した。ちょうどニュースの時間だったらしく、アナウンサーが僕たちに向かってしゃべっている。いつもなら興味ないのだが、このとき映し出された映像に僕の目は釘付けになった。このときテレビに映し出された映像、それは百貨店の連絡通路が落ちかかっているシーンや、崩れた高速道路の上を走っていて間一髪で落ちなかったバスなどの中継映像だった。こんなショッキングな映像を見たのは初めてだった。現実には起こっているとは思えなかった。あのころの僕は、大きなビルは絶対倒れないものだと思っていたからなおさらだった。こんな恐ろしいことが、あの一瞬で起きたなんて信じられなかった。このとき、初めて地震の恐ろしさを感じた。

【その後の現場】

阪神・淡路大震災が起こってから数年間、僕は父の職場に何回か連れて行ってもらった。職場の場所とはよく覚えていないのだが、車でその町を走っていると、瓦礫が積み上げられた空き地や屋根をブルーシートで覆った家などが多く目に付いたことだけは覚えている。テレビを通して見るのと、実物を目の前にしてみるのとは大きく違うもので、ここで本当に阪神・淡路大震災があったのだと再び実感させられたものだ。あの時目にした光景は、今でも鮮明に思い出すことができる。この光景を思い出すたびに、神戸に住んでおきながらひどい災害に会わなかったのは、本当に幸せなことなのだと思う。

地震の後の僕の家は、一見何の被害も受けてないように見えるが、実際のところそうでもない。壁にはひびが入り、タイルははがれている。このほかにもあるが、一番被害が大きいのは「家が傾いている」ことだ。もう文字のとおりである。ビー玉を床に置くと転がっていつてしまうところが、多少あったりするのだ。普通に住んでいる分にはまったく気にならないのだが、阪神・淡路大震災クラスの地震が再び我が家を襲ったら、あのときに受けたダメージのせいで倒壊してしまうような気がする。

【あのときを振り返って】

早いもので、阪神・淡路大震災が発生してから11年がたった。11年前の記憶、つまり幼稚園に通っていたころの記憶は、まったくといっていいほど残っていない。しかし、阪神・淡路大震災にあったときのことだけは今でも鮮明に覚えている。阪神・淡路大震災関係のときに、ときどき思い出すことがある。あのとき、妹は生まれてからまだ間もないくらいだったのだが、この日はいつも以上にぐずっていたので、母と一緒に寝ていた。ここで地震が襲ってきたのだが、いつも妹が寝ていたところ、しかもちょうど頭のところにブラウン管のテレビが落ちていたのだ。いつもと同じように寝ていたら、今頃いつもの風景である兄弟喧嘩もできなくなっていただろう。阪神・淡路大震災は、人からそんな日常なことすらも奪っていつてしまった。震災が残した傷跡は、そう簡単には癒えないだろう。少なくとも、僕の中にある傷跡は一生癒えることはないと思う。これは傷跡と言ってよいのか判らないが、震度3程度の小さな地震ですら、体が震えてしまう。意識はしていなくても、ちょっとした揺れだけで体が反応してしまうのだ。専門家などの診察などは受けたことはないが、この震えの原因は阪神・淡路大震災にある

と思っている。

僕は、今年の1月17日に三宮の東遊園地でロウソク立てのボランティアに参加した。この後に行われた行事にも参加したのだが、阪神・淡路大震災の傷跡はまだ癒えていないと、ここで思ったのだ。この式典には多くの人が参加していたが、参加した人々はロウソクに向かって手を合わせ、涙を流していた。阪神・淡路大震災の被害を受けた人に終わりはないような気がする。自分自身、ちょっとした揺れに敏感になってしまったなどの後遺症みたいなものを引きずってしまっているし、親しい人を亡くしてしまった人なんて、人の死を背負って生きていかななくてはならないのだ。でも、終わりが無いからといって停滞しているわけにはいかない。僕たちは前に進んでいかなければならないと思う。僕たちが前に進んでいかないと、阪神・淡路大震災を知らない世代の人たちに知られないまま風化してしまい、また同じことが繰り返されることになるだろう。それだけは絶対に避けたいといけな

【防災を学んで】

僕は、自分の体験を生かせたらいいなと思い、環境防災科に入った。今、僕は多くのことを学んでいる。防災のことを勉強しているとき、あの時は防災について何も知らなかったのだと良く思う。阪神・淡路大震災が起こる前の神戸では、絶対に地震は来ないと市民の間でいわれていた。これは神戸市民だけではなく、行政関係の仕事をしている人でも信じていたらしい。もちろん、これは間違った情報だった。現実に阪神・淡路大震災という大きな災害が神戸の町を襲った。それでは全部の人間が口をそろえて言っていたのかというと、実はそうでもないのだ。地震などの専門家は、阪神・淡路大震災が起こる前から警告を発していた。専門家たちには、神戸に地震が起こらないというのがデマだということが最初からわかっていた。それでは、なぜ市民や行政にそのことが伝わらなかったのだろう。答えは「つながりがなかったから」である。いくら専門家が「地震が起こる」と指摘していても、専門家と一般市民や行政のあいだにパイプ役が存在しなければ、一向に届くことはない。これでは、いくら警告を発してもまったく意味がない。今では当たり前のことも、当時はまったくなされていなかった。そういう姿を見たら、本当に無知だったのだと思うのも仕方ないだろう。このような無知が常識だと認識されるという状況が生まれたのは、やはり防災などの知識が抜けていたからだと思う。ちゃんとした知識を身につけておけば、個人単位では、あらかじめ水や食料などを貯蓄し、災害が起こっても自分で考え行動できる。行政も知識があれば防災プランなどを作成し、災害が起こっても迅速に対応できるはずなので、少なくとも阪神・淡路大震災クラスの災害が起こっても被害はまだマシになるはずだ。

【まとめ】

僕は、地震のときのことを鮮明に覚えている。この言葉に偽りはないのだが、実際覚えているのはとてもわずかで、地面が揺れているときとその後リビングに行っておたおたしていたときのことで、そして阪神・淡路大震災が発生してから数年たったときに見た光景の3つの場面しか覚えていない。ほかの箇所はすべて両親から聞いた話だ。この文を書いていて、自分の頭の中でも風化が着実に進んでいることに気づかされた。これに気づいたときは少しショックだった。だからこそ、この風化してしまった部分は、勉強して得た知識で補っていかなければならない。

前にも書いたが、阪神・淡路大震災が起きてから11年になる。自分の頭の中でも、社会的にも、風化がどんどん進んでいる。僕たちは、必死に勉強して後世に伝えていかなければならない。それが、あの阪神・淡路大震災を体験した者の最大かつ最重要の義務だ。僕はこの義務を精一杯努力して全うしていきたい。

忘れていく記憶

和歌山市毛見
東 英奈

地震が発生するまで

父・母・兄（小4）・姉（小2）・私（6歳）の家族5人は、父の仕事の都合で各地を転々とし、1994年4月からは和歌山市内に住んでいた。

1月14日から16日が3連休だったため、母方の祖父母の家のある神戸に遊びに行く予定だったが、私が熱を出してしまったので祖母が和歌山の我が家に来ていた。17日は兄・姉の学校と私の幼稚園があったので、祖母は16日の夜に神戸に戻った。

地震発生当日

阪神・淡路大震災が発生した1995年1月17日早朝、たまたま父が早く出勤するため父と母は起きていた。

出発の準備をしていると、地震が発生した。私たちが住んでいた和歌山市内は震度4だったので、兄弟は3人とも寝ていた。揺れていた時間は実際には10秒くらいだったが、母は30秒くらい揺れたように感じたそう。

地震が発生すると我が家では、すぐにテレビをNHKにする。しばらくテレビを見てみると、神戸で大きな被害が出ていることが分かった。

父方の祖父母は淡路島の南淡町、母方の祖父母は神戸市垂水区に住んでいた。

テレビを見てすぐに母は、神戸の祖父母の家に電話をかけた。するとすぐに繋がり、無事だということが分かった。そして、淡路島の祖父母の家にも電話をし、無事を確認した。そのときは普通に電話が繋がったがその直後から繋がらなくなったので、それから公衆電話から電話をかけたそう。

父の勤務先は和歌山市内だったが11階にあったため、会社に着くと机の引き出しが全て出ていたそう。

地震発生から数日後

親戚もたくさん神戸・淡路島に住んでいたため、電話をかけ安否を確認した。全壊した家もあったが、幸い全員が無事だった。

母は、急いで水や即席の味噌汁、カップラーメンなどを購入し、実家に送っていた。

その後、生まれ育った神戸のまちの状況がだんだん分かり、心配した母は体調を崩し1週間ほど寝込んだ。

祖母の話

地震が発生し、すごく揺れ「ドンッ」と上へ突き上げられたあと、ぐるぐる回されたように感じた。

その日たまたま逆向きで寝ていたため、祖父の枕元にテレビが落ちてきた。あと数センチで祖父の頭の上に落下していたらしい。

外に出ると土地が上がったか下がったかで、5センチくらいの段差ができていた。床下は掘れ、畳がゆさゆさしていた。台所では食器がたくさん落ちて、普段祖母が裁縫などをしていた部屋の本棚は倒れかかっていた。家の外から周りを見渡すと、長田のほうで黒い煙があがり、火の粉が散っているのが分かったらしい。

水がなくて近くの学校のプールの水をもらいに行ったり、車で運んだりした。給水タンクなどは当時持っていなかったため、バケツにポリ袋をかぶせ、その中に水を入れこぼれないようにして運んだ。も

らってきた水はお風呂に溜め、トイレを流したりするのに使った。水・電気は直後に通じなくなったが、ガスはお昼ごろまで来ていたので、祖父のおかゆを作ったりしていた。その後ガスも使えなくなり、ガスが復旧までに一番長く時間がかかったらしい。

水が出ないと洗い物ができないので、食器にラップをし、その上に食べ物をのせていた。

水を分け合ったり、給水車が来たら並んだり、とにかくみんなで協力した。

土曜日に淡路島の親戚の家に行った。北淡町などは被害がひどかったが、親戚がたくさんいた南淡町は被害が少なかった。福良は水がまだ通ってなかったが、そのころちょうど水不足で断水などをしていたため、お風呂などに水を溜めていたので、さほど困らなかったらしい。

祖母が行った潮見台は時間給水ではあったが水があったので、普通に生活できたそう。土曜日までずっとお風呂に入れなかったが、冬だったのでまだマシだったと言っていた。

淡路島の南淡町に住む祖父母の家は地震で壁が落ち、2階に飾っていた父の賞状や、習字の書など額に入っているものはすべて落ちたらしい。震災当時、断水で水を溜めていたので、困らなかったと言っていた。祖父母の家はとても広く、3軒家がある。手前の2軒は繋がっているが、奥のお風呂のあるほうは繋がっていない。その奥の家のお風呂は、今でも横のタイルはところどころはがれていて、浴槽は傾いている。

友人の話

●神戸市垂水区舞子台

父・母・姉(小5)・私(6歳)の家族4人は私が2歳のときに神戸に来て、それからずっと舞子台の家に住んでいた。

前日に勉強机を買ってもらい上機嫌だった。父は日付が変わってから帰宅し、ラーメンを食べていた。その後、2階の寝室で父・姉・母・私の順で寝ていた。父の横にはタンス、私の横には鏡台があった。

5時46分、地震が発生した。父・母・私は叫んだが、姉は寝ていた。父の上にうさぎの陶器の置物が落ちてきたが、幸い怪我はなかった。1階に降りると母に「スリッパを履きなさい」と言われた。

父が夜中にラーメンを食べていたため、食器棚が開きっぱなしになっていて、ほとんどの食器が落ちていた。電子レンジも落ちていたが、その後3年間使えた。水道が止まっていたので、ラーメンを食べた器が洗えなかった。

外に出てみると、玄関前のレンガが崩れ、瓦が落ち、ひび割れもしていた。家のまわりのブロック塀は崩れ、植木鉢も落ちていた。壁もボロボロで、亀裂がいっぱい入っていた。家が斜めに傾き、ドアがゆがんだ。父が舞子の浜に砂を取りに行き、セメントを作り玄関前などの補修をした。

トイレはタンクに水を溜め、何回かに1回流していた。水は、近所の家に井戸があったので、そこからもらっていた。実際は自分の家からその家までそんなに距離はなかったが、小さいころだったのでよく遠く感じていた。

幼稚園が休みになりすごく暇だったので、電気が通っていることもありずっとセーラームーンのテレビゲームをしていた。

知り合いの人からかつおのおにぎりや毛布が届いて、近所の人たちと分けた。

ガスは使えたので、家族で協力してお風呂に水を溜め、いつも父と姉と3人で入っていた。水道が復旧するまで2、3週間かかったので、2、3週間ぶりのお風呂はとても気持ちがよかった。電気はずっとついていたが、電話は繋がらなかった

昔住んでいた芦屋の家を父が見に行くと、ぺちゃんこに潰れていたらしい。

●神戸市垂水区海岸通

父・母・姉(小5)・兄(小4)・姉(小3)・私(6歳)の家族6人は、アジュール舞子のすぐそば

の海岸通のマンションの6階に住んでいた。家族みんな生き物が大好きなので、魚や鳥などいろいろな生き物を飼っていた。

地震が起こった瞬間は寝ていた。すぐ上の姉がタンスの下敷きになり、自分の顔の横には本棚が倒れていた。

とにかく家の中はぐちゃぐちゃだった。冷蔵庫の中の物、食器棚の皿はほぼ全部飛び出して、水槽の魚も出ていて、中には割れた皿で切れている魚もいた。水槽が大きかったので家の中が水浸しになってしまい、新聞紙を敷き詰めていた。当時幼稚園児の私は部屋から出してもらえなかった。

お風呂は銭湯に行っただが、結局入れず親戚の家で入らせてもらった。父と母は水を貰うため、毎日小学校に行っていた。電気は次の日、水道は1週間、ガスが復旧するまで1ヶ月かかった。

●神戸市垂水区霞ヶ丘

父・母・私(6歳)・弟(0歳)は霞ヶ丘の一軒家に住んでいた。近所に同い年の友達がたくさん住んでいて、幼いころからよく一緒に遊んでいた。

地震が発生した瞬間、私は地震に気付かずに寝ていた。しかし、父と母が駆けつけてくれた時の足音で目が覚め、揺れているのが分かった。地震の揺れはかなり大きかった。

地震がおさまって落ち着いてから1階に下りたら、食器棚が開いていて前の方にあった皿やコップがたくさん割れていた。

家自体に被害はほとんどなかったが、水道が止まっていたので近所の水汲み場に行き、周りの人と協力して各家に水を手配した。

●神戸市東灘区甲南町

父・母・姉(小2)・私(6歳)・弟(4歳)・弟(1歳)の家族6人は東灘区甲南町のマンションの10階に住んでいた。

地震が発生したとき、はじめはクローゼットの中がガタガタいっていたので、泥棒がいるのかと思っていた。寝ていたので揺れも感じなかった。起きてみるとタンスなどが倒れていて開かない部屋もあり、色んなものが割れていた。

食料は近くのコンビニまでパンを買いに並んだりした。幸い、住んでいたマンションの下がうどん屋だったので、水はそこでもらえた。

友達の家が潰れたり、斜めに傾いたりしたマンションもあった。道もたくさんヒビが入っていた。

何日か後に大阪の親戚の家に避難するのに車で行ったが、すごく時間がかかった。

地震のことはしっかり覚えていないが、部分部分は覚えている。揺れの怖さよりも地震後の街の様子や、サイレンの音の怖さの方が記憶に残っている。ガスが復旧するまで1ヶ月近くかかった。

幼稚園でランドセルを無料で配っていたので、私も貰った。

●神戸市東灘区

父・母・私(6歳)の家族3人は、東灘区の木造アパートの2階に住んでいた。

地震が起こった瞬間は寝ていたが、母の悲鳴で目を覚ますと、タンスが斜めになって倒れかけていた。玄関のドアが潰れていて開かなかったので、窓から裸足のまま外に逃げた。近所のおばちゃんが裸足だった私に靴を貸してくれた。周りは火事が起こっていたりもした。

私が住んでいたアパートは1階が潰れ、全壊だった。1階に住んでいた人が亡くなった。

避難所に行く途中、家の前で雑炊を作っていて、名前も知らないような人に雑炊を貰った。全然知らない人なのに雑炊をくれて、その優しさがとてもうれしかったので今でも覚えている。自衛隊の人がパンと毛布をたくさん持ってきてくれた。

環境防災科に入って

外部講師の方の話や、野島断層、人と防災未来センターを見学したりして、改めて阪神・淡路大震災の悲惨さを知った。全然知らなかったライフラインのことや、避難所のこと、人命救助、ボランティアなどたくさんの方からお話をさせていただいて、表面的なことだけでなく裏の裏まで阪神・淡路大震災を知ることができた。

消防学校体験入校など、普通に人ができないようなことをたくさん体験でき、また命をかけ人の命を助ける消防士の素晴らしさが分かった。

地震のメカニズムや、今後起こり得る地震のシミュレーションなど、これから必要な知識もたくさん吸収でき、また街頭募金活動や、新潟ボランティアなどさまざまな災害と関わって、人の温かさを知った。国が違って同じ人間なんだなぁと実感した。

これから

阪神・淡路大震災が発生してから 11 年が過ぎ、震災の記憶は少しずつ薄れていっている。しかし 6434 名の方が命を落とし、数え切れないほどの人が心に傷を負ったのは事実であり、絶対に風化させてはいけないと思う。

私たちは震災を覚えている最後の世代と言われている。阪神・淡路大震災の経験を踏まえ、これからの防災、ボランティアの在り方を、次の世代に伝えていくのが私たちの使命だ。今までたくさん専門知識を身につけたので、これからは色んな人にそれを発信していかなければならない。

これから生きていくのに、災害は切っても切り離せないのが現実だ。阪神・淡路大震災のような大災害が起きても、被害を少しでも減らすことができればいいと思う。そのために私たちがこれからできることはたくさんある。少しでも多くの人の命が助かるために、少しでも多くの人が悲しまなくてすむように、この環境防災科で学んだことを生かし、人々に防災の大切さを教えていきたい。日本だけに限らず、世界各国の人々に。

一生きえることのない悪夢

神戸市須磨区
淡立 裕司

1.地震発生

平成7年（1995年）1月17日午前5時46分、淡路島北淡町野島断層を震源とするマグニチュード7.3の地震が発生した。

あの悪夢が起きる10分ほど前、僕と妹は母に連れられてちょうどトイレから帰って布団に入っていたところだった。どうしてこんな朝早くにトイレに連れて行ったのか母に聞いてみると「目が覚めてしまったからトイレに連れて行こうと思った」と言っていた。僕が寝ていた部屋には母と僕、妹が寝ていて父は少し離れた部屋で寝ていた。僕が寝ていた部屋にはテレビ、パソコン、本棚、花瓶、タンスなどが置いてあってそれらに囲まれるようにして寝ていた。父の部屋は大きな洋服ダンスが部屋の両側にありその間に父がはさまれるように寝ていた。

「ゴーーー」と遠くのほうから今までに聞いたことのないような音がした。僕は「怪獣がきた!」と思った。その瞬間、下から「ドン!」と上に吹き飛ばされるような揺れが襲った。家が怪獣に振り回されていると思った。揺れは、どんどん激しくなり家の中をむちゃくちゃにしていく。母はただ「大丈夫、大丈夫だからね」と僕と妹に話しかけていた。揺れがおさまって「ゴーーー」という音は小さくなっていったが、体にはまだ揺れている感覚が残りととても怖かった。ちょっとした音にも敏感に反応してしまった。

揺れがおさまり、父が寝室から出てきた。母は「大丈夫?」と声をかけると父は「大丈夫、今からそっちに行くから動かずそこにいろ」といった。父の部屋と僕たちが寝ていた間にはキッチンがあり食器棚からは、ほとんどの食器が落ちて割れていた。父はまず玄関に行き、ドアが開くかを確認してから家族分のスリッパを持ってきてくれた。そして父は、外の様子を見に行き、母は食器の跡片付けをした。僕と妹はただそれを見ているだけだった。幸い団地の被害は少なく、亡くなった人もいなかったし、倒壊もなかった。そして父が帰ってきて母と一緒に食器をライトで照らしほうきで掃いて掃除をした。

日がだんだん昇って明るくなってきて部屋の状況もだんだんわかるようになってきた。部屋は廃墟に近い状況になっていた。昨日まではとても片付いていた部屋が見るも無残に散らかっていた。僕が寝ていた部屋は、テレビやパソコンが倒れているくらいでたんすは倒れてはいなかったが、父の部屋は生きているのが不思議なくらいぐちゃぐちゃになっていた。たんすが倒れ、洋服ダンスからは服が飛び出ている家の中で一番被害が大きかった。父は地震が起きる瞬間布団に包まらず、部屋の両側にあったタンスを支えて倒れないようにしていた。しかし立って支えることができなくて、座り込んでしまいなすすべが無かったと言っていた。

食器も片付き部屋を見て回ることを許されて、部屋を見て回っていたら気分が悪くなり僕は吐いたそう。子供なりに被害の大きさに驚いていた。母のお腹にはもう1人の妹がいて予定日が近かった。母はあの大きな地震から3人も守ってくれた。今思うと「やっぱり母は強い」と思った。

2.地震発生当日の朝

1月17日午前8時、電気がつかなくテレビも見えなく情報がまったく入ってこなかった。父はまだ足の踏み場も無く、どこに何があるかわからない部屋からラジオを探してきて、母と一緒に真剣に耳をかたむけていた。最初は「近畿地方で大きな地震がありました」くらいの情報しか流れてこなかったけど時間がたつにつれ死者・行方不明者の数がどんどん増え、長田で火災が起きていて神戸は壊滅状

態などいろいろな情報が聞こえてきた。ベランダから長田の町のほうを見ると、とても高くまで火が上がって、真っ黒な煙が上がっているのが見えた。板宿近辺に親戚が多かったのもとても不安だった。

ライフラインが遮断され、水・ガス・電気がまったく使えなく朝ごはんは焼いてないパンと生ぬるい牛乳だった。電気が使えないので冷蔵庫の腐りやすいのから食べていくことになったが、父がインスタントラーメンが好きで僕の家にはたくさんのラーメンがあり、食べ物には困らなかったし、水も風呂釜にためていたので困らなかった。

舞子に祖父と祖母が住んでいて、一軒家で屋根が瓦屋根だったので、地震が起きて祖母が外を見ると瓦が飛んで宙をまっていたそう。祖父の家も幸い被害がほとんど出ず、倒壊もせずひびもほとんどはいらなかった。しかし瓦が屋根からすべて落ちてしまっていた。

祖父と祖母はとても行動派の人で地震発生後すぐに僕の家へ駆けつけてくれた。しかも途中のコンビニで大量の飲み物と食べ物を買ってきてくれた。その日は祖父と祖母も僕の家泊まり次の日に帰っていった。母の実家も僕の家すぐそばにあり、父が見に行ったら家もほとんど無傷の状態被害は無かったそう。

3.地震発生からの生活

地震発生から1週間がたち少し行動に余裕が出てきたので父と僕とで近くの中学校と小学校に水を汲みに行った。どちらもすごい数の人がポリタンクやバケツ、ペットボトルなどを大量に持って蛇口に並んでいた。水を汲んで家に帰るまで3時間もかかった。家では母がご飯を作ったり妹の世話をしたりしていた。

27日、そんなことをしていると母の陣痛が始まり、祖母が駆けつけ父と一緒に病院に向かった。僕と妹と祖父は家で留守番になった。母は、病院に行くとき「すぐに帰ってくるからね」と言ってくれたけど、晩になり僕と妹は母親シックになり泣いて泣いて祖父が困り果てていたそう。特に僕がひどく甘えんぼだったらしく、妹以上に泣いていたそう。

無事妹が生まれ、母のもとへ行ってもよくなったので父が僕と妹を車に乗せ母のいる病院へ向かった。母のいる産婦人科はなんと被害が大きかった元町にあり、車から見える景色は道路がいたるところで隆起して、建物は倒れて焼け落ちた家や、ガラスが散乱した町並みだった。しかし母が産婦人科ではひびが入っているだけで大丈夫だった。母の病室から見える風景はもし地震が無かったら神戸の下町が見えるとてもいい部屋なのに、その当時は、見るもの無残な神戸の町が広がっていたそう。祖父と祖母はここでも行動派を発揮し、いろんなところから食べ物や飲み物、お菓子などを持ってきた。僕のランドセルもどこからか、持ってきた。

母がいない父と僕と妹の3人の生活がはじまり、父はもともと几帳面で料理もうまかったのもその辺は苦労はしなかったそうだが、一番苦労したのが僕の夜泣きだったそう。毎日のように夜泣きをしていたそう。しかも、ご飯もストレスから吐いてまだ小さかった妹のほうの手間がかからなかったそう。ガス電気、水道が復活してライフラインがもとのように使えるようになり生活的には普通に帰ったが、それはただ被害が少なかった場所にいただけのことでテレビからは長田の町の様子や避難所の様子が流れていた。父に聞いてはじめて分かったのだが、祖母はもと看護婦さんで人脈が広がったからたくさんの物資をもらえたそう。それにたくさんの物資を祖父と一緒に持ってあっちこちの避難所を回ったりして食べ物や飲み物を配っていたそう。とても尊敬する祖父と祖母だ。

母が病院から帰ってきて家も落ち着いてきて、父は会社に行くようになった。父の会社は高砂にあり、被害もとても出ていたし、高速が通れないので平道を通勤していたのもとても時間がかかったそう。赤ちゃんが生まれたせいか団地の人がよく家に遊びに来るようになったし、母の話し相手がたくさんできていた。情報交換もたくさんできていろいろな場所の情報がわかった。

一番母が心配していたのが余震で、すこし揺れただけでも母はまた大きな地震が来ると夜もあ

まり寝られなかったそうだ。

父や母に話を聞いていて驚いたのが、父が地震が起こる前「ごーー」と音がしたとき外を見ると向こうのほうの揺れが来るのがわかったそうだ。そして僕たちに言おうとした瞬間に地震が起きて言えなかったそうだ。母は地震が起きて病院で1人でいたとき僕と妹が心配で心配でたまらなかったそうで、地震後家族のありがたみがよくわかったそうだ。

4.感想

僕は当時5歳で何もできずただ見ているだけしかできなかったけど、もし将来結婚して子供ができれば家の親みたいになりたいと思った。そして地域の防災リーダーになりたいと強く思うようになった。

まだ、阪神・淡路大震災の傷は完全には癒えきれてないけど神戸の町と一緒に強くなって生きていきたいと思った。そのために阪神・淡路大震災のことをもっと多くの人に知ってもらうためにも語り継ぎをしていきたいと思った。

今この文を書いていって親や祖父祖母に聞いて自分が知らなかったことがたくさんあってそんなこともあったの？と思うようなことや知らなかった自分の過去も知ることができたりしてよかった。この聞いてきたことを頭において自分が間違っていたことを整理してこれを多くの子供たちや大人の人にも語り継いでいきたい。

これからまた大きな地震も体験すると思うのでそれも語り継いでいけたら日本の防災にも役に立つと思った。だからしっかり頭を整理しておきたいしもっと違うところの被害も知って僕の体験だけでなく、阪神・淡路大震災の語り継ぎをしていきたいと思った。父は阪神・淡路大震災を経験して、飲み水や、食料をためたり懐中電灯やラジオなどを準備したりするようになった。僕は僕で防災グッズをそろえていきたいと思った。

記 憶

神戸市須磨区中落合
池原 彩乃

1、始めに

あの阪神・淡路大震災から今年で11年が過ぎた。時の流れとともにまちは復興し、活気を取り戻し、そして阪神・淡路大震災などなかったかのように毎日が過ぎていく。しかし私はあのときの事を忘れることはできないし、絶対に忘れてはいけない。あの日何が起き、私が何を思い、両親がどんな苦勞をし、誰がどのように私達を支えてくださったのかをもう一度私の心に刻み込み、教訓を語り継ぐためにあの日のことを思い出してみたいと思う。

2、前日

当時私の家族は、父、母、小学3年生の姉、小学2年生の兄、幼稚園年長の私、そして4歳の弟の6人家族で暮らしていた。前日のことはほとんど覚えていないが、家族で食卓に座っていた夕方6時ごろに地震があり、棚の上においていた額縁が落ちそうになったことは覚えている。その地震が私の記憶の中の最初の地震だった。その夜私は和室で父、弟と一緒に川の字になって寝た。

3、揺れた瞬間

私は最初の揺れで目を覚ました。すぐに「地震や!」と思い、毛布をかぶった。縦揺れも横揺れもわからないほど揺れて、私は必死で毛布をつかんでいた。父は弟の横に寝ていたが、揺れの直前の大きな「ゴー」という音で目が覚め、すぐに弟の上に覆いかぶさったそうだ。私の家族は誰かが名前を呼んでもなく、悲鳴を上げるでもなく、みんなただじっと揺れが収まるのを待っていた。

4、揺れが収まって

揺れが収まるとすぐに父はみんなの無事を確認しに行った。私の家族は幸い、誰一人怪我人はいなかった。リビングは家具が少なく安全だということで、とりあえず家族全員がリビングに集合した。そのときは電気が通っていたので電気とテレビをつけた。テレビに何が映ったかは覚えていないが、おそらく地震情報はまだ出ていなかったと思う。そのとき垂水区に住んでいる祖母から電話がかかってきた。「あんたら、大丈夫か! あたしは大丈夫やからな!」。そう言って祖母は電話を切った。その直後電話は通じなくなった。私は今でも、あのときの祖母はすごかったと思う。みんなが電話を使い始め混線してしまう前に、親戚、知り合い全部に電話をかけてしまったのだ。母は今でもあのときのことを思い出して「あれは戦争を体験した人の強さやなあ」という。

5、1日目

家の中を見渡すと、リビングにある子供用の高さ1m ぐらいの本棚が倒れ、本が散乱していた。台所は食器棚の中のコップが2、3個割れたくらいで済んでいた。とにかくひどかったのは洗面所で、洗面台の上に立てていた化粧水など、すべてのものが散乱していた。他は、姉の部屋にあるピアノが15cm程度動いたのと、私が寝ていた和室のたんすが1cm程度動いただけだった。その和室のたんすは母の

嫁入り道具で、とても大きくて重い民芸だんすだった。しかもそれが枕元と足元にずらっと合計5個並んでいた。本当はかなり重いので、その中の1つが数cm動いただけで済んだが、もしもう少し揺れが大きくて倒れていたとすると、その部屋に寝ていた私と父と弟は即死だったと思う。ちなみにその動いたたんすはあまりの重さに元の位置に戻すことができず、今でも数センチ動いたままで置いてある。

その後、少しすると電気がいきなり消えてしまった。火事が発生する可能性があるので関西電力がいったん電気の供給を停止してしまったそうだ。家の中は一気に真っ暗になった。ろうそくを使い、みんなでじっとしていた。

外が明るくなるにつれ、父、母、姉、兄が家の中の片付けを始めた。私と弟は危ないからといって、布団の敷いてある和室にいなさいといわれた。朝早く起きたわけだが、こんな状況で眠れるわけもなく、ずっと和室の入り口から弟と2人で、父たちが片づけているのを見ていた。一番ひどかった洗面所は姉があっという間に片付けてしまい、母もびっくりしたそうだ。

少しすると、一番奥の父の部屋のドアがまったく開かないことに気づいた。その部屋では誰も寝ていなかったのもそれまで開けることも無く、全く気づかなかったのだ。最初はドアがゆがんだのかなと思ったりもしたが、どうも入り口の向かいに置いている、父の本が詰まった大きな本棚がドアに倒れ掛かっているのだということが分かった。あまりにも重くて全く開かなかったのも、ベランダから窓ガラスを割って部屋に入ることも考えたが、それではガラス代がもったいないということで母が必死で押すと、少しずつドアが開き始めた。20cmぐらいドアが開いたとき、母は一番体の小さな弟を呼んで、ドアの隙間から部屋に入らせ、邪魔をしている本をすべてどけさせた。それで本棚は軽くなり、やっとドアを開けることができた。

家の中がほとんど片付いたので、私はリビングでうろうろしていた。そのときいきなりパッと電気とテレビが点いた。一度電気の供給が停止したときに、電源を入れっぱなしにしていたからだだった。私はテレビに映った光景を見て声も出なくなった。それは炎がまちを食い尽くしている映像だった。もちろんこんなに大きな火事は映像でさえ見たことが無かった。全く状況を把握することができず、「これどこ？」と父に聞いた記憶がある。長田だということを教えてもらったが、同じ神戸に住んでいる私たちはこんなに被害が少なかったのに、そう遠くない長田でこんな火事が起きているなんて信じることができなかった。

母の実家は岡山なのだが、母は地震直後には実家に電話をかけていなかった。自分の家では被害が出たといってもそれほど大きな被害ではないし、身の回りで誰かが怪我をしたとか、負傷したとかいうことも無かったので、電話するまでも無いだろうと思っていたそうだ。しかし長田の大火事の映像を見て「きっと今頃おじいちゃんもこの映像見とうやろ！あかんわ！電話せな！」と思ったらしい。そしてすぐに祖父に電話しようとしたが、すでに電話はつながるはずもなく、しょうがなく近くのスーパーまで電話をかけに行った。母の話によると、10数人が並んでいたそうだが、比較的すぐに順番は回ってきたそうだ。しかし後ろにも人が並んでいるので「自分たちは大丈夫だ」ということだけ伝えて電話を切ったらしい。

私はそのままテレビをずっと見ていたのだが、いきなりお姉ちゃんがベランダで「ちょっと！あれ見て！」といった。「あっちの空が真っ赤やで！」私はその光景を今でもはっきりと覚えている。まるできれいな夕焼けのように空が赤く染まっていた。私は父に「なんであんななっとん？」と聞いた。すると父は「きっとその(テレビの)火事のせいやろ。あっち長田方面やからなあ」と言った。父もそう言いながらあまりの火事の大きさに驚いているようだった。そのとき私はやっと、テレビの映像が自分のまちの近くで本当に起きていることを実感した。

ライフラインに関してだが、地震が起きた17日のうちは水は出ていたらしい。ガスは止まることはなかったそうだ。

他に困ったのは食料だったが、1日目はどこの店も開いていなかったし、ましてや救援物資が届いているはずもなく、食料を調達することができなかったので、棚の中にあったクッキーなどでしのいだ。

6、2日目

2日目はとにかく食料を調達することが必要だった。もう開いている店があるということを知り、父と姉がまず徒歩で“ばんどう”というお店に行った。しかしすでに商品は全てなくなっていたので、次は“ローソン”へと足を運んだ。しかしまたもや商品は全てなくなっていた。次に“コープ”へ行くとまだ店は開いていなかったが、数時間待ったら開くということだったので、すでに出来上がっている行列に並んだ。数時間待ってようやく店に入ることができたが、すでに商品はほとんどなくなっていて、結局買ったのはクッキー1箱と電池だけだった。

そのころ同じ団地の誰かの家が水漏れしていることが分かり、いったん水の供給が停止してしまった。数日間はお水が出なかったらしい。私の家は24時間風呂を使用しているため常に浴槽には水をためていたので、最初のうちはそれで顔や手をまず洗い、その後トイレを流すのに使ったりしていた。しかし、さすがにそれもすぐなくなってしまう。そのとき、家から歩いて2、3分のところにある公園に自衛隊の給水車が来ているという話を聞き、父と姉と兄が水をもらいに行ったが、すでに水はなくなってしまう。しかし、そこでまた小学校にも給水車が来ているという話を聞き、次は20分ほど歩いたところにある小学校まで水をもらいに行った。そこで2、3時間並び、夕方になってようやく2ℓの水をもらうことができた。こんな非常時なので誰も文句は言わなかったが、6人家族が2ℓの水で足りるはずもなかった。しかし、私たちの住宅は水が出なかったのだが、隣の住宅に住んでいる知り合いが「こっちでは水が出ている」と教えてくださり、水をいただくことができた。また向かいに住んでいる方が「お皿にサランラップやアルミホイルを敷くとお皿を洗わなくて済む」という豆知識を教えてくださいましたので、水を節約することができた。

この時期の印象を母に聞くと、長田方面の空が昼も夜も真っ赤で、常に煙のにおいがしていたという。また、私の住宅のすぐ横には三木線が通っているのだが、ひっきりなしに消防車や救急車が通っていて、常にサイレンの音がしていたそうだ。しかもそのサイレンの音は1ヶ月程度やむことがなかったという。またヘリコプターの音もしょっちゅうしていたそうだ。

7、数日後～数ヶ月

数日して、祖母が家にやってきた。地下鉄はもう動いていたのでそれに乗ってきたらしい。家にあるありったけの缶詰とレトルト食品、そして銀行3ヶ所を回って集めたお金を持ってきてくれた。食料が足りていなかったのが本当に助かった。

また近所の方が田舎の親戚が送ってきた野菜をおすそ分けして下さった。その方は知り合いの方々におすそ分けして下さっているようで、いただいたのはビニール袋に入った少しのキュウリとレタスとハムだけだったがとてもありがたかった。私の住宅は日ごろからふれあいが多く、近隣の方々同士もよく知り合っていたので、震災の時はとにかく助け合って暮らした。このことを思い出すたびに、やはり日ごろから近所の方々とコミュニケーションをとっておくことは大切だなと思う。

私たちの生活は比較的収まってきていた。長田の被害の大きさは私達に伝わっていたので、私たちは母と子供たち全員でおにぎりを握り、お弁当箱に入れて、長田に救援物資を届けに行く人に預けた。それが私が生まれて初めてした災害ボランティアだったと思う。数は本当に少なかったが、それが誰かの助けになったと思うとうれしかった。

この頃の私の記憶といえば、テレビですっと亡くなった方々の名前が放送されていたことだった。最初はびっくりして自分の知り合いがいないか探したが、私の知っている名前が映ることはなかった。

私が地震発生の際に寝ていた和室は大きなたんすがたくさんあり、まだ余震も時々起きているのであまりにも危ないということで、その後数週間は母と私と弟で一番家具の少ないリビングで寝ていた。

この頃になると父はもう仕事に行き始めていた。中央区にある事務所で働いていたが、そこに行くま

でがとにかく大変だったらしい。地下鉄は運行しているとはいえ板宿までしか行くことができなかった。父は名谷から板宿までまず地下鉄で行き、そこから約3時間歩いて事務所まで行っていた。長田を通るともう大きな火事は収まっていたが、ところどころで火がくすぶっていたらしい。また長田警察署の前の大きな道は閉鎖されていて、全国各地から集まったパトカーや自衛隊の車の駐車場にされていたという。父は東京や沖縄のパトカーも見たといい。

昼頃事務所に着くと、中はぐちゃぐちゃに散乱していたので、その日1日は6時までかかって中を整理したらしい。

帰りはやはり歩いて帰ったのだが、板宿までの道は一面焼け野原で電灯も消え、本当に真っ暗でとても怖かったといっていた。

数日すると板宿から JR 神戸駅まで代替バスが運行されているという情報が入ってきた。父はそれを利用することにしたが、使用者があまりにも多く、時間も不規則で次のバスが何時に来るか分からないということも多かったので、しょうがなく歩いていった日も時々あった。徒歩ではあまりにしんどいので中古の自転車を買い、板宿から事務所まではその自転車を使って行き来することもあったという。比較的平坦な道が続くので、自転車だとそんなにしんどくはなかったらしい。

そのうち父は仕事で主に長田区の避難所運営をすることになった。そのころ父が数日に一度しか帰ってこなくなったのを私は覚えている。父がしたのは事務的なことが多かったらしい。一番大変だったのは、人探しのためにひっきりなしにかかってくる電話の取次ぎだったそうだ。電話がつながらないと苦情を言われることもあったらしい。他にも救援物資の管理もしていたそうだ。時には朝の4時ぐらいから救援物資を取りに行ったり、水道局がポリタンクに入れて届けてくれたたくさんの水を、避難者と協力して運んだりしたそうだ。父のいた避難所は食料や水は有り余るほど届いていたため、それによる混乱が起きることはなかった。しかし、他の避難所では食料や水が足りていないという情報を聞いて、避難所運営の難しさを感じたらしい。

トイレに関してだが、避難所では水が出なかったため、支給された水を使って自分たちで流していた。最初のうちはトイレトーパーも一緒に流していたのだが、そのうちトイレが詰まってしまった。それ以後はトイレトーパーは流すのではなく備え付けのゴミ袋に入れることになったそうだ。

夜は避難所で支給された寝袋を使って寝ていたらしい。避難所で寝ていても余震などが多く、なかなか落ち着いて寝ることができなかったという。父は時折その寝袋を家に持って帰ってきていたのだが、なんとその寝袋はサウジアラビアから送られてきた救援物資だった。世界中の人たちが助けてくれるんだということが分かった。

避難所が少し落ち着き始めると、父は倒壊した家の取り壊しの受付をするようになった。民間業者に取り壊しを頼むときはいいのだが、自衛隊に取り壊しを頼むときには立ち会わなければならなかったので大変だったらしい。ある賃貸アパートでは、家主さんは公費で取り壊してもらう申請の受付に間に合わすために、早く取り壊して欲しいのだが、そのアパートを借りている人が荷物を残したままどこに行ったのか分からない、というトラブルもあったらしい。また取り壊しの受付をしていると、数日後に連絡を取りなおさなければならないのだが、電話がつながないことが多かった。それで NTT に携帯電話を借りてそれを使用したそうだが、それでもなかなかつながらなかったらしい。

その後数ヶ月間、父は事務所での仕事と避難所での仕事の両方を受け持っていたので、事務所と避難所の両方を行き来して仕事をしていた。

8、今

阪神・淡路大震災の発生からおよそ11年が過ぎた今、私は環境防災科に入って環境防災を専門に学んでいる。もとはといえばあの阪神・淡路大震災がなければ環境防災科が発足することなどなかったかもしれないし、私も環境防災に興味を持たなかったかもしれない。阪神・淡路大震災は私たちから多く

のものを奪い、心に傷跡を残していったが、あの阪神・淡路大震災が起きたことによって私たちが得たものも非常に多い。その1つがこの環境防災科であると私は思う。

私が環境防災科に入った理由はいくつかあるのだが、その中でも大きな理由は「阪神・淡路大震災の教訓を語り継いでいる」ということだった。私自身も阪神・淡路大震災の被災者だが、阪神・淡路大震災で経験したと学んだ教訓とをかなり忘れつつあったと思う。そんな時、環境防災科ができたことやそこで学ぶことのできる知識について聞いて、私は大いに興味をそそられた。それが今、震災を経験した最後の世代である私たちが学んで、伝えていかなければならないことだと思った。

3年間環境防災科で勉強してきて、学んだことはたくさんある。その中でも私が一番興味を持ったのは、とても基本的なことだが、「準備の大切さ」「伝えることの大切さ」だった。私たちが阪神・淡路大震災を経験して得た教訓は数え切れないほどある。6千人以上の方々を犠牲にして得たその教訓を私たちは生かしていき、何もせずにまた同じことが起こってしまうような事態は絶対に避けなければいけない。私がそれを痛感したのはインド洋大津波の発生について聞いたときだった。私たちが当たり前のように知っているその知識を現地の方たちが持っていなかったために、30万人もの命が奪われてしまった。もし事前に津波の基本的な知識を伝えていればあんなに大きな被害は起こらなかっただろう。私たち環境防災科生が事前にできることはなかったのか。それまでは知識として持っていた「準備の大切さ」「伝えることの大切さ」を身をもって感じた。私は環境防災科での3年間、その達成を目標に様々な活動に参加してきた。しかしまだまだ達成できたわけではない。私は今後もこの2つの事を目標に生きて行きたいと思った。

私のそれまでの夢は消防の救急隊に入って救急救命士になることだった。しかし「準備」と「伝える」ということについて考えると、やはりまず頭に浮かぶのは行政関連、教師、国際協力などの仕事だった。少しの間そういった仕事にも興味を持った。しかし長年抱き続けてきた救急救命士になるという夢を捨てることはできなかった。そこで救急救命士の立場で「準備」と「伝える」ということに携われないかと考えてみると、あまりにたくさんの道が開けていることに気づいた。よく考えてみるとどのような立場の人でもそういった活動に携わることができるんだということに気づいた。そのときから、私の夢は「防災重視の救急救命士」になることになった。消防関連の仕事というと事後に目が行きがちだが、事前にできることはいくらかでもある。そういった活動を重視する救急救命士になりたいと思った。

私が環境防災科に入ってこの3年間で学んだことはたくさんある。環境防災科は私の物の見方まで変えてくれた。私は環境防災科に入ったことを誇りに思っている。ここで学んだことを忘れず、自分の夢へと向かって行きたいと思う。

これから生きていくために・・・

島根県松江市春日町

伊藤 光希

1 自己紹介

僕は阪神・淡路大震災は体験しておらず、当時は島根県の松江市の方に住んでいた。この地震の揺れが島根県まで届いたのかは覚えていないが、関西地方などで強い地震が発生したことはテレビのニュースで知った。島根県では10年間暮らし、父の転勤で兵庫県に引っ越してきた。島根県より都会で人口も建物も多く、方言も違い、その当時はまったく兵庫県のことを知らず、高校受験の季節に入ると、兵庫県立舞子高等学校の環境防災科という学科の存在を知った。この学科に入ったことが、防災と自分自身がつながり始めたきっかけである。そこでは全国唯一の、環境や防災を考える環境防災科という珍しい学科があり、僕は環境や防災といったものに興味を持っていたので入学することに決めた。

防災の授業で阪神・淡路大震災のことを学び、あの日にいったい何が起こったのかを改めて理解することができた。僕は大きな地震を今までに体験したことはない。あの震災でどれだけの被害があったのかは調べたが、想像もつかないほどの数であった。僕は環境防災科に入って命の大切さを学び、また防災というものにさらに興味を持った。またこの瞬間から防災に対する考えや意識が変わり始めたのだ。

2 阪神・淡路大震災を体験した友人

僕には震災を経験した友人がいる。そこで友人に震災についていろいろ語ってもらった。友人は当時神戸市の垂水区のほうに住んでいて、地震直後にPTSRにかかり、吐き気や涙で耐えられずにいて、友人の親戚や友達は無事だったらしいが、友人は「テレビで安否情報が公開されたときは、まるで自分のことのように悲しんだ」と言ってくれた。またスーパーはごった返して、電気やガス、水など、生活に欠かせないライフラインが止まってしまい、電話も使えず、連絡をとりたくてもとれない状態で、公衆電話にはたくさんの行列ができていて、あきらめずに何回も掛け続ける人もいたそうだ。僕はその話は嘘だったということにしてほしかった。なぜなら、そのことは僕にとって本当に信じられなくて、今の神戸に強い地震があったとは想像できないくらい復興しているので正直驚いている。友人は「将来は心理学の方向で勉強したい」と言ってくれた。

そして、僕は環境防災科で勉強していくうちに深く考えたことがあった。それは、地震で被害にあった建物などを直して復興させるだけではなく、傷ついた人々の心のケアが大切であるということに気が付いたのだ。この学科ではいろいろな災害ボランティア、災害募金などボランティアを行っている。そして友人はたくさんのボランティアや、防災を専門とする人の講義などを受講したり、命の大切さ、そして心のケア、直接人とふれあう重要性を実感したりして、心理学の方で勉強していくことを決めた。

友人というのは、実は同じ学科の先輩である。僕が非常に尊敬している方で、他の人からの信頼もあり、勇気があり、根性があり、常に現実と向き合って防災を考えているのだ。今は大学生で、防災の学習や、人の心のケアなどに一生懸命取り組んでいる。そんな先輩には、ぜひとも防災を語り継いでほしいと思っている。もちろん僕自身も先輩に負けず、防災を語り継いでいきたいと思った。そして、僕にとってその先輩は大切な友人でもある。だからこそ、いつしか先輩のようになりたいと思っている。防災をいつまでも語り継がれていくために…。

3 震災について知らないこと

僕が震災について知らないことがまだまだある。それで、阪神・淡路大震災に関わる本を何冊か読んでみた。ページをめくっていくと震災当時の写真があって、炊き出しや、仮設住宅などの風景が写っていた。その写真を見て、心が痛くなった。こんな強い地震がまた日本で発生したら、建物が崩壊し、高速道路も横転、屋根がつぶれた家々...あの時と同じようになってしまうのでは？と考えた。想像がリアルで、恐怖を感じた。しかし、実際大きな地震が発生すれば何がおこるか予想ができないし、自分の命が助かるかどうかもわからない。災害は絶対発生するものだが、防ぐことも可能である。今後の地震に備えて、命を守っていきたいと思っている。被災者の方は、あの震災で多くのものを失ったと思っているはずだ。しかし、その分いろんなことが得られ、変わってきた。

それは地震などの災害にこれまで以上に意識を向け始めて、人と人のつながりが深まって、災害が発生するまでに避難準備をするようになっていったことだ。震災時の被害は広域だったために、行政の対応がうまく連携をとることができない状態で、消防や自衛隊、警察などが被災者を救助するのに限界があった。それで被害にあった方は、近所同士で助け合ったことがほとんどだったと聞いている。

お互いを知っていれば、何も抵抗なく助け合うことができるはずだ。だからこそ、人と人がつながり合うことが大切であり、協調性を持つことが重要だと実感した。震度7という強い地震から生き残るには、地震対策が絶対必要になってくる。友人は「震災時は、まさか自分が住んでいる地域で大きな地震を体験するとは思っていなかったから、地震対策がいかに重要なのかを改めて実感した」と言っていた。実際に地震対策を実行して揺れに備えていれば、被害は最小限におさえることが可能であるのだ。

この文章を読んでいる方、ぜひこの言葉を口癖にして、自分の友人や親戚、身内、震災を知らない方にこのことを教えてあげてほしい。こんなことを言うのは失礼に値すると思うが、震度7の地震が発生した場合、生き残れるかは地震対策と、あとは運命にまかせるしかないのだ。

僕はさっき言った通り震災を体験していない。だが、人間は自然には勝ち目はないのだ。だから運がたよりなのだ。僕は防災を学習していくうちにこう思ってしまった...

震災の時に何があったのか？体験したもう1人の僕の友人に話を聞いて、まだ知らないこと教えてもらうことにした。その友人は震災当時神戸市の妙法寺の方に住んでいた。友人は2人兄弟で、地震が発生した数時間後に、近くのコンビニに行った。そのコンビニは1人何個までという制限を出していたので、友人の母はできるだけ多くの物を買えるようにと、「僕の母さんは兄と僕を連れて買い物にいった」と聞いた。でも友人は、こんなことを僕に言った。「何か、いやらしことをしたと思ったかもしれないけど、当時はそんなに余裕がなかったし、家がつぶれてしまった人もあったから、しかたのないことだったんや」。僕は友人の言ったことは全然いやらしいとは思わなかった。

今何も起こってない状況で、例えば店で1人何個までと限定された時に家族や友人を連れていったら、多少はそう思うかもしれないが、逆に震災当時は、僕にしてみたらそれは当たり前のことだと思ったし、僕が友人であるならばそうするだろうし、他の人もみんなそうするに決まっているだろうと感じた。生きていくためにはそうしていくしかないだろう、こう思ったのであった。

もう1つ話せば、バイクでノーヘルメットで2人乗りして、両手にバケツをかかえて走っている人がいて、警察官に「水はどこですか？」と聞いた時に、普通は交通法に違反しているが、当時は水不足だったために、警察官は目をつぶり、「あっちの方に水があるぞ」とその人たちに教えてあげた話を、他の人から聞いたことがある。緊急時は警察官は目をつぶるが、何も無い時には、決してそんなことしないようにしてほしい。なぜこんなことを言うのかというと、危ないからだ。しないかもしれないが、忠告だ。ここまで語ってきたが、まだまだ語るつもりだ。

僕はこれまでに震災を体験した方の話を聞いてきたが、1人1人が違う状況ではあるが、みな同じ地震の被害を受けているのだ。地震で亡くなった方、地震から生存した方、いろいろだ。命は1人1つ。そう考えれば被害の大きさにやっと気が付くことができる。人生を生きていくことは容易ではなく、困

難である。交通事故に巻き込まれたり、災害に巻き込まれたり…。その中で命が失われることもある。この文章を見ていて、こういうことを考えたりはしなかっただろうか？

それは、いつ何がどこで起こってもおかしくはない、と。これに対して、その通りと思った人は、その通りである。常に命あるものは、生と死の間を通り抜けているのだ。また、阪神・淡路大震災みたいな地震が発生したら、絶対自分は死ぬ、というのは決して思わないでほしい。あなたに命があるかぎり、生きていく可能性はあるのだ…。

4 語り継ぐ

僕は震災を体験していないので震災時にどのようなことがあったのかははっきりとは言えないが、震災を体験してきた方にいろいろな話を聞いていくうちに、阪神・淡路大震災の恐ろしさ、残酷さ、悔しさ、そういった悲しみが伝わってくる。地震といった災害の苦しみは、体験したその人にしかわからない。地震は、いろいろな種類がある。そして、条件が良いとき、悪いとき、それによって被害の大小は決まってきて、そして…生と死に分かれる。自分は大きな地震の被害にあったから、自分が生きているうちにはもう大きな地震なんてこないだろう…。そんなことはない。それはなぜかというと、地震はいつ起こるかわからず、明日に起こるか10年後に起こるかわからないからであるからだ。

日本はたくさんの断層と、たくさんのプレートが密集している国で、絶対に地震は起こらない、もう体験したからこない、という考えは持たないでほしい。油断している時が最大の危険なのだ。

地震はいつ発生してもおかしくはない…いつもこう思っていてほしい。地震、災害対策をまだ行っていない人は、できるだけ早く対策を実行してほしい。いざという時に効果を発揮して、命を守ることができる。災害なんてこわくない、こう思っている人ほど、最悪の条件で被害にあってしまうので、そういう考え方もやめてほしい。災害からみんなが命を落とさず、みんなが助かってほしいのだ。自分の命は、自分で守らなければならない。行政や人に頼ってばかりいると、その人を巻き込んでしまうので、命は自分で守っていくのだ。あなた方が、災害にも負けないという意識を持ち、そして防災が強いという人になって、支え合ってほしい。僕は防災に強くなってとか、地震などに備えてなどと語りかけているが、防災はそれほど大切であり、非常に重要なのだ。

人生でのひとつひとつの経験が、これから生きていくために必要な知識、緊急時の判断、それらをいかして実際に行動できれば、いろんなことが変わってくる。例えば、なんらかの災害に自分が巻き込まれたとしよう。その災害はまた自分の住んでいる地域に発生するとすれば、前回の経験をいかして、あの時は何が不足していて、何が必要で、どうすれば被害を食い止められるだろう？これは絶対考えるはずだ。だから経験した人は、その体験したことに強くなっていく。納得していただけただろうか？

災害に慣れて、とは言わない。そんな自分が生きている時に、自分の住んでいる地域に10回も20回も災害が発生すれば、手のほどこしょうがないのだ。しかし、その中のたった1回で、自分の命が消えてしまう可能性もある。例えば、交通事故みたいなものだ。自分には可能性があると思い、気持ちを入れ替えて災害対策をしてほしい。

1人1人が、大きく、いろんな可能性を秘めている。世の中は何が起こるかわからない。これから災害が発生していくが、どのような対策を計画するだろうか？これが正しい、その考え方は違う…と思わず、本当に今自分たちがしなければならないことだけを考えていこう。でも、あせる必要はない。

あせればあせるほど混乱していき、大切な何かを忘れてしまう可能性がある。一度家族で相談してみてほしい。災害、災害は、という言葉が繰り返して語りかけているが、本当に災害は恐ろしいものだ。

震災を体験した人、まだ体験していない方々にもう一度考えてほしいのだ。実際に震災が発生した時、いつでも対応できるようにしておけば、少なくとも、体験した方々は被害を最小限に食い止めることが可能だ。

体験していない人は、実際に災害が起こらなければ、防災ということに意識を向けることは難しいと

思う。僕も体験していないので、その気持ちは理解できる。きっかけさえあれば、防災の大切さがいやというほど大切であり、いかに重要なことなのかがわかる。そのきっかけに出会う機会はなかなか訪れてはこないが、自分自身が考えて行動を起こすようになれば、いくらでもチャンスがある。自分自身が待っていてはいけない。もちろんその機会だけではなく、これから生きていくうえでもいろいろなことに活用することもできる。物事と立ち向かい、正面から向き合っていこう。

これらの文章を読んでみてどうだったか？震災の記憶が自分自身の心を横切ったことと思う。ただ勘違いをしてほしくないのが、阪神・淡路大震災のような強い地震がどこかで発生した場合、1995年の震災と、あらゆるものが同じとは思わないでほしい。その地域の地盤が強かったり、弱かったりしただけでも、被害の数は大きく違っていくのだ。揺れが強いのか、弱いのか、それは誰にも予測不可能なことだ。例えば、これから発生する可能性がある東海、東南海地震だ。一度に一緒に揺れるか、それとも片方だけが発生するのか、どちらもわからない。例えてみればこういうことだ。防災というのは、はっきりいって難しい。マニュアル通りにいくかどうか分からない。自分が震災前に計画したことを実行できないかもしれない、いろいろある。

もし、計画、対策などが不十分であった場合、その場その場でうまく対応できることが理想だが、あくまでも人間だ。失敗は当たり前なのだ。うまく対応していくには、日頃からの生活で決まってくる。防災だけを考えてもあまりよくはない。最初に言った通り、人と人のつながりも大切である。

近所の人を知っていれば、遠慮せずに助けてほしい。また自分が地震直後に助かった時は、まず、自分にとって最愛となる人を優先してほしい。まずは自分たちである。地震がこれから発生していくが、恐れてはいけない。僕も、震災とか大きな災害に巻き込まれたことがないので、正直不安でいっぱいである。でも逃げれば逃げるほど、後悔も大きくなって悔いとして残ってしまうし、これからに立ち向かっていけなくなってしまうと思った。発生してしまうものであれば、いつか立ち向かわなければならぬ。防災の大切さ、命の尊さ、理解してもらえたらだろうか？これから災害対策をしようと思った人がいれば嬉しい。災害に負けずに、いろいろなことに負けずに、これからを生きていこう。命は1つであり、いつかはなくなってしまうものだが、自分が生きている間は、絶対防災を強くして、お互いを支え合い、そして協力し合って頑張っていこう。

こんなこともあったんだ

神戸市須磨区妙法寺
岩井 雅人

私は震災当時、妙法寺にあるマンションに住んでいた。その時一緒に住んでいた家族は今と変わらず、祖母・父・母・兄・自分・妹だった。あのとき家族が1人も欠けることなく、今も元気に暮らせているということを私は奇跡的だと思う。なぜなら私の親戚の状況は悲惨で、倒壊家屋の下敷きになり逃げ出せずに焼死してしまった人（おじの婚約者）や、住んでいた家が倒壊してしまい仮設住宅での生活をしなければならなかった人（祖父）がいたからだ。

< 祖父の話 >

祖父は現在 80 歳以上で足腰もかなり悪くなり時々杖をついて歩いているが、それでも正月には必ず私たちの家に来てくれる。毎年六甲山に登り初日の出を見るという決まりごとが祖父にはあり、そのついでに私たち孫の顔を見に来るのである。

祖父は「震災でワシの代わりに亡くなった人のためにも毎日元気に生きなあかん」と言っていた。

< おじの話 >

おじの婚約者は地震発生時おじと一緒に寝ていたのだが、運悪く婚約者の身体は柱のようなものの下敷きになり、何をしても婚約者の身体はその柱のようなものから引きずり出せなかった。そうしている間に火の手がまわってきて、婚約者はおじに「私をおいて逃げて」と叫んだ。おじはどうすることもできず、婚約者の横に水の入ったペットボトルを置いてその場を離れたそうだ。後にその婚約者は焼死体としてその家屋から出てきた。

世界的にみると、人間が1人死ぬことはそんなにたいしたことではないけれど、自分の世界では、人間が1人死ぬだけでもかなりのショックを受ける。阪神・淡路大震災では6000以上の人亡くなり、1人1人が家族、親戚、親友の死を嘆いた。死者の数ではなく嘆いた人の数が多かったので、阪神・淡路大震災は世界的に広がったのだと私は思う。

< 自分の経験 >

地震発生直後、私は2段ベッドの上のほうで寝ていた。兄は下で、祖母は2段ベッドの隣のシングルベッドで寝ていた。地震の揺れで3人とも起き、私は慌ててベッドから下りた。いや、下りたと言うよりもあれは落ちたに近かった。そのときにベッドの格子で口の中を切ってしまった。しかし、まだ幼稚園児だった私はパニックに陥ったので、その痛みを忘れていたのは不幸中の幸いだ。

ふと祖母のほうを見てみると、必死にドアを押し開けようとしている。しかし、どうしても開けなかった。しばらくすると母が私たちの部屋の前に来て、ドアを開けてくれた。ドアの外側にはいろんなものが散乱しており、どう考えても私たちのほうからドアを開けるのは無理な状態だった。

幼かった私は母と一緒にリビングへ行った。キッチンではガラスが割れ食器も割れ、とても裸足で歩けるような状態ではなかった。

父・母・妹の寝室にはタンスの上にテレビを置いていたのだが、父が何かを取りに行き一歩戻った瞬間父のいたところにそのテレビが落ちたことを覚えている。あの時すぐに戻っていなかったら、父は大怪我を負っていただろう。やがて兄と私と妹は地震の揺れに怯えながらリビングの中央で横になった。次に目が覚めたころには辺りはもうすっかり明るくなり、普段とあまり変わらないように思えた。しかし目の前の壊れていないテレビに目を向けると、やはり事態は深刻だった。そんな中、母が兄と私に「一緒にローソン行こう」と呼びかけた。兄は行かなかったが、私はじっとしているのが嫌な性格だったので、一緒にローソンへ行った。

ローソンまでの道のりでまず驚いたのが、マンションの壁だった。壁には無数の亀裂があり、今にも

崩れそうな感じだったのを覚えている（少しだが、現在もその亀裂が残っている）。また、マンションの入り口の前には10段ほどの階段があるのだが、その階段にも無数の亀裂が入っており、危険な状態だった。マンションからローソンまでの距離は200メートルほどだったが、歩道にも車道にも亀裂が入っていた。

ローソンに着くと、客が5人ほどいた。ローソンにおいてある品はあまり多くなかった。おそらく近所に住んでいる人が次々と買っていったのだろう。それが原因で「1人が買える品数は何個まで」と制限があった。何個までかは忘れてしまったが、母はこのことを知っていたから僕たちを誘って少しでも多く買おうとしたのだろう。周りから「卑しいぞ」といわんばかりの目線が飛んできたが、母は気にせずさっさと買い物を済ませた。

確かに卑しいかもしれないが、さらに被害の大きい被災地ではそういうことも頻繁に起こっているだろう。ああいう状況に直面すると、卑しかろうが卑しくなろうが必死に生きようとしている気持ちが行動として表れているのだから、仕方がないと思う。ここで私が言いたいのは、「生きたければ何を言われようが、ずる賢く生きろ」ということだ。これを卑しいという人もいるが、自分が死んでしまったら助けられる命も助けられなくなるということを理解してもらいたい。

地震の被害は想像以上に悪く、私の周りの環境では考えられないほどひどかった。なぜなら、近くにある横尾の大きな公園にはびっしりと建て並べられた仮設住宅があったからだ。初めて仮設住宅を見たのであの光景にはさすがに驚いた。

普段はあまり人がいなくて無駄に広いだけの公園だったが、今ふと考えると、その無駄な広さがなければ仮設住宅に住んでいた人はどうなっていたのだろうと思う。おそらく路頭に迷い、最悪の場合亡くなっていただろう。つまり私が言いたいのは、それほど多くの仮設住宅が建てられていたということである。

阪神・淡路大震災当時に住んでいたマンションには、友達がたくさんいた。しかし、地震が起きたときはまったく友達のことなど頭になかった。それはそうである。危険に出くわしたときは誰もがまず自分の身を守るだろう。しかし、ふと冷静になると、人は周りの状況を気にし始める。私はこれを経験し（おそらく多くの人が経験している）、友達は大丈夫かと気にしていた。

ローソンへ行くときに何人かの友達と会った。幼かったからか、なぜか遊ぶ約束をしていた。だが、環境防災科の授業を通して、なんとなく理由がわかった。幼い子のストレスを解消するために、外で一緒に遊んであげるとよいということを習った。だから、私の場合はストレスがたまっていたので自分から遊ぼうといったのかもしれない。

<「震災奮闘記」を書いた女性Aの話>

地震発生の直前に、Aさんは朝食を作るために布団から出ようとした。しかし、立ち上がった瞬間、下から突き上げるような大きな揺れがあった。隣で寝ていた夫もこの揺れで目が覚めたと同時にAさんの体を掛け布団で覆い、その上に夫がAさんを守るように覆いかぶさった。その後、ゴーッという音と共に激しい横揺れが続いた。

家族で怪我をした者はいなかったが、住んでいたマンションは大きな被害を受けていた。Aさんの場合、マンションから出るには大人1人がやっと通れるくらいの穴を、身を縮めて通るしかなかった。また、その穴は今にも崩れ落ちそうな感じだった。

Aさんはそのマンションからやっと出ることができたが、お金や毛布などを取るために、再びマンションに入り、それらを取ってきたそう。

住んでいた家がなくなったので、夫の義兄の家で生活することになった。義兄は家にあまり物を置かない性格で、ほんとに物寂しい家だった。だが、家をなくして路頭に迷っている人に比べると、屋根のある家で生活できるということはとても幸せであった。まさに「不幸中の幸い」である。そう考えると、物寂しい家でもまったく気にしなかった。

洗濯物は、少し離れたところにある山の川の水で洗った。しかし、そこにはすでに多くの人が洗濯物

を洗いに来ていたので、多少洗いづらかった。

今はそんな生活はしていないが、あのころのことは今でもはっきりと憶えている。

Aさんは、「些細な震災体験ですが、何かに役立ったら幸いです」と言う。

<親友Kの話>

地震発生後、K君はベッドから降りようとしたときに机に頭をぶつけて気絶したらしい(たんこぶができたが、たいしたことはなかった)。次に目が覚めたのは明るくなった昼ごろで、K君も買い物に行った。K君の家は私の家からローソンまでの道のりの間にあるので、K君も私と同じローソンへ行った。K君が行ったのは昼ごろだったので、私が行ったときよりもさらに品数が減っていた。K君は水のペットボトルを2本持ち、家に帰った。

K君は震災前、日課として家のベランダに置いてある植木鉢に水をやっていたそうだが、この日も帰ってすぐに買ったばかりの水を1本開け、その植木鉢に水をやった。すると、その行動に気づいたK君の母が、ものすごく怖い顔をしてK君の頭をたたいたそう。それを聞いたとき、いつ水がなくなるかわからない状況でそういうもったいないことをしたK君も悪いが、まだ幼稚園の年長の子供なのだからそんなに怒らなくてもいいのでは私は思った。

K君の母はその後怖い顔をしていたそう。

私は「K君のお母さんも被災者の1人で、みんなと同じように何らかのストレスがたまっていたから、そういう行動でも腹が立ってたたいてしまったんだろう」とK君の母をかばいつつ、環境防災科で習ったことをK君に話した。

<当時医者だったAさんの話>

ものすごい地響きとともに家が大揺れした。一体何がおきたのかわからなかったが、暗闇の中をなんとか1階に降りてみると、台所が大荒れ状況になっていた。「また揺れが来る」という義母の大きな声で一部屋に集まり、みんなで布団をかぶった。「家がつぶれる」「ものすごい地鳴り」などと言っているうちに台所の食器棚から再びたくさんの食器が落ち、家の柱がミシミシと無気味な音を立てているのがはっきりわかった。「これが地震？何がおこったのかわからない」というのが本心だったそう。すぐにテレビをつけたが、映りが悪かった。震源地がどこかわからず、淡路とテレビに出たときは目を疑った。「どうしてこんなところで地震が？」と思いつつ、経験したことのない大地震に震えていたそう。慌てて実家に電話し、無事だったことを伝えたがその後つながりが悪くなった。そして明けてくる朝に、ホッとしたが、それはほんのつかの間だった。

「すぐ病院に来てください！神戸のN病院がつぶれました！大勢の患者さんが搬送されてくるはず！透析患者も大勢くるはず！」とAさんの病院から急に電話が入った。家族が全員無事だと確認すると、申し訳ない気持ちで仕事にでた。なんとか地割れしている道路を避けながら、やっとの思いで病院に到着すると、当院の透析患者は全員無事だということがわかり安心した。しかし、これからどれだけの患者がこの病院に殺到するのかはまったく予想できなかったそう。

その後、電話がひっきりなしに鳴りつづけ、どれも透析が必要な患者さんばかりだった。「かかりつけの病院に連絡が取れない。透析させてください」「家族で透析を受けている者がいます！まだ埋まったままなんです、絶対助け出して連れて行きますので、透析させてください！」「病院の場所を教えてください！」と夕方から患者が殺到し始めた。中には避難したままの姿で寝巻き姿の人、はだしのままの人、怪我をしている人、朝からのまず食わずの人たちが透析室に殺到し、スタッフ全員で対応しても透析できる機械は限りがあり、順番を待つしかないなど、地震のあったその日は明け方の4時まで勤務が続いたそう。

<Oさんの話>

早朝、ゴーというなり声のような地響きの音で目が覚めた。小さな揺れを感じ、暗闇の中で条件反射的に起き上がり、横で寝ている妻の近くにあるタンスを押さえた。突然ドーンという轟音と、下か

ら突き上げるような衝撃、激しい大きな揺れが来た。その大きすぎる揺れで立つことができなかったそうだ。食器が落ちて割れる音がし、本が落ち、テレビが落ち、蛍光灯までも落ちてしまった。多少のことでは驚かない歳になっていたが、この時は死ぬかと思ったそうだ。マンションの天井が崩れたり、床が抜けたりしたらどうしようか。それよりも、マンションが倒壊したらどうしようか。など不安がいっぱいあったが、幸いマンションは無事だった。家族の無事も確認できたので次に家の被害を調べた。次女の部屋のタンスが倒れ、大きな重い蛍光灯が落ちていた。娘がその部屋で寝ていたら、頭を直撃されるところだった。テレビを元の位置に戻し、何とか映るようにし、ニュースを見てみた。TVは大きな地震が関西で起きたことを言っていたが、震源地は確定していなかった。京都のお寺の灯籠が倒れた程度の被害しか言っていなかった。そのうち7時ごろのニュースで震源地が確定され、神戸・阪神地域でかなり大きな被害がでていることや、鉄道がすべて不通であることを知った。そして、ヘリコプターからの実況中継に目を見張り、高速道路の崩壊、至るところでの大きな火災を目の当たりにし、神戸で起きていることをようやく把握することができたそうだ。

その日の通勤を諦め、その日は家の後始末に専念した。壊れた食器や蛍光灯の整理、カーペットに食い込んだガラス破片の回収などをした。

当時、Oさんはマンションの管理組合理事をしていたそうで、全世帯の被害状況を調べた。1階はほとんど被害が無く、一番高い14階はほとんどの家のタンスが倒れていた。Oさんが住む9階はタンスの倒れはほとんど無く、食器・本が棚から落ちた程度の被害だった。人身事故がなかったのはよかった。その日からゴミ捨て場は割れた食器、壺などの瀬戸物・陶器で一杯だったそうだ。

< Bさんの話 >

Bさんは地震発生直前に朝食を終わり、台所で出勤前のひと時テレビを見ていたそうだ。突然ドーンという音がして下から突き上げられるような衝撃を受け、その次に左右に激しい揺れを感じた。一瞬何が起こったのか判断できなかったが、台所の食器棚から食器やコップが落下して散乱し、冷蔵庫は転倒こそしなかったが大きく移動した。隣の部屋では仏壇が台から放り出されてひっくり返っていた。これは大地震だと思い家族が安全かどうか確認するとともに、このまま屋内にとどまれば家がつぶれるのではないかという恐怖を感じたそうだ。余震はしばらくの間続いたが、幸い激しい揺れは次第に収まってきた。この激しい揺れにもかかわらずBさんの土地は奇跡的に水道、電気、ガスとも止まらなかった。とりあえず会社に出勤しなければならないので、地震による交通機関の影響を見ようとテレビの報道番組を見た。地震発生直後はテレビも事態を把握していなかったが、時間の経過とともに次第に被害の実態が報道されだした。当初未確認情報として新幹線高架の落下、阪神高速道路高架の落下、高層マンションの崩壊などが伝えられていたが、それがみな事実として確認された。神戸市の長田区方面では火災も発生しているが、地震で道路損傷が激しく消防車が現地に到着できないとか、現地に到着しても水道が断水していて消火活動が満足に出来ないという状況も報道された。もちろん鉄道もJRも私鉄も架線の断線や線路の損傷が激しく全面ストップになっており、復旧の見込みが立たない状態だった。こういうことで会社のことが気になりながら、何も出来ない状態が4、5日続いたそうだ。

5日ほど経って会社の役職者から初めて連絡があった。Bさんの勤め先は西宮市だが、やはり相当の被害が出ているということだ。会社は鉄筋コンクリート造りで6階建てビルの1階だが、倒壊こそ免れたものの、最上階から1階まで所々亀裂があり損傷が激しいという。交通手段が確保でき、「準備出来次第出社せよ」という連絡を受けた。しかし西宮市は地震災害の最も激しい神戸市を通過し更に大阪よりに位置するので、交通機関が部分的にでも復旧しない限り出社する手段が無かったそうだ。

地震発生後1週間ほど経って、JRの福知山線が震災地を経由して大阪まで開通したと報道された。翌日から加古川線を経由し福知山線で宝塚まで行き、そこからは交通機関が無いので徒歩で西宮の会社まで出社することとなった。会社到着まで何時間かかるかわからないがとにかく出社した。翌朝午前5時過ぎの始発電車で加古川に向かい、それから列車を乗り継いで宝塚に着いたのが午前10時ごろ、それから徒歩で会社に向かった。

宝塚も震災被害がひどく、いたるところで家屋が倒壊していた。全く損傷が見られないというものはほとんど無かった。2時間近く歩いて会社に着いたのが昼前で、会社の付近も被害が大きかった。鉄筋コンクリートの建物さえ損傷が激しく、木造の建物で被害の無いものは皆無であったそうだ。会社に着いてみるとほとんどの人の顔が揃っていた。社員のほとんどが無事だったようだ。会社の中は、震災後は無茶苦茶に散乱していたそうだ。書類ロッカー等がすべて転倒し、中の帳簿や書類が床に散乱していたそうだ。電気、ガス、水道もすべて止まり、まだまだ寒い1月だというのに暖房は無く、初日は散乱した書類の整理に追われた。会社の勤務時間は午後6時までだが5時に退社しないと家に帰れないので、5時に会社を出て部分開通した阪急電鉄で大阪に行き、JRの福知山線に乗った。加古川に戻って最終電車でやっと間に合うくらいだった。家に帰り着くと12時を回っており、翌朝はまた始発電車出勤である。

Bさんの場合、こんな生活が半年ほど続いたそうだ。

<母の話>

私の経験とかぶるのだが、母は地震が発生したときすぐに、隣で寝ていた私の妹の上に覆いかぶさり、守ったそうだ。激しい揺れがおさまったところに私たちの部屋にきた。無我夢中で私たちを助けに来たので、知らないうちに台所の食器の破片を踏んでいた。足を怪我していることに気づいたのは明るくなり、ホッとした時だった。気づいたときはかなり痛かった。

そして応急処置をした後、私とローソンへ向かった。

ローソンでは卑しい目で見られたが、家族のことだけ気にし、「卑しいのなら、みんなもすればいいじゃないか」という気持ちで買い物を済ませた。

その後、痴呆症の祖母や私たちの世話をし、私たちは3人兄弟なのでそれはたいへんだったそうだ。

「怖い体験、貴重な体験、忘れてはいけない体験」

神戸市須磨区東白川台
翁 明德

・ 発生直後

当時のことは今も断片的だがおぼえている。あの時のことでテレビや新聞に出ている人は“揺れがひどかった”とか“地面がつきあがるような感じがした”などと言うが、ぼくが体験した中では揺れというより音がすごかった。よく映画やテレビで空手の名人か力の強い人が木の板を一度にたくさん割ったような「バ、バ、バ、バーン」といった音が聞こえた。その音はどの目覚ましよりも大きい音を発していたのでぼくはびっくりしながら起こされた。そのときは僕はまだ小学校にはいる前だったので、地震が起きたということも知らず、変な人が音を立てているだけやと思ってまた眠りにつこうとした。そして次はさっきと同じような音が鳴って、体が左右に揺れ始めた。このときにやっと地震が起きたことがわかった。

揺れがおさまって今度は隣の部屋から母が大丈夫かとたずねながら部屋に入ってきた。そして僕の手をつかんで近くの公園まで寝巻きのまま何にも持たずに飛び出した。しばらく公園にいとぞろぞろと人が集まってきた。みんな地震が怖くなって家を飛び出してきたらしい。しばらくして揺れがおさまり、家に帰ると今どうなっているのかを知りたいためテレビをつけようとしたが、つかない。出張で出かけている父に連絡を取ろうと電話の受話器をとったがうんともすんともいわない。家での通信手段がすべて絶たれ、家族みんながあせった。今思えばラジオがあるじゃないかと思うが、当時は地震なんてめったに来ないと思っていたから、準備しても無駄みたいな感覚があったためすぐに取り出せるようなところにはなかったし、準備する気もなかったのだ。そしてようやくラジオを見つけ聴くと自分たちのまちがどうなっているのが少しだわかった。今、神戸が大変なことになっていると。

時間も地震が起きてから、ずいぶんたった。電気もそのときだけしか止まらず、すぐにまた使えるようになった。ラジオだけではなにか物足りないから目で確かめたい、情報をもっと知りたいと思ってテレビをつけたが、テレビの画面に映るのは砂嵐だけ。ラジオも小さい僕にとっては何を言っているのかわからない。だから僕はずっと母と姉に「どうしたん？何が起きたん？」と聞いているが、2人とも地震が起きたことだけしか状況がわかっていない様子だった。しかも必死で家から飛び出してきたので寝巻きのまま。母はまた揺れるのを怖がって家に入ろうとしない。揺れはもう来ないだろうと見計らっていざ入ろうとするとまた揺れるといった繰り返しが続いたため、姉が僕らの着替えを取りに行ってもらったりと、かなり慌ただしい雰囲気だった。

2、3日するとさすがに家には入れる。しかし、母はその恐怖心からくるのか、地震にはとても敏感になった。家族全員気づかない震度1ぐらいの地震でも、すぐにそれを感じ取り怖がった。

1週間位すると被害はそれほどなかったから、さすがに3日もすれば情報も親戚の安否も確認できたし、父も出張からなんとか帰ってきた。早速車に乗って長田のまちを見下ろせるところまできた。そこには黒い煙がもくもくと上がっていて、煙の下の方には赤い光が見えた。その煙を見ると父は車を止め、みんなは何にも言わずに車から降りただボーっとその煙と長田のまちを見下ろした。そして家に帰ってもだれも口を開こうとしなかった。

ずっと呆けるわけにもいかないがライフラインはそのときまだ電気しかなく水もガスもすべて止まっていた。ガスはなくても生活するには障害にはならないが、さすがに水をなくしては料理もトイレも風呂も洗濯といった日常生活のほとんどの影響した。このことに困っていたところに、垂水に住んでいる親戚の家がまだ水が出るという話を聞きいそいでやかんやバケツ、ペットボトルなんかをもって行った。最初は勢いよく水が出ていたがしばらくすると垂水でも水が出なくなった。そこでひとついい

ところを思い出した。その垂水に住んでいる親戚の人は西神のほうに小さな山小屋を持っていることを。そこには直接水道は通っていないがその近くに蛇口がある。そこにいってみようということになった。その蛇口につくと、うれしいことにまだ水は止まっていなかった。しばらくしても水は止まらずいつものように使えた。そしてしばらくの間僕ら家族と親戚の生活用水になった。家族と親戚の人はやっとの思いで水を見つけることができた。

水をみつけて一息ついているが、もうひとつ恐ろしいものがある。それは“余震”だ。みんなで地震の話なんかをしているときにグラッと来る。これがものすごく怖い。震度4ぐらいの地震が来れば足元がふらついたりして、ときたま地面に伏せたことがあるぐらい怖い思いをした。その地震体験のせいか、今でも小さな地震にも敏感に感じるようになった。それに最近では南海地震が来るとよくいわれるが、僕の心境では環境防災科で学んだことを実践できると自信を持つ反面、小さいときの恐怖心のせいで地震にまだ少し不安な気持ちがのこっている。

・ 2週間位～

ひとまず水も確保することができた。ひと段落ついたところでまた問題が出てきた。それは食料だ。今までは家にあるインスタントや近くのスーパーにまだ品物が置いてあったが、それも底を尽いてしまった。これもまた水のときのように探し回った。

食料をさがして長田のほうを通りかかったとき、信じられないような光景をみた。家という家がつぶれ、目の前に障害がほとんどなく、辺りをまんべんなく見渡せるようになっていた。これを見た僕らは口をぽか～んとあけるだけしかできなかった。テレビで夏の終戦の日の特集とかでよくある戦後の日本の焼け野原とそっくりだった。そのなかで人がうずくまって泣いていたり、手を合わせていたりする人もいた。たぶん誰か大切な人を亡くしたのだろう。まだ幼い僕でもそんな風景を見ると涙ぐんできた。

そして長田駅の近くを通りかかり大開のほうに行こうとした。すると道路の右のほうに西市民病院が建っている。最初は気づかなかったけれど、途中の階がぺしゃんこになってつぶれているのをみて、これもまたあ然とした。さらに先に進むと地面が大きく陥没しその中に自動車がおちていた。当時の僕の幼い発想ででっかいアリ地獄かとおもった。今になってわかったが下に駅がありそれがつぶれて陥没したのだ。

そしてさらに東へ行こうとしたが渋滞やがれきなんかで道がふさがれ進むこともできない状態なので今度は反対に西のほうへ行くことにした。須磨駅より西のほうは被害が少なかったのかいつもと同じような街並みだったが雰囲気だけはちがった。店もみんな閉まっているし、道行くひとふだんみたいにキリッとした感じじゃなく、“どうしたらいいんだろう”といった感じでおどおどしていた。なんとも勢いがないような感じだった。そんな空気が家族の間でも流れみんな口数が少なくなってきた。そしてとうとう加古川あたりでやっとう物を売っている店を見つけた。でもすぐ人が買いあさりすぐに店の品物は売切れてしまった。それから週に2、3回は食料を探し続けた。

ここしばらく、ずっと食料を探す毎日。いつ元通りになるかは見当もつかない。だから、たくさんの食料をかき集めた。その上保存がきくものとなったらカップラーメンやレトルトカレーといったものしかない。もちろんそれらは店などが営業再開するまでの間、ずっと同じようなものばかり食べさせられていた。食事の中での変化といえば、買い物に行く途中に小さな露店で野菜を買ってそれを加えるぐらいの事しかできなかった。

・ 約1ヶ月～

いつもと同じようになったが、まだ地震前のような雰囲気ではない。すがすがしい青空でもどことなく暗い空気が流れている。ただ普段と変わらないのはそこに住んでいる人間と建物だけ。当時通ってい

た幼稚園からのバスも来ないし、余震のせいでうかつに外に出る事もできない。テレビもまだ震災のことばかりで、みたい番組も見ることもしないし、ものすごく暇だったし、つまらなかった。地震の話もさすがにこんなに時間も過ぎれば、最初はドキドキしていたけど、飽きてくると言うかうんざりしてくる。外に友達と遊びにも親が“また地震が来るから”みたいなことをいって外にも出してくれない。とにかく暇だった。

この時期からはものすごく友達が恋しくなった。普段なら幼稚園から帰ってくるとすぐに着替えて、外に友達と遊びに行っていたのに、いまでは友達じゃなく家族と近くの親戚のひとだけ。しかも、幼い僕には難しくてわからないことばかりを言う大人ばかり。僕も本当はどうなっているのか、地震ってどうやっておきるのかを知りたかったのに大人たちの言うことはさっぱりわからなかった。そして多分これが地震の起きた後の生活で一番嫌なことだったと思う。

そんな中での楽しみといえば、加古川方面に家族と親戚の人と一緒に買出しに行くこと。市内はまだ物が不足しているみたいだったので市外に出ることになった。車に乗って外を見れば、周りがどんな風になっているのか、どんな気持ちでみんなは過ごしているのだろうかと気にかけて見るのが、家にこもりっきりの生活での唯一の刺激だった。もしかしたらこの時に防災のことを考えはじめていたのかもしれない。しかし当時の僕はそんな気持ちを持つ反面とにかく外に出て遊びたいという気持ちも強くあった。そう思うくらい地震後は娯楽がなかった。

・ 4月ごろ

地震発生から3ヶ月。そろそろ被害の軽いところでは以前の暮らしを取り戻していた。僕も何とか幼稚園の卒園式にも出る事ができた。そして、僕はついに小学生になった。僕の場合普通の公立小学校に通わず、中央区にある私立の学校に通う事になった。ふつうならバスと電車で乗り継いでいくが、たまに父の車に乗せておくってもらう事がしばしばあった。その通学の途中に長田の町を見る事があるが、まだまだひどい状況に見えた。たしかいっぱい建物があつたはずなのに、まちには荒地が広がっていた。見渡す限り茶色い地面が見えた。また、学校にいるときにも、被災直後ほど頻繁ではないが余震がおきる。でも怖くない。最初の時と違って不謹慎だけど新鮮に、ドキドキしたものを感じた。

僕が入学した頃にはいなかったけど、学校にも近所の人々が避難してきたらしい。震災前はボールで近所のガラスを割ったり、少しだけだけ外国人学校という偏見もあったりしたためか、あまりお互いいい雰囲気ではなかった。しかし震災のとき学校は嫌な態度をとられていたにもかかわらず、避難を受け入れたことにより、近所の人との関係もよくなったということも聞かされた。たぶんこの話は地震で被害を受けた中で初めて聞いた“地震が起きてよかった”ことかもしれない。今までさんざん悪いイメージしかなかった地震が、地震によってよかったものもあると気づかされた。

・ 現在

今はもう高校3年になった。防災の知識も一般的な知識もいろいろと学んだ。あの時わからなかったことがたくさんわかった気がする。どれだけの人が死に、どれだけの人が悲しんだか、今も時々「あの時はホント大変で、面白くない日々やったな。でも何か得たものもあるような気がする」と思い返している。そして考える。これからは地震を経験して、環境防災科で専門知識を学んで、どうやって活用すればいいだろう。専門的な仕事に就くのもいいし、ごく普通のサラリーマンになってみるのもいいし、仕事をするかたわらにボランティアに参加もしくは立ち上げるのもいいんじゃないかと思うが、まだはっきりしたことは決めていない。でもこれからはこれらの知識、経験を伝えていく必要がある。地震で悲しいことが起きないように、被害が出ないようにするために。確かにもう過去の話だが、またこれから起きる災害を防ぐためにこの知識、この文章が役に立てればいいかなと思っている。

未来への防災メッセージ

兵庫区北逆瀬川町

大西 健太

はじめに

阪神・淡路大震災を経験してもう 11 年。震源地淡路島北部、マグニチュード 7.3。あのときの赤く光る炎、ぐちゃぐちゃに壊れた建物、どこからか聞こえてくる悲鳴、鮮明に覚えている。あのときはまだ幼稚園の年長だったと思う。あのときはとても幼くて地震の存在すら知らなかった。というか、地震といわれてもわからなかったし、わかろうとしなかった。町では悲痛な叫びしか聞こえなかった。自分自身もわけがわからずなにをしようともせず過ごしたそんな地震体験を書く。

地震発生

地震前日、普通どおりの日で朝から幼稚園に行き、夕方幼稚園バスに乗り帰宅という感じの 1 日だったとおもうが、その日バスから見た空はなにかおかしかった。言葉では言い表しにくい雲が黒く変な形をしていたのを覚えている。あの日は幼稚園に行く日だった。地震発生前日に幼稚園の制服を準備してもらい、夜 10 時ぐらいには寝床についた。まだ、親たちは酒を手飲みに飲んでいる。寝辛いという感情をもちながら目を閉じて夕方の雲のことを思い出していた。変な雲、黒い、見た事ない形をしていた。ちょっと不気味と思いすぐ頭の中から消した。そんなこんなで勝手に寝ていた。

AM 5:46 分...「ゴゴゴゴォォ・・・ドッカーン!!」地震発生、そのときまだ寝ていた。地震が起きてタンスやテレビ、食器棚などが倒れた。タンスが上にのしかかってきた。あのころは部屋には親父が横でいつも寝ていたし、寝相もとても悪かったので「親父が上にのってきた」とずっと思っていた。だけど、なかなかどけられない。いつもとなにかが違ふと感じ始めたころには「おい!起きろ!」と声が聞こえていた。やっぱり「なにか」が起きたんだと思った。そして、その「なにか」の事実がわかったきっかけが、ベランダから見た前に建っている高層の建物が真ん中で壊れて、両方から真ん中に流れるように壊れていた(表現しにくい...)のが見えた。そして、そこで「なにか」とは「地震」ということがわかった。

とりあえず避難することになった。家は危険なので車に避難した。車を走らせるといつもの空、いつものまち、いつもの風景じゃない。どんよりした空、怪獣に壊されたような町などが目に次々にはいつてきた。怖いとしか思わなかった。知っている家は壊れ、いつもお菓子を買ってもらっていたコンビニは閉まっていて中がぐちゃぐちゃ。地震が発生したのは早朝なので車でまちを走らせているころには昼前だった。母はガスコンロや生活に必要な日用品は車に積んでいたのものでそれでカップラーメンかなにかを食べた。

少し時間が経ち家に戻ることになると、やっぱりなかはぐちゃぐちゃで、水槽で熱帯魚を飼っていたのもみんな死んでしまっていた。ガラスは飛び散り、タンスがあちこちに倒れ、時計は下に落ちていて壊れ、食器類は散乱していた。水道は使えなかった。電気は通っていた。ガスは使えなかった。電気が通っていたのである程度の情報はいつてきた。この地震の規模、いまのところの死者数など。幼かったものでテレビのニュースの内容がわからなかったけどある程度は感じ取れた。「これはものすごいことが起きたんや」とも実感できた。

避難生活

夜になると親の友達の家に行った。ここはまだ被害が小さくて家の物などが散乱した状態で済んでい

た。そこをみんなで整理して避難スペースを作って被災生活を送り始めた。何人ぐらいで生活していただろう？ざっと4家族ぐらいは生活していたんじゃないかと思う。その避難生活の間ずっと親父と母の弟は家で早く生活ができるように整理、掃除、修理などをしに行っていた。その間の自分たち子供らはおもちゃやじゃれて遊ぶしかなかった。子供だって怖いけど気を紛らわすにはいつもどおりのことをしないとだめだと学習していたんだと思う。小学校に避難しに行ったりもした。中学校にも避難しに行ったりもした。だけど、そのとき一番に思ったことが自分の家で普通に家族と一緒に平凡な暮らしでいいから早く戻りたいと強く思った。毎日出されるご飯はカップラーメンや冷たいおにぎり。家に帰ってあったかい料理が恋しくなっていたのを今でも覚えている。

その家に避難しに行った翌日は祖父が心配だったので家族みんなで家に行った。祖父の家は築何十年も経っていたので心配だった。祖父の家に近づくにつれて怖くなった。近くの家は全壊、半壊している家も多々ある。しかし、祖父の家は大丈夫だった。中もそれほど被害が多くなかった。タンスなどはとても重くて倒れなかったらしい。だけど、もし倒れていたら大変なことになっていたに違いないだろうと思った。この祖父は親父のほうの祖父で母のほうの祖父はどうなったのか心配になった。その祖父は灘に住んでいて灘は被害が大きかったことをニュースで聞いていたから余計みんな心配していた。そのときは安否がわからなかったが、後にわかったのが家が全壊したということ…。だけど、ベッドに守られて怪我がひとつもなく済んだらしい。そのベッドは母が祖父にプレゼントした物だったらしく、「このベッドに守られたんじゃないー」って九州弁なまりで言っていたのを覚えている。本当に助かってよかったと実感できる。

親戚や家族は誰1人亡くならなかったのは奇跡だと思う。あのとき死んでもおかしくない半端ではない揺れだったし、実際母の友達が亡くなっていた。その人は子供が2人いて年も自分と同じ子が1人と弟と年が同じ子が1人でまったく同じだった。だけど、弟のほうをかばって圧死したらしい。そして、その子とそのおばちゃんは亡くなった。お墓参りにも行くけどあまり覚えてない。母からしたら大切な人をなくしたから悲しかったと思う。いま現在も1・17の行事には絶対目を向ける。決して無視して通ることはできない行事。毎年毎年黙祷をするたびに思う。あのときの惨劇。戦争に遭ったことはないけど、戦争が起こったかのような気持ちになる。

芦屋に親戚がいたので車で見に行っただのを覚えている。あのときは芦屋は被害が少ないところと激しいところの差があった。その親戚の地域は被害が少なく住める状態であった。だけど、震災で被災した人同士で河川敷のところで焼肉を焼いたり、話したりしていた。これこそが「共存」だと思った。人と人とが協力して、共に分かち合って生きること。

話は変わるが、そこでは水道管がやられていたので定期的に学校にくる自衛隊の給水車に水をもらうのが日課になっていた。自衛隊の人は見た目はとても怖そうな人だけどとてもやさしく水をくれた。このときは少し自衛隊に憧れていたかもしれない。

このときは親戚の家で避難させてもらっていた。親戚の家は芦屋の深江だったので被害は多くあったけど大きな損害とまではいかなかったから避難をさせてもらった。だけど、水道はやっぱりあちこちで止まっていたので親が苦労しているので少しでも楽にさせようと思って、水を自衛隊からもらってきたのだ。親父と居候の母の弟は家に帰り、淡々と家の中の整理をしていたらしい。ガラスなど危険なものが散乱しているから子供は連れて行ってはくれなかった。

避難所でもっとも効率よく運営されていたのはやっぱり小・中・高等学校だと思う。かんぱんの配布、おにぎりの配布、毛布の配布など生活に必要なものはほとんど手に入った。このときに体育館を覗くと、たくさんの人が布団をしきつめて踏み場がとても見当たらないぐらい、歩くスペースがないのにとっても驚いた。みんなやっぱり元気はなくて、お年寄りや寝たきりの人も中にはいた。そして、トイレは汚くて悪臭が漂っていた。水不足で汚物が流しきれない状況だったのだと思う。大の方は10リットル以上水がないと流れないらしい。

人々の不安

学校は問題がたくさんあり、学校運営、心のケア、物資の支給などがたくさんあったと思う。この環境防災科にはいつから学んだことがたくさんあって、震災当時あまり覚えてないけどたくさんの支障があったんだなぁと思った。避難して来る人にはいろいろな事情が人それぞれで違う。ときには家が全壊した人、ときには家族を失った人、ときには怪我を負った人…。いろんな人が来る中で学校運営に携わってきた先生などはこの当時震災など来るとは思わなかったと思う。実際神戸のまちは安心できると思っていたと家族や祖父母は言っていた。“神戸のまちは安心”というのが“恐怖のまち神戸”に変わったのは一瞬の出来事で神戸のまちは震撼させた。あの当時子供だったし、地震なんか知らなかった。戦争だってまったく知らない。防災や災害といった言葉なんか聞いたことがないくらいだ。

あまり覚えていない出来事だからこれぐらいしか書けないが、心の中ではものすごい量の震災の教訓を覚えさせられた。人との協力、一致団結、共存。さまざまな人の気持ちがわかったし、家族の大切さもわかった。人の大切さがわかった。それに地震の怖さもわかった。

覚えているのはこれくらいだ。あとは震災体験から今までに学んだことや現在の環境防災科から学んだことや災害関係のことを書く。

学び

震災体験をしてもうかれこれ 11 年。月日が流れるのは早いものだと感じる。もうすぐ誕生日を迎え、自分自身も 18 歳になる。もう大人として社会に出る予定だし、そろそろ将来のことも考えないといけない年になる。そこで震災から学んだことをいかして防災に将来少しでも役立てるようにしたいと思う。一番思うことは震災体験を通して一番感じた「協力」するということの大切さ。人は 1 人じゃできないこともたくさんあるけど、みんなが集まったらできることだってある。そんな風に災害時、人は協力し合った。自分自身も親の手伝いなどもした。水を運んだり、荷物をもったり。子供でもできることがあるなら、大人にはもっとできることの範囲が広いと思う。そこでこれからの防災は大人がひっぱり、それも今世の中に多くいる「ニート」など社会にでていない人などに防災力を身につけてもらい、災害時に活躍してくれれば別にニートでもいいと思う。けど、防災を勉強してもお金を稼ぐことなどはわずかな収入しかないけれど、防災っていうのは自分を守るためじゃなくて、大切な人、家族、恋人、友達などを守るためにも勉強をするということを忘れないでほしい。

災害は減るもんじゃない。自分で被害を抑えて被害を最小限で食い止めることが大切ということ。これからの未来どうやって社会が進化していくかはよくはわからないけど、多少は科学も進歩するだろうし、便利さも増すだろう。けど、災害は決して減らないと思う。年齢層は年々高くなっている。そんななかで高齢の人たちになにもなくてもいいのか？少なくとも体は動き、言葉をしゃべれるのだから、災害に備えて地域で避難訓練や自治会などで防災講演会など、防災をより身近で感じられるようなことをすればいいと思うし、いかにお年寄りに防災をわかってもらえるか、過去にあった大地震などのことを題材にしてスピーチをして、災害の怖さを改めて知ってほしいとも思った。いつ災害はくるかわからない今。時間が少ないと思う。最低でも家庭では食料を 1 週間分、水を 1 人 3 リットル用意しておいてほしい。

南海大地震がもう少しの時間で発生する恐れがある。家は地震被害だけに備えているのではないかな？阪神・淡路大震災みたいな地震災害だけではないことをわかってほしい。津波被害が各地ですということ…。数年前に発生した、スマトラ沖地震。スリランカの東側はおおきな傷跡がいまでも残っている。津波の高さが約 30m もあったそう。まだ、関西のかたなどは津波がどれほど怖いかあまり実感できないと思うけど、津波は自分が思うに地震よりずっとこわいと思う。正直、スマトラ沖地震の傷跡の写真とかを見たけどかなり残酷だった。家がなかったのに跡形もなく流され、一面に広がっていた田畑は

いろいろなゴミが流れてきていて再生不可能な状態。あんなスリランカみたいな被害が関西にもできたらぞっとする。関西(特に大阪)は都会が多いし、川も流れているところが多い。津波は川をのぼってきて都会を襲う。もし、大地震が発生したらまず避難し、なるべく高いところに逃げる。津波はどうにもならない。ゴミを流して、木を根こそぎ流してそんな水のなかに人間が流されるとゴミなどにひっかかったりして体が引き裂かれる。実際スリランカの少女が書いた絵にはそんなことが書かれていた気がする。自分の親が津波に流されてバラバラに引き裂かれて遺体安置所に帰ってきたこと。そんな子供たちがスリランカにはたくさんいる。いわゆる、孤児という子供たちが。スリランカは日本と違って家の造りも違うし、使っている材料も違う。だから、スリランカよりは多少被害は少ないが車などは一発で流されてしまうと思う。だから、安心はしては駄目ということ。いつも毎日の生活から防災を意識して日常生活を送ることが自分の命、家族の命を守る第一歩だと自分は思う。阪神・淡路大震災から学んだことは数え切れないくらいある。そんななかでも自分は人のつながりがやっぱり一番大事だと実感した。

数え切れない人が阪神・淡路大震災で亡くなったけど、また数え切れない人に防災の大切さを学ばせたものだと思う。防災に関わりがなかったたくさんの人たちに災害の「恐怖感」というものを植えつけたと思う。そのことがよかったか悪かったかはわからないが、ただ言えることは阪神・淡路大震災は兵庫の人たちになにか防災のメッセージを残していったんじゃないかと思う。あの出来事は誰も忘れないし、これから語り継ぐことだと思う。活性化してきた神戸のまちも毎年絶対というほど防災関係のおおきな行事がある。これは非常にいいことだと思うし、防災をみんなに知ってもらうのに非常にいい案だとも思う。

最後に

自分自身もあの阪神・淡路大震災から学んだことがある。それは人の温かさや人の大切さ。誰1人亡くなってほしくなかなかったし、あんな悲しいことはもう起きてほしくないと考えた。誰もが願うことだと思うけど、この国ではそんな簡単にはいかないそうだ。災害大国の日本はいつどこで大きな災害がくるかわからない。次に関西地方に大きな災害をもたらすのは南海地震だろう。もう阪神・淡路大震災みたいな被害はだせない。防災力が少しでも向上した神戸のまちのすごさを南海大地震に見せ付けたい。防災には「減災」という言葉がある。少しでも被害を少なくするために災害に対抗することである。いまの神戸には災害に対抗できるほどの「減災力」が高くあると思う。神戸は阪神・淡路大震災から防災に手を尽くしてきたけど、世界的に見てはまだまだだと思うから世界的に有名な防災のまち「神戸」ってのがすごい憧れるし、自分も神戸に住んでいてとても安心して生活できる。そして、そんなまちに日本唯一の舞子高校環境防災科。そんな感じが理想である。これからその理想に一步でも近づけるように自分でもがんばりたいと思うし、みんなと協力してがんばっていききたいと思う。

あの震災からもう11年。環境防災科に入ってもう3年目。いろいろ防災についても学んだし、たくさんの細かい情報も頭に詰め込んだ。いろんな課外授業にもいった。さまざまな視野から防災学習を学んだ。大学の講師の人たちから数え切れないくらい大切な言葉をいただいた。カウンセリングのことや災害救助犬のこと、応急対応のこと、ライフラインのこと。こんな重要なこと忘れない。将来絶対忘れないと思う。いつかくる大きな災害から最低でも自分が将来持つ家族だけでも守りたいと思う。未来には自分の子供にも防災学習をさせたいと思う。

E N D

災害から学んだこと

中 国
勝見 久美子

(1) 私と阪神・淡路大震災

私が5、6歳の時に阪神・淡路大震災が起こった。その頃は神戸に住んでいなかった。親がニュースをみて慌ててお祖父ちゃんに電話したのをよく覚えている。今思えば、祖父は埼玉に住んでいた。きっと親はこんな大きな地震だから、埼玉にも影響あるかもしれないと思って電話をしたと思う。親は地震を体験したことがなかった。私はその時地震という言葉も知らなかった、もちろん体験したこともなかった。ニュースを見ても理解できなかったけど、映像から泣いている人々や、叫んでいる人々をみてなんか悲しかったのは覚えている。私は友達に阪神・淡路大震災についていろいろと聞いた。

(2) 阪神・淡路大震災の体験

・正人さんの体験 当時 12 歳

夜、「テレビを見てから明日も学校や、用意して寝よう」と思って...、用意をしてから寝たのを覚えている。「地震や地震、早く起きなさい」というお母さんの叫び声で目が覚めた。なんかユサユサッ、などというのではなく、ガガガガ！ というような揺れだった。その時のことは今でもよく覚えていて、「うわっ、地震や！」「本棚が倒れたら死ぬ」「家がまさかつぶれないよ」「水使えるかな」「電気使えるかな」「祖母は大丈夫かな」揺れている間に考えた。そして停電。揺れがおさまって、まず親と祖母の部屋に行き、祖母の部屋は家具も少なく、無事だった。祖母からろうそくをもらって火をつけた。今、考えると、みんな無事でよかったと思った。2階に上がると、棚が倒れていた。その場所にいなくてよかったと思った。下敷きになったら死んでいたかもしれない。そう考えると泣きそうになった。

だんだん、朝になって光がさしてきた。家のみんなもすこし落ち着いた。ヘリコプターが飛んでいた。「何か大変なことあったに違いない」と思った。今までの地震とは違う気がした。その後は余震が怖くて家の外に座っていた。外に出ると驚いた。道路が割れて、電柱や塀が倒れて、建物が倒れて、泣いている人や、叫んでいる人。その時初めて「大地震」が起きたことを知った。夢みたいな現実だった。ちょっと落ち着いてから、信じられない気持ちで歩きながら町内をいろいろと見て回った。消防車の音が鳴り響いていた。非常ベルも鳴り響いていた。「あんたに言われなくても非常だってことくらいわかっている！」と思った。なんかいらいらしていた。なにをしていいかわからなかった。2階が道路に落ちて1階になっている家があった。その家の人生きているかな、生きているといいなと思いながら歩いたら、友達の家があった。家がつぶれていた。心配になってその近所の人に「この家の人は生きていましたか？」ときいたら、「避難所にいたよ」と答えてくれた。友達の家族も誰も死んでいないと聞いてほっとした。家に帰ってからじわじわとショックというものが実感されてきて、気分が悪くなってきた。涙も自然に出てくる。でも、泣いてもなににしても、目の前の光景が変わらなかった。これが現実と言うことを信じたくなかったけど、現実ということを受け止めないといけなかった。親は近所の人を助けたりしていた。自分もなんかできることないかなと思ったけど、体が動かなかった。

それから、避難所での避難生活が始まった。小学校の体育館だった。寝るときも、トイレにいくときも、たくさんの人が並んでいた。食事もお腹いっぱいには食べることができなかった。夜も寒くて、赤ちゃんの泣き声ですっと寝ることができなかったり、気分悪くなったり、下痢になったり、本当に辛かった。いらいらもして親に怒ったり、急に泣いたりする子もいた。今思えば親のほうがかつと大変だった...。大人たちは「食料」とかで喧嘩することもあった。避難生活は大変だった。自分にできることがわからなかった。今までの生活がとても幸せに思えた。大嫌いの勉強もそのときはしたくてしかたなかった。ほかの県からきたボランティアの人もたくさんいた。とても優しく声をかけてくれたけど、そのと

きの自分はその人たちに対して冷たかった。かわいそうだから助けてあげよう、そう思われるのがいやだったのかもしれない。しばらく、明るい自分には戻ることができなかった。

そんなある日、避難所に美容師のボランティアの方が来てくれた。順番で髪の毛を切ってくれた。私の髪を切ってくれたのは若い男の人だった。髪を切りながらずっと声をかけてくれたけど、なんも言わなかった。やっぱりそのときの自分はボランティアの方と話したくなかった。でも、その人は諦めずにずっと話しかけてくれた。「どんな髪型がいい」、「かっこよくなるよ」とかを質問された…。知らないうちに、少しずつと会話をしていた。その人に「弟とかいる」と聞かれ、「いない」と答えた。そしてその人は「避難所の子と仲良くなったら、自分の知っていることを教えたら、喜ぶと思うよ。こんなときこそ笑顔で乗り切らないとね」と笑顔で言われた。「でも、みんなそんな気分じゃないと思うよ」と言うと、その人は「だから、みんな暗かったら、大人も辛いよ。元気になって親を安心させないと」と言われた。よく考えると暗くなっても仕方ない、これが現実だから、前向きに頑張らないと思った。それから、私は自分と同じ年の子を誘い、小さい子たちとゲームの話とかしたりして、ちょっと走り回って遊んでいた。でも、中々話そうとしない子もいたけど時間がたてば、話をしてくれると信じて、ずっとあの美容師のようにずっと話しかけたりもした。「お兄ちゃん遊んで」とかも言われたりして、すこしずつみんなの笑顔が戻った気がした。うれしかった。その美容師に今でも感謝している。もし出会えてなかったら、多分ずっと暗い自分がいたと思う。

私は阪神・淡路大震災は一生忘れられない。忘れたくないというのが正しいかもしれない。なぜなら阪神・淡路大震災で自分が変わったから、1日1日を大切に生きようになったから、誰かのためになんかしようと思えたから。

・洋美さんの体験 当時 20 歳

夢を見ていた。彼氏と動物園でデートをしている…。突然、何かが自分のお腹の上に落ちてきて夢を破られ、目を覚ました。布団から出て、そのときはそれほどの揺れではなかったから、「まあ、すぐに終わるわ!」と思いながら椅子に座った。やがてその揺れが段々激しくなっていた。スピードが猛烈に早くなってきた。これは、危ないと思い、布団を頭の上にしてなるべく安全な場所にいるようにした。私が住んでいるマンションは10階建てで、私は6階に住んでいた。建物全体が「ゴオーッ」というものすごく不気味な音がした。今にも倒壊しそうだった。そのときには家の家具はすべてその音とともに倒れ、真っ暗な中、また何かが胸の上に落ちてきた。怖くて、今にもこの建物全体が倒壊しそうで「私は死ぬのかな」と思っていた。やっと揺れがやんだとき、「助かった」と思った。ちょっとは安心したけど、部屋はめちゃくちゃだった。そして、友人が泊まっていることを思い出した。別の部屋に寝ている友人が気になり、倒れた家具を乗り越えながら、友人の部屋に行くと、友人が洋服タンスの下敷きになるところをわずか数センチのところかわし、助かっていた。本当に危なかった。

そのとき、2人抱きあいながらずっと泣いていた。泣いてもなんにもならないから、2人は涙をふいた。まだ外は明けきらずに暗かったが、目をこらしてよく見ると、この団地のマンション群は倒壊した棟もなさそうで、ただ、すべての棟の警報ベルが鳴り渡り、その警報で余計に不安になった。後でわかったことだが、これは火が起こって警報装置が作動したのではなく、激しい震動で作動したらしい。日の出を迎えて明るくなってくるに従い、外の景色の変わりように驚いた。いたるところに大きな地割れがあった。家もたくさん倒壊していた。その幅が1メートル近いものもある。街灯はすべて大きく傾いている。友人も家族のことが心配で家に帰り、私も家族が心配ですぐ実家に戻った。

帰り道、町の光景が町じゃなくなっていた。倒れそうな家がいっぱいだった。まるで、アニメの世界みたいだった。家に着くと家族みんな無事だった。でも、1人で不安だったせいかもしれないけど、親にあった瞬間大粒の涙が出てきた。親も涙がとまらなかった。家もそこまで倒壊していなかった。

家から西の方を見ると、そこはもういたるところで火が発生し、真っ黒な煙が立ちこめている。家が見えなかった。そのとき町が消えたのかとさえ思えた。よくここで夜景を見ていたのに…今となっては

真っ黒に煙しかない町になっているなんて信じたくないという気持ちでいっぱいだった。泣きながら「どうしてこんなことになったの？」って叫んだ。答えは返ってこない。涙だけが増えていく。それからちょっとしてからわかったことだけど、この時の火事で長田区の親戚の家は消失し、また、違う親戚の家は激しい震動で倒壊した。しかし、幸いみんな大した怪我もなく無事であった。友人の家族もみんな無事だった。本当に安心した。生きていたらなにかができるよねと自分に言い聞かせていた。この近くの駐車場とか公園とかは液状化現象で一面の泥。鉄筋コンクリート造りのマンションが大きく傾いているのが見える。すぐにでも倒れそう。液状化現象というのを初めてみた。地震の恐ろしさが初めて身を感じた。

この地震で阪神高速道路が500メートルくらいにわたって横倒しになった。あの頑丈そうな高速道路が倒れて、そのときみんな不安だったと思う。こんな頑丈なものが壊れるということはこの地震の大きさがよく分かると思う。その近くに住んでいた人々は修復されるまでは心配で近くの小学校に避難していたみたいだ。

私の家は倒壊までにはいかなかったから、しばらくしてから、みんなで家を戻せるようにがんばった。お母さん、お父さん、お兄ちゃんと協力して直せるところまで直したけど、家はすこし傾いていた。家具も買うお金がなく、前の利用できる家具を利用した。不安ということもあって、いつまだ地震が起きるかわからないということもあって、しばらくはみんなで一緒に寝ていた。

後で知ったことだけど、私が住んでいたマンションには犠牲者は1人もでなかった。この建物に感謝の気持ちでいっぱいだった。傷つきながらも中の住人の命を守ったのだから。本当にえらいよとほめてあげたかった。そこに住んでいて本当によかった。阪神・淡路大震災で被害が多かったのは建物にも原因があると思う。もっと強い建物を建てないといけないと思った。この阪神・淡路大震災の教訓をいかして、もっといい街になってほしいと思っている。

・達也さんの体験 当時 35 歳

平成7年1月17日は家におり、寒い朝で、布団の中からはなかなか出る気がなかった。突然、ガダガダダツという音で揺れが始まった。「アレッ、地震や、家族大丈夫かな」と思いながら、しばらく様子をみたら、上を見上げると、蛍光灯が上下に激しく揺れていた。今までと違う揺れだった。危険だと思い、家族を起こしにしようとしたら、電気が消え、本がバラバラと落ちてきた。家具が倒れ始め、ガラス窓がパリンパリンと割れる音がしたので、ガラスの破片が下に落ちているから、動きにくかったけど靴を探して入ってから、すこずつゆっくりと歩いた。この家はもたないなと瞬間思った。命の危険を感じた。家族の元にやっと行けた。その日は奥さんと子供と一緒に寝ていた。子供は泣いていた。奥さんは私の顔を見てとても安心した顔をしていた。そして、3人で一緒に揺れがおさまるのを待ち続けた。真っ黒の中、物の倒れる音しかなかった。

しばらくして揺れがおさまると、3人で声を掛け合いながら、そのまま表に出た。南向いの建物が屋根から崩れ落ちているのが夢のように見えた。普段から近所付き合いがよかったから、これは大変だなと思いながら、ご近所の安否を確認した。ある家は長男が無断外泊して行方不明だということが判明してきた。奥の方は名前を呼びながら、安全を確かめに出てこられた。普段は付き合いのない南向いの家の事をたずねると、夜に勤められているので多分不在だと思う、右隣も留守だと思うとの答えが返ってきた。ちょっと安心をした。余震が続く。妻が服を持ち出したので着替えた。自分の家族はみんな無事だったから、家族に、庭に居るように言って、会社、兄弟の安否を確かめに出かけた。家までいたり、電話したり、近所の人から聞いたり。アパートが道路の半ばまで出てきている。途中見る影もないほどつぶれている。1人住まいの会社の人を訪ねると平屋だったので瓦がずり落ちていたが無事だった。ダイエーなどの4階建てのお店が、いずれも1階店舗が押しつぶされている。想像もできないような景色がたくさんあった。

私の兄弟の家にもいった。家は傾いただけでみんな怪我もなく無事だった。妹の住む母屋は土塀がな

くなり、2階の屋根が落ちているが、みんなすぐ1階におりたらしく、1階は残っていた。全員無事だった。

こんな時は昔からの付き合いの所へいってしまう。昔の友人の家は1階がなくなり、その友人は「お母さん、お母さん」と呼んでいるが、応答がなかった。私も一緒にさがした。下敷きになっていたから、道具がないので道具を探して、家具などをのけてから、何分だったか、必死だったから50分も100分にも感じた。やっと助けることができた。友人はすこし安心していただけだった。そのあとは、近くの子供が「助けて」と全壊の瓦礫の下で泣き叫んでいた。知らない方に声をかけ、手を貸して欲しいと頼むと、快く引き受けてくれた。少女も無事に助けることができた。親の胸で少女の涙は止まることがなかった。

少女のことを心配する暇もなかった。すぐに知らない人に、この家は1人暮らししているお爺さんの家で、呼んでも返事が無いから探すのを手伝ってくださいと言われた。お爺ちゃんを探すために、まず、屋根などのけて、家具ものをのけて、ガラスなどもあって指を切ったけど、そのときは夢中で痛いのも忘れて、声を出しながら一生懸命お爺ちゃんを探した。そして、やっとお爺ちゃんを見つけたけど、タンスの下敷きになって、もうすでに亡くなっていた…。一緒に探してくださいっていた子は死んだお爺ちゃんを見ながら、泣き崩れていた。泣きながら私に、お爺ちゃんは私が小さいときから一緒に話してくれた、勉強教えてもらった、一緒にもちも食べた、大学合格したときもとても喜んでくれた、そんなお爺ちゃんが死ぬなんて…と言った。私はなんも言えなかったけど胸がとても痛かった。もっと早くきたらお爺ちゃんは助かっていたと思った。

それから、手伝ったりした。泣きながら感謝されることもあったけど自分の中ではやって当たり前をただけ。人が死んで喜ぶ人は1人もいないと思うから。自分の手で1人でも多くの人が助けられるなら頑張りたい。2日目や3日目以降になると、助かる人の数よりも死んでいる人の数が多かった。悲しい気持ちとショックという気持ちがすこしずつ大きくなっていった。

最初は、こんな大きな揺れを経験したことなかったから、何をしていたかわからなかった。でも、いろんな人を助けたことによって、私は普段の付き合いや近所付き合いが本当に大切だと思った。だから、これからも、近所の人とちゃんと付き合いをして、なんかあったときに助けられる、助けてあげられるようにする。

(3) これから自分がしたいこと

私は友達に阪神・淡路大震災の体験を聞けてよかった。やっぱり、阪神・淡路大震災のことを忘れたいという人もいると思う。考えるだけで気分悪くなったりする人もいると思う。写真と映像も見たくない人もいると思う。だから、阪神・淡路大震災のことを話してくれたことは本当に感謝をしている。みんなはきっと自分の阪神・淡路大震災をいろんな人に知ってもらいたいから話してくれたと思う。もう同じことにならないように防災を知ってほしいからだと思う。

私は友達に「地震とか体験したことなかったのに何で環境防災科に入ったの?」と聞かれたことがあった。私は神戸に住むまで阪神・淡路大震災のことも知らなかった。地震を体験したこともなかった。もちろん興味もなかった。神戸に住むようになって、学校で地震や阪神・淡路大震災のことを知った。初めて、阪神・淡路大震災の映像をみたときは、これが神戸というのが信じられなかった。道が割れていて、電車が倒れていた。とても悲しくて、涙が出そうになった。驚く気持ちと悲しい気持ちで胸がいっぱいだった。でも、あの神戸と今の神戸がこんなにも違うのが、それ以上に神戸がこんな早く復興したことに驚いた。それから、すこしずつ神戸という街に興味をもち始めた。だから、環境防災科に入ったというもある。もう1つの理由は私が国際的な仕事をしたかったから。神戸にこんな大きな地震があったから、きっと世界はもっと大きな地震や災害が起きていただろう。そういうのをもっと知りたかったから、世界の災害と防災の仕方も知りたかったから。だから、環境防災科でいろんなことが勉強できるからと思って入った。

今まで阪神・淡路大震災の映像をみて感想を書いて終わりみたいな感じだったけど、環境防災科はその当時の消防、警察、ライフライン、ボランティア、心のケア、外国の災害など外部講師の話をきくことができた。消防学校の体験などもした。訓練がとてもしんどかったけど、すこしは体力もついた。緊急対応の仕方や、消火器の使い方などもわかった。環境防災科では災害だけではなく、ネパールとの交流もあって、いろんな方面から勉強ができる。私は環境防災科に入って本当によかったと思っている。

これからは環境防災科で学んだことをいかしていけたらなと思っている。例えば、防災と全然関係ない職業についても、防災を広げていきたい。地域の避難訓練に参加したり、近所の付き合いをちゃんとしたりして、外国の人に防災を教えたりして、自分が聞いた災害体験をいろんな人に話して、もっと防災を広げられたらいいと思っている。もし外国にいったら、そのときも防災を広げたい。まず、災害というのを教える。それから防災というのを教えたい。スマトラ沖地震みたいに、津波というのを知らない人が多いから大きな死者が出たと思う。津波というのを知っていたら、もっと多くの人が生きていたかも知れない。そう思うと知らないことは本当に怖いことだと思う。

今の時代には環境問題はいろんなことがある。オゾン層、ゴミ問題、地球温暖化など。だから災害はいつ起きるのがわからない。すこしでも災害を減らすためにはもっと防災の知識を知るべきと思う。だから、これから防災についてもっと勉強したいと思っている。

語り継ぐ—神戸が揺らいた日

神戸市垂水区星陵台

神谷 晃平

僕の家族は、父と母、弟と姉と僕の5人家族だ。当時の僕は弟と同じ幼稚園の年長組。姉は小学2年生だった。父は近所の垂水郵便局に勤めていた。

当時の記憶はほとんど薄れてしまった。姉に聞いてみても「覚えてない」と言い、自分自身の記憶を辿るのはとても難しかった。それでも、僕の当時の記憶は、断片的でも強く心に焼き付いていた。空間中がごうごうと揺れるあのただならぬ光景。今でもその感触は忘れられない。

僕が覚えているのは震災発生直後から、それから数日後の断片的な記憶のみで、災害時の生活の全てを語ろうとするにはあまりにも記憶が少なすぎた。ここでは、僕の記憶と、両親の記憶を照らし合わせたものを紹介したい。

僕が今住んでいるのは、垂水区にある宿舍だ。昔からほとんど変わらない姿で佇んでいる。10年前のあの大きな地震に耐えた、僕の今までの歴史の象徴だ。号室の入り口に入って左側が姉の部屋の入り口、左正面が僕の部屋の入り口、右正面が洗面所・浴室の入り口になっていて向かい合わせにトイレがある。右の通路を歩いていくとリビングにつながる。

僕の家の場合、リビングと和室が隣り合わせになっている。和室は8畳くらいの広さで、布団を横一列に4枚ほど敷ける広さだ。和室の北側は押入れ、西側は出入り口、東側は洋服ダンスとクローゼット、鏡台が壁沿いに並べられていて、南側はガラスサッシ、といった具合の構成だ。

当時は家族5人全員が、和室に布団を並べて寝ていた。東側のクローゼットの存在は、今振り返ってみると恐ろしいことだと思った。震源が遠かったため倒れはしなかったものの、もっと大きな地震が僕の住んでいる地域を震源に発生していたら、きっと僕は倒れたクローゼットの下敷きになっていただろう。

和室にはふすまが付いているのだが常に開けたままにしているので、リビングと和室が一体化しているようになっている。当時和室で寝るときは、リビングの常夜灯を利用することを習慣にしていた。ところが…。

僕から見た災害の記憶：

冬の寒さが厳しい早朝、母の声で目を覚ますと目の前の、いつもは付いているはずの常夜灯が消えていた。何かが変。普段の朝とは様子が違っていた。

僕は母の腕の中にかかえられていた。僕はその時、何が起こったのかすぐに理解できなかった。あたり一面は妙な静けさで、姉と弟も、布団の上に座っていた。僕もまた、母の膝の上に足がくっついたようにただ座っていた。頭から布団をかぶって、顔だけ出している状態で。

目の前のダイニングには、視線の先の食卓越しに食器棚が西の壁側に佇んでいたが、観音開きになっているので、中の皿が何枚か飛び出して、床の上に粉々になって散らばっていた。幸い、食器棚のドアガラスが割れることはなかった。しばらくすると余震のような小さな揺れが間隔をあけて起こった。食器の揺れる音。空間全体ががたがたと揺れる感触が部屋全体を通り抜けた。部屋の上下を電車が通っているような揺れに戸惑っていた。

父は手に懐中電灯を持って、スリッパをはいていた。水道が止まっているらしく、まだ早朝ということもあり、僕は懐中電灯の明かりを頼りにトイレまで連れて行ってもらったのを覚えている。父が、バケツに風呂の残り湯を入れて流していたこともあった。

それから1時間後くらいに外に出た。宿舍の入り口（ホール）の手前のタイルの地面は、下方向に反れてへこんでいた（今は改修処理されているが、改修前は雨が降るとそこに水溜りができた）。地震が

起きた後の空は不気味な色だったのを覚えている。同じ宿舎の人たちが外に出ていて、どよめいていた。黄土色とねずみ色が混ざったような空で、まるで地球がおかしくなってしまったように思った。

宿舎の付け根には溝が出来ていた。僕は子供ながらに「空から大きな手が伸びてきてこの宿舎を揺らしたのかな」と考えていた。

宿舎の北側は駐車場になっていて、あたりの建物から少し距離を置いているので安心して車の中に避難できた。車の中に毛布を持って行って、避難の間は外の様子を伺っていた。その日の朝食はサンドウィッチで、母から受け取ったのを覚えている。今になって思い出してみると、当時の朝食がどんなにありがたかったことなのかを少し実感できた。僕たちが車の中で避難していた間にも、もっと遠くの地域では、朝食を食べられない人たちがたくさん居たのだから。

それから数日間、しばらく両親はポリタンクを持って水を確保しに行っていた。コマーシャルでは、しばらく「生水を飲んではいけない」といったようなCMが流れていたのを記憶している（母も覚えていた）。

僕は何もできずにただ、自分の部屋の畳の上に寝そべっていた。部屋が傾いているような、変な錯覚さえ感じた。

震災が起こってしばらくはガスが止まって風呂に入れなかったのが、数日後に高速道路を利用して姫路の健康ランドに行った。健康ランドは多くの人でごった返していた。群集の中に近所の知り合いの人がいたのを覚えている。

それから数日間、昼ごろにはNHKの放送をずっと眺めていたのも覚えている。『死亡』と赤い四角で囲まれた文字の下に、人の名前と住所が代わる代わる画面に表示されているのをただ見つめていた。僕の知らない地域の人たちが、次々に命を落としていく。今ほど命の重さを理解できていなかったはずなのに、悲しい感情が走ったのも覚えている。

僕が阪神・淡路大震災の記録を初めて読んだのは、小学校低学年の頃だった。赤く燃える家屋がしっかり写真に焼きついていて、恐怖を感じたのを覚えている。映画のジオラマのように、ひしゃげた家。この時になって改めて大震災の恐ろしさを実感した。僕の知らない地域では、何千もの人たちが命を落とし、何万人もの人々が家屋を失ったこと。避難所生活を強いられたこと。テレビでもよく報道されていた。当時は両親とよく車でドライブに出かけていたが、行く先々で仮設住宅をよく見かけた。あの中で、被災者たちがどんな思いで生活していたのか、考えると今でも胸が痛む。

母の記憶と照らし合わせた震災体験：

1月17日。母は「ドーン」という音で目を覚ましたそうだ。湯飲みやウィスキーの入ったサイドボードの上の、壁に掛けてあった羽子板が落ちこちていたそうだ。しばらく父は、タンスが倒れないように両手でずっと支えていたそうだ。

サイドボードの上には、長年愛用していたCDラジカセが置いてあったが、それはなんとかその場に踏みとどまって、転落することはなかった。しかし、ワープロは転落していたので、プリンタ機能がおかしくなってしまったのを僕は覚えている（当時のワープロはとても貴重なもので、僕の生活を大きく変えたものでもあった。結構頑丈に作られていたのだが、もしあの時ワープロが壊れていたら、僕はコンピュータの生活になじんでいなかったと思っている）。

また、姉の部屋の壁側に置いてあったピアノも数十センチずれて、ピアノの防振板からずり落ちていた。当時は家族全員で和室に寝ていたのが、あそこで誰も寝ていなくて改めてほっとした。

地震の爪あととは、他にも我が家に大きな被害をもたらしていた。建物のきしみがひどく、今でもフローリングが、きゅっきゅっと歩くたびに音が鳴っている。また、和室の窓サッシが歪んで、今でも隙間風が入ってくるそうだ。僕の部屋もサッシがゆがんでいて、網戸の枠がレールから飛び出した状態になっている。

外に出るとガスのにおいがしていたそうだ。また、ベランダから見える向かい側の2階建ての家は歪

んでいて、見るも無残な光景だったそうだ。

宿舍の西側の、裏庭へと続く通路の地盤が下がっていて、コンクリートが粘土のように変形して、下方向に反れていたそうだ。ということは、宿舍が立っているところの地盤も緩んでいたということだろうか。あれだけの地震によく耐えていたなと思った。

母の記憶では、外に出てみると、近所の人たちがどよめいていて、ただならぬ光景だったそうだ。ガスはずっと止まっていたので、それから数ヶ月は、ガスを使うことはできなかった。

あと、外に並んでいるマンホールのふたがすべて浮かんでいて、道路は波打っていたそうだ。地震のすさまじさを思い知ったと母は話していた。

車の中で僕たちが避難している間、父は、当時勤めていた垂水郵便局に様子を見に行っていた。屋上のタンクが破裂していて、水浸しになっていたそうだ。また、その日の昼食に、近くのスーパーに買い出しに行っていたそうだが、まるで一掃セールでも行ったかのように、陳列棚が空っぽだったそうだ。その後数日間は食料の調達が難しかったと母は語る。

震災発生から数時間たって、田舎の叔父から、安否を気遣う電話が来た。当日は電気がすぐに復旧したので、それがせめてもの救いだった。電話もかろうじて通じたそうでとても運がよかったと、その時電話に出た母は話していた。

電話ボード付近のコンセントは電気が通っていたそうだが、テレビ側のコンセントには電気が通ってなくて、しばらくテレビをつけることはできなかったそうだ。だから、神戸市の各地で火災が発生していたことも、阪神高速が倒壊していたことも、田舎のおじさんの話を聞いて初めてわかったそうだ。電話がかかってきて1週間後、レトルト食品がいっぱい入った物資が田舎から届いた。母が言うには、その物資を近所の人たちと分け合ったそうだ。当時、災害が起きたときの近所の様子は、「誰もが、自分自身が生きるために、自分自身を守るためにしか動いていなかった」と聞いた。そんな中で、物資を分けて、近所の人たちを助けようとした母はすごいなと思った。テレビがついたのは、電話がかかってきてから数時間後の、ちょうど昼ごろだったそうだ。

水は、父が星陵高校まで水を汲みに行っていたそうだ。1日～2日ごろに桃山台の祖父祖母から電話がかかってきて、「水がこっちでは出ているから使ってもいいよ」と言われた。当時は水が不足していたので、とても貴重なものだった。それから祖父祖母の家に車で向かおうとしていたそうだが、いつもなら10分くらいでいける道も、1時間も2時間もかかったそうだ。時間は結構かかるものの、数日間は、祖父祖母の家の水にお世話になっていた。完全に水道が止まっていたので、当時の水がどんなにありがたかったことか、今になってもありがたさがひしひしと感じられる。毎日、祖父祖母の家から、また近所から水を確保してきてはポットでお湯を沸かして顔や手を拭いていた。当時はまだ冬だったので、とても寒かったとは母は言っていた。

それから毎日余震に怯えながら、テレビラジオに釘付けになる日々が続き、母は、しばらく普段着のまま起床を繰り返していたそうだ。地震が来たときに、すぐに行動ができるように、というよりも、地震の揺れがよほど怖くていつでも逃げられるように...と話していた。震災体験は、老若男女関係なしに、多くの人々に恐怖感や絶望感を与えたんだな、と母の話を聞いているうちに強く実感した。誰もが明日をも知れない生活を送っていて、自分自身が生きるために必死になっていたことを僕は知らなかった。

普段何気なく使っている、電気、ガス、水道、テレビなどの情報がどんなに貴重なものなのかを実感した。いつ東南海地震が起きても不思議ではない今日この頃。僕たちはいつでも災害（いわば生と死）と隣り合わせに過ごしているのではないだろうか...

語り継ぎたいこと：

誰もが自分自身が生きるために必死で行動を起こすことと、他の何かを失うことを食い止めること。2つの感情がぶつかり合ったときに起こるジレンマ。どんな切羽詰った場合にも、いつでもそれは付き

まどっている。

僕が住んでいる宿舎の場合、防災でもっとも大切な「地域とのコミュニケーション」は、震災当時では生かせていなかった。かと言って「災害に備えて」という意識を持つのではなく、無意識的に、近所との輪を深めていくことの大切さを実感した。近所の人たちとの輪を実現するためには日々の、近所の人たちへの「おはようございます。こんにち。こんばんは」が、コミュニケーションの第一歩につながるのだ。

震災はめったに起こらない。だから、「いつ起きたっておかしくない」ことをいつでも意識しておいてほしい。今回の「語り継ぐ」に協力してもらった母の話を聞いていると胸が痛んだ。あの場でも、人としてのやさしさを失わない強さ。それが災害を乗り越えるひとつの鍵になると僕は思った。

最近では、災害伝言ダイヤルなどで、遠く離れた親戚に連絡を送ることができるので、安否確認への心配は少しでも減ったと思っている。ところがもし、自分が災害伝言ダイヤルを受け取ったら相手のためにまず何ができるかを、落ち着いて考えることが大切だと思った。震災では、地震が発生した当日に田舎のおじさんから電話がかかってきたので、こちらの状況を伝えることができた。おじさんは機転を利かして、保存性の良い「レトルト食品」を送ってくれた。震災が、いつでもわが身と隣りあわせなら、災害伝言ダイヤルを「利用する」のも「受け取る」のも、いつ自分が体験してもおかしくない状態にあるのだ。そのときに、自分自身がどのように機転を利かせることができるのか。一瞬の判断に、人間の生活が左右されることを、これを読んでいるあなたに伝えたい。

これから、さまざまな災害が日本を直撃する。あなたがこれから起こる災害に対してで、今できることは何だろうか…。

遠い昔に起こったこと

神戸市西区伊川谷町
河上 悟

1月17日早朝

起きたときにはただ家が揺れているとしか分からなかった。家中の物がぶつかったり、落ちたりで「ガッシャーン」「ゴットン」という音だけが布団の中から聞こえ続けていた。そして、そのことが地震だと分かると、僕はひたすら布団の中で「早く止まって、早く止まって」と祈っていたのをかすかに覚えている。たった何十秒間の揺れが1時間にも何十時間にも思えたぐらいその時は時間が進むのが遅かった。

朝の7時ごろになり、辺りが明るくなって1階に降りてみると、全ての食器が棚から落ちて割れ、本棚の上にあった自分のおもちゃなども全て床に散らばっていた。それはまるで自分の家の中だけに台風が入ってきて、全てを巻き上げて行ってしまったような様子だった。

幸い僕の家は西区にあったので、地震の揺れは長田区や東灘区などのような激しい地震よりは少しはましで、家が倒壊したり、家の一部が損傷を受けるような惨事には至らなかった。

水は地震が起こってからの最初の1時間くらいは出ていた。というのも、地震が起きてから水が完全にストップするまでには1時間ほど時間差があったそうで、母親は水が止まる1時間前に機転を利かせて水をバケツや浴槽に溜めていたそうだ。水道の水は供給しているところから配水管を通して出回っているの、配水管に出回っている分は閉鎖されないの、地震が発生しても1時間くらいは水が出ていて助かったそうだ。

1月17日午前

朝8時ぐらいになって地震も大きな揺れはなくなり外に出てみると、隣近所の人たちが同じように家の外に出て周りの様子を見回していたり、不安そうに喋りあっていたり様々だった。そうして、家の近所を見て回っていると、僕はのどが渴いたのでいったん家に帰り、水を飲みに行こうと思った。家に帰って割れていないコップを見つけだし、はじめはグラスをゆすぐと蛇口をひねった。だけど、蛇口からは朝方は出ていたのに今は一向に水が出ないことに僕は気がついた。僕は水が止まってしまうことを知らなかったのだ。普段は何気なく蛇口を回せば出る水が、今日に限って出ない。はっきり言って、僕はその時とても大きな不安を覚えた。当時、自分はまだ小さく、いろんなことに対する知識もなかったので、「水が出ない＝もうこの先ずっと水が飲めない」という安易な考えが頭をよぎった。今であれば配給やどこかで水を買えば済む話であったけれど、当時はそんな考えしか浮かばなかったことを覚えている。

水が出なくなってしまった一方で、電気やガスも地震発生直後は通っていなかった。朝方にテレビでとりあえず自分たちのおかれている状況を知ろうとテレビをつけようとしたが、スイッチを押してもテレビは反応しない。そこで父親が、「車のラジオなら聞けるやろ」と言って、父親と僕で車に乗り込んだ。当時は自分が住んでいるところに地震が襲ってくるなどと考えたこともなかったので、懐中電灯はあってもラジオは家に用意していなかった。車に乗り込み父親と2人でラジオのつまみを回しながら、ラジオの音声に聞き入っていた。「長田区の～は～」男のアナウンサーは静かに黙々と原稿を読み、長田区の被害状況や地震の情報などを伝えていて、声の感じから被害の深刻さをうかがい知ることができた。

20分程度車の中で地震情報を聞き、その間は何をするでもなくじっと座りながら自分も父親も黙って遠くを見ながら聞いていた。今よくよく考えてみると父親は長田区に住んでいるおじいちゃんやおばあちゃんのことを心配して考え込んでいたんじゃないかとも思えた。

ラジオを聞いていると前の家の2階の電気がパツとついた。「電気が戻ったんや」と思い家の中に戻り、テレビのスイッチを押してみた。「ブォーン」テレビがついた！テレビを点けたときちょうどアニメをやっていた気がする。テレビを点ける前、自分ははっきりラジオで聞いたような大惨事をニュースでも報道されているんだとばかり思ってテレビをつけた。だけど、実際点けてみるとアニメをやっていたので、僕は「こんな大変なときなのにテレビではアニメをやっていたりするんだ」と神戸とその他の地域との温度差を感じた。

地震発生当日はこのほかのことは覚えていない。当時自分の中で強烈な印象を受けたものだけが今なお自分の記憶の中に残っている気がする。

1月18日午前

2日目の午前中は少し運のいいことが起こった。それは隣の家の人から水を貰えたことだった。というのも隣の家の家の配水管には地震が起きる前から少し亀裂が入っていたそうで、地震が起こったことにより管のヒビがさらに大きくなってそこから水が湧き出していた。「その配水管は床下にあったから、床下にあった収納棚は水浸しで水が満杯になって、床にまで水が浸かってやっと気がついた」と隣の人は言っていた。そのあふれ出している水は飲料水にするには衛生的にも汚く、飲めないで捨てるよりはトイレの水などに使うほうが有効的だと思って隣近所に配ったそう。水を配り始めてから1時間ぐらい経つと、隣の家の前には5、6メートルくらいの長い列ができていた。隣や近所の人だけでなく違う街区からも来た人がたくさん並んでいて、まるで小さなバーゲンを行なっているようだった。僕はその列を見たとき、自分は自然と何か手伝いをしようと思った。「僕にでも何かやれることないかな？」たくさん人がならんでいるけど、別に列は乱れていたりしていなかったし、列を正す必要もなかった。そこで僕は、大きな容器に水を入れる補助を行うことにした。隣の家の人は4人家族で僕の兄と同年の友達がいって、仲もよかったので「すぐに手伝う」と、言って手伝わせてもらった。手伝う前は4人全員で水を入れて配る作業をしていたが、それでも大変そうだったので、当時小さいながらも「大変そうだなあ」と思い、手伝いを買って出た。

作業を1、2時間ぐらいすると床下にたまった水も尽きて水を配る作業も終わりを迎えた。今振り返ってみると、高だか1、2時間だけの作業で、作業自体もものすごく簡単だったけど、今考えればあの作業は自分にとって初めてのボランティア活動だったんじゃないかと思う。

1月18日午後

その後、お昼ご飯を済ませた僕たち家族は、家の2階にあった大きな荷物や箆笥を1階に降ろすことにした。なぜなら、僕たち兄以外の家族はいつもみんな2階の和室で寝ていたので、余震や今後の地震などに備えるためである。そして、作業開始した。引越し屋さんのようにベランダから次々と家具をロープを使って1階に下ろしていく。みんな必死にがんばり、僕は手を少し切ってしまった。しかし、1人だけやめるわけにもいかず、そのことを言わず一生懸命手伝いを続けた。本当に疲れきった午後だった。ちなみに、このエピソードはビデオとして今も家に残っている（これは幼馴染の友達(Kくん)に撮らせたものだ）。

1月18日夜

夜8時ごろ、僕は家でテレビを見ていた。ただなにげなくボクシングの試合がテレビでやっていたのを覚えている。家には僕と母親しかいなかった。母親は電話で誰かと心配そうに話していて、僕はテレビのボクシングよりもそちらのほうに気をとられていた。父親や兄、姉は水を探しに車でどこかへ出かけていた。9時くらいになって家に帰ってくると、大きな容器に水を入れて持って帰ってきた。「その水どこで貰ってきたん??」と帰ってきた父親に始めに聞いた。「ワイン城(西区の農業公園)でたまたま水をくばったんや。」と父親は言っていた。「ワイン城ってどこやろう?」と思いつつ、そこまでは追及しなかった。

1月20日

この日もまだ電気以外のライフラインは回復していなかったため、僕ら家族は風呂に入れていなかった。なので、北区に住んでいる親戚の家でお風呂に入らせてもらうことになった（本当の目的は祖母の迎え）。母親以外の父親、兄、姉、そして僕の4人で出かけた。（詳しく言うと、僕には父方の祖父母夫婦とその姉妹の祖父母夫婦の4人がいて、その4人が北区の親戚の家に一時的に避難していた。だけど、その4人を預かるのは非常に大変なので、父の母親（つまり、僕にとっての祖父母）を僕の家で預かることになった。親戚の家で久しぶりにお風呂に入るのはとても気持ちよかった。地震が起きてからいろいろなことがあって自分も回りもばたばたしていたので、お風呂に入ったことによりリラックスすることができた。

お風呂を入り終えて、祖父と祖母が夜になって家に着いたときに、母親と祖父と祖母が3人で抱き合っていたのを今も強烈に覚えている。「無事でよかったなあ」と祖母は涙を流していた。僕の父方の祖父も祖母も母方の祖父も祖母も両方とも地震の被害の大きかった長田区に住んでいたため、とても心配だったようだ。

その夜祖父と祖母が家にはじめて泊まるとき、1階の居間で父親と祖父と祖母で川の字になって寝たことを覚えている。寝る前に布団に入って、居間のテレビで地震のニュースを見ながらしゃべっていた。会話の内容はこれからまだ余震は続くのかな？そんな内容の会話だった。地震が起きたのは1月。冬の真っ只中で布団に入りながらも部屋の温度は低く、気温が低くてとても寒かった。今考えれば1階で寝たりするよりも2階で寝たほうが安全だということは分かる。当時は防災とか身を守る方法などを知らなかったために少し危ないことを知らずにしていた気がする。

1月21日

この日になると水が復旧した。水がない生活を4日ほどして、水が出た瞬間あの時ほどほっとした安堵感はないと思う。水は生活をする上で自分たちには不可欠なものであり、なくてはとても困るものだったから、水が出た瞬間はこれからはもっと水を大事に使おうと思った。母親に当時の水が出たときの事を聞いてみると「これでやっと水が出たから洗い物ができるから安心した」と言っていた。

当時は水が出ない間はできるだけ洗い物などを出さないように生活していて、気をつけて生活してそれでもどうしても洗う必要が出てくるものもあったので、水はどうしても必要だったし、洗濯物もものすごくたまっていた。だけど、水が出るようになり電気も地震発生当日には直っていたので洗い物もできるようになっていった。

僕の父親は公務員で当時は文化ホールに勤めていた。地震が起きてから父親はちょくちょく夜勤で帰ってこられない日が続いた。普段は夜勤などなくて同じ時刻に帰ってきていたけど、地震が発生してからはそうじゃなくなった。父親は夜勤の日は救援物資の仕分けや救援物資の運搬などを当時はしていたらしい。夜勤の日は祖父や祖母などの普段いない人がいて、少し心強く感じていたけど、一家の大黒柱が夜にいないのは不安でもあった。

1月22日夜

僕たちの家族は当時玉津に住んでいる父親の兄弟（従兄弟）の家にお風呂に入りに行った。当時のこの家はプロパンガスでガスが来ているようが来てなからうが関係なく、水さえあればお風呂に入れていた。ところが、従兄弟の家にはまだ水が復旧していなくて、お風呂に入れなかったそうで、そこで僕たちの家族は自分たちの家は水が復旧して水が使えるので、従兄弟の家に水を持っていきその水をお風呂に使って入った。お風呂に入った後に従兄弟のおばちゃんから貰ったジュースが風呂あがり久しぶりに飲んだジュースだったので、とてもおいしくて、久しぶりに贅沢をした気分だった記憶がある。

風呂に入った後も母親や父親たちは祖父と話していて時間があつたので、僕たちもゲームなどをして遊んでいた。

1月23日

この日は母方の従姉妹の姉が家に避難してきた日だった。従姉妹の姉は兵庫区に住んでいて、地震が発生してからは2、3日の間は伯父や伯母と一緒に避難所で生活していたけれど、避難所生活が長くなるかもしれないと思い、伯父が僕の家に避難させることを決めた。

最初は母親以外のみんなで姉を迎えに行く予定だったけど、僕は迎えに行くのが急に怖くなって迎えにいくのをやめて、家に母親と残ることにした。何が怖くなったかという、それは地震で被害にあった街を見るのがいやだったことだ。それまでもテレビでさんざん長田区の様子などを見ていた自分にとって実際にその現場に行くのは到底出来ない勇気のいることだった。テレビで見ていた様子から想像して、「まだまだ家は燃えているだろうし、死体なども転がっているのかなー」と恐ろしい光景を想像していた。

そして、父親たちが従姉妹の姉を連れてきた時に僕は姉に「どんな様子やった？」と恐る恐る聞いてみた。すると、2つ上の姉は「ひどかった。家とかグチャグチャ」と言っていた。そのときの自分の想像が「合っていたんだー」とさらに怖くなってしまった。

一方で従姉妹の姉を迎えに行くのは怖くていやだったけれど、従姉妹の姉が避難して、自分の家に来るのは楽しみだった。一緒にご飯を食べたり、テレビを見たり、トランプをして遊んでみたりで他の人が被害にあって依然と苦勞をしている中で少し申し訳の無い気もしたけれども、それでも従姉妹の姉が泊まっていた2、3日は楽しかった。

2月23日

地震から1ヶ月ぐらい経ったその日、母親は当時僕が通っていた幼稚園の父兄の集まりで、物資の収集のボランティア活動を行っていた。湯たんぽや鉛筆・下敷きなどの文房具を避難所や授業を再開し始めている小中学校のために集めた。

3月12日

僕は地震が起きて以来、初めて長田を訪れた。あんまりはっきりと覚えてはいないけど、倒壊した家をタクシーの中から眺めていたのを覚えている。長田商店街は丸焦げになり、跡形一つ残ってもなく、僕の祖母が住んでいたマンションの渡り廊下は崩れ落ちてロープが張ってあった。

さらに近くのマンションでは1階部分が丸々つぶれ、2階の部分が1階となって、そこには花が手向けられていた。当時のことを撮っているビデオを見てみると、僕は「しんどいー疲れたー帰ろう」と駄々をこねている映像があった。映像を見ている限り、僕は歩き疲れて、「帰りたい、帰りたい」と叫んでいるけれど、本当の気持ちは怖いから帰りたかったような気がする。長田商店街は跡形もなく、崩れ焼けていて、その現場で地震が起こった瞬間にここでたくさんの人が一瞬にして亡くなったりしたことを想像してみると、「この崩れた瓦礫の下にはまだたくさんの人たちの遺体が埋もれているんじゃないかなー」と思うと、いてもたってもいられなくなり、たまらず家に帰りたくなった。そんな思いを持ちながらも母親や父親にお化け屋敷にいるわけでもないのに「怖いから帰ろう」なんていえば笑われると思ったので、「しんどいから帰ろう」と嘘を言ったのを、映像を見て思い出した。

今振り返ってみると、当時は怖いとしかあの場で感じることはできなかったけれど、今の自分がもしあの現場にいたなら手のひとつでも合わせて、拝むなり何なりしただろうと思う。それほどあの時は怖くて余裕がなかった。

4月11日

僕は小学校に入学した。1995年といえば、地震のことでしか思い出すことができないけど、母親に聞いてみると、母親も「地震の印象が強すぎて、他のことはあんまり覚えてないな」と言っていた。ただ、小学校に入学して今でも覚えているのは、小学校にも地震の被害がかなりあった事だ。

小学校の中庭は普通なら1段段差があり、低くなって広さもけっこうあったのだけれど、地震の揺れによって更に新たな段差が自然と出てきてしまっていた。他にも、校舎の外壁には無数のヒビが入り、手付かずのままで結構長い期間放置されっぱなしの状態だった。校庭にあった大型の遊具もねじなどが緩んでいる可能性もあったし、実際に地震の影響があった遊具もあったので長い間、入学しても遊具で遊べない日が続いていた。

12月23日

地震が起きてから1年が経とうとしていた。神戸ルミナリエがちょうど開催されていた。

そんなある日ルミナリエが開催される1週間ほど前に母親のお兄さんが病気のために亡くなってしまった。僕にとってその伯父さんの記憶はほとんどなく、お見舞いに行ったときの印象だけだった。伯父さんがルミナリエの始まる前に亡くなってしまって、母親はルミナリエを見に行くどころではなくなるほど悲しく、落ち込んでいた。だから、僕の家族みんなは第1回目のルミナリエを見ることはできなかった。初めてルミナリエを見に行ったのは1997年のときだった。ライトアップされる前に東遊園地に行き、家族みんなできれいなルミナリエを見た。その時は地震から約2年の年月が経っていたけれど、そのときだけは地震の時を思い出し、悲しいような切ないような気持ちになった。「2年経ってみたけど、少し地震について忘れているところもあるな。10年20年たてばどうなるんやろう？」と当時は本気で思った。実際に今は忘れていることがほとんどで震災は知らず知らずのうちに風化していつていることを感じた。

2006年5月31日現在

僕は環境防災科に入って防災について学んでいる。阪神・淡路大震災だけが僕を環境防災科に入った理由ではないけれど、被災したということがひとつの大きな理由になっていることは間違いない。環境防災科に入って地震についてたくさんのことを学んできたけれど、今になって思うことがひとつある。それはあの地震についてもっと見たり聞いたりしておくべきだったことだ。当時は小さくて難しい話とか深い話は理解できなかっただろうけど、せめて地震の光景などを脳に焼き付けておけば今の時点で防災を学んだりする時に、自分の体験も一緒にあわせて考えるともっと生かしていけるんじゃないかなと思う。

将来生きていくなかで、またこのような大災害は必ず起こると思うし、起こるだろう。そうした時に、僕が阪神・淡路大震災で得た経験と環境防災科で学んだ知識をもって、自分の命や友人・大切な人の命を守れるような人間になりたい。

震災の記憶

神戸市須磨区禅昌寺町
川口 潤

あの日から

阪神・淡路大震災で多くの人々が亡くなった。その数は 6433 人にもなる。この数字を最初僕は何も思わなかった。世界の人口を考えればたいした数じゃないとも思っていたのだ。しかし、環境防災科に入ってその数の重大さに気付かされた。これだけの人が死ぬと、何人の人が関係しているのだろうか。計り知れないだろうと思う。考えると、1 人の人が死ぬということはそれだけいろいろな人に影響を与えるのだなと感じるようになった。それに、6433 人という数字だけが震災の被害ではない。あの震災によって多くの人々が被害を受け心に大きく深い傷を負った。僕もその 1 人でもある。

当日

僕はまだ保育所に通っていた時期だった。住んでいた場所は高取山の麓にあるところだった。この場所は標高が元から高い場所だった。僕が年長になって、もうすぐ、小学校に入ろうとしていたときにこの地震は起こった。正直言って僕は地震が今まさに発生しているときの記憶はないのだ。僕はあんなに被害を及ぼした地震のさなか、すやすやと眠っていた。本当に地震の揺れを覚えていない。今考えてみると、僕はどうやって起きたのだろうとさえ思う。

少し覚えていることでは、父と母がすごく焦っていた。たぶん父は僕の体の上に覆いかぶさった。母も叫んでいた。家族 4 人で並んで寝ていたので、兄にも覆いかぶさった。今になって聞くと母は「ずっと叫んでいた。あんたは寝かしたままにしといたんよ。起こして地震がトラウマになったらかわいそうやから」と言っていた。この話を聞いた時僕は母の優しさを感じた。

揺れの後になって母は落ち着きを取り戻しラジオと懐中電灯を持ってきた。主要動が終わっても、余震がずっと続いていた。そのため、僕は玄関の階段のすぐそばで、いつでも逃げられるようにと待機していた。ラジオを家族みんなで聞いていた。放送の内容は、当然どれも地震のニュースだった。幸い僕の家は倒壊せず、花瓶や食器が割れるくらいですんだ。あの揺れでこれだけで被害がすんだのはよほど地盤がいいのだろうと思う。余震も落ち着いたところで、僕は父と外の様子を見に行った。幸いにも近所の家はどこもつぶれていなくて、みんな無事だった。近所のどこの家も倒壊していず、僕が住んでいた禅昌寺町は被害がほとんどなかった。そして、近所の人たちも僕たちと同じように外に出てきていた。大人たちはみんな「うちは大丈夫やったけど、あんたの家は大丈夫か？ けが人はおらんか？」と無事を確かめあっていた。父は外に出て、家の前にある物置に資器材をとりに行っていていつでも近所の人を助けられるようにしていた。震災が起きた時は、まだ冬の真っ只中だった。すごく寒かった。

「坂」

僕の家の前には大きな坂がある。そこに登ると海まで見える景色のいいところだった。地震から何時間かたった時、家の前にある大きな坂に上って、街の姿を見た。煙がすごくたっていたのを覚えている。特に長田の町のほうは、真っ黒だった。ヘリコプターも飛んでいた。地震が起こる前には、そこからはきれいな須磨の海が見えていた。そこからは水平線が見えていてキラキラと光っていたはずだった。それなのにその時は、海が見えていなかった。僕はそのとき何を思っていたのだろう。今になって思い返してみてもわからない。たぶん事の重大さに気付いておらずただ「すごいなあ、海がまったく見えない」としか思っていなかっただろう。横にいた父は、大変なことが起こっていると顔に出ていた。その顔は僕にも少しの不安を与えた。

「テレビ」

それから家に帰って、母にもそのことを言うと僕たちと同じように坂からの風景を見に行った。母も神妙な面持ちとなっていた。近所の人の無事を一通り確認してから、家族で家の中に戻った。幸いにも電気はすぐに復旧していたので、テレビを見ることができた。どのテレビ局もやっぱり地震の事について報道していた。テレビの画面からは長田の町が火事になっているのが放送されていた。また、救援物資などの必要を求める放送が流されていた。その中にあったのは、食料と毛布だった。各避難所が必要としているものを詳しく知らせていた。テレビの報道で僕がすごく覚えていることがあった。それはおそらくNHKの放送で、地震によって亡くなった人々の名前がテレビにいっぱい出ていたことだ。亡くなった人の名前が1画面に5人位ずつ出ていた。その放送を、家族で自分の身内がいなかを目を凝らしてみていた。その放送はどれくらいだったろうか。ずっと流れていたことを覚えている。それを見ていて僕は、すごく恐かった。幸いにも身内に亡くなった人はいなく、家族みんなほっとしていた。

「保育所」

僕の両親は共働きだったために、僕は禅昌寺保育所に通っていた。母はいつも帰りが遅くて最高10時まで母を待っていたことがあった。しかし、保育所の先生はとても優しくだったので寂しくなることはほとんどなかった。保育所では僕は活発なほうだったのでいつもすり傷などがいっぱいあった。それに友達がたくさんいたので、その子たちと毎日ブロックをして遊んだり、三輪車に乗ったり、泥団子を作ったり、竹馬をしたり毎日楽しかった。毎日が楽しかった。

地震が起きたとき身内の次に心配になったのは保育所の友達だった。仲がよかった子がヒロユキさんとカズマくんだったので、その子たちのことが気になった。僕は母に何度も「ひっくんとカズマ大丈夫かなあ」と聞いていた。そのたびお母さんは「大丈夫よ」と言って僕は安心させてくれた。あのときの心配は今でも鮮明に思い出すことができる。それほど心配だったのだろうと思った。

「おじいちゃんの家」

7時かそれくらいになったとき、御影にいる祖父が心配して車で来てくれた。その第一声は「大丈夫か!!」だった。僕は祖父が来て少し安心していた。「こっちは大丈夫です。お父さんの方は？」と僕の父が言った。祖父の家はほぼ半壊だったらしい。しかし、家の下敷きにはならず助かった。

祖父の家にはたくさんの思い出があった。僕は休みの日になると、家族で祖父の家に泊まりに行っていた。遊びに行ったときはいつも祖母が、すき焼きを作っていてくれた。それをテレビを見ながらみんなで食べていた。祖父の家のテレビはとても古くてスイッチというものはなく、本体にある円いスイッチでチャンネルを変えるものだった。台所も覚えている。今ではほとんどの家庭にないと思うが、祖父の家の台所には、テーブルがあるその下に野菜などを保存しておく小さな蔵みたいのものがあって、僕は台所に行くと何かと蔵を開けてのぞくのが好きだった。いつも蔵には、野菜がいっぱい詰まっていて、底が見えなかった。どこまで深いのだろうと思っていた。お風呂には、取っ手の長い洗面器といつも何かおもちゃが浮いていた。それに母と入っていた。風呂から上がると母が体を拭いてくれた。そして、祖母がアイスをくれた。寝る前には「サンダーバード」を見ながら、母に歯磨きをしてもらった。僕たちが寝る部屋には、立派な大きい机があった。それをどかしてその部屋にいつも寝ていた。寝る部屋には恐い般若のお面があって、暗い時にそのお面を見るのが怖かった。それ以前に、テレビである家のお面が寝ている時に顔が変わっていくという番組を見ていたから余計に怖かった。

祖父の家に行くといつもこんな生活をしていた。家にはすごく思い出があった。でも家が今はもうない。こうして僕の大切なものの1つが無くなった。でも命なんかに比べれば家なんかという感じが。何よりも祖父母が生きていることが嬉しかった。

「衣食住」

地震の時に何が困ったかという、当分の食料だった。以前父に地震当時の話を聞いた。地震が収まったといってもまだ余震がひどかった。しかし、早く食料を確保しておきたかった。当時僕の家は冷蔵庫を空っぽにしていた時だった為全然食べ物が無かった。父は僕たちが落ち着いたら食料の調達にすぐ出かけた。明石の方のダイエーへ行った。そこはまだ被害が少なかったらしく、被災者の為にすぐに営業を開始していた。そこで父は買えるだけの食料を買ってきた。買ってきたものは長持ちのするインスタントラーメンや缶詰、乾パンなどだった。その他には、ガスの復旧のめどが立っていなかったので、ガスボンベとコンロを買ってきた。

板宿には商店街があった。八百屋がたくさんあった。その八百屋に父が寄ってトマトを買おうとした。そのトマトの値段を見ると、いつもは1個50円で売っているものが200円になっていた。環境防災の授業でそういうような店が実際にあったという話は先生から聞いていたが、そんなことをするのはごく一部の人の人だけだと思っていたが違った。こんなに身近にそんなことをしていた人がいたのだ。僕はこのことを聞いた時悲しくなった。父もすごく怒っていた。ダイエーのように安く売る所もあれば、地震という災害の時に人の足元を見て物を高値で売る人もいる。この差はすごく悲しかった。それでも父は家族が待っているのだからトマトを買わなければいけなかった。

それらいっぱい食料を単車にいっぱい乗せて父が帰ってきた。これで当分の食事は確保できたわけだが、肝心なのは水だった。これは人間が生きていくうえで一番大事なものだだったので調達に苦労するはずだった。しかし、僕の家族は苦労しなかった。これはかなり偶然な事なのだけれど、父と母が北区のほうに美味しい湧き水が出ていると聞いていて、その水を地震前に汲みにいっていたのだ。しかもその量が20Lのポリタンクで7個いれていたのだ。だから地震当時、家には140Lの飲料水が常備されていた。これは今家族と話しても奇跡的だったなあよく話している。そのため水に苦労することはなかった。それに僕の家は山の近くにあったので山の頂上から川が流れていた。その水をトイレなどの排水に使ったりしていた。父は被災してから毎日のように、その川やいろいろなところに水を汲みに行ってくれた。

お風呂には入ることができなかった。水を大切にしていたし、ガスがいつ復旧するかもわからなかったからだ。このときは冬でとても寒かったのだが、電気が通っていたためにコタツが使えたし石油ストーブもあった。できるだけ使えるものを使おうとして、ストーブの上になべを置いて湯を沸かした。それで温かいものを飲んだりしていた。寝るときはみんなでかたまて寝た。余震がまだ多くて少し怖かったが、誰かが側についてくれると寝ることができた。

数日後

2、3日は祖父たちも僕の家と一緒に暮らしていたが、時間が経つと自分の家が心配になって御影に帰って行った。このころになるとガスも復旧してきてやっと前みたいな生活ができるようになった。やっとみんなが落ち着いてきたときだった。僕たちは何日もお風呂に入っていなかったため、体から少し臭ってきた。僕たち家族は父が勤めていた高砂の方の会社の近くに行った。高砂はまだ被害が少なかったらしく、ほとんどのお店が営業をしていた。そこで水を汲むついでに、銭湯に入った。久しぶりのお風呂で嬉しかった。僕はお風呂に飛び込もうとしたが、父に止められた。それからちゃんと体をきれいに洗った。体からはいっぱい垢が出てきた。一生懸命に体を洗わないときれいにならないほど汚かった。特に父は汚れていた。毎日家族のために動き回っていたからすごく汚かった。そんな姿を僕は見て何かを感じていた。お風呂から上がるとオロナミンCを買ってくれた。久しぶりのジュースでやけにおいしかったことを覚えている。

「小学校」

僕はこの年に小学校に入学した。僕の小学校では2つあるうちの1つが倒壊したために、プレハブの

中での入学式となった。まだ被災して3ヶ月しか経っていなかったが入学式は行われた。まだ小学校には避難している人がチラホラいた。学校の中は晴れやかなムードでは決してなかった。被災者の悲しみや苦しみが残っていた。僕だって本当はこんな年に入学したくなかったのだが、しかたなく入学するしかなかった。でも、今は僕たちみたいな小さな子の入学式などを見ればかわいいと思うだろう。それで被災者の心が少しでも晴れれば僕たちの入学式もいいことなんじゃないかと今は思える。今になっては両親たちが「あんな年でかわいそうだったな。」と言う。といわれても僕はまだ小さくて、何もできずに親が全部やってくれていたの、苦労をしたという実感はあまりない。何も考えずに、大人たちが必死になっているのを「苦労してそうだなあ」と見ていただけだった。校長先生の話でもやっぱり震災の話をしていて、僕たちを「新しい希望だ」みたいなことを言っていた。入学してからは初めてのことで戸惑った。

プレハブの校舎では小学校2年生まで勉強していた。僕たちはそこで2年間ひらがなの勉強や校歌の練習をしていた。校歌は6年生の人たちが、模造紙に手書きで校歌を書いて歌って見本を見せてくれた。この2年間はとてもあつという間だった。2年間で小学校のあの大きな校舎が出来上がったのだ。作っている最中には、ずっと青っぽい幕が校舎にかけられていて、子供に怪我させないようにしていた。校舎が出来上がるまでは、グラウンドの半分は使用禁止となっていた。グラウンドのもう半分を使えたのは小学校3年生からだった。

小学校に入ってから毎年震災の日になると、黙祷をした。そのたびに僕は心の中で「どうか成仏できますように」とお祈りをしていた。

震災で自分の身内が直接亡くなったわけではないが、やっぱり周りに悲しんでいる人がいると自分も悲しくなってしまう。

「全国唯一の科」

僕は環境防災科に入りたいと思った。中学生のときに正義感のある仕事・職業に就きたいと思っていた僕に1つのニュースが飛び込んできた。それは消防士が消火作業中に家屋の下敷きとなって死亡したということだった。正義感を重視していた僕にとってはその死によって与えられた影響は計り知れなかった。これがきっかけで。僕は消防士になりたいと思ったのだ。

この環境防災科では、いろいろのことが勉強できる。例えば、地震発生時のメカニズム、地震によって起きる災害、二次災害、自然現象、気象、消防体験、心のケアなどを行っている。これらはさまざまな分野に属する。1年生の間は多くの外部講師が、学校に授業をしに来てくださった。その内容のほとんどは、阪神・淡路大震災当時の各企業、各分野での苦労した点や状況の報告を聞いた。今高校生になって考えると、すごく大変だったことがわかる。

環境防災科は全国で1つしかなく、行っている授業は様々だった。このことを知っていて、僕は消防士にもなりたかったので、環境防災科に入った。この科のおかげで未来に起こるだろうといわれている南海・東南開地震を少しでも減災できるだろうと僕は思う。

「最後に」

僕は阪神・淡路大震災を決して忘れてはいけないと思う。忘れるのではなく語り継がなければならない。「亡くなった人々の分も僕たちが今を生き、後世へと教訓を伝える」それが今僕たち環境防災科の生徒の役割だと思う。今3年生になって震災から10年以上も経とうとしている。風化していく震災の記憶を伝えていくための準備は2年間勉強してきてできた。これからは伝えられるのではなく、「伝える」これが大切だ。僕たちはまだまだ勉強することはたくさんあるのだが、自分たちが知っていることを少しでも少しずつ伝えていきたいと思う。

家族の大切さ

アメリカ合衆国ニューヨーク州
神戸 アーノルド 優人

僕は阪神・淡路大震災を体験していないので、震災を経験した友達から話を聞いて、その聞いた話を友達が書いているように書きました。その友達の歳は当時5歳、住所は明石市西新町でした。

～友達の体験～地震発生～

その日、僕は珍しく寒さで目が覚めました。寒いので布団の中で丸まりながら寝ていたら下から床が突き上がってきました。その後も余震でユラユラとまるで船の上で揺られているかのように揺れていました。そのときは何が起きたのかは分からずオドオドしてそして泣いていました。まだ、日の出前のため部屋は真っ暗闇。

両親は僕が寝ている部屋の隣に寝ていました。その隣の部屋からバタバタと物音が聞こえたと思ったら僕がいる部屋の扉のドアノブが回り、ドアが開きました。そこには母と父が立っていて心配そうに僕に駆け寄りました。母親が「大丈夫よ。大丈夫よ」と僕の体にケガが無いかを確認しながら優しく抱きしめてくれました。

父がふと気がついたように僕の部屋から出て1階の居間にあるテレビやラジオをつけようとしてましたがつきませんでした。その後、タンスの引き出しをかき出し始めると電池でつくラジオが引き出しの中から出てきました。そして、そのラジオを持って僕と母親がいる2階の部屋に慌てながら駆け上がってきました。その間も僕は母に抱きかかえられていました。そして、父は僕の目の前に腰を下ろすと、ラジオを3人の真ん中に置き、ラジオをつけるといきなり「何が起きたのでしょうか？」とラジオの中のアナウンサーが慌てふためきながら放送をしていました。そして、ニュース速報が流れました。「地震の震度は4」。震度4のはずはない、とニュース速報を聞いて父は思ったそうです。そのときに初めて僕は地震というものを知りました。父は「自分の家だけではないのか、これは大変だ」と思い2階の僕の部屋の窓から外をのぞくと黒煙の柱が何本も立っていることを教えてくれました。そして落ち着き始めると回りも見えるようになってきて、そのとき初めて、自分たちの部屋のすごさに気づきました。タンスは倒れ、本棚のガラスは割れて中に入っていた本が散乱していました。その本棚が天井までであったおかげで、僕は本棚の下敷きになることが無かったのです。

～家からの脱出～

父は玄関のドアから外に出ようと部屋を出て、玄関に行くのとドアの横にある窓から照らされた朝日で今回の地震のものすごさを思い知らされました。玄関に置いてあった大きな水槽は割れて靴の中などに入ったりして玄関はガラスの破片でいっぱいでした。そして、玄関にあった水槽の中に飼っていた出目金（金魚）は床の上にあるガラスの破片の横でみなピチピチと音を立てながら跳ね回っていました。しかし、金魚を入れてあげる代わりの水槽や水はなく、仕方がなく金魚を見捨てることに父はしました。

肝心の玄関のドアは開かず、家の窓はすべてに泥棒よけのために鉄格子がはめられており、外に出ることはできませんでした。居間にある大きな窓の外はガレージになっていて、ガレージに止めてある車には行くことができましたが、ガレージのシャッターまでは開けられませんでした。そのため、自分の家で缶詰状態になりました。

母は僕の部屋の片付けを始めて、僕の部屋がきれいになると自分達が寝ていた寝室に行きそこも片付けました。こんな風に母は家の中すべてを片付けてしまいました。そのときのことを母は「掃除機も使えなくてホウキだけで腰が痛くなったし、後であんなことになるなら止めておけば良かった」と言っていました。父が出口を探したり、母親が片付けをしたりしている間僕はそんな両親達をボーっとして見

ていたことを覚えています。

そんな中、外から声が聞こえてきました。「〇〇さん大丈夫？」とお隣さんが心配して駆けつけてきてくれたのです。父はその声を聞いて「助かった」とため息をつきながら言いました。父は玄関越しでお隣さんに「ドアが開かないのです」と説明すると、お隣さんは快くドアを開けることを手伝ってくれました。そして、ドアが開くとまぶしく光る朝日が玄関いっぱいに入り込んでお隣さんがその光に包まれているかのようでした。その光景を僕は見て、「神様だ」と言っていたと父が教えてくれました。僕はそのときのことやそんなことを言ったことさえまったく覚えていませんでした。

～物資を求めて～

父はお隣さんにお礼を言って家の裏にあるローソンに駆け込みました。が、店の中は商品を置く棚だけで商品は1つもある気配はありませんでした。店員さんに話を聞くと「商品は全部売れちゃったよ。こんなに売れたのは初めてだよ」と笑いながら店員さんが話してくれました。父は「遅かった」と悔しなげにトボトボと家に帰ってきました。父はローソンであったことを母に言うと「近くにもう1つ小さなスーパーがあるわよ？」と父に言いました。

父はそのスーパーの場所を聞いて、走ってそのスーパーへと行くとスーパーの前にはたくさんの人だかりができていました。その原因はスーパーの店員が2つある入り口を1つにして、お客さんがパニックを起こして店内を走り回らないために入り口を制限していることでした。父は店の前に並ぶ行列に並んで店内に入れる順番を待ちました。そして、ようやく店内に入ることができました。お店の中でもお客さん1人につき何でも5点までと制限されていて父は何を買っていいかわからず悩みました。悩んだあげく、お米が2つと水を3つ買って帰ってきました。行きは急いでいて気づきませんでしたが、帰りには町内の様子を見ながら帰ってきて、家に帰るとその様子を事細かに母親に話しました。その話の内容は、自分の家は倒れていないのでこの町はあまり被害が出ていないのかと思っていたら、自分の家以外の家はほとんどの塀が倒れていたり、家の壁が崩れていたりしていました。ひどい所では1階部分が無くなって2階が1階になっているマンションや、家がそこにあったことさえも感じさせないほど崩れていた家もあったそうです。

～金魚の奇跡～

父は家に帰ると「この玄関のきれいさはどうしたんだ」と驚きながら母を玄関に呼びました。母は驚いている父に「グチャグチャだったから片付けたの。汚いと落ち着かないし」と平然と何もなかったかのように返しました。父が「金魚は？」と聞くと「金魚はみんな死んでいたから庭に埋めときました」と残念そうに母は言いました。そのとき、玄関においてある台の下からピチピチと金魚が跳ねる音が聞こえ、父は静かに台の下を覗き込みました。するとそこには黒く丸々とした出目金が今にも死にそうと尾ひれをピチピチと動かしていました。そのときにはもう地震が発生してから9時間も経っていました。父は驚きながら金魚を拾い上げ「お前にあげられるほど水はないのだし、一度あきらめた身だからこの中で生きられるなら生きろ」と言いながら水がたまった傘たてに入れてやりました。その後も20日間も餌をやらずに傘たての中で生きていました。そして、その死骸は丁重に仲間が埋まる庭へと埋めてやりました。

～困難な生活の日々～

僕達は避難所には行かずお隣さんや近所の皆さんからおかずをもらったりして、スーパーに品物が並ぶまで食いつなげました。

地震が発生した日の夕方に一瞬電気がついてそしてまた消えました。復旧のきざしと思ったがそれ以降本当に復旧するまでライフライン関係は何も起きませんでした。

日が暮れると、急激に気温が下がってきました。

父が気分転換に町を歩こうかと僕を誘ったので、僕と父は町を歩くことにしました。町には電気がついているところなど無いので町中真っ暗でした。ところどころ燃えている家の明かりがゆらゆらと道路を照らしていただけだったことを覚えています。そして潰れた家の前で泣き崩れる人もたくさんいました。車も道路が割れていたりしていたためか、消防車や救急車が通る以外は1台も通ることは無くとても静かでした。気分転換のために町を歩いていたはずなのに余計に父の気が重くなっていきました。その後、僕達2人は無事に家に着くことができました。

しかし、家の中でも僕はいつ余震が来て家がさらに崩れるかも知れないという恐怖と恐ろしさで、布団の中でうずくまりながら夜遅くまで眠ることは出来ませんでした。

地震発生の数日後に行政の地震調査委員の人が家に来て、「お宅の家は部分破壊です」と診断しました。それを聞いて母は「確かに家の外の破損は少ないけれども、発生直後の家の中はものすごかったのにどうして？」と調査委員に問いただすと「片付けずにそのままにして写真でも撮って置いてくれば良かったんですけどねえ」と言われ「そんなこと地震直後のパニック状態で出来ると思っているの」と母は怒って調査委員の人を追い出しました。その後は行政からの連絡が何も来なくなり、避難所の場所や炊き出しの場所、物資の配給場所も自分で近所の人に聞いて調べたりしたそうです。調べたりするのは当たり前、と思うかもしれませんが全壊や半壊の診断をもらった人には行政からいろんな話があり、その差別に当時母や近所の部分破壊の診断された人たちと怒っていました。そして父は「行政は表面的にだけでも『うちの行政は支援しているよ』と思わせたかったのかも知れないね」と言っていました。そして、一番重要な行政からの補助金などの話も何も無く食事や家の補強費用が高くて困ったと母が言っていました。

～その後～

そのあとライフラインは復旧しました。生活は徐々にではありますが元に戻っていきました。震災後と震災前の違いは家に少し亀裂が入ったことと、両親が水と非常食を家に常備したりツッパリ棒を家のタンスに取り入れたりと防災に取り組んでいることでした。そして、地震を体験した本人も暇があるときにですがボランティアに参加しています。ボランティアといっても防災ボランティアだけでなく福祉ボランティアや環境ボランティアなどいろんな分野で活躍しています。

友達の家もその後の余震にも耐え抜き、友達の叔父さんが1人お亡くなりになっただけで友達の家族も無事に震災を切り抜けました。

友達の感想はあのときのすごい揺れが一瞬のうちに家や物を倒し、むちゃくちゃにしてしまう恐ろしさは、今でも忘れることはできないということです。

～この『語り継ぐ』を書くに至って調べて思ったこと～

阪神・淡路大震災は多くのものを一瞬にしてうばいました。でもこの地震は多くの大切なことを僕たちに教えてくれたと思います。

1つ目は生きているという事。2つ目は普段何気なく使っている物がどれだけありがたい物かという事。3つ目は自分たちがどれだけ幸せだったかという事。数えたらきりが無いほどのことを教えてくれました。

その中で僕が一番印象に残っているのは人の温かさ。そして、その反対の人のわがままさです。世界の国々からの数多くの救援の申し出がありました。日本政府は断ってしまったけど僕は「困った時は助け合おう」というその思いが今回、地震について調べて嬉しかったことです。

もっと身近なことでは普段あいさつを交わしている近所の人達、けんかもするけど温かい家族が地震発生後にこんなにも頼もしいとは思っていなかったことです。日本各地からの援助物資や義援金、励ましの手紙など、これらのおかげで、どれほど被災地にいる人の元気が出たんだろうと思いました。そして、どれほど心の助けになったのんだろうと思いました。そしてボランティアの人達。遠くから被災者のため

に駆けつけてくれました。自分も被災しているのに、人のために頑張っている人もいました。

この地震を通じて人間は本当に強い、そして温かいと思いました。でも今、僕たちはその温かさに甘えすぎていないか、人まかせにしていないか、そして何よりもわがままになっていないか。時には甘えることも大事だと思いました。しかし、今の僕たちは甘えすぎだと思います。震災後の被災者たちのように甘えず助け合って生きて行くことが大事と思いました。

今、この街を復興させるのは他の誰でもない若い世代の僕たちです。その僕たちがしっかりしないでどうするのか、しっかりしなくてはと思いました。

被災者の中には思いやりのある被災者と自分勝手な被災者がいたということにガッカリしました。例えば、避難所で食事を作ってもらっているのに「まずい」や「遅い」なんてことを言っていた人も少なからずいた事です。その人達は自分のために働いてくれている人たちのことを考えたことがあるのでしょうか？避難所で食事を作っている人達も自分たちと同じ被災者だという事です。そして、トイレ掃除や避難所の運営などボランティアの人達がどれほど頑張ってくれているか知っているのでしょうか？けが人やお年寄りのように体が動かせないのかもしれないと思いますが、その人たちは被災しても動けないわけじゃないです。つまり、自分は何もせずに、人に文句をつける人達にも自分以外の人への思いやりをもってもらえばいい社会、いいコミュニティを作れると思いました。

～教訓～

人は良いところと同じくらい、悪いところを持っている。でも震災時のように他の人が助けを求めているときは自分の良いところを出してほしいと思いました。

こんな時だからこそ、僕たちは明るくないといけないと思います。それがきっと明日への生きる力になると信じています。そして僕たちが精一杯生きることが、この大震災の犠牲者の方達への一番の供養になると思いました。

僕も力強く生きたい。僕たちはみんな多くの人と助け合って生きています。今回ほどそれを強く感じたことはありませんでした。これからもずっとこの思いを忘れずに生きていきたいと思いました。そして、阪神・淡路大震災で学んだことを次の世代、次の社会に活かしていくのが僕たちの努めだろうと思いました。

僕の震災体験

神戸市長田区腕塚町
北野 友輝

僕が「命の尊さ」「死」を実感したのは、あの阪神・淡路大震災のときだと思う。あの時僕は長田区に住んでいた。当時の僕は幼稚園の年長で3学期が始まり卒園に向けて生活発表会の練習をしていた頃だった。

震災前

平成7年、僕は幼稚園の年長だった。当時の記憶はほとんどない。しかし、ひとつだけどうしても忘れることの出来ない出来事が起きた。それが、阪神・淡路大震災である。何を根拠に言われていたのか分からないが、当時「神戸には地震は来ない」と住民は皆安心しきっていた。僕の家では震災前日に、父が「神戸にも地震が起きそう」と、とんでもない勘をはたらかせ、ある程度の荷物をまとめて置いていた。

震災発生直後（家の中で）

1月17日早朝いきなり僕は、たんすの下敷きになった。両親の僕の名前を叫ぶ声、弟の泣き叫ぶ声、聞こえるのだが、どうしても身動き出来ないのである。真っ暗の中、何が起こったのか分からない。何分か経って父が必死でたんすを持ち上げ引きずり出してくれた。天井を見ると、まだ夜明け前の空が見えた。天井が崩れ落ちていたのである。父だけが1階の部屋へ行き、リュックに水とお菓子や果物を入れ、そして、みんなに靴をはかせたのだ。早く外に出たい。しかし、扉も窓もゆがんでしまい開かない。そんな中、2階のベランダの戸が何とか開いたのだ。脱出場所はそこしかない。母が一番にベランダのさくを乗り越えようとした。その時、「いかんといて」と僕は泣き叫んだらしい。今思うとそのようなことで泣いてしまうなんて、とても恥ずかしい。しかし、当時の僕には、2階のベランダのさくを乗り越えて下へ行こうとするなんて事は考えられなかったのである。泣きながら、父の背中にしがみついてしまったらしい。そして、次に当時2歳だった弟を父は下にいる母へ投げ渡そうとした。その瞬間「やめてー」とまた僕が泣き叫ぶ。母はうまく弟をキャッチした。その後、父が泣いてばかりの僕を背中におんぶしたまま下へ降りた。

家から脱出して

やっと家の外に脱出することが出来た。おそらく1時間以上かかっていたらと思う。外はもう薄明くなり始めていた。外へ出て見た光景は、今も忘れることの出来ないショックなものだった。僕の家の中の米屋さんは、家の形もなく、ただ土がもり上がっているだけのように見えた。確か昨日灯油の配達をしてくれた。あのおばちゃんはどうなってしまったのだろうか？あの土の下？昨日は元気だったのと思うともう涙が止まらなかった。国道の向こうはすごい炎でそばを通った時、「熱い」と感じたのを今でもはっきりと覚えている。道端におばあさんが倒れていて、そのそばに呆然と立っている人がいた。「大丈夫ですか？」父が声をかけたが、「今息をひきとりました」と…。この日、何人の方の遺体を見たことが…。

初めて「死」というものに直面したように思う。人はいつ、どんなことで命を失ってしまうか分からないという事を知った。又、命を大切にしなければいけないという事も同時に感じた。

避難所生活

僕たち家族は、近くのお寺に避難した。このお寺で1週間ほど避難所生活を送ることになった。1週間の避難所生活は楽なものではなかった。当時、幼稚園児だった僕も大きな灯油缶を持ってよく水汲みに行ったものだ。普段何気なく使っている水が、すごい行列の中に並び長時間待って、やっともらうことが出来た。水というものの大切さを実感した。

知らない人との共同生活は、やはり精神的に辛いものがある。常に気を張ったような状態だったように思う。なかなか行き先が決まらなくて長い間避難所生活をしなければいけなかった人たちもいる。そんな中、僕たち家族は避難所生活を1週間ほどで終えることが出来た。そして、大阪に住んでいる祖母の家に行くことになった。

大阪で暮らした1年間

僕は大阪で小学校の入学式を迎えることになった。震災の時のストレスからか今の僕からは考えられないほど、やんちゃな小学1年生だったように思う。毎日誰かとケンカをした。上級生とケンカになることもあった。毎日制服がボロボロになっていた。しかし、家に帰ると可愛い小学1年生になってしまう。トイレに入る時ドアを閉めて用を足すことが出来なかった。ドアを開けておかないと出てくるのが出来なくなってしまうのではないかと、訳の分からない心配をしていた。1人で寝ることも出来なかった。地震で僕が負った心の傷は大きかったのだろうか。何か説明出来ない恐怖感があったのだ。とても怖がりになっていた。出来ることなら、震災の時の記憶を全て消してしまいたかった。

神戸に戻ってきて

あの震災からもうすぐ1年が経とうとしていた。小学校1年の3学期に垂水区の西舞子小学校に転校することになった。転校するということはとても不安なことであった。しかし、西舞子小学校は緑豊かで、生徒もみんな穏やかな良い子たちばかりだった。ケンカなんてめったにすることがなくなった。少し震災の時のことを忘れることができたように思う。忘れてはいけないのだろうが、小学1年生の子供には辛すぎる記憶であったのだ。

中学校入学

中学校に入学する頃には、もう阪神・淡路大地震で受けた心の傷も癒えていた。部活動に勉強に遊びに一生懸命だった。あっという間に進路のことを考えなければいけない3年生になった。僕の志望校はすぐに決まった。舞子高校の環境防災科だ。今までは、震災当時のことを忘れない、忘れないとばかり思っていた。しかし、この頃から、それではいけないと思うようになった。今になっても忘れることの出来ない、辛い震災体験を多くの人に伝えたいとまで思うようになった。僕たちの世代で、震災当時の記憶が映像として残っている人はほとんどいないと思う。だから、環境防災の勉強をして、将来、自分の体験を活かせる職業に就きたい。環境防災科に入ろうと思った理由である。

舞子高校環境防災科に入学して

環境防災科に入ってから毎日は、とても充実していて楽しいものがある。自分が学びたい防災ということ詳しく学ぶことが出来る。たくさんのすばらしい友達もでき、環境防災科に入って本当に良かったと思っている。

頭が痛くなるほどのレポート提出の数に苦しめられたが、ライフラインや消防、警察、自衛隊、他にも様々な分野の外部講師の方に学校に来てもらい、僕たちは講義を受けることが出来る。六甲山のフィールドワークや人と防災未来センターなど多くの校外学習もある。

僕が一番印象に残っているのは消防学校に行ったことである。消防士が実際行っている訓練を教えてもらい、実際自分の体で体験するという貴重な体験をすることが出来た。規律訓練や筋力トレーニング、消火訓練など基本的なことから火災が起きたという設定の建物から要救助者を救出する訓練やロープをつたって高い建物から地上に降りるなど、難しい訓練までさせてもらえる。消防学校では消防士という職業がいかに厳しいものであるかだけでなく、改めて防災の大切さを実感する良い体験になったと思う。

これは授業外で行ったのだが僕は、強い学校づくりをすすめている NSET-Nepal という NGO の支援で、ネパールに学校から行くということがあった。初めて海外に行くということでとても緊張したが、かなり貴重な体験をすることが出来たように思う。現地での学校補修を見学したり、子供たちと交流したりホームステイをしたりした。現地の子供達との交流では、現地の学校で文化交流としてカルチャーボックスの交換をする。その際、現地の子供達が民族の踊りと歌でもてなしてくれる。ホームステイでは、カトマンズ郊外の田舎の家に泊まる。しかし、日本との文化の違いに驚かされることばかりである。トイレが田んぼの真ん中にあったり、家の中に牛や鳥を飼っていたり、夜いきなり停電したり…。日本では決して出来ない貴重な体験をすることが出来る。コミュニケーションは片言の英語と身振り手振りでなんとか伝えたいことは伝わる。震災体験や環境防災科で学んだことを発表する場もある。そこでお互いの防災意識を向上させることが出来る。ネパールの人とコミュニケーションをとる時にどのようにすれば良いのか、とても苦労した。英語をうまく話すことができたかなと思った。ホームステイをする時には特に感じたことである。ネパールと日本の文化の違いに驚くことばかりだったがネパールの人とはとても親切で何とか乗り越えることが出来た。このネパール訪問で防災を広めるには言語がとても大切だということが分かった。

環境防災科に入ってから、毎日知らないことを知っていくことが出来て本当に楽しい。環境防災科で学んだこと、これから学ぶことをこれからの自分の人生に活かしていきたいと考えている。

最後に

あの阪神・淡路大震災から 11 年、泣いてばかりいた僕は今、環境防災科の 3 年生になっている。阪神・淡路大震災の時のことを忘れようと必死だった時期もあった。しかし、今はこうして環境防災科で防災について学び、阪神・淡路大震災の時の記憶を思い出しながら「語り継ぐ」を書いている。

あの悲惨な震災を経験していない子たちにあの震災の時のことを語り継いでいくということは、震災を経験した僕たちの使命であると思う。大きな被害を受けた人は思い出したくない人もいると思う。しかし、あの時の教訓を伝えていかなければ、また同じ被害を出してしまうかもしれない。そうならないためにも、僕は多くの人に防災の大切さ、震災の教訓を伝えていこうと考えている。

私の震災体験と教訓

神戸市西区伊川谷町

木村 仁美

1995年1月17日午前5時46分。神戸を今までにない大きな揺れが襲った。震度7強。未曾有の出来事に私たち神戸に住む人々はただ驚き立ち竦むしかなかった。人々が失ったものは家やものだけではなく、大切な仲間、友人、そして家族。しかし、復興活動では人の本来持つ大きな優しさや温かさも見られた。けれども、次にいつあのような悲惨な出来事が起きるか分からない。そして、現状の対応では、神戸にも被害が及ぶと予測される南海地震に対応するには不十分だと聞く。では、あのような悲劇を繰り返さないために、今の私たちには一体何ができるだろう。この震災に備えられる時を大切に有効に使うにはどうすればよいのだろうか。私はそれを伝えるのが「語り継ぐ」ということだと思う。

・私の震災体験

(1) 震災当日の様子～私の家の震災体験

あの日、私たちの家で最初に目が覚めたのは父だった。大きな揺れにより転倒した家具の音で目が覚めたのだ。家の様子は、家具が転倒しガラスはそこら中に飛び散っていた。私の家は新築のマンションだったので、幸いそんなに大きな被害はなかった。まず、父は私たちを起こした。私は何が起きたのか分からず両親に聞いたが、両親もまだ今の状況がつかめていない様子だった。母は、ガラスで怪我をしないようにスリッパを履き、すぐ家のドアを開けて避難口を確保した。私は、震災前日に一生懸命自分の部屋の掃除をしていた。家の中が散らかっているのを見て、居間で寝ていた私は自分の部屋の様子が気になった。そこで父と一緒に自分の部屋の様子を見に行った。地震の揺れで部屋は案の定、ぐじゃぐじゃに散らかっていた。その姿を見たとき、「一生懸命片付けたのに台無しになってしまった」と落ち込んだ。しかし、今考えてみれば居間で寝ていてよかったのだ。そうでなければ私はきっと部屋にあった固定されていない家具や玩具で大怪我をしていただろう。もしかすると、大怪我では済まなかったかもしれない。そう考えると、今でもぞっとする。

最初、父はこの地震の震源地が東京だと思い、まさか自分たちの住むこの神戸だとは思わなかったそうだ。というのも、父の祖母、つまり私の曾祖母からよく関東大震災での出来事を言い聞かされていたのだ。それは、1923年（大正12年）9月1日、関東地方南部を襲った大地震により、142,800人もの人々が命を落とし128,000棟もの建物が全壊するという未曾有の大災害がもたらされたというものだった。特に、火災による被害が大きく、多くの人々を恐怖に陥らせたそうだ。また、今までに神戸で大きな地震が起きたことはなかったため、神戸に住む人々は、まさか自分たちが被災者になるとは思っていなかったこともその理由の1つだろう。それだけ油断していたのだから被害があれほどまでに広がったようだ。

当時、東京で働いていた叔父が心配になった母は電話をかけようとした。しかし、電話は輻輳して繋がらなかった。その頃、父は家から出て車でラジオを聴いていた。ラジオの被害情報を聴いてやっと今の状況が飲み込めた父は急いで家に帰り私たちに知らせた。途中、近所の人に出会い、地震の話をした。未曾有の大きな揺れであった事、少し遠くのマンションでは半壊になっていること、私たちは新築のマンションだったため耐震基準法が改正された後の構造の家であってよかったということなど。近所の新幹線の鉄橋が落ちていたと聞いた時は驚いたそうだ。その間、私と弟は母について家に残っていた。そして、祖母のことを心配した母は電話をしようとしたがやはり繋がらなかった。次に、水が出るかどうか、電気が点くかどうか確かめた。電気は点かなかったが水道からは水が出た。しかし、その水は途中で止まってしまった。しばらくして分かったのだが、その出た水はマンションの受水槽からのものだった。だから、受水槽からの水が無くなり水が止まってしまったのだ。

父は、懐中電灯の電池が切れていたため、24 時間営業であるコンビニは開いていると考え電池を買いにいった。予想通り、開店はしているが、店の中は棚が倒れ、商品が散らばっていた。店員はいるが、「開業できるような状況ではないから商品は売れない」と1 度は断られた。それでも、「懐中電灯の電池が必要だ」と事情を話すと店員は急いで店に入れてくれ、買うことが出来た。家に着いて、1、2 時間してから電気が点いた。そこで、母は炊飯器でご飯を炊いて私と弟とでおにぎりを作った。そして、近所に配った。

当時、私の住んでいるマンションには、弟の友人が住んでいた。その家のご主人は消防士だった。ご主人は震災で出勤命令が出ていたので現場に向かわなくてはならなかった。その頃、奥さんは妊婦だったため、あまり動けなかった。そこで、私の母は家に伺いおにぎりを渡し、手伝いをした。弟は友達と遊び、私もついていっていた。「来てもらえて助かるわぁ。ありがとう」と言ってもらえたことに嬉しさを感じた。

（２）震災翌日～祖母の家での避難生活

神戸に住む父方の祖母に電話が繋がったのは、震災が起きた後の翌日になってからだった。祖母の家の近くには、ガソリンスタンドがあったので火災が起きる可能性があった。そのため、祖母の家にも避難告知が出された。祖母の家には叔父も住んでいたのも、幸い大きな被害や怪我はなく2 人で避難所に向かった。避難所での生活はそれほど長くなかったが、そこでの生活はつらかったと聞く。祖母は「早く家に帰りたい。という思いがずっとあった。」と言っていた。震災がおさまってから戻って見ると、家はあちこち崩れていた。私たちも行ってみたのだが、半壊状態だった。そのため、震災後に建て替える必要があった。思い出がいっぱい詰まった、長年住み続けてきた我が家の姿が変わっていく様子を見るのはどれだけ痛ましかっただろうか。そして、私も私の思い出もある祖母の家がなくなるのは悲しかった。

電話が繋がると、母方の祖母にも電話をかけた。祖母は姫路に住んでいるので被害はなく、「水も電気も繋がるのでこちらにおいで」と言ってくれた。そこで、水道が繋がるまでの間、祖母の家での生活が始まった。祖母の家では大きな揺れはなかったが小さい余震があった。安全な生活を送れるようになってやはり神戸で起きたあの出来事を忘れることはできなかったのだろう。あんなに大きな地震が起これないとは分かってはいるものの、私と弟はしばらくの間怖がっていたそうだ。しばらくすると、父は会社から電話を受けて出勤しなければならなくなった。

（３）生活も元に戻り始める～その中で見える欠陥

父の会社は兵庫区にあった。幸い倒壊はしなかったものの、揺れが激しかったため会社の中の状態はひどかったそうだ。ガラスが割れてそこら中に飛び散り、それが山のようになっていた。近所に住んでいた同じ会社に勤めている人がもうすでにある程度片付けてくださっていたが、ばらばらになった書類をまとめるなど、多くの仕事があったそうだ。母や私たち子どもは、もう少し家にいていろいろと手伝ってほしかったが、もっと被害が大きく会社に向かうことが出来ない人も多く、人手不足だったため、どうしても行かなければならなかった。

後に父から聞いた話によると、当時の兵庫区の被害は後にメディアで伝えられた以上に大きなものだったようだ。普段は会社まで車を使っていっているのだが、震災当時、高速道路は切断され使うことが出来なかった。そこで、父は最寄り駅まで自転車で行き、電車を何度も乗り継いで出勤しなければならなかった。普段は1 時間以内で行ける所を3 時間以上かけて出勤しなければならなかった。

この時期になると人々の生活は一見復興活動を遂げているように見えるが、こういう所にも障壁があったのだと思う。また、震災復旧時だったので、いつも以上に通勤ラッシュはひどかったそうだ。父が板宿で降りると商店街が潰れていた姿を目にしたが、ニュースで聴くほど状況はひどくないと思った。しかし、大通りを出て東のほうを見るとその考え方は一瞬でくつがえされた。一面が焼け野原だったの

だ。その様子を見てみると、瓦礫の中から人々が救助されていた。どうやら、救助している人は実際にテレビで言われ授業でも習ったように近所の人が多かったようだ。

私もしばらくすると幼稚園に戻り、震災以前と同様の日常生活を取り戻していった。私が通っていた幼稚園の子どもたちは幸いみんな無事だった。しかし、遠くから通ってきている子どもたちは家屋倒壊の被害に遭い制服が下敷きになっていたり、その他の家の都合で制服が着られなくなってしまった場合もあった。そのため、私立の幼稚園には珍しく私服登園になったそう。こうして、私の生活は以前とあまり変わらない様子になった。震災後私の家で変わったことは、家の防災に対する心得だと思う。震災以前より、家具をしっかりと固定したり、防災に関心を寄せるようにもなったと思う。

（４）復興活動に参加して

震災後、私は復興ボランティアにも参加した。阪神・淡路大震災で多くの人が助け合う姿を見てきて、「自分も誰かの役に立ちたい」と思ったからだ。あの時のことは、今でも覚えている。私が行った仮設住宅には高齢者の方が多く、私たちを温かく迎えてくれた。その活動は、「震災で心の傷付いた人たちと交流し励まそう」というものだった。私たちは炊き出しを行い、それを一緒に食べながら様々な話をした。けれども、彼らは当時小学生の私たちを気遣ってのことだろうか、苦しかった経験や悲しい話はあまりしなかった。そして「ありがとう」や、「ご苦労様」という言葉を笑顔で言ってくれた。震災で辛い思いをした、励まされるべきである人々が、逆に私たちボランティアに勇気をくれた。あの日のことは決して忘れないだろう。

思えばあれから約 10 年ボランティアを続けていることになる。今続けているボランティア活動は、災害や防災とは一見関係ないように思えるが、多くの人と話をすることで震災時に必要なものを手に入れることが出来たような気がする。コミュニティの拡張に関わるボランティア活動も行ったからだ。また、ボランティアを続けてきて、心理学にも興味を持った。震災時に人が抱える心理的問題の解決の手助けをするだけでなく、日常から多くの人役に立ちたいと思うようにもなった。この 10 年間で出会った友人やボランティアで出会った人たちなどから、多くのことを学び、夢を持つことが出来た。けれども、これらはあの震災なしではありえなかったかもしれない。そう考えると震災に対して良い見方をしているようでもあり複雑だが、なんとなくそんな気がしてならない。私がこの環境防災科に入学することを決意した理由の 1 つがもっとボランティアや心のケアについて学びたいと思ったからだ。そして今念願の学習をしている。私は、これからもこうしてボランティアを続けていくだろう。

・災害体験を振り返って思うこと

私の災害体験を改めて振り返ってみると、多くの記憶が消えていて、両親に聞く事でその空白が埋められた。その話を聞いていると思い出すことも多く、再認識できたいくつかのことがあった。それは、第 1 にどんな災害も他人事ではないということだ。いつまたこうして兵庫県で、神戸市で、災害が起きるか分からない。そして、災害では残酷にも古い家に住む人やお年寄り、子どもなど弱い立場にある人たちがほど被害に遭っている。手を差し伸べられるべき人には冷たいのが災害である。そのために、いかに人々を強く支えられる対策が出来るか。というのがこれからの課題だ。耐震住宅の拡張は言うまでもなく大切だ。強い家に住んでいれば、倒壊によって命を落とすことはない。そして、第 2 に大切なことはコミュニティの拡張である。近所同士の助け合い、声かけが日頃からしっかりしていれば孤独の状況に追いやられる人はいない。そして命を落とす人も減るだろうし、その後の助け合いも上手くいくだろう。

また、今の私に出来ることは何であるかも考えさせられた。そして、自分なりの答えを見つけ出せた気がする。それは、ありきたりではあるけれども、「今を一生懸命に頑張る事」でしかない。「亡くなった人の分も生きる」というのは震災後多くの人の心にあった事で、教訓としても言われている。けれども、今日の社会に目を向けてみるとどうであろうか。多くの犯罪と失われた命を考えるとその考えは風

化してきているように思われてならない。被災者の中には「震災からまだ 11 年しか経っていない」と考える人もいるだろう。そんな中で、教訓が風化されてきていることは望ましくないし、このままではいけないと思う。震災の中で、大切な人やものを守るためにも、あの震災で私たちが学んだ教訓はこれからも忘れてはならない事である。その教訓を生かすためには、1 日 1 日を大切に次回の災害に備えることが大切だ。

だから私は、今の生活を一生懸命に暮らすことを改めて考えていく必要があると思うのである。さらに詳しく言えば、どのように一生懸命に暮らせばいいのか。それは本当の自分らしく個性を大切に、それを活かして生きることだと思う。個性は災害対策を練る上でも大切な要素となる。もし、本当の自分が分からないならば、ぜひボランティアに参加してほしいと思う。そこで多くの人に対して思いやりを持ち、助け合い、積極的に参加できるようになれば自分らしく生きるコツが掴めると思う。実は、このことは災害現場で非常に大切になる。他人の心に耳を傾け自分の考えも述べられ、そして尚且つ一生懸命に生きていく。災害が起きて人の心も不安定な時、また、それから先復興活動へ進んでいく際にも、このような心得を持っているのと持っていないのでは生活意欲も態度も大きく異なってくると思う。これが私の考える教訓である。そして、ここで学んだことは、これから先、いつか必ず役に立つ日が来るだろう。また、環境防災科に入ったからには、ここで学んだことを多くの人に伝えたいし、そうしなければならぬと思う。学んだことを伝えずにいるより、この学科にいてこそ気づいたことや学んだことを多くの人に伝えることで、命を守ることにも出来るかもしれないと思う。今持っている夢を叶える為に自分の出来る事をこれからも続けていきたい。

地震から11年

神戸市須磨区高倉台

坂本 舞

・震災から11年

1995年に起こった阪神・淡路大震災から、もう11年という長い年月が経とうとしている。その当時私は6歳だった。昔の記憶を鮮明に覚えているか？と聞かれたら、ちょっと困る…。実際に私は、阪神・淡路大震災の記憶もうっすらと覚えがあるだけで何をして何を言ったかまで覚えていない。家族に話を聞いてみてもあまり「ピン！」と来ないし「そんなことあったかな？」という驚きも多々あった。また、震災の記憶があまりにも強かったからなのか分からないけれど、震災後の記憶が全くといっていい程ない。

11年が経過し、当時6歳だった私は17歳になった。あれだけ地震に打ちのめされた須磨のまちも昔以上の姿を取り戻した。地震があったことを知らなければ、普通に「活気あるまちだ！」と誰もが思うだろう。今のまち並みは11年前にあれだけダメージを受けたことを感じさせなくなり、私は11年でここまでまちは復旧・復興するものなのか？と思うくらい変わってしまった。

簡単に11年と言っても、頭で考えるととても長い年月だ。でも実際、私が生きてきたことを考えると、とても早く感じる。11年でここまでまちが変わるとなると、被災者の方々がどれだけ頑張ったのだろうか？と思う。心に深い傷をおったのにも関わらず、本当に人間ってすごい！と思った。

何かの縁なのか、私が環境防災科に入学し早2年が経った。行政や消防など地震当時の対応を、授業の中で外部講師の先生や学校の先生に教えてもらった。自分でも防災や環境問題に対する知識は日に日に増えていっているのがわかる。でも年月を追うごとに、大切な自分自身の震災の記憶が薄れていってしまっているような気がする。

私は、阪神・淡路大震災を忘れることなんて到底出来ない。当然目の前に現れ、一瞬でみんなを恐怖に落とし入れ、絶望や一生消えない心の傷を残して、私たちの記憶に深く刻み込まれたあの震災を…。

精神的にも成長し、体も大きくなり力も強くなった。何より2年間環境防災科で学んだ知識や経験が、今の私にはある。

もし今、突然地震が起こったとしても6歳だった頃の私より今の私のほうが、必ずみんなの役にたてるだろう。火事が起きたとき、消防の来ることの出来ない事態におちいたら、バケツリレーを率先してすることが出来ると思う。また、子供たちの遊び相手になることも出来るし、お年寄りの方の話し相手も出来るだろう。

・前日

11年前の1月16日はちょうど月曜で15日(日)成人式の代休だった。私は当時、須磨海岸からちょっと上にあがったところの山陽電鉄東須磨駅の近くにある若木保育園というところに通っていた。

保育園には大好きな友達がいる。大好きな先生もいる。私は、保育園の遊具で遊んだり、部屋の中で友達と一緒に絵かきをしたりすることが大好きだった。お昼寝の時間も好きだったし、3時のお菓子の時間も大好きだった。

1月17日は火曜日で保育園もあるからきっと楽しみにしていたに違いない。1月は私の生まれた月で、もうすぐ1月生まれの子供達の誕生日パーティがあったはずだ。私の誕生日は1月24日で17日のちょうど1週間後になる。でも、1月の誕生日パーティをすることはなかった。震災で私の通っていた保育園は半壊してしまったのだ。もちろん半壊してしまったので保育園に行くことはなかった。その時の私はただこんな事になろうとは思ってもおらず、誕生日パーティをひたすら楽しみにしていたのだろう。

・1月17日

私の家は一軒家で祖父・祖母・母・私・弟の5人で住んでいる。1階で祖父と祖母が寝ていて、その部屋の真上の2階の部屋で母と私と弟と一緒に寝ていた。

今もそうだが、昔から私は1回寝ると大きな音がしても、なかなか起きないくらいぐっすり寝る子供だったらしい。突然母と私は、なんとなく感じた地鳴りの音と、家具が「カタカタ・・・」と小さく揺れる音で目が覚めた。「・・・？」と顔を見合わせていると数十秒後、かなり遠くの方から「ゴゴゴッ！！」という音がだんだん近づくにつれ大きくなってきた。その直後地面が「ドンッ！！」突き上げられ、私たちの体を上下左右という具合に揺さぶった。体の自由もきかず、ひたすら揺れがおさまるのを待つことしか出来なかった。

家具の上に置いてある袋が何個か頭上から落ちてきた。幸い、その袋の中身は服で軽いものだったから怪我をしないですんだ。でも、もしその袋の中身が重たいもので怪我の原因になるものだったら私や母や弟は大怪我をしていたかもしれない。

母は「舞！勇太！地震やけど大丈夫やから落ち着き！」と叫び、私は「うん」と返事をした。母は弟の名前を呼んだ。でも、弟からの返事はない。母と私は、とても心配になった。明け方だったにも関わらず周りは暗い。家の前にある街灯もついていない。もちろんそんな状況下の中で弟の姿が見えるわけではない。電気をつけようにも激しい揺れで立つことさえ出来なかった。母は私に自分の布団をかけて「絶対動くな！」といい手探りで弟を探していた。私は怖くて身動きが取れず、ひたすら布団にくるまっていた。時間が早く経てばいいと思っていた。

揺れはどれくらい続いたのだろうか？実際今になって聞いてみるとそんなには長くなかったみたいだが、私にはとても長い時間を揺れの中で過ごしたように感じた。後で聞いたところによると結局弟は、全く地震に気づかずに普通に寝ていたらしい。人騒がせなやつだ。

1階から祖父の「大丈夫か？」という声が聞こえてきた。私たちは3人とも無事だということを知らせた。祖父も祖母も無事でよかったと思ったのを覚えている。

・17日以降・・・

震災後、私たち家族はテレビで震災の被害の報道を目の当たりにしていた。テレビから聞こえてくる報道人のあの大きな声や、被害のひどい場所を映したあの光景は本当に怖いと思ったものだ。事実、その当時弟は「ゴジラ」にはまっており、その映像を見て街が破壊されている特撮物のテレビと勘違いしていたくらいだ。私の住んでいる高倉台とはえらい違いだった。私の家族や親戚は誰1人として亡くなることはなかったのでもとても良かったと思った。

ある日、いつものように家族でテレビを見ていたときのことだ。母が急に叫んだ。その理由は保育園で同級生だった男の子の名前がテレビに載っていたからだ。フルネームと年齢が載っており変わった苗字だったのでおそらくその子だろうと母が絶句していたのをなんとなく覚えている。

兵庫に住んでいて広島に下宿していた親戚が、兵庫区に住んでいる両親を心配して、須磨まで電車 came。でも、電車が不通になっていて兵庫区まで行くことが出来ずに須磨から歩いて私たちの家を訪ねてきた。家の電話は全く繋がらなかったで、友が丘の公衆電話までみんなで電話をかけに行った。公衆電話も沢山の人が並んでいて公衆電話からやっと繋がった。みんなが無事ということが分かり、1泊して兵庫区の実家に帰って行った。

香川県にいる親戚が車で水入りのポリタンクや米やブルーシートを大量に持ってきてくれた。

祖父は、医者なので長田区の病院に診察の手伝いに行っていた。その時祖父は自転車で長田区まで行ったらしい。途中で自転車がパンクして大変だったとも言っていた。その時、祖父の知り合いの駒ヶ林教会におにぎりを沢山作って持って行ったら大変喜ばれたと言っていた。駒ヶ林教会は建物の一部が崩れいつ潰れるか分からない状況だったらしい。そんな中避難者の人が沢山いたみたいだ。

また母は、板宿に住んでいる友達の家に原付でおにぎりを持っていったらしい。アスファルトの道路

は隆起し、おにぎりとお母をつんだ原付は上下に跳ねて怖かったらしい。

その帰りにある場所で、ブルーシートを買い込んで1枚1万円で売っていたのを見た。こんな非常時に高額で売りつけるなんて母には信じることが出来ず、その人の人間性を疑ったみたいだ。

祖母は昔から今もずっと有機野菜のグループに所属しており、地域の人と共同して有機野菜の購入をしている。その有機野菜の会社の人地震のときに牛乳と卵を大量に寄贈してくれた。

この地震は、私が覚えている限りでは初めての地震だった。私はとても焦った。

私の住んでいる高倉台は山を削って作った町だ。だから、地盤も固く高倉台に住んでいる人のほとんどは家が半壊もしくは全壊などの被害はなかった。私の家の被害といっても水道が1時間半ぐらい使えなかったのと、お皿が何枚か割れたくらいだった。電気・ガスは何不自由なく使えた。

でも、家を出て須磨海岸のほうに下って行くと高倉台では見られないような光景が広がっていた。高速道路は崩れ、家も傾いていたり崩れていたりしていた。私は今でもその光景を忘れることが出来ない。まぶたの裏に強く焼きついている。

私は昔、東須磨にある若木保育園というところに通っており、保育園辺りは被害が本当にすごかったらしい。私と弟が保育園に行くときは、毎朝母が送ってから仕事に行っていた。毎朝保育園まで、家から離宮道の月見山までバスに乗って、月見山から山陽電車に乗り換えて東須磨という駅で降りてから歩いて通っていた。

私の小さいころからの友達がその保育園の近辺に住んでいた。友達の私と一緒に保育園に通っていた。でも、地震のために家が崩れた。幸いにも家族は誰1人亡くなったりすることがなかったが、家に住めなくなってしまったために県外に住んでいる親戚の家に引っ越すことになってしまった。それから連絡をとっていないから、どうなったかは分からない。友達が引っ越したのを知ったのは、だいぶ後の話で私は本当に悲しかった。なんで、地震なんか起こるのだろう？ずっとそんな事を思っていた。

・今、これからについて思うこと

今の時代、阪神・淡路大震災を経験していない子供や地震についての知識がない子供も多いと思う。現に世間では、私たちの年代に生まれた子供が、阪神・淡路大震災を覚えている最後の世代だという風に言われている。

6歳だった私でさえ、当時のことをあまり覚えていないのに震災時5歳、4歳だった子たちが詳しく覚えているとは到底思えない。ましてや、それより後に生まれた子供は経験していたとしても、絶対という具合に覚えていないと思う。阪神・淡路大震災が起こった後に生まれ全く経験していない子供もいる。

これから、南海地震・東南海地震・東海地震などの巨大地震が「今後30年から50年間の間で起こるだろう」と予測されている。そんな時に地震を経験していない子供たちは、地震の本当の怖さを知らない。また、大切な人を失う怖さを知らない。

最近は防災教育を実施している学校も多いし、防災訓練や地域コミュニティの活動も活発化している。でも、地震を甘くみていると必ず痛い目にあう。

たとえば、あまり地盤が強くない地域に住んでいるとする。地震が襲ってくる前に自分の家の家具の固定などの耐震補強をしていれば、高い確率で家の全壊はまぬがれ命も助かるだろう。一方で、耐震補強をしないまま地震にあってしまうと家は全壊・もしくは半壊し、自分の命も危機にさらされることになるかもしれない。そんな事態を防ぐためにも、私たちは地震の教訓やその時の怖さ、地震に対するありとあらゆる知識を語り継いでいかなければいけない。

私はもう阪神・淡路大震災のような地震にあいたくない。でも災害を止めることは私たちの手では、出来ない。今、私たちに出来ることは災害が起きたときに少しでも被害が軽減するように備えをすることだ。備えをするにあたって何をしたらいいのか？ということをお教えていくことは私たちの役目だと思うし、私たちにしか出来ないことだと思う。

私は覚えていなかったことばかりだけど、地震のときにいろいろな人と関わりすごく助けられたみたいだ。県外から水や米を持ってきてくれたり、牛乳や卵を寄贈してくれたりと人との関わりは本当に素晴らしいと思う。私はこの時は被災者だったけど、もしいつか地震が起こったらどんな形であれ、沢山の人の役に立ちたい。

災害時に物を盗んだり、絶対に必要なものを高額で売りつけたり、そんな卑劣な考えを行動に移す人がいない世の中になってくれたらいいと思う。

語り継ぐことはとても重要だと思う。これから私たちは各自いろいろな進路に進むが、どこで何をしようとも自分の経験を話し、いろいろな行事に積極的に参加して沢山の人と交流を深めて行くことが大切だと思う。

そういう思いこそが環境防災科の生徒の誇りであり、使命であると思う。その思いを大切に、私のこれからの人生に役立てて行きたい。

人生とは旅である。旅とは人生である。

神戸市垂水区多聞台
鮫島 和博

「1月17日午前5時46分」

1995年1月17日午前5時46分、阪神・淡路大震災が神戸の町を襲った。ゴォーという音とともに下から突き上げるような揺れが襲ってきた。当時、僕の家族は和室で母、長男、次男、そして僕、リビングで父が寝ていた。大きな揺れでパッと目が覚め、辺りを見回しても真っ暗でなにがどうなっているのかわからなかった。そのとき母が「地震や！」と叫んだ。僕は怖くて布団にもぐりこんだ。地震というものは今まで体験していなかったものでそれまでなにが起きているのかさっぱりだった。

地震が起きているとき母は僕たち3人を覆うようにしてくれていた。そして揺れがおさまったところに兄が「おかん、血出とうやん！」と言った。母は「大丈夫や」と明らかに大丈夫ではないのに、強がってそういう風に言っているんだと幼稚園児の僕でも分かった。揺れで2段重ねのタンスの上の段が落ちてきて頭にあたったらしい。本当ならタンスは僕たち兄弟のところに倒れてきていたのだが、母が僕たちをかばってくれていたために母は頭に一生の傷を負った。またタンスの上にはいろんなものが置いていて、布団の上にたくさん落ちてきていたが、当時は冬だったので何枚も重ねて寝ていたことでそれがクッションになって助かった。阪神・淡路大震災が夏に起こっていたらと思うとゾッとする。

ドア

父は揺れがおさまると懐中電灯を探したが、真っ暗でどこにあるかわからなかったのでとりあえず玄関に向かった。そして外に出ようとドアを押したが開かなかった。地震でドアが動かなくなってしまったらしい。父は何度押しても開かないドアを無理矢理蹴って開けた。

長田の空

やっと、5人一緒にマンションを出ると、門のところにマンションの住民がたくさんいた。そこで僕はすごく安心したのを覚えている。大勢の人が周りにいるだけで人は安心するものだと思う。そして、余震がくるかもしれないので、しばらくマンションの自転車置き場にいることになった。

後から聞いた話だがそのとき長田方面の空は赤く染まっていたらしい。

当時の病院

母はとりあえず病院に行って診てもらうことにした。そのとき自分の家の車で行こうとしたが、電気が止まっていたので車を上げることが出来なかった（僕のマンションの駐車場は地下にも車を置くことができて、僕の家は地下にとめていた。車をあげるのは電気の力だ）。母が病院に行くと、電気が止まっているので使えなくて傷口を懐中電灯で見てもらったらしい。母はそこまでたいしたケガではなかったのよかったが大怪我をした人だったら大変なことになっていたと言っていた。

ガスのにおい

そして、夜が明けてから、近くの小学校に避難した。小学校まで歩いて向かっていると道路が地割れで隆起していた。小学校の正門の前まで来るとどこからかガスのにおいがしてきて、本当に小学校に避難しても大丈夫なのか不安だったのを覚えている。

1つだけ困ったこと

小学校にブレイルームという小さい部屋があって、そこで僕たちは1週間寝泊りすることになった。

プレイルームには僕たち家族以外にもたくさん避難していて、僕たちを合わせて20人くらいいた。

外は雪が降るほど寒かったがプレイルームはじゅうたんが敷いてあったし、近所の人毛布を持ってきてくれていたので、寒さに困ることはなかった。ただ、1つ困ったことがあったといえば、トイレだろう。小学校のトイレは水が出なくて、流せなかったので汚物がどんどん溜まっていった。臭いもすごかったらしい。

事の重大さ

震災の前は連休だったのでたくさん買い物をしていて2、3日は食料に困らなかった。しかし、冷蔵庫が使えなかったので肉類の保存には困った。電気が復旧してからテレビをつけると神戸の街が激しく燃え盛っている映像が出た。みんなその映像を見て言葉も出ない状態だった。僕はこのとき初めてすごいことになっているんだということが分かった。

避難所生活

僕たちは小学校に避難していたけど、中には小学校には避難せず車の中で生活する人もいたり、親戚のところに避難していった人もいた。夜中は地域の人たちが小学校の見回りを交代でしてくれていた。

炊き出しもあった。地域の人たちで豚汁など作ってくれた。自分の家も大変なときなのに人のためにボランティアをしてくれる地域の人には本当に有難いと思う。3日後くらいに避難所に毛布や食パン、おにぎり、弁当の配給があった。このとき家族が5人のため、5人分もらった。幼稚園児でも大人と同じだけ食料をもらえるので、こういうときは家族が多いと助かる。また、地域の人たちが炊き出しを作ってくれた。寒かったので豚汁を作ってもらったときは本当にうれしかった。

家の状況

その日から夜は学校で寝て、昼間は家に帰って片付けをした。久々に家に帰るとまず自分の目を疑った。

僕の目の前にあるのは今まで安心して暮らしてきた我が家ではなかった。言い過ぎかもしれないが、ホラー系の映画にでも出てきそうな薄気味悪い建物がそこにはあった。ひどいところは外壁の鉄筋がむき出しになっていた。僕の家は3階だが、3階が1番被害が大きかったらしい。半壊の判定が出たという。

家の中もそれに負けないくらいものすごいことになっていた。食器棚は倒れているわ、テレビはこたつの机に倒れてきているわ、たんすも引き出しが飛び出ているわで、驚きと、恐怖といろんな感情を通り越してもう笑うしかなかった。食器棚や家具が壊れたけど、しばらく新しいものを買う気にはなれなかったと母は言っていた。また強い地震が起きたら壊れるという恐怖心があった。

また、ごみを捨てるのも、ごみ収集車が来なくて日に日にごみステーションに瓦礫やごみがたまっていった。家の中を一通り片付けるのには3、4日かかった。そして、小学校に避難して1週間くらいしてから父が風邪をひいた。それをきっかけに家に帰ることになった。

全国各地からの支援

その日に給水車が小学校に来てくれて兄2人と母とで水をもらいに行った。全国各地から応援に来てくれていた（北海道、沖縄、九州のナンバープレートをつけたトラックが多かったらしい）。遠いところからわざわざ神戸に来てくれて本当に有難かった。そのもらった水は大事に使った。顔を洗うときは洗面器にためて洗うなどした。

協力

家のトイレの水に困ったので近くの松池というところに水を汲みに行った。マンションにはエレベーター

ターがあるが使えなかった。8階建てのマンションで、僕の家は3階だからまだマシなほうだが、8階の人は松池に行ってもた8階に上がらなければならなかったのもとても大変だ。お年寄りの人ならなおさらだった。そのため、気を利かした人が汲んだ水を1階にためてそれを、特に上のほうの階の人やお年寄りに汲んでもらうという風にしていた。こんなに大変なときにも周りの人のことを考える、みんなで協力するということは本当に大事だと思う。

風呂のありがたさ

風呂は少し遠くにある銭湯に行ったり、近くにあるゴルフ場の風呂を一般開放してくれていたのも使わせてもらったりした。銭湯に行って、1週間ぶりに風呂に入ったのもとてもしゃいでいたのを覚えている。銭湯は当たり前だがお金を払わないといけない。でも、このときは風呂に入れるところがあるというだけでありがたかった。

復旧する早さ

水道の復旧に関しては、マンションは比較的早かったが近くにある団地は遅くて、団地に住んでいる友達は僕の家洗濯しにきたりしていた。一戸建ての家で庭の水が使えていたので、家の前に「自由に使ってください」という看板みたいなところもあった。

親戚からの支援

大阪や種子島の祖父母が郵便小包で下着などを送ってくれた。大阪の和泉府中のおじさんは電車と徒歩で家まで訪ねてきてくれた。遠いところから心配してくれている親戚がたくさんいた。それから少しその生活に慣れたのもあり、またライフラインが復旧したというのもあって、生活の中であまり不自由な思いをすることはなかった。

復興するまで

2週間後には幼稚園も始まった。僕の友達で比較的大きな被害を受けたという友達はいなかったようだ。

そして、10ヵ月後にはマンションの補修工事が始まった。こうして時が経つにつれて復旧が進んでいった。そして、10年という長い年月が経ち、今では神戸は元通りになっている。それと同時に僕たちはあの震災のことをだんだん忘れ去ってしまっている。しかし、そうなってはいけない。そうならないためにも僕たちが体験したことを全国の人に発信しなければならない。また、この阪神・淡路大震災で被害を受けたけど、6433人というたくさんの亡くなった人がいるので命が助かっただけでも幸せ、そしてその人たちの分の精一杯生きないといけないと思う。もうこのような大災害にならないためにも多くの人に語り継いで、これからも防災に関わっていきたいと思う。

「地震」

僕は兵庫県南部地震が起こるまで、地震というのは言葉では分かっていたけれど実際に体験したこともなかったので、どんなものなのかはこのときに恐怖とともに実感した。それはすべての人に言えることだと思う。地震というものは実際に体験しないと本当の怖さを知ることは出来ない。

「ライフライン」

普段当たり前のように使っていた水、電気、ガスがこの地震によって、一時すべて使えなくなった。このとき初めてライフラインのありがたさに気づいた。経済が発展し、いろんなものが簡単、便利になってきているがその反面、自分たちで何かをするということに人間は弱くなっているように思う。

阪神・淡路大震災はこういうことも僕たちに学ばせてくれたのではないだろうか。

「テレビとラジオ」

父は当時情報収集をするとき、テレビを見るよりもラジオのほうが地元のことを細かく伝えていて分かりやすいと言っていた。確かに被災していないほかの地域人ならテレビで全体的に見たほうが分かりやすいが、実際被災した人たちは地元や近くの情報が知りたいときはラジオのほうがよいのかもしれない。

「電話」

僕の母方の祖母は大阪に住んでいて、父方の祖母は鹿児島県の種子島というところに住んでいる。どちらも阪神・淡路大震災が起きたことを知って心配して電話をかけてくれた。

種子島の方の祖母はつながったが大阪の祖母が電話をしてもつながらなかったらしい。大阪から神戸への電話回線はいっぱいだったらしい。これも1つの豆知識になった。

「地震のまえぶれ」

これは後から聞いた話だが震災前日の夜近所の犬が暴れだし、大きな声で何度も鳴いたり、カラスの大群が飛び回ったり、急におかしなことが起こったらしい。動物には地震が起こるといのがわかるのかもしれない。また、最近テレビで見たが地震が起きるときの雲は形が変わっていて、それを専門家たちは“地震雲”と呼んでいるらしい。本当かは知らないが・・・。

「こんなときだからこそ」

阪神・淡路大震災が起きてから1ヶ月くらいの間たくさんの親切な行動を見ることが多かったように思う。たとえば水が出ていない人のために自分の庭の水を自由に使うようにするだとか、マンションに住んでいるお年寄りのために近くまで水を運んでためておいてあげるとか。みんなが困っているときだからこそ思いやりの気持ちが強かったと思う。日ごろからこのように近所との付き合いをしていれば、いざというとき本当に助かると思う。

「阪神・淡路大震災は阪神・淡路だけの問題ではない」

阪神・淡路大震災は確かに阪神、淡路の地域で起きた地震だが、これをほかの地域の人が「僕たちには関係ない」という風に考えてしまっただけで阪神・淡路大震災によってたくさんの人が亡くなった意味がないと思う。そんな人たちがいれば、もし兵庫県南部地震級の地震がほかの地域で起きたときに同じような災害になってしまいかねない。だから阪神・淡路大震災を自分のことのように受け止めてほしい。

「もしも・・・」

(もしも阪神・淡路大震災が夏に起きていたら...) 布団がクッションになって助かるというものない。水がなく脱水症状による被害。

(もしも阪神・淡路大震災が通勤ラッシュの時間に起きていたら...) 兵庫県南部地震が起きたのは5時46分。通勤ラッシュの時間なら電車による被害はものすごい数になったに違いない。

という風に考えるととっても大変なことになっていたかもしれないということが予想される。

「あれから11年」

兵庫県南部地震が起きてから11年がたった。今でもやはり地震は恐ろしい。テレビを見ていてニュース速報が流れどこかで地震が発生したのがわかると、なぜか体に力が入っている自分があるし、またあの時の記憶がよみがえってくる。11年前と今の家の状況で変わっているといえば家具が固定され、懐中電灯が布団を敷くところのそばにおいてあったり、食料、水が確保されたりと、地震で家がつぶれない

限りは十分な備えができていないのではないだろうか。また、その反面当時助かったから、次も大丈夫と思っている人も意外にいます。

「環境防災に入って」

僕は今舞子高校の環境防災科の一員だ。環境防災科とは阪神・淡路大震災の教訓を生かして、将来の地域の防災リーダーを育成するという全国で1つだけの学科だ。最初はこの学科に入ったのは消防士になれたらいいなと正直軽い気持ちで入ったが、今ではもっと防災について学びたいし、将来は本当に地域の防災リーダーになりたいと思っている。その学科ではいろんな視点から阪神・淡路大震災を見ることができた。ライフライン、消防、警察、大学教授、いろんな外部講師の方が授業をしに来てくれた。そして、六甲山フィールドワーク、消防体験入学と自分の体で学ぶことも出来た。また、自分が阪神・淡路大震災について知らないことをたくさん知ることが出来たし、環境防災科に入らないと出来ない貴重な体験もさせてもらった。

だから、僕はこの環境防災科に入れて本当によかったと思う。

「感想」

今回の「語り継ぐ」の授業で父、母、兄などいろんな人に阪神・淡路大震災のことについて聞いた。僕は当時幼稚園年長だったので、当時のことははっきりとは覚えていなかった。しかし、いろんな人に話を聞いていく中で思い出したこともあった。そして僕の知らないこともたくさんあった。そして、母は話をしながら「こんなこともあった。…あんなこともあった」という風に当時のことを思い出したりもしていた。僕たちの世代でも当時のことをはっきり覚えていない人はいると思っていたけど、大人でも約10年そのことについて話していないと忘れてしまうものなんだと思った。また、そうならないためにも時々当時のことについて、家族、あるいは友達同士で話をするということのも大事だと思う。そして、阪神・淡路大震災の教訓で近所とのつながりも重要視されている。近所付き合いは災害のときに限らず、近所と仲良くして損はないし、プラスに働くことばかりだと思う。朝、学校に行くときや家の周りで出会った人に挨拶するだけでも良いと思うので近所との付き合いを大切にしようと思う。また、これからはもっとボランティアに参加し、防災の意識を高めていきたい。

これから何十年経ったら神戸には阪神・淡路大震災を体験した人がだんだんと少なくなっていく。それでも自分は阪神・淡路大震災を体験した人の1人として語り続けて生きたいと思う。

あの日から11年

神戸市垂水区星陵台
島本 裕也

地震直後の様子と生活

阪神・淡路大震災を憶えている人は今、ほとんどいないのではないだろうか。11年前のあの日のことは、僕にとって忘れることができない大きなものだった。当時幼稚園の年長だった僕は兄と2人でふとんの中で寝ていた。そしたら家がだんだん揺れてきた。しだいにその揺れは大きくなっていった。そのとき、僕はなぜだかこの揺れが遊園地の乗り物みたいでわくわくしていた記憶がある。そしてちょっとしてから僕と兄の頭のほうにある窓がすさまじい音とともに割れたのだ。わくわくしていた気持ちは一転、怖いという気持ちに変わった。なにがなんだかわからなくて、とにかく兄と一緒にふとんの中にもぐりじっとしてしばらくいた。そして気づいたときには父がタンスを支えて僕と兄を助けてくれていたのだった。必死で僕と兄を助けてくれている、そのとき父がいなかったら僕らは下敷きになってしまっていた。父がいなければ間違いなく僕と兄は死んでいただろう。父はそのタンスをどけると兄を背中におんぶしガラスがちらばった床を急いで歩いて1階へ降りていった。その次に僕がおんぶされて1階へ降りた。おんぶされているとき僕は父が助けてくれているというのに、なぜだか感謝の気持ちではなく部屋に飾っていた、お気に入りのパズルを気にしていた。自分が作った初めてのパズルだったので落ちてバラバラになっているのが気になってしまっていた。怖かったはずなのになぜこんなことを考えていたのだろうか、今考えてみると不思議だ。

1階に下りてみると母と祖母がいた。母と祖母は地震がおきたときすぐさまテーブルの下に隠れていたという。母と祖母は地震がおこる前から朝食の準備をしていたらしい、床にはいろんなものが散乱していた。揺れが少しおさまったころ僕が一番最初にしたことは兄の手をギュッと握っていたことだった。いつも兄に頼っていたのでこのときのこんな地震は兄がなんとかしてくれるだろうと思っていた。父にこたつの中にいなさいと言われたときも兄のそばを離れなかった。父と母それに祖母は僕と兄がこたつに避難しているときになにもすることがないのでお酒を飲んでいたらしい。お酒を飲んでも酔えなかったと言っていた。少し揺れがおきると僕と兄はこたつの中へ、父と母と祖母はテーブルの下へ隠れた。その繰り返しが何度かあった。早くこの揺れがおさまればいいのにと思っていた。

この地震によってガス、電気、水道、すべて止まってしまった。なにもできない状況だった。地震を経験した人たちは全員どうしようという気持ちになったにちがいない。父が外の様子を見ると家の瓦が落ち、壁と階段にはひびが入ってしまっている。近所の人たちも自分の家の様子を見るために外に出ていたらしい。そこで少し話をして情報の交換をしたと言っていた。近所の人たちの中で亡くなった人やケガをした人はいなかった。不幸中の幸いだったなと父は言っていた。地震がおこる前までは、僕の家はそんなに近所の人たちと話さない感じで、あまり話したことのない近所の方とこのとき初めてじっくり話したそう。これをきっかけにだいぶ話すようになったらしい。近所の人たちとのコミュニケーションがなければ災害がおこったときに助けることができないというのは当時、誰もが考えていなかったのではないかと思う。このことは僕も環境防災科に入ってから知ったことだった。

今でも家の場所は変わっていない。いつも部屋から見る風景はなんとも言えないきれいなものである。淡路島が見え、キレイな海も見えるし、今では明石海峡大橋だってはっきり見えることができる。しかし阪神・淡路大震災がおこったときの外の様子はひどいでは言い切れなくらいだったそう。道はでこぼこになり、家はつぶれ、人がたくさん外に出てボーっとしていた。なんだろう、その人たちや自分の住んでいる町を見まわしたとき、とても寂しい気分になったと言う。なんでこんなことになっているのだろう、なにがこうさせたんだろう。そんなことを当時の僕は考えていた。父も母も祖父もしばらくの間なにをしたらいいのかわからなくて、ボーっとしていた。地震なんか経験したことないことだし、

自分が地震にあうなんて誰もが思っていなかった。

とにかく自分の家族が大丈夫なのを確認した父は会社へ行くことになった。父は長田でケミカルシューズの会社を経営している。しかし、長田に行くまでの道のりがとてつもなく困難なものだったと父は教えてくれた。道はボコボコになり、建物がつぶれ道路まで壊れたものが飛んできていていつもの通り自分の会社まで行けなかったそうだ。父は自分の会社に行くまでの道のりでたくさんのことを考えていたという。家においてきた家族のこと、自分の会社のこと、会社で働いてくれている社員のこと、そしてこれからどうなってしまうのだろうかかと不安な気持ちで頭がいっぱいだったと言っていた。いろんなことを考えているうちにやっとのことで会社にたどり着いた。幸いにも工場は大丈夫であった。しかし事務所は建物全体がつぶれてしまっていたらしい。会社の地下にはタンクがあり、その中にはガソリンを貯めてある。そのタンクが傷つかずにいたことだけでもよかったと安心した。それがもし引火してしまったら会社の周りのほとんどが燃えて大変なことになっていたという。自分の会社はなんとかなりそうである。父は少し安心し周りを気にしてみると近くにあった工場がなくなっている。地震によって一瞬にしてなくなってしまったのだった。近くに行ってみても人はいなかった。父は自分の会社だけでも助かってよかったと思ったと言っていた。

そのころ、家では母と祖母が食器を片付けていた。ほとんどのものが壊れてしまったのですべて処分されていた。当時、幼稚園に通っていた僕はなにも手伝うことができなかった。母と祖母が食器などを片付けるのをこたつの中で見ているしかなかったのが今思ったら悔しい気持ちになる。そのときは、なにか手伝ってあげられたらなと思った。たぶん兄も同じ気持ちで見えていたと思う。しばらくして父が帰ってきた。その隣には母方の祖母が一緒にいた。母と祖母の顔に安堵の表情が見られた。母方の祖母は長田の古い家に住んでいて、父が捜してきたのだった。その祖母は地震がおこったとき家のリビングにいたらしい。そして家の下敷きになったのだ。祖母は必死になって助けを求めたという。何分たっても助けがこない、もうだめだと思ったときに近所の人引きずりだしてくれたそうだ。助けられた祖母の体は怖さでなかなか動けず、ふるえていた。しばらくしてやっと安心したのかふるえが止まってもともにもどった。親戚の人たちには連絡が取れない。次から次へと心配事があり家族はバタバタしていた。

親戚の人は無事避難していたという。なんとか心配事が減ったと安心してはいたけれど、何日かしてから両親の同級生が僕の家へ来た。僕の家族と両親の同級生の家族、親戚で10人以上の人間が僕の家に行った。両親の同級生の家は同じ星陵台に家があるのだが、家の前の道路が地震によってボコボコになってしまって埋めてあるパイプが壊れたため、うちでしばらく生活することになったのだ。もともと仲のよい家族同士だったので全然嫌にはならなかった。むしろ僕と兄の遊び相手をしてくれるおにいちゃんとおねえちゃんができたみたいだった。結構年が離れているので、そのおにいちゃんもおねえちゃんも可愛がってくれた記憶が今もまだ残っている。いきなり家族が増えたのでなんだかおもしろかった。僕と兄はまだ小さかったので、なんにもできないし考えていなかったので遊んでいるだけだった。

両親たちはとても大変だったのだ。僕らはなにも考えてはいなかったけれど、水道が止まったりしていたので、水をもらいに行かなければならなかったのだ。まず、最初は星陵台中学校に水をもらいに行ったらしい。そのときは男女関係なくみんなが水をもらいに星陵台中学校まで行った。たくさんの空のペットボトルを持って水をもらいに行った。そして中学に何人か行っている間に残った人たちは家のすぐ裏にある星陵高校にも水をもらいに行った。とにかくそのときは水が必要だったのだ。水がなければトイレもできない。お風呂も入れない。一番は生活するのに困るということだった。地震なんかおこしていなければ、いつもは水の大切さなんてまったくわからないと思う。しかしいざ、地震などの災害がおこってライフラインがストップした場合にはどうしても水の大切さやありがたさがわかってくる。なんにもしなくても蛇口をひねれば、水はでてくるものと思っている僕たちにとって、水が貴重であるということはこういうときにしかわからないのだなと思った。そして、星陵高校ではおにぎりをもらったらしい。僕は全然記憶にはないのだけれど、そのときもらったおにぎりがとても美味しく感じたんだと家族は言っていた。

父とうちに來ていたおじさんが一緒に三木まで車で水をもらいに行ったらしい。当然道はボコボコで、とても時間がかかったそう。父はおじさんに困ったことを聞かれたと言っていた。この水で火事を消すか消さないかということだった。なぜそんな質問をしたのかはわからないけれど、本当に目の前で火事がおこっていたらどうしたらいいのか、おじさんもわからなくて父に聞いたのではないかと僕は思っている。火事がおこっていて、目の前で人が困っている。そんな状況で僕だったらどうするのだろうか。困っている人はいるけれど、自分も困っているし家族がなにより水を持ってきてくれると思っているのに、その人に渡すのだろうか。正直僕はわからない。そんなことを質問されたらわからないとしか言えないのではないだろうか。

水に関してはなんとか間に合いそうであったが、ガスなどは使えないためおにぎりなどで少しの間生活していた。問題はたくさんあったけれども、一番の問題は人がたくさん死んでしまったということだった。小さかった僕のわずかな記憶の中では両親と両親の同級生のおじさんたちが号泣していたのを覚えている。おじさんの親がこの阪神・淡路大震災の犠牲者になってしまったのだ。家の下敷きになって亡くなってしまったらしい。そのときの泣いている両親たちの顔が今でも僕の頭の中に残っている。本当に辛いことだ。僕はそのときなぜ死んだのかは理解できていなかったけれど、どうしても涙が止まらなかった。親しい人が死んでしまうということがどれだけ悲しいことなのかということを初めて知った瞬間だった。そのとき兄はたくさんの人にこんなに悲しい思いはさせたくないという気持ちになったらしい。そのときの思いが将来人の役に立ちたいという気持ちにさせたと教えてくれた。そしてそのときの気持ちがずっとあったので、環境防災科にくることを決めたのだと言う。もちろん僕も同じように人の役に立ちたい、自分も災害のときには被害にあった人を助けたいという気持ちがあった。そのときの気持ちが残っていたので、僕も兄と同じように環境防災科に入ることにしたのだ。

悲しい知らせなどもあったが、なんとかやってきた何週間が終わっていった。お風呂は家のものが使えないため親戚のおばさんの家まで行き、お風呂に入った。長い時間をかけて親戚の家まで行きお風呂に入って、みんながお風呂に入り終わると両親は親戚の人とこれからのことを話したりしていて、僕と兄は親戚のおねえちゃんと一緒に遊んでいた。そしてまた自分の家に帰って行く。ほとんど毎晩その繰り返しであった。誰かに頼っていなければ生活できない日々を送っていた。そうでなければ生きていけないくらい被害が大きかったのだ。生きたいと思う気持ちが大きかった。なにもしないままではいけない、しかしどうしようもない状況なのだ。とにかくとにかくにしがみついても生きてやるという気持ちが当時の人たちにはあったと思う。あのときの地震は、人の命も人の生きたいという気持ちも持っていってしまうものだったように僕は思っている。どうしようもないけれど悔しさやむなしさが残っている。当時を思い出すと悲しくなる。本当にあのときはなにもかもが一生懸命だったと父は言っていた。

あの頃の父は今よりも必死になって働いていた。自分も家族も生きていくためだ。地震から何週間かたったころには父は必死で仕事をしていた。自分の会社をどうにか守らなくてはいけないと思ったらしい。朝の早くから家を出て、晩は遅くまで帰ってこなかった。そんな日々を続けていた。自分の会社が潰れてしまえばこれからの生活はできなくなってしまう。家族もいるし、従業員もいる。そんな思いでやっていたのだという。仕事には水がいる。もう父が仕事をするときには水の復旧はできていたらしいので助かったと言っていた。仕事を毎日やっている間に従業員の人たちもだんだん会社に来られるようになってきて、本格的に仕事が再開できるようになったそう。そんな父の姿を見た僕はとても感謝した。自分の家族などを守るために必死でかっこのなど気にせず、働く父の姿は頼もしかった。長田にある同業者たちが被害をおってできない仕事は父の会社が代わりにやっていたそう。本当は自分のところでいっぱいであったはずなのに一緒にやっていたのだという。困ったときはお互い助け合わないといけないだろと言っていた。

水などの復旧などがだいぶできたころではあったけれど、食べ物に関しては足りないところもあったらしい。そんな中でおにぎりを配ってくれる人たちもいれば、おにぎりを売って渡す人もいたらしい。そんなことをやっている人たちがいたことがとても心が痛くなってしまった。人は追い詰められたら本心

を出すものだと思うけれど、お互いが困っているのに助け合っていないというのは残念だと思った。ボランティアの人たちの助けもあって生活をする人もたくさんいたと思う。本当にボランティアをしてくれた人たちには感謝しなくてはいけないと思った。みんなにおにぎりや飲み物を配ってくれたり、話し相手になってくれたりしていた。わざわざ遠いところから来てくれる人もいたし、近くですぐに駆けつけてくれる人たちもいた。

地震があっている忙しかったけれど、なんとか落ち着いたところに母と一緒に長田の町を見に行った。なにがなんだかわからないような状況になっていた。すべての物がないのだ。長田の町は僕が知っていたものとはまるで違う。どこか知らない場所に連れて行かれたような気にもなった。そのときの母は複雑な顔をしていた。どんな感情が母の中にあっただのかはわからなかった。自分が育ってきた町が被害にあって、ほとんどの物がなくなってしまったのだから悲しさと地震に対しての怒りがあったと思う。本当になんにもない町だったことを僕は覚えている。これは誰が直してくれるのだろう、直るのだろうか、そんなことを考えていた。こんなになったら何年かかって地震の前と同じ姿になるのか僕には想像できなかった。

実際去年行った長田のまち歩きのとくに話を聞いてみたら、まだ完璧には戻っていないという意見を聞いた。パッと見は昔よりもきれいになっているけれど、昔みたいな活気はないと言われた。人は全然こなくなって商店街の人たちは少し寂しい感じがするとも言っていた。地震によって町を出てしまった人たちがいると言う。建物はお金があつたらなんとかして直すことができるけれど、人の心は動かないと言われたときに本当にそうだなと僕も思った。阪神・淡路大震災によって神戸の町から出て行った人たちも少なくはない。地震が原因で神戸に戻ってくるのがいやになった人もいるのではないだろうか。また必ず地震がくると思ってもう戻ってこない人もいるかもしれない。そんなことがもしあったとしたなら、とても寂しいことだと思う。やっぱり人の心はなかなか動かないんだなと思った。

兄が小学校に行くようになったけれど、僕は幼稚園に行っていた記憶がない。記憶がはっきりしないのだが、家でずっと母と祖母といたと思う。幼稚園ではいろいろ大変なことがあったらしい。地震で潰れたり、幼稚園にきた子たちは地震のせいかすぐに泣いたりするようになっていたらしい。少しの音などに敏感に反応する子たちが増えていたため母が行かさないようにしていたのだ。しかし、今でも僕は少しの揺れなどがおこったら体がこわばってしまう。阪神・淡路大震災のあの日から今でもこの反応は変わらないのだ。少しでも怖いという気持ちと体の反応はたぶん一生治らないと思う。不安になってしまって家族の顔や友達の顔を見なければ、安心できないくらいになってしまった。こんな人たちは今でもたくさんいるのではないだろうか。自分の中で当時の記憶がまだ体に残っている。他にも実際に体に傷をおってしまってその傷が一生残ってしまった人もいるのではないだろうか。もし、傷が治ったとしても心におってしまった傷は治せないと思う。11年経った今でも治っていないだろう。それは残念だが、一生残ってしまうと思う。

阪神・淡路大震災から1年、2年が過ぎていって、学校の音楽の時間になった歌が今でも忘れられない。それは、「しあわせ運べるように」という歌だった。この歌は被災した方への言葉で、この歌を聴いた人たちはみんな涙したと思う。本当に心に響く歌で、僕はこの歌を知ったときはなにも考えなく、ただ習ったから歌っていたという感じだったのだが、中学生、高校生になってくるにしたがってこの歌がどれほどの人に影響をあたえたのだろうかと感動した。この歌を知らない子たちが今とても多いと思う。本当に地震にあったりしてなかったらこの歌も普通の歌だと思うだろう。あの阪神・淡路大震災を知っている最後の子たちと言われている僕らは、あの当時のことを僕らより年下の子たちに伝えていかなければならないと思う。なぜこの歌が作られたのかをしっかりと教えてあげなければいけない。どんなに興味を持ってもらえなくても、阪神・淡路大震災のことは伝えなければいけない。亡くなった人たちのことを忘れてしまうことになるのではないかと考えてしまう。直接僕ら1人1人が話をしても良いと思うが、さっきも言ったようなあの「しあわせ運べるように」という歌を教えてあげたら子供たちからしたら分かりやすいように思う。小学生の子たちからしたら昔の僕と一緒にただ習ったから歌っているというふ

うに感じると思うけれど、何年かしてから歌の中にある気持ちがわかると思う。多くの人がこの歌を知って、1月17日には歌ってほしい。亡くなった方のために歌ってもらえたらと思う。この歌のメッセージがわかってもらえたらと思った。

1月17日があると気分が複雑になる。なんだかその日になるとあの日を振り返って怖いという気持ちが出てくるのだ。去年兄と一緒に追悼しに行った。そこにはたくさんの人が集まっていて、5時46分になるのをみんなが静かに待っていた。地震で家族や友達を亡くした人たちが祈りを捧げながら泣いていた。その様子を見てなんだか僕も悲しくなってしまった。一緒に祈りを捧げて、亡くなった方の名前が載っている場所に行きゆっくりと名前を見て回った。その中で泣いている人たちが大勢いたのを覚えている。自分の家族の名前が刻まれているのを見てその人は泣きくずれてしまっていた。11年経った今でも悲しみが残っている。こんなにも傷をおった人たちがいる。そう思ったとき僕は環境防災科で勉強していることがどれだけ大切で貴重なのかというのがわかった。

防災のことを勉強しているのを活かしてこられたかなと考えたとき、そんなに活かせてないなと思った。家では非常時のときに備えての準備をしている。水に乾パンに懐中電灯といったものを準備している。少しでも勉強したことを活かしてそれを広められたらと思ってやっている。毎年毎年1月17日があると気持ちが引き締まる気がするのだが、地震はまだこないんだろうなといった気持ちが先に出てきて気持ちがゆるんでしまう。何十年か先には絶対にくると言われている南海地震などに備えてなにかできることを考えたら、心の準備しかできないのかなと思ったりもする。阪神・淡路大震災と同じようなことは絶対になりたくはない。今の自分は災害にあったときになにができるのかを考えたと、ほんのちょっとのことしかできないと思うけれど全力でできたらいいと思う。

11年経って日本の防災力は高まっている。しかし日本は災害大国と言われるくらい災害の発生率が高い。そのたびに被害にあう人がたくさんいて対応しきれていないのが現状だと思う。救助する人たちよりはるかに多い人数の人が災害にあって困っている。気持ちではなにかしたいと思うけれど、実際はなにもできないことが多い。そんなことを思っているともっとみんなが防災の知識を学んで自分のことは自分で守るくらいの気持ちでないといけないと思った。

阪神・淡路大震災でも救助活動していたのは地域の人たちであったという話をたくさん聞く。淡路では救助活動のときに近所の人たちの力だけで、亡くなった人たちが少なかった所があると聞いたときに地域の力はすごいなと感心した。将来どこに行っても、どんな仕事に就くかはまだわからないけれど、自分が今、環境防災科で勉強していることは、どこに行ってもどんな仕事に就いたとしても決して無駄なことではない。まだ知識は浅いけれどももっと深くまで防災ということに関して勉強できたらいいと思う。これを読んだ人には阪神・淡路大震災がどれだけのものだったかを知ってもらえたらと思う。

阪神・淡路大震災から生まれたの

神戸市垂水区西脇

鈴木 美穂

阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）

震災当時の私は物心がついたかついていないかぐらいの6歳だった。6歳の記憶はあまり覚えてないけれど、地震発生からの2日間は私にとって忘れる事のない出来事だった。当時の私は防災知識など全く知らなくて、その頃に覚えている防災訓練は消火訓練とかだった。神戸に地震が起こることはないという気持ちが家族全員にあったから、地震の事について話し合ったことなどなかった。

地震が起こる少し前に母が起きて新聞を読んでいるところだった。父は仕事へ行く身支度をしている最中で、お姉ちゃんや私はぐっすりと眠っていた。

1月17日午前5時46分地震発生。

きのう見た景色が変わった瞬間だった。急に母が「地震や！！」と叫んだ。母はすぐに寝ている私たちを起こし押入れの中に入るように大きな声で叫んできた。その時、長女だけが別室で寝ていた。しかも、長女が寝ていた部屋には大きなタンスが2つあったので下敷きになってしまう可能性があった。運良くタンスの隙間から押入れの方へ逃げる事ができたので長女は下敷きにならずに済んだ。姉達と言うには、その時私が全身震えていてとても心配した、と聞いた。けれどそんな記憶は全然なくて、両親が玄関のドアを「ドンッ！ドンッ！！」と開ける為に蹴ったり、雑誌の束とかでドアを叩いたりしている音とか、地震の「グラグラグラ・・・」とした現象しか記憶になかった。地震の揺れがおさまった時、ドアも同時に開いた。開いてから家族一緒に近くの学校に避難をした。学校にはたくさんの人がすでに避難をしていて、地震の揺れがもう来ない事を祈っていた。

地震を受けた後の家

地震が落ち着いた頃、父は仕事にいった。両親は共働きだったので、父が仕事に行く事に対しての疑問はなかった。逆に私は「幼稚園は今日もある」と思っていたぐらいだったからだ。ひとまず、母は家の状況を見に行ってから、電話が通じなかったので祖父母の無事を確認するためにバイクに乗って凸凹道に気を付けて行った。その間、私は学校にいて避難している人、泣いている人とかを見たりしながら姉達が「地震怖かったなあ」とか「これからどうしていくかなあ？」としゃべっているのを聞きながら、姉達にくっついて座っていた。私は地震に対して、「怖い！！」という恐怖感がわかったと思った。

母が祖父母の家から帰って来て地震を受けた後の家にいっしょに帰った。家に帰りながら祖父母の安否をきいた。祖父母の家にはそこまで地震が大きくなかったらしく、食器棚の中のものが1、2個壊れた程度だったそうだ。家に着くと歩く場所もないくらいに悲惨な状態だった。ガスは止まり、水もでなかった。どこから片付けるか悩んでしまうくらい散らばっていた。けれど、早く元の生活に近づくように少しずつ片付けをしていった。私はまだ小さかったからガラスの破片など危ない片付けは母がほぼしていた。その間に姉たちとコンビニに買い出しに行った。コンビニの出入り口の所にはたくさんの人が順番待ちをしていた。その時に印象的だったのが、食べ物を買うためにかなりみんな必死な顔でいたことだった。

ライフラインの停止

私が住んでいた地域は電気だけすぐに点くようになった。電気でお湯を沸かしたりしてご飯を食べた

りしていた。また、学校が目の前にあったおかげで避難食とか水をもらいに行くのに時間はかからなかったし、すぐにもらえた。

けれど、水はいろいろな事に使う。水はさまざまな行動にたくさん必要なんだと思った。まず、トイレをしてもながせない。顔や手を洗うにも水の節約の為にあまり使えない。食器を使うと洗うのに水が必要になるから食器を使わずに紙皿とかをなるべく使った。一番水を使うのは飲料水で、節約することは出来ないから他の事でかなりの節約をしていった。

ガスは水と同じで使えなかった。けれど、電気がすぐに使えたからあまり辛いとか大変という気持ちにはならなかった。逆に地震でガス管の破裂などが心配だった。私の地域ではガス管の破裂とかは幸いなかった。

電気はすぐに復旧した。復旧した頃あたりには、家もだいぶ片付いていた。やっぱり地震前の家とはまったく違うけれど、それでも地震直後の家の状況よりは落ち着いた。テレビは壊れていなかったの、電気が普及した時すぐにテレビをつけて神戸がどんな状況になったのかを見た。テレビで流されている神戸の状況はとても神戸の町とは思えなかった。

テレビから映し出される阪神・淡路大震災の被害

あたり一面煙があがっていた。火事の火を消すために水を出すけれども火はいっこうに消えない。逆に水が出なくて火を消せない。そのまわりでは火から逃げようと逃げ回っている人。建物の中にとりのこされたままで助けを求めている人。「倒れる事はない」と言われていた高速道路の地震後の悲惨な状態。その高速道路を走っていて地震の為に道が通れなくなったトラック。ガス管が破裂していたり、水道管が破裂していたり。地震に対しての神戸の町の弱さが指摘されていた。上空からの神戸の町は長田区を中心に地震の被害の大きさが伝わってきた。

幼い私でも、思う事は「信じられない」と言う言葉しかなかった。たくさんの人が涙をながしている。たくさんの物・建築物を失った。そしてたくさんの人が亡くなり、ほんとうに「お先真っ暗」っていうのはこの状態だと思った。テレビから今回の地震の情報を聞くとところによると、

マグニチュード7.2

震度7

地震名は阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）

と発表されていた。死者・負傷者はこのときまだはっきりとしておらず、これからもどんどん死者・負傷者は増え続けると予想されていた。建物の被害も増大している一方だった。消防車・救急車のサイレンは鳴り続けていた。神戸の救助隊や自衛隊などでは被害を止めることはできず、他にも近くの住民・ボランティアの人たちの方々がいっしょに協力しあっていた。

復興への不安

神戸の町の人たちや避難所にきている人たちはこれからの神戸にとっても不安があったと思う。「神戸の町はほとんど壊れていて復興できるのか？」とか、「地震で壊れた建物を直すのに神戸市はどのくらいのお金をだしてくれるのか？」など、私の両親も同じようなことを口に出している。私もその頃通っていた幼稚園の友達や知り合いの人達が元気で怪我をしていないか心配だった。「幼稚園もいつから始まるのかなあ？」と姉達に聞いたりして、幼いなりにいろいろな心配事があつたらすぐに家族に相談したりしていた。不安は私の近くの人たちにもあり、親が隣同士の住民の人となにか相談をした感じだったのを見たこともあった。

また、私が当時地震の被害を受けて住んでいた場所は「もう一度地震が来ると崩れる可能性がある」と言われていた。確かにあちらこちらにヒビが入っていて今にも壊れそうだった。

震災直後の生活

電気はすぐについたのでインスタントとかを地震があった日の夜はみんなで食べた。さすがにまた震度7の地震やそれに近い地震が来るとも限らないので寝るときは家族みんなで寝た。私は水をもらいに学校と家を往復したりとかして1日中動いていたのですぐに寝入ってしまった。けれど、その日の深夜も地震が起きたらしく、私だけ気がつかなくて両親が布団をかぶせて守っていたと次の日の朝に家族に伝えられた。逆に姉達は「地震が怖くてなかなか眠れなかった」と言っている。

家族の大切さ

神戸の町は地震を受けてから大きく変わった。私の住んでいる町も地震が発生してから一瞬に姿を変えた。地震が起きてからは失った物への代償は大きかった。特に一番大きかったのは水だった。普段普通に使っていたものが使えなくなると思った以上に不便だった。けれど、家族みんなで助け合って過ごした1日目は家族の絆がとても強く深まった気がした。両親は仕事にいったりしていたけれど、いつもよりは早く帰ってきてくれたし、姉たちといつも以上にいっしょにいたから姉妹の絆も深くなった気がした。

両親が考えた安全な場所

2日目、私たち姉妹は祖父母の家に行く事になった。祖父母の家にも地震は起こったけれども被害は少なく、水・電気・ガスは止まったりしていなかったからだ。父も仕事は毎日あるらしかったし、母も仕事があったので私たちの安全を考えて祖父母の家に泊まる事になった。

車で祖父母の家に母が送った。「いつ迎えにくるの?」と聞いたら、「家の状態や周りが落ち着いたからね」と言ってすぐに帰った。私はとても心配だった。姉たちは「お母さんとお父さんなら大丈夫」と言っていて全然心配しているように見えなかった。けれど、その心配を見せなかっただけで、とても心配だったらしかった。姉達とは結構年が離れていて、幼い私に気を使って心配させないようにしていたのだった。私は震災後から心配事があるとすぐに泣いてしまう事があった。姉達は私の見えない所で相談して、祖父母に迷惑をかけないように炊事などの手伝いをしながら、私の遊び相手にもなってくれたりもした。

テレビから流れる情報

日ごとにテレビから放送される死者・負傷者・建物の倒壊が増えていった。そして、最終的に「地震の死亡者：約6433人（約90%が家屋の倒壊による圧死・窒息死）、負傷者：約3万5千人・全壊家屋：約10万棟、半壊家屋：約10万棟、小・中学校の避難者数最大：32万人、電気停電：260万戸、ガス停止：85万7千戸、水道断水：127万戸、直接被害額総計：約9兆9268億円」と発表された。

その時の私には被害の大きさを全く理解していなかった。それでも、亡くなった人が多かった中で私の家族・親戚・友達はみんな無事だった事がよかった。

けれど、近隣では私と年が近い子がなくなったというのを聞いた。被害がどんどん大きくなるにつれて不安もどんどん大きくなった。私的には、もう幼稚園に行けなくなると思った。

震災後、神戸の町が落ち着いてきたころ

1週間ぐらいたったら母が迎えに来た。まだ水・ガスは復興していなかった。でも家は地震前の家とは家具が壊れたりしたので違うけれど、ガラスなどの補修とかきれいに掃除されていてすっきりした感

じがした。両親はとても疲れている感じた。姉妹で両親の手伝いをしながら、水・ガスが出るまで小学校に通った。3、4日すると水・ガスが出るようになった。その何日か後に学校がはじまった。小学校・中学校には避難者がまだ多数居たので仮設校舎が建てられた。また、避難者のために公園の広場に仮設住宅を建てて学校の避難者を少なくして、少しでも授業が早くできる対策が実施されていた。小学校・中学校などは学年・クラス毎に時間単位で授業が行われていた。同時に神戸の町も落ち着いてきた。

神戸の復興・人々の心の傷

神戸の町は少しずつ復興・復旧をしていった。時間はだいぶかかると思われ、同時に災害に対しての災害対策基本法など、これからの災害に対しての対策がとられた。両親の仕事もだいぶ急がしそうで、学校がはじまってからは、「親の帰って来る時間がだいぶ遅い」と私は思った。両親は震災のテレビ番組を見るたびに険しい顔をしている。神戸は建物が建て直されたりと、少しでも早く復興するためにさまざまな地方からの手を借りて復興に取り組んでいた。

また、阪神・淡路大震災を体験したことによって PTSD（外傷後ストレス障害）になっている人も少なくはなかった。小学生ぐらいの年頃の子は「赤ちゃん返り」と呼ばれて親から離れることができなくなったり、震災の衝撃で言葉を話すことができなくなったりと、震災で建物が壊れただけでなく人の心も傷付いている。

その現象をケアするために精神科の先生や心のケアの専門科医が自宅訪問などをして診察したりしていた。PTSD になっている人の多くはお年寄りが多かったと聞いている。また、自分自身では普段通り生活している人でも PTSD にかかっている人はいる。PTSD は症状に気がつく人と気がつかない人もいる。そういう人達のために震災後に専門科の人が自宅訪問をしたりして PTSD の早急な発見をと、取り組んでいたんだと思った。神戸市は建物の復興とともに震災を体験した人たちの心のケアもしていた。

舞子高校環境防災科

私はきっと環境防災科に入らなければ阪神・淡路大震災のことを詳しく調べたり、考えたりしなかったと思った。実際、環境防災科という学科がある事を中学の先生に言われなかったら知らなかった。まだ私が受験するときにはできたばかりというのもあって、まったくというほど周りには知られていなかった。正直なところどんな事を学ぶのかとか、将来に対してどんな事に役立つ事もわからなかった。不安もとても大きかった。でも、入って見たら不安よりも興味を持つ事ばかりだった。

1年の時は阪神・淡路大震災を体験した外部講師が来てくれて資料をもらったり、震災の体験した事について詳しく話してもらったりし、阪神・淡路大震災についてさまざまな行動や企業の気持ちなどを知ることができてとても貴重な授業がいっぱいあった。

ライフラインでは1日でも早く電気・ガス・水の復旧をと、たくさんの人の協力と労働・震災の被害にあっていない人たちからの支援...その他にも励ましの言葉など、環境防災科に入っていなかったら知る事ができなかった事がたくさんあった。

警察・消防では「生き埋めになっている人が生存できる確率が高いのは災害後 72 時間」と言っていたのがとても印象的だった。3日間で人の生死が決まるからだ。けれど、消防士の方は「3日間人命救助にがんばればよかった」と、悔やんでいる...上の人からの指令がなかったら動けないからだ。阪神・淡路大震災は市民に大きな傷を負わしたけれど、消防士・警察官にも大きなダメージを与えていた。

そして外部講師の方々の話を聞いていて、“神戸に大きな地震が来ることは全く言われてなかった事だったし、その上、対策本部など地震の備えなどちゃんと計画していなかったのが事実だった。その事だけが阪神・淡路大震災の被害者数が多かった原因ではないけれど、備えをしていたら軽減できた被害

もあったと思う。けれど、備えをしていなかったのは市民も同じだから、これからしていけば阪神・淡路大震災ぐらいの地震が来ても被害は軽減されて、死者の数とともに負傷者の数も軽減される。”という事を思えるようになった。

阪神・淡路大震災は本当に悲惨な出来事だったと思う。そして、忘れてはいけないもの。だから、震災の事を伝えるために「人と防災未来センター」ができたと思う。けれど、震災を体験していない子供たちは自分たちで「人と防災未来センター」にいかないと思う。それは直接地震を体験していないからというもあるけれど、「地震の怖さ」というのは体験しないと感じにくいものだからだと思う。だから、これからは大人と成長していく子達に、震災を直接体験した人達が伝えていくのも重視する部分だと思った。

環境防災科は学科ができて5年目で、私が震災を実際に体験したのが幼稚園というとても幼いときだ。私も震災を体験したことはうっすらとしか覚えていない。これから環境防災科に入ってくる子達は、私よりも幼いときに震災体験をしたから、ほとんど覚えていることは少なくなってくると思う。でも、体験していなくても被害状況・死亡者数・その時の写真とかを見れば災害の大きさを感じることはできると思う。

私も外部講師の方々や語り部さんの話で学んだ事はたくさんある。やっぱり震災当時に大人だった人はどんな被害だったとか詳しく覚えている。その体験した事を聞いているだけでも“そのときの大変だった事”とかがわかると思う。

環境防災科は、実際体験していなくてもさまざまな事が学べる。その学んでいる事を小学生や地域の人・家族に伝えていけるだけでも学んだかいがあるから、たくさんの知識を身につけてこれからも学んでほしい。

私は今年で卒業だけれども、2年間で学んだ知識はたくさんある。けれど、それはまだまだ基本的なものの一部だと思うから、後1年を大切に最後まで学んでいきたいと思った。そして、これから出ていく友達とかに伝えていけたらと思う。私が環境防災科で学んだ知識を少しでも生かしていけるように生活したいと思っている。

震災復興から11年・・・

今でも震災を体験してPTSDにかかっている人はいる。その人たちのために心のケアセンターなどカウンセリングはあり、震災は私たちに大きな傷を残して行った。これからは協力をし合っていく中で防災の事を学んでいくのが一番身につくと思う。阪神・淡路大震災のような被害がでないようにこれからも私が学んだ知識やボランティアに参加して防災を深めていきたい。

阪神・淡路大震災

神戸市東灘区住吉台
西川 安國

1、地震発生

「ドーン！！！」突然下から突き上げられるような強い揺れがあった。このとき僕はまだ夢を見ていたと思っていたが、すると今度は小刻みに左右の揺れが始まり、ようやくこの揺れが現実だと気づく。いったい何がおきたのかわからなくてとても怖くなった。僕は必死に布団にしがみつくなかった。隣では母親が筆筒を倒れないように手で支え、必死に妹を守りながら「お父さん！」と叫び声をあげている。隣の部屋で寝ていた父親も、返事をするように何かを叫んでいるようだった。すると、そのとき僕の頭上にあった大量の荷物が落ちてきた。僕はなす術もなく荷物の下敷きとなった。そして、真っ暗になった視界の中、僕はただじっとして何も考えることができず、揺れていたのかどうかもわからないほど混乱していた。

気がつくと、揺れはおさまっていた。起き上がろうとしたが、体がまったく動かない。そこで自分がまだ荷物の下敷きになっていたことに気づく。「安國！」と母親の呼ぶ声が聞こえたので、僕も「お母さん！」と返事をした。母親は荷物をどけて僕を助けてくれた。僕は幸いにも布団にもぐっていたので、怪我ひとつしなくてすんだ。布団から出て部屋を見渡すと、薄暗い中、ある程度家の中の状況が見渡せた。起こされた筆筒以外はすべて倒れ、廊下には食器棚が倒れたときに割れた皿やコップなどが大量に飛び散り、足の置き場がない状態だった。また、壁と壁とがずれて隙間ができていた箇所も多々あった。とにかく家はめちゃくちゃに荒れ果てていた。僕には何も考えることができなく、とにかく「何！？」と思うことしかできなかった。

家の中が落ち着いた後、割れた窓から外を眺めた。すると、まず視界に飛び込んできたのは、目の前の4号棟だ。僕が住んでいた3号棟から公園を挟んだところにある4号棟は真二つになっていた。その割れ目の向こうには5号棟が見え、しばらくその光景を理解することができなかった。また、公園もガタガタになり地盤が変化していた。海の方の町に目をやると、あちこちから煙と火が上がっていた。空も町も真っ黒だった。僕はその光景をみて、ほんとに怪獣が来たのかと思う反面、なにかとても苦いものを感じたことを覚えている。玄関を出て廊下を見渡すと、家の中同様隙間があいている箇所、外側の壁が剥がれ落ちているところもあった。家の前の駐車場や反対側の公園では地割れがあり、10cm くらいの段差がいたるところにできていた。家の近くにある万翠園の下ではガス漏れもあった。昨日までなんともなかった場所が、今は全く別の姿をしていることが信じられなかった。

近所に住んでいる家族には赤ちゃんがいた。しかし、地震でお湯を沸かすことができなく、赤ちゃんの世話ができないと、とても困っていた。このとき家にはたまたま沸かしただけのお湯があった(父親が出勤するため沸かしていた)のでそれをその家族にあげることにした。その後、僕ら家族は一時車の中へ避難し、ラジオに耳を傾け、できるだけ今の詳しい状況を理解しようとしていた。すると、近所のかたからの口コミで、すぐ近くのミニコープで、商品を籠一杯 500 円で売ってくれているということを聞き、父親も近所の大人たちも走って買いに行った。また、トミーズというパン屋さんもパンをみんなに分けてくれた。そして、午前中はみんなばたばたとお互いの無事を確認したり食料を確保したりしていた。

午後になると3時くらいに、近くの住吉台幼稚園が避難所として開けられた。僕らが幼稚園に行ったときは歩くスペースもないほどみんなが陣取りをしていた。僕たちは仕方なく隅にあいていたスペースで過ごすことにした(しかし、実際はぎゅうぎゅうだったので、ほとんど車の中で過ごし、寝るときだけ幼稚園にいた)。また、幼稚園では電気も通り、テレビも見ることができた。そのテレビに映っていたの

は上空から神戸を映した映像や、救助作業をしている映像（特に印象的だったのは、レスキュー隊や、消防士による救助活動だ。どのチャンネルにしても一生懸命に被災者を助けている彼らの姿が映っていて、僕は心から尊敬した）など、被害の様子が流されていた。そして、この日はとにかくみんな慌てて食料の調達や情報収集などに走り回っていた。

翌日の朝、父たち大人数人が千丈谷や、別の湧き水ポイントへ水汲みに行くことになった(しかし、このとき「水を汲みに行きますからどなたか手伝ってくれないですか?」と頼まれても行こうとする人はほとんどいなかったの、ほんとに数人しか行かなかった)。しかし、千丈谷以外の場所では地震により水路が変わってしまい、水が出なくなっていたので、結局水はほとんど千丈谷から運んだ。そして、この日から炊き出しが始まった。水は千丈谷から。お米はドラッグストアという近くのお店が寄付してくれた。それを使い、みんなで炊き出し(確か雑炊のようなものだったと思う)をした。そのときは、県営住宅に住む人だけでなく、近くに一軒家で住んでいる方々も炊き出しをもらいに来た。一軒家の方々の自治会はあまり機能せず、物資もぜんぜん届かない状態だったそうだ。

その日父親が住吉の駅のほうに下りようとしたら、途中地震によりいろんな場所で道路が盛り上がっていて通れなくなっていた(ゆっくり進めば通れるが、段差が激しくとてもいけるような状態ではなかった)。そのため買い物に行くこともできず、結局父親は戻ってきた。

地震発生から3日目、僕ら家族の住んでいた3号棟は全壊という診断を受けていたので、仮設住宅の申し込みをすることにした。僕ら家族は高砂の祖父の家へ避難することにした。行く途中は道路がガタガタだったが、進まないわけにはいかず、とても慎重に進んでいった。高砂へ着くまでの道は、廃墟となった神戸を見ながら進むこととなり、僕は一種のテーマパークのセットの中を進んでいるみたいだと思っていた。その後は県営住宅での集会に参加するときに住吉台にもどるだけで、入学前までは高砂で生活を送った。

2、高砂での生活

高砂では、祖父、祖母、叔父、叔母、従兄弟(2人)と僕ら家族4人の計10人で暮らすことになった(これは後々聞いたのだが、多人数なので、食事、洗濯などの家事をこなす祖母、叔母、母はとても大変だったそうだ)。高砂に着くと、まず、僕と妹は従兄弟が行っていた幼稚園へ一時転校した。しかし、今まで一緒だった友達もいなく、環境もまったく違っていたので僕と妹は幼稚園になじむことができず、ほかの子たちとは別に遊んでいた。しかし、家ではみんな暖かかったの、ストレスを感じ、甘えたり、意味もなく泣いたりすることはあまりなかった。

そして、家ではテレビを見たり、従兄弟と遊んだり震災前の日常となんら変わらない生活をおくっていた。ライフラインも食事も困ったことはほとんどなかったと思う。強いて言えば、幼稚園児が3人になったので、家の中ではバタバタと走り回り、世話をするのが大変だったことくらいだろう。

つい昨日まではあのめちゃくちゃになった町で生活していたのが嘘みたいだった。まさに「別世界」へ来た気がしていた。このとき震災前のような日常が、こんなにも幸せだったのかと幼いながらに実感していたことを覚えている。

僕の記憶にある高砂での生活はこのような感じだ。振り返ると、みんなが大変だったあの時期に、よく僕ら家族4人を引き取ってくれたな、と改めて、祖父や祖母を始めみんなへの感謝の気持ちでいっぱいになる。

3、帰宅

1ヶ月ほどたって、僕らは高砂から住吉台へ戻った。戻るとまず僕は久々に会う友達とたくさん遊んだ。保育所では先生たちが「久しぶり～」と、暖かく迎えてくれて、僕はほっとすることができた。

僕はちょうど小学校に入学する前だったので、机やランドセルなど必要なものを買いに行った。しかし、開いている店はまだ少なく、開いていても商品が地震で破損していることがあり、なかなかちゃんとしたものが見当たらなかった。結局机は多少破損のあるものを安く買い、その他のものは母が友達から譲り受けてきた。このとき僕はランドセルのことで怒ったことがある。それは、ランドセルがペッチャンコで、しかもヒビがたくさん入っていて、明らかに何年も使い古された感じがあり、新入生という雰囲気のものではなかったことだ。今思えばとてもくだらないことだなと思うが、当時僕は1年生になるということで、「全部新品じゃなきゃ嫌だ」と、人には言わないが、心ひそかに思っていたのである。だが、母に説得されたのもあるが、目の前に近づいてくる入学式への期待がランドセルのことなど忘れさせた。そして、僕は渦が森小学校へと大きな希望を抱き入学したのである。その後、僕にとってすべてが新鮮な体験である学校生活にも慣れ、無事に友達を作ることができ、学校生活は順調に進んでいった。が、小学校にはまだ震災の爪痕がところどころ残っていて、地割れの跡や、校舎の一部が大きく崩れていた跡もあり、いたるところにヒビが入っていた。これが僕にとって少し違和感のある学校生活にさせた。

4、小学校生活

小学校で、1年生から2年生、3年生と、少しずつ学年が上がっていくうちに学校は補強され、震災の跡などがけらもなくなった。しかし、学校を一步外へ出れば、まだまだ公園には多くの仮設住宅があったり、道路の盛り上がりがあったりなど、震災の爪痕はいろんなところで見られた。僕が少年野球に入った5年生のときもまだ仮設住宅は残っていたから、神戸市という大きさで見るともっとたくさんの方が未だに仮設住宅で暮らしていたのだと思う。

振り返ると、僕の小学校生活は先ほど述べたような、震災の爪痕と共におくった生活で、まだまだ完全に元通りには戻っていなかった。

5、震災を振り返り今思うこと

今、自分の震災体験をこうして思い出しながら文にしていると、忘れかけていた出来事を鮮明に思い出す。また、両親の話をきいて、そんなこともあったのかと、新たに知ったこともあった。そうして、今自分の体験を事細かに知り、感じている。当時は幼すぎて、何かわからないけど、すごいことがあったと恐怖心を抱いていた反面、少し興奮していたこと、大人たちがどうしてこんなに慌てているのかを不思議に思ったこと、避難所で友達と寝泊りができて少し嬉しかったことなど、当時の僕が感じ取ったことが次々と蘇った。今思えば僕の住んでいた地域では誰かが亡くなるといったことはなく、みんなが無事だったということが、こんな考えでいられた1つの原因であると思う。もし、僕にとって大切な誰かが亡くなっていたら…。もし目の前で人が死んでいく様を見ていたら…。ふとそんなことを考える。きっと先ほど述べたような気持ちを持つことはできなかっただろう。「地震」というものへの恐怖心は今もなおものすごく、夜部屋の明かりを消して寝ることができなくなっていたかもしれない。自分にとって大切なものを失った喪失感や行き場を失った怒りなど、さまざまな感情が入り混じり、自分を自分でコントロールできなくなっていたかもしれない。そう考えるだけでゾッとするし、逆に、自分の幸運に心から感謝する。しかし、街では何千という方々が一瞬で命を落とし、その何倍もの方が怪我をして、今現在も震災によりリスクを負わされた方や、精神的に傷ついた方、また、そういったことが原因で亡くなる方もいる。つまり、震災での死者は未だに増え続けているということだと思う。そう考えると、今何事もなかったかのように平然と小学生、中学生、そして高校生として、生きてきた自分に苦い思いを感じ、引け目を感じるときもある。そしてどうしていいのかわからなくなることもある。

「震災」というものに対し、正面から向き合ったとき、僕はその現実のつらさ、悲しみ、苦しみ、怒

り、そういったものをちゃんと見つめることができなかったのだ。数字や写真などを見て、「勉強」という観点から見てただけで、自分の体験を生で思い起こし、資料からだけでは伝わらないそのときの人々の感情や社会の雰囲気といったもの、それを今回初めて正面から見つめることができたと思う。

「命は大切」「命は失うと二度と戻らない」そんなことはみんな分かっている。しかし、それはほんとうの「分かっている」なのだろうか？命の大切さは頭で「分かる」のではなく、全身で「感じる」ものだと思っただ。死というものを自分の目で見て、肌で感じる。そうして初めて本当に「命の大切さ」を理解することができるのではないだろうか。僕は自分の体験を通じ、振り返ることによってこのことを強く感じた。

6、これから・・・

僕は将来幼児教育に関わっていきたいと思っている。なぜなら、0歳から6歳(小学校にあがる)までの教育は、その人の人格や常識など、生きていくうえでの基礎の基礎になると思うからだ。だから、阪神・淡路大震災での教訓や、今舞子高校環境防災科で学んだ環境防災についても小さいころから教えて、その子が大人になったとき、「当たり前のこと」として「防災」を知っていて、災害のことも知っているようにしたい。とくに、日本は災害大国といわれるほど本当に災害の多い国だ。台風、地震、津波など災害を引き起こす原因となるものがとても多い。だからこそ、日本では幼児教育から防災などを、一般教養と同じように教えていくべきだと思う。別に難しいことを教えるのではなく、例えば絵本、すごろくなどのゲームなど、子供たちが興味を持つようなもので、アバウトに防災というものを知らせよう。それだけでいい。防災という言葉を知っていて、災害が起こったときどう行動すればいいのか。それをなんとなくわかっているだけでも逃げることもできるし、さまざまなことができる。

なぜこれだけ教育にこだわるかと言えば、それは僕の震災体験も含め、さまざまな体験などから、教育さえしっかりしていれば、災害は起きたとしても小規模ですむと思うし、教育はその人の人生の上での基礎の基礎となることだと思うからだ。一生の知識として、当たり前のこととして防災を知ってもらおう。そのような教育をすることがこれからの「世界」の課題であり、災害の多い日本では特に重要視されるべき教育内容だと思う。また、人が起こす災害(戦争や、環境問題)についても考えていかなければならないが、それについても防災と同様に、民族、宗教、文化、国境などのさまざまな壁を打ち払うことが必要であり、そのためには教育というのが欠かせない。この問題については多種多様な民族が住むアメリカなどは、そういう教育をしていく方法など、世界に広めていくべきだと思うし、まさに環境防災科の目標である Think Globally, Act Locally という「世界規模で考え地域で行動する」が大切だと思う。僕は、これからは教育者、そして、語り部としても一生懸命がんばっていきたいと思う。

7、感想

全体を通じて、僕の震災体験、震災を振り返って、震災後の生活、そして、これから...というような流れで話を進めてきたが、ここで一番伝えなかったことは命の大切さということと、それについてのこれからの教育のあり方だ。最後は将来の話になってしまったが、僕の震災体験を語り継ぐと共に、将来のことも話せたので、この僕の考え方が伝わると幸いだ。

私と阪神・淡路大震災

神戸市垂水区清水が丘
則元 麻依

私が、阪神・淡路大震災を体験したのは今から 11 年前の幼稚園の年長だった。小さかったため、ほとんど記憶にない。けれどこの「語り継ぐ」をきっかけに、親から震災当時の話など詳しく聞けることができた。覚えていない事がたくさんあるが、その体験を忘れないように語り継いで行きたいと思った。

1. 震災発生

今でも覚えているのは、地震が起こる少し前に目が覚めた事だ。いつもなら朝起きる時間以外には目が覚めないのに…。小さいころから鼻炎だった私は、ふと目が覚め部屋にある机の上のティッシュをとって鼻をかんでいた。スッキリしたので、私はまた寝ようとベッドに戻った。布団に入り目をつぶった瞬間目の前が揺れた。ガタガタとなにかジェットコースターに乗っているみたいだった。何がなんだかわからなかったが、とっさにとった行動は布団にもぐる事だった。その頃私は2段ベッドで寝ていて、私は下、上にはお姉ちゃんがいた。2人とも地震だってことがわからず、笑っていた。周りで何が起きていたかもわからず…。

揺れが続く中、父が廊下から大きな声を出して私たちのことを呼んでいるのを耳にした。部屋まで来てくれた。「お～い。大丈夫か？」と。今思えば、あんな揺れの中歩くのはとても困難だと気づき、父はすごいなと思った。

地震のせいで家の家具は倒れなかったけれど、台所は想像以上にすごかった。キッチンに置いてある冷蔵庫から中身が全部出ており、1メートルくらい飛んでいた。卵が床にべったり。さらにドアが外れていた。他にオーブンレンジが落下し壊れており、食器棚の扉も開き中の食器がほとんどと言っていいほどのものが床に無残な形で一面に散らかっていた。キッチンはとても危険な世界になった。

他の部屋では今も私の部屋にあるピアノが、すごく動いていた。1週間前にピアノの調律をしたばかりだと母から聞いた。

揺れがおさまってから、家族全員リビングに集まった。その時リビングにはこたつがまだあったのでみんなこたつの布団をかぶり、私は寝転んでいた。父と母はとにかく情報が欲しかったので1回テレビをつけてみた。けれどそこには何も映し出されなかった。テレビが駄目だったので、ラジオを探して来て聞いていた。あと父は親戚などに電話をかけていた。みんな無事だったのでよかったと思った。その中で塩屋に住んでいるおじいちゃんの所に電話をした話を聞いた。その頃ちょうどおばあちゃんが入院をしていたので塩屋の家にはおじいちゃんと父の妹だけだったので、とても心配だった。電話をずっと鳴らしてもなかなか出ず、不安が横切った。ちょっと間経ってから電話に出て大丈夫だってことがわかり安心した。しかし、妹さんがガラスで足を怪我したそう。そこまで深い傷ではなかったのでよかったと、父は再度安心することができた。けれど家が古かったため全壊していたそう。

それからマンションの外に出て行った。そしたら次から次へとマンションの人が出てきた。マンションのガレージにはたくさんの亀裂が入っており、中には浮き上がっている部分もあった。私達は車の中でいることにし、父はマンションの人に単車を借りて鷹取にある会社に走って行った。会社のすぐ傍に、石油タンクがたくさんあったのでとても心配していた。鷹取へ行く途中の町で、ガス管が破れており、火が高く出ていたそう。

マンションの方ではたくさんの人がガレージのフェンスに集まって遠くにある何かを見ていた。何かと疑問に思いながらもフェンスにしがみつき、必死で遠くの何かを見た。見えたのは黒い煙だった。小さかったため、その煙がなんであるかもわからなかった。母に聞いた。「火事だよ」って教えて

くれた。火は見えなかったが、きっとこの震災の火事が生まれて初めて見た火事だったと思う。この火事もガス管が破裂したのが原因であった。

近所のガス管の破裂の結果、私達が住んでいる地域は避難勧告が出た。避難勧告が出た頃、まだ父が戻って来てなかったので母はとても心配していた。それからマンションの人たちで話し合いをし、近くにある中学校に避難した。避難するからには準備をしなければならない。私たちは外にいた。母は家に残り布団や服、食べ物など持っていけるものはすべて持って行った。私は同じマンションの人の車に乗って中学校に避難した。布団が敷き詰められた車の中ではまともに座れずただ布団にしがみ付くだけだった。

2．避難所生活のスタート

中学校に行くと、初めは少ししかいなかった人が次々と大きな荷物を持って集まって来た。この中学校はとても新しく体育館がとても広かった。また、その隣には少し小さめの格技室があった。

私たち家族とマンションの仲がよかった人たちとほとんど近くに集まった。体育館にあるマットや柔道に使われる畳を均等にわけその上に布団をしいた。

たくさんの人がいる中でも何度も小さい地震があり怖かったのを覚えている。

昼過ぎには中学の先生が学校に集まっていた。きっとこの先避難所としての生活が始まることを話し合っていただろう。このことは高校入ってからの授業を受けて思ったことだ。学校に来るまでの道のりは大変だったと思う。

避難所では配給として食べ物はおにぎり(1人2個まで)と水が配られた。初めはそれだけであった。しかもご飯はとても冷たかった。真冬でとても寒かったので私たちはガスボンベでおにぎりを焼いたりして食べたそう。私は全然覚えていない。唯一覚えているのは水を配給するのにたくさんの行列の中で並んでいたのは覚えている。

高校に入ってから勉強した避難所で大切なこと、それは排泄についてだ。水が流れないってことは流せない。つまったりして衛生的に悪かったと思う。そんなトイレでしたくないから我慢して病気になる人がいたと学んだ。私がいた避難所は始めにも書いたが中学校だったから、綺麗ではないけれど体育館のすぐ隣にプールがあった。その水と水を押して流す物を使っていたため、トイレには困らなかった。

中学校の体育館にはもう入れないだろうっていうくらいの人が避難して来ていた。体育館のフロアーに入れなかった人や家族は廊下などにもいた気がした。

避難生活が始まってすぐ、母はストレスが原因で下痢をし、そのうち父は高熱が出てしまい、次の日に近くに住んでいるおじいちゃんの家に行き寝ていた。その少し日が経ったくらいに私は耳がすごく痛くなり、医者が避難所に来ていたので見てもらうことにした。検診の結果、中耳炎だと言われ薬をもらったが熱が少しだけ出ていた。我が家は体調不良でとても大変だった。

3．復旧

体育館では1週間生活した。近所の人たちは、実家や親戚の家に行ってしまうととても心細かった。近所の人だけでなく、その避難所にいた多くの人が徐々に減っているのを覚えている。

1週間目に水が出たので私達はマンションに戻る事ができたが、私の家には電気で動く炊飯器しかなく、ガスストーブもオープンレンジもない…。一体これから生活して行くのにどうしたらいいかなとお母さんが困っていた。そうすると、マンションの上の階の人がガスボンベセットを貸してくれた。何もなかった我が家だったのでとても感謝した。そのガスボンベのおかげでなんとか生活ができるようになった。家に戻ってから気が付いた。そこにはたくさんの亀裂があちらこちらの部屋の天井に走っていた。家に戻るまでのマンションの廊下・階段にも…。本当にこの家に戻って来ても大丈夫なのかとても

心配であった。

家に帰ってすぐくらいに塩屋のおじいちゃん達が家に来た。おじいちゃんの家の下に断層が走っていたというのも、家が全壊したひとつの理由でもあった。家が住めなくなったので、私の家におじいちゃん達がやって来た。なぜかおじいちゃんには娘が3人もいたのに、一番被害がひどくて、子供が3人いるという大変な我が家の所にやって来て生活が始まった。それから塩屋のおばあちゃんも退院し、我が家で8人家族の生活となった。マンションだったのでそこまで部屋数が多いわけでもなく、地震で散らかっている家具や衣類を急いで片付け、ひとつ部屋を空けた。

私の姉と兄は小学生で学校にも行き始めていた。授業は昼までだった。私は幼稚園児だったが行けそうにもなかったのですずっと家にいた。

何日が過ぎた日にもう1人のおじいちゃんの友達の家にお風呂を入りにいった。西区の奥へ行った。とても気持ちがよく幸せを実感してしまうくらいだった。そのお昼に食べた炊き込みご飯もすごくおいしかったのを今でも覚えている。

2月に入ってから、鷹取にある父の会社の風呂にも行った。ボイラーのため、すぐ入る事ができてよかった。

鷹取の町はテレビで見るより、なんとも言えないくらい真っ暗で、異様な臭いがしていた。とても怖かった。垂水とは全然違って、壊れた家、真っ黒にこげた家の跡。本当に昔の戦争のあのような感じが漂っていた。西舞子に住む母の双子の兄の家は隣との壁がやぶれ、悲惨なことになっていたようだ。同じの垂水であっても、家の古さや向きによってはガタガタであった。地盤の違いも大きく左右したと思った。

2月に入ってから毎日母と歩いて幼稚園まで通っていた。幼稚園の校舎もすごく破損しており、当分は校舎に入れなかった気がする。ずっと講堂にいたのを覚えている。まもなく私は卒園したのだが、卒園してから幼稚園自体が春休みに入った頃、校舎建て替えの工事が行われた。今では私達が通っていた頃の幼稚園の面影が全くないのがすこし悲しかった。

そして2月終わりくらいにやっとガスが復旧した。震災が発生して初めて自分の家でお風呂に入った。すごく長い時間がかかったが、その間も近所の人が貸してくれたガスコンロはとても役にたちすごく感謝していた。今では当たり前に見えるのが、震災の時にはなかなか使えなかった事がわかり無駄に使用するのはやめようと思った。

いつくらいだったか忘れたが、マンションは工事に取り掛かった。全体を幕みたいなもの で囲い洗濯物を干すことさえできなくなっていた。ベランダのすぐ外には工事の人が歩いていたり、家の中では天井の亀裂を直すために工事の人がいたり、落ち着かない毎日だった。しかもその亀裂を直すためのペンキのようなものがとても臭く気分が悪かった気がする。その亀裂は直ったが今でも天井に痕が残っている。

4．環境防災科に入学して

環境防災科に入学して早3年目。入学した当初は災害のことなど全く知らず、「災害と人間」の授業でたくさんの講師の方に阪神・淡路大震災のライフラインの様子や活動の話を聞くことができた。あの頃はとにかく話を聞くのに必死であり記憶にはないが、勉強を重ねる度に知識が頭に入っているような気がした。それに簡単なことならとっさに答えられるようにもなった。これは環境防災科に入って災害の事を勉強したからということもあるが、環境防災科で積極的になることも学べたと思う。私は人前で話をするのはとても苦手だが、この学科は発表する場が多く、そのうち慣れる気がした。

他の面でも災害の勉強もしながら英語も学べるし、海外のことも勉強できる。とても知識豊富になれると思う。そんな環境防災科に入れて私は本当によかったと思った。正直専門教科を勉強するのはすごく嫌いだった。けれど、日が経つにつれ嫌いだった気持ちがどこかに消えてしまい、興味をそそる話ばっ

かりになっていた。環境防災科に入学してから、自分が変わった気がした。“諦める”ってことをしないようになった。いつも他の教科の勉強をしていますが、わからなくなればすぐ諦めていた。今もこの「語り継ぐ」を書いている最中も、辞めたい気持ちでいっぱいだった。しかし心のどこかでやらなければいけないという意思があり、どんなに時間がかかっても諦めないようになった。きっとこの“諦める”という弱い気持ちを強くしたのも、この舞子高校環境防災科のおかげだ。

環境防災科でひとつ残念という言い方は変になるが、全国でひとつしかないのが少し残念だ。今までに多くの他県の学生や先生などが来て環境防災科のことを知っていった。防災を学ぶだけでなく他のことも学べるこの学科がもっとたくさんの地域にあればいいと思った。そうすることによって、防災を学ぶ人が増え語り継いでいく人も増えるはずだ。

環境防災科でたくさん学んだ知識などをたくさんの人に伝えるために阪神・淡路大震災だけでなく他の自然災害についても「語り継ぐ」って事はとても重要だと思った。そして次から次へと広がって行けばいいなとも思った。

5. 将来の夢

私の将来の夢は、今はこれとはっきり決まっていらないが介護福祉士になろうと思った。この夢は中学で体験したトライやるウィークがきっかけだった。介護のことを体験し、すこしだけいいなと思ったきり、そういった体験や活動はしていなかったが、環境防災科に入って阪神・淡路大震災のことを勉強した。その中で、阪神・淡路大震災でたくさんの死者・負傷者が出た。その中でも高齢者の人がとても多いことが勉強する内にわかった。1人暮らしの人などがいて、逃げ遅れたりして亡くなったそうだ。命はとても大事だし、助け合うという気持ちも大事だ。私は介護福祉士になって、近い場所から高齢者の人を助けたいと思った。助けたいだけなら、消防士や警察官、レスキュー隊があるが、私は助けもしながら介護をし、高齢者の人たちが安心できるような人になりたいと思った。高齢者の人も1人だととても不安だと思うけれど、介護の人がいれば少しでも心を広げていけるような気がした。

また災害が起きたときだけではなく、復旧・復興期にでも活躍できると思う。例えば、家が倒壊して建て直すまで仮設住宅に住んでいる高齢者の人のところに訪問して「体調の方どうですか？」など声をかけていき、疲れやストレスがたまっている人に心のケアまではできないかもしれないが、話し相手になるだけで少しでも楽になれると思った。

他に介護福祉士の世界でどう防災を広めていくかも考えた。私が今考えていることは、はじめは普通に介護施設で働いて仕事になれ始めたらまず、そこの施設で働いているスタッフに防災の事を教えていく。その教え方はとりあえず簡単に、もし地震が起きた時にどう行動をとればいかなど話し合いをしていく。そうする事でまず施設で防災をできると思った。その次に、施設に住んでいるまたはデイ・サービスに来る高齢者にわかりやすく災害について話したい。自分より多く生きている人がたくさんいるから聞きたくない人もいるかもしれない。そう言う人たちには少しでもいいので災害などに興味を持ってもらうようにクイズをしたりしたい。災害についてだんだん知って行ってから、その災害に備えるためにどうしていけばいいかなど、私が考えていることが伝わるように絵を描いてなどで話したい。ちょっとでも興味を持ってもらいたいからだ。防災の話が済んでからは、上の方に書いている日頃からできることを実践して行きたい。

1つの施設だけ防災をするのではなく、多くの人に防災を知ってもらい高齢者の方にも対策をしてもらいたいので、いろんな施設に行って防災を伝えていきたい。まず多くの介護士にも防災を知ってもらうために講演をし、その講演を聞いた人で一緒に防災介護士になり、全国各地の施設に訪問できるような派遣隊を作りたい。少し少しだけど、防災を広めることができると思った。

他はきっと働いているうちに色々気付くことがあると思うから、その中で防災を広げていくこともいいと思った。私も仕事をしながらたくさんの防災や災害のことを勉強していき、新しい発想や発見をし

ていきたい。

こういったことで震災の体験話もできるし、聞く事もできる。これから先いつまた阪神・淡路大震災のような地震が起こるかわからない。けれどもその時と同じように多くの死者・被害者は出て欲しくない。きっとこれは誰だって願っていることだと思う。そのために、体験した人たちが思いを伝えていくために「語り継ぐ」という言葉があるのだと思う。

私は語り継いでいきたい。これから先、社会に出た時も結婚して子供が出来た時も自分が体験した阪神・淡路大震災の話をしていきたい。相手が興味なくても、生きていく上で災害は付き物だから聞いてもらいたい。そしてそこからまた「語り継ぐ」人が増えていけばいいなと思っている。

6. 温かい心

この震災で多くの温かい支援と心をもらった。神奈川県横須賀市に住んでいる母の姉は、震災 10 日後ぐらいで神戸にやって来た。電車など乗り継いで来たが、途中からは線路の上を歩いたりして子供の頃住んでいた芦屋のひどい高速の転倒など目にして、私達の住む垂水まで何時間もかけて来てくれた。横須賀のおばさんは友達や親戚から食べ物や義援金などもいただいたそうだ。

父が会社を経営していたので、多くの取引先からカセットボンベ、水、暖房器具などが送られてきた。

この震災で近所の人、その他多くの温かい励ましなどの心をいただいたと思う。その温かい心を忘れなかったら、震災後の高齢者の孤独死も少なくなっていたような気がする。お互いみんなが被災者になっていたのに、なかなか他人の事まで目が届かなかったのだろう。それはとても残念に今思う。

今、世界中で地震がおきている。もっと早く行動ができ、ボランティアなどすみやかに行けるような体制作りも今後の課題になるのではと思った。世界中、言葉は通じなくても温かい心は伝わると思う。この暖かい心を忘れずに、みんなは 1 日 1 日を大切に生きていけばいいと思った。

私も心温かくそしてどんな人にもやさしくなれるような立派な人を目指したいと、この「語り継ぐ」を通じて感じる事ができた。

「語り継ぐ」を書いて小さい頃の記憶がほとんどなかったが、親に話を聞き知らなかったことがたくさんあった。時間が経つにつれどんどん記憶が薄れていってしまうが、そんな時に自分が書いた「語り継ぐ」、またはクラスの子、先輩やこれから「語り継ぐ」を作成していく後輩たちの記憶を読んで、思い出していきたいと思った。そして多くの方に読んでもらえたらと思った。

僕の見た震災

神戸市須磨区車尾鼻

橋本 聖司

阪神・淡路大震災発生

1、震災発生

阪神・淡路大震災が発生した時、僕はまだ幼稚園児、年長、6歳になったばかりだった。そのころ、僕はまだ、『地震』というものが何かわからず、そんなものがあるということすら知らなかった。震災が発生する前夜、僕は何事もなかったかのように眠りについた。そのころは、幼稚園の音楽会で、僕はシンバルをする予定で、そのことで、小さかった僕は頭がいっぱいだった。そして、僕らが家族で寝静かえり、午前6時前のまだあたりが真っ暗な時だった。いきなりゴゴゴゴゴッ ドーン！というとてもない音とゆれが起こった。僕は、初めて家で体がゆれを感じた、などとまるで他人事のようにその大きな地震を感じていた、まったく鈍感である。でも、そのとき、それが地震とは知らず、今まで地震というものを経験したことがなかったので、危険なものだと言うことは自分の中には意識がなかったから、結構冷静だったと思う。そのとき、母の『えっ、地震』という声がしたことを、震災が発生して11年経過しているにもかかわらず今でも自分の頭の中にあり、思い出すことが結構多くある。そして、覚えているということは、たとえ知らなかったとしてもそれが異常なことだということが、幼いながらも本能みたいなもので感じ取り、この記憶をのこしておかなければならないと脳が勝手にそうしたのかも知れない。その後、僕と母は手をつなぎ、地震がおさまるのを待っていた。その後、真っ暗の中、母に手をつながれたまま、僕は何も知らず、もう一度眠りについてしまった。これが、いまだに人の記憶に残っている阪神・淡路大震災の発生の朝のことであった。

2、混乱

震災が発生したあとの朝、僕は何事もなかったかのように起き、幼稚園に行こうとしていた。そして、1階に下りたとき、驚いたのはすべての食器がすべて地面に落ち皿がほとんど割れていたことだった。母がそれを片付けている中、僕は『どうしたん』と聞いた。母は『朝の地震で割れてもた』と言い、この地震というものが大変なものだということに気がついた。僕はテレビをつけようとした。しかし、テレビはつかなかった。僕は、母や父に『テレビつかへんで』と言われた。今考えれば、自分はなんてアホなことを言っているのだろうと思ってしまう。何も知らなかったので仕方ないと思うが、無知というのは自分に対してでも落胆してしまう。しかし、電気というものは目に見えないからなくならないと思ったのかも知れない。その後、母が、『電気止まってもてん』と言い、それじゃ、テレビが見られないと、またとてもないことを思ってしまった。そして『今日は幼稚園ないで。たぶん、数週間はないと思うな』と母が言ったので、それじゃ、音楽会でとてもしたかったシンバルはどうになってしまうのだろうと、この現在の状況をどうするかよりもそちらのほうが気になっていた。

その後、外に出てみようとして僕はした。外に出てみた。周りはいつものように同じ家が立ちならび、倒れている家もなければ、火事が起こっていると言うわけでもなく、何も変わっていないと僕は思った。しかし、近所のひと、母、父はどこかそわそわしていた。そして父が、僕を連れて、家の壁をみた。そうすると、家の壁にいくつものひびが入っていて、僕は驚いてしまった。そのひびはいくつもあり、ほとんどは縦にひびがあるのを覚えている。そして僕は怖くなった。もしかしたらこの家は倒れてしまうのかなと思ってしまったからである。僕の家や近所の家ではひびは入っていたが、幸い倒壊、半壊をした家はまったくなかった。その後、水を飲もうとすると、水道から水も出なくなってしまう、いったいこれからどうしていけばいいのかと、初めてこのとき、小さいながらも不安になってしまった。また、

トイレにいき水を流そうとしても水が流れてこず、どうしようと思ってしまったことも覚えている。そう、もうこの時期には神戸市のライフラインが完全にシャットダウンしてしまい、電気、水道、ガス、などの生活にもっとも必要なものが完全に停止してしまったのだった。そして、これから僕らはどうなるのかと心の底から心配した。

3、親族の安否

震災で家族がもっとも不安に思ってしまうのが親族の安否だった。僕の親戚が主に住んでいるのは、和田岬、長田、そして、淡路島本島だった。最初のころは、何も情報がなくいったいどれぐらいの被害なのかと本当に不安になってしまっていたのだが、父が車にあるラジオを聞いてその被害を把握したらしく相当あわてていた。当然である。僕たちの親戚が住んでいるところは結構危ないところが多かった。長田区は神戸市でももっとも被害が多く、ほとんどが全壊である地域で灘について多くの人の命が失われてしまったところである。和田岬は海が近く津波の危険性があり、祖母の住んでいるところはもっぱら海に近い所にあったのでこれも心配だった。さらに驚くのは僕の叔父が住んでいるところが淡路島にあるということだった。淡路島は阪神・淡路大震災の震源地であるということもあり、叔父の安否がもっとも心配だった。そして、僕たちの親戚はもしかしたら命を失っているのかもしれないと父も母も思ってしまったらしい。しかし僕は、自分の住んでいるところがあまり被害もすくなかったこともあり、それほどものすごい被害ではないだろうと考えていた。町の家がほとんど倒れてしまった長田の町や淡路などは6歳の子供には想像もすることができないだろうと思う。そのため僕は結構楽観的に考えていた。

そして、父が自動車で親族の安否の確認に向かってしまった。この家の状態で父がいなくなるのは、楽観的に考えている自分でも結構抵抗があった。しかし、親族の安否の確認をすることはこちら側にとっても安心できるし、相手側にとっても安心できることなので、このことはしなければならぬことであった。

ここからは父に聞いた話を書いていきたい。まず僕の住んでいるところは板宿へ行く道と、三木に行く道のちょうど間に位置するところに家が建っている。そのため、被害の大きい板宿のところから安全な三木市のほうにすすんでいく車が結構多く、逆向きに行こうとする父にとってはなかなかすすまず、車と車のすきまを通過して行かなくてはならず危険なことが多かった。そして長田区のほうにすすんでいくと家がほとんど倒れてしまい、半壊の家も多く呆然としてしまったらしい。道路には瓦礫や家の木材や石が転がっており、人も路上で呆然と立っているの、またすすむのにも一苦労したらしい。さらに驚いたのが、火のすぐそばを通過していたらしく、その話を聞いてまだ火が消されずに残っているのかとってしまった。そして、祖父母の家の近くになっていくにつれて、すべて倒れてしまった家が多く続き、父は絶望的になってしまったらしい。しかし、奇跡的にも祖父母の家は立っており、父はほっとしたらしい。その風景は異様で、祖父母の家だけは立っているが、周りの家はすべて倒れているというまさに異様でかつ奇跡的なことだったらしい。しかし、後になって聞いてみると、祖父は大工をしていたのだが、祖父が建てた家はどれも倒れなかったらしい。祖父母の今も住んでいる家も祖父が建てたもので、改めて祖父のことをすごいと思ってしまった。そして祖父母は2人とも大丈夫だった。

不幸中の幸いで、そのときは淡路にすんでいる叔母と従兄弟がともに祖父母の家に来ており、何とか一命を取り留めたい。しかし、叔母は泣いていた。叔父は淡路で警察官として働いているのだが、淡路は前にも書いたが震源地である。そのため叔母は『もう、死んでしまった』と泣いていたらしく、その話を聞いて僕もものすごく真剣に聞いてしまっていた。淡路というもっとも危険なところで働いていた叔父が、そのときそういう気持ちだったのかと思ってしまった。今は淡路島には明石海峡大橋が架けられているが11年前にはそんなものはなく、淡路島に行くのはフェリーにのって数時間かけていくものだったので、淡路に行くこともできないし、来ることもできない、電話も通じないと最悪の状況下だった。

父は叔母と従兄弟を加古川にいる叔父の両親のいるところに、車で送って行ったらしい。その後、神

戸にかえって来た父は和田岬にいる親戚のところに行ってきた。そこには父方の祖母が1人だけで住んでいるので父は心配したらしい。そして、ついとみると津波の影響はなく祖母は無事だったが、祖母は不安だったらしい。祖母を家に連れて帰ろうと父は思ったらしいが、祖母は僕たち家族の迷惑になるのではないかと思い拒否したそうだ。その後、父が帰ってきて、僕はほっとした。父と母は今後のことについて話していたが、その後父は三木市にいる知人に水を分けてもらいに、すぐに、三木に車を飛ばした。そのため僕の家では水についての心配はほとんどなく、そこについては安心することができた。

4、いい子化

最初にも書いたが、僕は阪神・淡路大震災が発生した時、幼稚園児、6歳であった。しかし、僕は地震が発生した当時のことを、うっすらながらも、しかし、その期間のことだけは良く覚えていることが多く、父母と震災の話をした時も、『結構覚えているな』といわれたことがある。それほど強い印象だった。震災があったとき、ライフラインが完全に止まってしまった時、一番の問題は『水』だった。僕の家は三木市の知人のところから、父が水をもらいには行ってはいたが、それをもらってくるまでの期間は、この水を確保するのは何よりも重要で、難しいことだった。幸い、僕の家の前には川が流れていたのです。その川をせき止め、何とかトイレ用のみの水だけは入手でき、このことの心配はなくなった。しかし、川をせき止めている場所には結構な距離があった。僕と母はその水を取りに何度か往復した。水は重く、なかなかの労働だった。僕はそれを持つ母のために何かしたいと思い、母を手伝った。そこから、僕は母を良く手伝うようになった。水くみはもちろん、掃除や片付けなどを僕は自分からすすんでやるようになっていた。

予想をはるかに超える災害が発生した時、小さな子供から大きな子供（小学校6年くらい）は、母親の意識を自分に向けたいと思い、いきなりとてもいい子になってしまったり、逆に今までできたことができなくなったりしてしまうということを、僕は学校で学習した。もう一度このころのことを考えると、このことはあたっていると思う。やはり母や父が自分のことにはかまってくれず、それ以外のことをするので、本能で不安になってしまうのであると思う。僕も不安だった。いつまでこの生活が続くのだろうと思い、本当に不安だった。でもいい子でいようと思い、がんばってみた。

5、悪い子化

僕は不安だった。『夜』というものが、何よりも怖かった。もともと、小さかったころの僕は暗いのがだめで、寝る時も明かりをつけて寝ることが多かった。そのため、ライフラインが完全に停止した家での夜は何よりも怖かった。夜になると、いつも僕は恐怖で泣いて、父母たちに多大な迷惑をかけたらしい。しかし、町中からは何も聞こえてこず、あたりが真っ暗になってしまったら、それだけでも、強い恐怖に陥るのは仕方がないと思ってしまう。実際僕は怖かったのだから、毎夜毎夜泣いたのだ。その後、僕は父に連れられて、車にいった。車には内部電源があり電気をつけることができた。さらに、僕の家にはテレビがあり、好きなテレビを見ることができた。それが良かった。そして、テレビから多くの情報を得た。神戸の町が燃える映像を家族で一緒にみた。自分たちの住んでいるところは、それほど、被害がほかの地域よりも少ないということを知った。そして、地震というのが本当に怖くなった。自分たちの住んでいるところではまだ良かったが、ほかの地域にこれほど被害があり、さらに火事まで発生しまい、黒い煙がもくもくとでているのを見て、さらに恐怖が増してしまっていた。

車の中の生活はそれほど窮屈なものではなかった。電気はあるし、テレビもある。そしてゲームもすることができたので、それは僕にとっては良かったことだった。そして、その後、僕はずっとゲームをし続けた。母や父は地域のことや家の片付けなどで忙しく、父もバイクでいろいろなところに出かけており、自分をかまってくれはしなかった。確かにみんな忙しいのは分かっていたが、だれにもかまってもらえず、ずっとひとりだったのでその寂しさは辛いものだった。その反発かもしれないが、僕はずっとゲームをし続けた。少しでも寂しさを紛らわそうとしていた。母には『もう、やめなさい』と何度も

いわれはしたが、それでも僕は、やり続けてしまっていた。そのため、気が付けば僕は目が見えなくなっていた。まあ、毎日、毎日ゲームをし続ければそれは、目が悪くなるのは仕方がないが、僕の視力は一気に下がってしまい、メガネがなければ何も見えない状況になってしまっていた。

久しぶりに僕は震災の年の写真を見ていたのだが、そこにもう幼稚園でメガネを付けている自分を見て、それは自分でもショックだった。視力が低くなりゲームをする回数は少なくなったが、それでもやっていたのはやはり寂しかったからではないかと思う。その後はそろそろ復旧が始まっており、僕たちの生活は元に戻っていき始めた。

6、震災の後に

震災後神戸の町は多くのものが変わってしまった。町並みも人もどこか暗いところがあったのをまだ覚えている。幼稚園の送り向かえのバスのおじちゃんはいつも面白くしゃべってくれて、良かったのだが、震災後から初めて幼稚園に行ったとき、どこか不自然なところが多かったなと思った。そして、どこかそわそわしているようすだった。僕の幼稚園は板宿にあり、震災から結構たっても幼稚園に行くことができず、数ヵ月後によく幼稚園によく戻れることになった。しかし、もうそのときには、幼稚園、年長の1月だったのでもう卒業することになってしまった。そして、残りわずかな幼稚園生活は何事もなかったように、震災前からと同じような生活を送り始めた。卒業式でも園長先生が最後に僕たちに送る言葉のさなか、涙を流しながら震災当時のことを話してくれていた。板宿は結構、被害が大きかったので多くの人が死んだ。そして、幼稚園の中からも尊い命が失われてしまった。

卒園後、小学校に進学した時も、同じように最初は震災のことを先生方から話され、震災のことを思い出した。小学校に入ってある本が学校の図書室に置かれることになった。それは『ドッカンぐらぐら』という本で、震災を経験した小さな子供が震災の時の体験を作文にしたものである。そのとき、その本を借りようと思い図書室に行ったが何処にもなかった。その本は全部貸し出し中だったのだ。僕はそのとき残念に思ったが、今思えばそれはとてもすごいことだった。わずか小学校の子供があ那时的悲惨な出来事をもう一度思い出し、それについて学ぼうとしているだけで、この巨大な地震はまったく無駄ではなかったものだと思う。そして、それは今後も継承されていく。小学校の授業の中でも総合学習で震災のことは良く取り上げられ、何度も震災のことについて考えたり、作文を作成したりと、多くのことをした。震災では多くのものを失ったが、その代わりに大きなものを得たと思う。

7、そして、今

震災から数年たち、僕も中学3年になったときだ。もうすぐ高校の入試が始まり、進路についての授業も多くなってきた。そのとき僕は何をしたいのかと思い、ずっと考えていた。将来何をしたいのか、どうしたいのかと思い、その結果、僕は『消防士』になりたいと思った。そして、消防士になるにはいったいどうしたらいいのかと思った。消防士の仕事は防災だ。防災を学ぶにはと考え、舞子高校の環境防災科のことを思い出した。僕が2年生だったころ、トライやるウィークで地域の地域防災センターに体験に行っていたのだが、その後、環境防災科の先輩たちが、僕の中学校にきてくれ、僕たちもそのとき防災についての発表をすることになった。そのときはあまり気にはとめずに着々と作業をしていたのだが、このことが僕の進路を決定した。そのあと、先生や母の後押しもあり、僕は舞子高校の環境防災科に入学することができた。そこでは震災当時のことをさらに深く学ぶことができたが、その中で、多聞東小学校に出前授業に行ったときのことだった。そのとき、僕は何を話せばいいのかと悩んでいた。そして最初に言った言葉が、『震災のこと知っているかな～』だった。そうすると多くの子供たちが手を上げ多くのことを話してくれた。お母さんから聞いたとか、先生に教えてもらったと話してくれた。そのとき僕は感激した。震災から9年、震災を経験していない子供たちまでもが震災について、多くの知識を持ち、ちゃんと受け継がれているということに、感動した。そして中越地震や豊岡での水害など多くのことについて意識しているようで、このことについてとても感激し、うれしかった。震災が受け継がれ、さらに防災のことをちゃんと意識していることは、あの震災は無駄ではなかったと実感した。

神戸の光

神戸市東灘区魚崎

松尾 智也

～どこかで災害が・・・～

僕はいつも思う。なぜ人は他人を傷つけてしまうのだろうか。世界では戦争、争い、犯罪など悲惨なことがたくさん起こっている。どうして、悲惨なことをしてしまうのだろうか。世界では今過ごしている時でも災害が起きていることが、よくニュースで見られることが多くある。その災害地では多くの人が涙を流してないている。家族が亡くなった。友達がいない。災害で苦しんでいる国がいるのに平気で戦争をしている。僕はそのようなニュースを見るたびにこのようなことを思うようになった。そう小さいながらに感じ取ったあの日から…。

～なんでゆれるの！？～

あの阪神・淡路大震災から 11 年がたとうとしている。僕はちょうど 6 歳の幼稚園の年長で、もうすぐ小学校に行けるといつもわくわくしていた。僕が住んでいたところは、一軒家で昔ながらのつくりをしていた。近くには当時行く予定だった小学校、いつも遊んでいた川、そして公園、大好きだった幼稚園。次の日は幼稚園で餅つき大会がある。僕はとても楽しみに次の日が来るのを待った。僕はぐっすり寝ていた。しかしその楽しい日は来なかった。

激しい揺れで目が覚めた。「ゴォォー」という音がして、天井で照明の電気が激しく揺れている。今にも落ちてきそうな勢いだった。僕の隣で寝ていた母が僕のうえに覆いかぶさってきた。母の腕の中にもぐりこんで揺れがおさまるのをじっと耐えた。何かなんとか理解できず、揺れがおさまるまで気が遠くなるくらいに時間がたったと感じた。揺れがおさまってから何がおきたのだろうと不思議でたまらなかった。

兄と姉は近くの違う部屋で寝ていた。すぐ近くで寝ているのにもかかわらず、なかなか部屋には行くことができなかった。母は「お母さんが先に行くからとんち（僕のあだ名）はここで待っとき」と言った。僕はとても 1 人になるのが怖くて母の後を追った。母の背中を見ながら真っ暗の中、慣れ親しんだ家の道を手探りで探した。いつもはしゃいで走って通っていた廊下もとても長く感じた。そのときは恐怖でたまらなかつただろう。足が震えていたのを覚えている。何かが手に触れた。それはいつも母ががんばっていた内職の仕事の山だった。あんなにがんばっていたのに、グチャグチャになった内職の箱を見るととても複雑な気持ちになった。怖くて、寂しくて、悲しくて呆然とした。大きな声で姉が「大丈夫、ドアが開かない」という声でハッとした。よかったと思いドアを開けようとしたが、ドアは大きなタンスによってふさがれており母と僕の弱い力ではどうすることもできなかった。母は姉に「ちょっと助けを求めてくるよ、すぐ戻ってくるから」と言った。母は僕にいつも着ていたちゃんちゃんこを着せ、手を握り外につながっている玄関に向かった。

玄関のドアをいくら開けようとしてもなかなか開けなかった。なんだかむかむかしていた。悔しかったのかもしれない。するといつも親しくしてくれていた近所の人々が助けに来てくれた。ドアを 4 人くらいの男の人が開けてくれた。外からの風が強く体を押してくる。冷たくて重たい風だったように感じた。外は真っ暗で恐怖心を感じさせるようだった。そこには懐かしい匂いもなく違うところに来たみたいだった。あたりをきょろきょろするしかなかった…。変な町だなと思った。母の顔を見ると母も驚き立ちすくんでいて、母も同じ気持ちだったのだろうか。母は力が抜けた声で言った。「私の子供を助けてください。」男の人たちはすぐに家の中に入っていった。こんな弱い母を見るのは初めてだった。ますます大変なことに気づいた。泣くのを我慢した。母を困らせたくなかったから…元気になってほしかったから。

屋根を見ると家は半壊だった。屋根は一部落ち、建っているのがやっとのくらいだった。家の中はもちろぐちゃぐちゃで足の踏み場もなかった。空には星もなくて真っ暗にしか見えなかったが、僕は星にお願い事をした。「お星さま、町をもとに戻してください」と。

すると男の人が兄と姉を抱いて家から出てきた。母に「もう大丈夫です。僕たちはほかの家を回ります」といって兄と姉を渡しどこかに行ってしまった。母はただ「ありがとうございます」と何回も何回も言っていた。僕もそれを見て「おじちゃんありがとう」と大きく言い手を振った。僕たちは家に入り4人で毛布に入り朝が来るのを待った。僕はよかったと思い夢の中に入った。

周りからの物音で目が覚めた。母は何がなんだか分からない部屋を通帳や財布などを捜していた。外を眺めるととてもまぶしかった。あたりは地震が起きた時と比べて見えるようになっており、タンスが倒れてドアは壊れている。そのような風景を見ると、早朝の自分に降りかかった恐ろしいことを感じ取った。1つだけ倒れていないたんすがあった。家の天井まである大きなたんすだった。そのタンスのそばで寝ていたのは僕と母で、運良く倒れてこなかったのだろうか、いや僕は違うと思った。そのタンスは僕が生まれた時からあり写真にもたくさん載っていた。木で作られたたんすで、色が濃くところどころに傷が入り色も薄れていた。僕よりかは当時3倍くらいの大きさだったと思う。お祖母ちゃんが助けてくれたのだと心の中で強く思った。聞いた話によると地震当時タンスはなにも固定されておらずただ置いてあるだけという感じだったそうだ。僕の家は何も地震対策をしていなかった。母も地震なんて来ないと思っていたそうで、なので地震にたいして備えをしていなかった。今住んでいるところは兵庫区の住宅で、近所の人に聞いたところ多くの人が地震対策をしていなく、やはりその原因は地震なんて来ないと思っていたからだった。

僕も起き上がり母の手伝いをした。見たことのあるものや見たことのないものまでさまざまなものが落ちていた。すると目に入ってきたものがあつた。それはアルバムだった。僕の幼稚園の写真が入っており、入学式や大好きだった運動会などの写真でいっぱいだった。きっとそれを見て友達のことを考えていただろう。今日本当は餅つき大会なのにできないということに気づきとても悲しい気持ちになった。アルバムをタンスのすみにしまい玄関に向かった。

外は黒い煙がいたるところで上がっていた。それにもかかわらず消防車のサイレンが聞こえなかった。僕の中での消防士はスーパーヒーローのような感じだった。たまに幼稚園に来ては火事の本を読んで面白い話をし、幼稚園の先生たちに消火器の使い方を教えていたことを覚えている。大きい体にはオレンジの服を着て、とてもすばやく火を消して僕たちを助けているのでヒーローと思っていたのだろう。地震当時は何も消防士の状態もわからず、スーパーヒーローなのになぜ助けてくれないのかとずっと思っていた。電気、水道、ガスは通っていない、ラジオを聴いて情報を得るということしかできなかった。しかし、情報は何も入ってこなかった。

唯一わかっていた情報があつた。近くの公園でおにぎりを配っているということだけだった。公園までは家の間の細い道を歩いてすぐだった。姉と兄とでいつものように公園に行く細い道を通ろうとした時唖然とした。道がなかったからだった。この地域ではたくさんの木造の家屋が隙間なく並んでいる状況で、それが将棋倒しのよう倒れていた。家がこんなにも簡単に倒れるとは思っても見なかった。僕が幼稚園のときいつも先生に3匹の子豚という本をよく読んでもらったのを覚えている。子豚たちが作った家の中で、レンガの家が壊れなく危険なときは家の中にいたら大丈夫だという印象的な本だった。地域はレンガ造りの家ではなかったけれども、いつも台風や強い雨が来たときは壊れなかった。なので、家の中にいたら絶対に大丈夫で壊れないものだと思い込んでいた。僕はこの家が倒れていることは何ということしか考えられなかった。仕方なく大きな交差点まで出て公園に向かった。

公園ではたくさんの人でいっぱいだった。さまざまな色をしたキャンプ用のテントがたくさんあつた。公園の中心で、子供たちがたくさん集まっている。そこではおにぎりを配っていた。おにぎりはまず子供たちに配っているようだった。1人2個ずつ配っていて僕たちもおにぎりをもらった。味は覚えてはいないが母に1つおにぎりを上げたことは覚えている。おにぎりをもらったあと家に帰った。

家に帰ると母が車に毛布を積んでいるところだった。「今から体育館に行くから準備をしなさい」と言われた。ふと駐輪場所を見ると、姉と兄と僕の自転車に水や懐中電気が積まれていた。「3人は自転車で体育館に行って」と言われた。自転車に乗り体育館に向かった。

～避難所～

体育館までは僕にとって慣れ親しんだ道だった。それは幼稚園の隣に体育館があり、毎日母と通っていたからだ。体育館が見えてきたがたくさんの人であふれかえっていた。どうしていいのかわからないまま、体育館の前で母を待った。車で来た母は近くの公園に車を止め僕たちのところにやってきた。体育館に入るとやはり人でいっぱいだった。トイレには使用しないで下さいと書かれてある。やはり体育館も水が出なかったのだろう。

幼稚園ではたまに体育館を使いドッチボールやマットでの体操などをしていた。しかしそのようなことのできるようなスペースがない。いつもよりも体育館が狭く感じた。体育館にはたくさんの毛布や布団がびっしり敷いてあった。たくさんの人が自分の場所をとろうと必死だったのを覚えている。僕たちは運よく近所の人場所をとっていたらしく、狭いスペースだが僕ら家族4人寝るには十分なスペースだった。そのスペースは体育館の一番隅だった。自転車で持ってきた荷物を置き体育館の中を歩いた。体育館の入り口、廊下、ロビーまでも人のスペースになっていた。一番気になっていたことがあった。友達のことと幼稚園はどうなっているのかということだ。

体育館を飛び出し隣の幼稚園に足が進む。この瞬間だけははっきりと覚えている。まだ幼稚園は避難所として使われておらず門が開いていて、体育館と公園をつなぐ道として使われていた。校舎には無数にヒビが入っており、やっとのとこでたっている状態だった。今日やるはずだった餅つき大会もあるはずもなく、石で作られていたうすも半分に割れていた。それが何よりもショックだったのかもしれない。しかし、公園を見ると見覚えのある友達がいた。それはしょうごだった。しょうごという子は当時僕と一番仲がよかった友達だった。母親同士も仲がよく幼稚園にいるときはいつもしょうごと遊んでいた。

しょうごの家族は、体育館がたくさんの人だったので公園で車を止めてテントを張り1日を過ごすと言っていた。明日になると車でいとこのところに行くみたいだった。昼ごはんはしょうごと一緒にラーメンを食べさせてもらった。今思うととても食べ物がないときに食べ物を出してくれたのが、どれほどうれしいことなのかと思う。そして、遠慮しなかった僕はあまりなにも考えていなかったのだが、申し訳ないと思う。夕方までしょうごと遊んだ。ボールでサッカーをしたり、虫取りをしたりして遊んだことを少し覚えている。その日がしょうごと遊んだ最後の日だった。

体育館に戻ると、電気など通っていないのでたくさんの人が懐中電灯で体育館を明るく照らしていた。ぼくは母に今日しょうごと遊んだことを話した。

ラジオをつけるとやっと情報が入ってくるようになった。地震が起きたときはまったくといっていいほど情報が違っていた。震度の大きさや死者の多さなど、ますますこの地震の被害が大きくなっていくことが聞いていてもわかる。どのラジオのチャンネルにしても地震のことばかりだったような記憶がある。体育館にいる人のほとんどはラジオを聞いていた。その中にラジオを聞きながら泣いている人もいた。小さかったせいかなぜ泣いているのかということとはわからなかった。きっと知り合いの名前がラジオで流されたのだろうと思う。

この夜体育館では、家族におにぎり2個入りのパックとメロンパン2個とお茶のペットボトル2本が配られた。母に言われた。「ご飯少ないけど、我慢してね」と。この日の夜はおにぎり1個で我慢した。隣の知らないおじさんが僕たちにカステラのお菓子をくれた。感謝しながら家族でお菓子を食べた。今日は昼からしょうごと遊んでいたので疲れたせいかすぐに寝てしまった。

夜中に目が覚めた。揺れを感じたからだだった。余震はたびたび起こっている。体には地震の揺れが残っているようにも感じた。体育館のトイレは使えないので仕方なく外ですまし、もと寝ていたところに

帰った。

朝母に起こされ目を覚ました。もう兄と姉はご飯を食べ終わっていた。ご飯といっても昨日の残りのメロンパンだが。メロンパンを半分に分けて食べた。メロンパンを口に放り込み朝から母が運転する自転車の後ろに乗った。

町の風景が見える。建物にさえぎられる風もなくそのまま肌に風を感じる。水道管が破裂しすごい勢いで飛び出してくる水。壁はこんなにやくのようにグニャグニャになっており手で押しただけでも倒れそうだ。黒い煙が高く上がり助けを求めているようにも思う。小学校では自衛隊がいた。もう水が配られていたかのような記憶がある。大きな緑の車があり、運動場にはサーカスをするような大きなテントがあった。倒れた家屋のところには3人くらいの家族が全員黒い服を着ており立っており、きっと誰かがなくなったのだろう。街のいたる所の風景を自転車で回って見た。

昼過ぎになり体育館に戻ると、初め来たときよりも人が少なくなっていた。駐車場を見ても車が多少減っていた。たくさんの人が神戸から離れて行く。カステラのお菓子をくれたおじさんも名古屋に兄弟がいるからと名古屋に向かうようだった。僕たちも次の日は広島の祖母の家に向かう予定だった。神戸を離れることは友達、幼稚園とも離れないといけなかったのでとても寂しい気持ちだった。母は神戸が大好きだった。なぜかは知らないがいつも言っていた。それから記憶にない。聞いた話によると昼からは小学校に行き姉や兄の先生と話をし児童館に行っていたそうだ。

～ 広島風景～

体育館での避難所生活でも終わりになった。車で広島まで何時間かかるかわからない道のりを出発する。避難所からもらった毛布、必要な生活用品、食べものなど車に積み狭いスペースの中に入った。車の中ではラジオが流れている。やはりひたすら名前を呼んでいるチャンネルを聞くと体育館で涙を流していた人を思い出した。車の中では地震はあまり感じないという話を聞いたことがある。確かに車に乗っているときに地震を感じなかった。その話は本当なのかもしれない。ラジオからは余震情報や死者の人数、被害状況や物資の状況などが話されていただろう。多少時間がたったので多くの人が地震の大きさ、被害の範囲を知ることができただろう。

車の中では何もすることがなくただラジオを呆然と聞いているだけだった。何時間たったかは忘れたがまだ夕方ではなかった。周りの景色はまだ地震の被害があったところで、ちょうど小さな広場だったのだろうか。遊具はないが公園のようなところだった。そこに車を止め休憩をとった。ちょっとした集まりがあった。2人の若者が小さな子供に紙芝居を読んでいる光景があった。それは見ているだけでも楽しそうだった。子供たちの笑い声や、母親たちの会話も楽しそうだった。この公園だけが違った雰囲気があったように思う。その雰囲気に囲まれながら少しの時間を過ごした。また車に乗り広島に向かった。

目が覚めた。回りはもう真っ暗で町の光が見えていて1日の半分、いやもっと車に乗っていて初めは思うように体が動かなかった。広島には春に一度だけ行くだけで、いつも親戚が集まり顔を合わせる事が毎年の行事のようになっていた。広島景色はとてもきれいだった。町の光を見るのがとても懐かしく感じる。祖母から聞いた話だが、広島にはあまり被害が出なく、地震の揺れは少ししか感じず、朝テレビをつけるまで大変なことに気づかないくらいだったそうだ。家の被害も出ずライフラインも問題なかったそうだ。テレビから見た神戸は衝撃的なもので言葉も出なかったと言っていた。母とも2日間連絡が取れずにいたので大変心配したそうだ。

祖母の家で一緒に生活していくことになってきた頃、僕はもう1年生になった。幼稚園が神戸だったので小学校では初めて見る人ばかりだった。もちろん小学校の子供たちは阪神・淡路大震災を経験していない。阪神・淡路大震災のとき大変だっただろうとたくさんの人に言われた。クラスがかわるごとにたくさんの友達もできてきた。しかし年を重ねるごとにやはり記憶というものは薄れていく。しかし母は何年も何年も神戸の県営住宅の応募に手紙をだしていた。それはそう簡単には当たらず、はずれる確率のほうが高かった。

広島に住みだしてから5年がたち、もう小学校5年生で先生も中学校の話をするようになってきた。母が急に食事の時に、兵庫区の県営住宅が当たったと話をし、家族で話をした結果神戸に戻ることもなった。広島の友達とは離れなければならなかったが、いつでも家に遊びに来てもいいと暖かく神戸に送ってくれた。今でも広島に行きとても仲がいい友達で、震災がなかったら広島にはいないと思う。震災は悪いことばかりではないなと思った。

～思い出の兵庫～

最近電車から魚崎の風景を見た。地震のときに母の自転車の後ろに乗って見た小学校や体育館などを見ることができた。小学校も体育館も何も変わってなく、自然に地震当時の風景がよみがえってきた。今神戸に住んで6年になるが、まだもとあった家の場所には一度も足を運んでいない。新しい家が建っているのかと思っていたが、母の話によると、今では駐車場になっているみたいだ。

今度行ってみようと思う。地震によってとても衝撃的な場面を数々みてきた。僕は地震の記憶を忘れたくはない。確かに悲しい、苦しいという感情がとても強かった。人間は馬鹿ではない。誰でも学ぶことはでき、今一度たくさんの人に地震のことを振り返ってほしい。そうすると、備えの大切さがわかるはずだろう。ふと考えるときがたびたびあり、それは地震で悪いことばかりだっただろうか。地震によってたくさんの出会いや助け合いがあったと思う。それが一番すばらしく、大切なのではないだろうか。別れもあったが、僕がいま環境防災科にいることはきっと地震のおかげではないだろうか。

「地震のときはどうでしたか。大変ではなかったですか」と聞かれることがよくある。僕は、本当につらかったと話すのだが、助け合いのすばらしさや教訓、さまざまな学んだことを生かして生きていきたいと話したい。

将来の夢は消防士だ。母から小さい時から夢は消防士と言っていたと聞いたが、それは阪神・淡路大震災からそう思ったのかもしれない。今ならわかる。どうして消防が火災が起きているのに助けられなかったのかは。環境防災科に入りたくさん事を学んだ。阪神・淡路大震災のときには、自衛隊や関西電力や水道局や阪急電鉄の人などさまざまな話を聞き、大きな範囲で阪神・淡路大震災のことについて勉強してきた。しかし、個人個人体験してきたことが違うのでまだまだ勉強していかなければならない。防災などは継続していかなければならなく、やめてしまえばそこで終わってしまう。防災というものは完璧がないのだ。いかに町の防災力を上げることで次の災害に備えができ、災害に対しての町の脆弱性が小さくなれば被害も軽減することができるだろう。そのことから日常の生活の大切さを感じる。これから少しでも防災にかかわっていけたらと思う。

神戸の町は明るくきれいな色の光を見ることができる。六甲山からの神戸の夜景はとても好きだ。神戸の光も地震当時の面影を見せないくらいに戻った。しかしまだまだ復興の時期だと僕は考えている。これから起きる地震のことを考えていかなければならないから…。「しあわせ運べるように」という歌がある。あの歌は阪神・淡路大震災に負けられないようにという気持ちが入っている。神戸の光を絶やさず力強く生きていけたらと思う。

傷 跡

神戸市西区美賀多台
松本 容史子

・オオオトコが...

「ドン・・・ ドン・・・」ゆっくりとした、けどとても大きな足音が聞こえてきた。その足音は、近づいてくるかのように早くなっていった。私は、この足音で目を覚ました。でも、その足音はすぐに収まってしまった。何かの夢を見ていたと思った私は、またすぐ眠りについた。しかし、次の瞬間、激しい揺れに襲われた。さっきの夢の続きをみているんだ。“大男がおもちゃ箱を激しく揺らしている。そのおもちゃ箱の中に私の家があるから...”とっさにそんなふうに思った。だから何も怖くなかった。夢だから...。真っ暗なのも夢の中だから(当時、いつも豆電球をつけて寝ていた)。でも、夢じゃなかった。自分で夢だと言い聞かせるために、そう考えていたのかもしれない。

揺れはいつの間にか収まっていて、私は廊下で母を呼んでいた。母は何も答えてくれなかった。なぜ自分が廊下にいるのか、いつベッドを抜け出したのかは、まったく覚えていない。ただ必死にタオルケットを握っていた(赤ちゃんの時に使用していたもので小さく、当時寝るときにはいつも枕にかぶせてあった)。そして、何度も母を呼んだ。すると「部屋に戻って、頭まで布団をかぶるとき」と言う誰かの声が聞こえた。私は壁伝いに部屋に行き、ベッドに入り布団をかぶった。すると、すぐに母が来てくれた。2段ベッドの上で寝ていた姉は、私がいる下のベッドに降りてきた。少しの間、3人は私の寝ていたベッドの中に入り布団をかぶっていた。余震がなくなったくらいに、母が箆笥から服をだしてくれた。学校や保育園があるかもしれないからと言って、姉には小学校の体操服、私には保育園の体操服を手渡してくれた。私と姉は、夜が明け始めた薄暗い中で着替えさせられ、母と3人で再び布団の中に入り、頭まで布団をかぶった。私はそのまま寝てしまっていた。

目を覚ましたとき、布団の中には誰もいなかった。また壁伝いにリビングまでいった。リビングはすっかり片付いていて、母が掃除機をかけていた。椅子に座り、窓を見た。私の家は、広い道路に面している場所にある。窓の外は、いつもと同じ風景だった。歩道を歩いている人は何人か見た。近所付き合いはそれほどなかった所だが、このときは近所の人が集まって話をしていたように見えた。だが、いつもの火曜日なら出勤や保育園・幼稚園の送り迎えに車やバイク、バスも通っているはずなのに、全然通っていなかった。それどころか、どこからも車やバイクの走っている音がしなかった。とても静かな朝だった。私はずっと窓を見ていた。しかし、床に座らされた。「カーテンのレースをもったらダメ」「またいつ地震がくるかわからないから、椅子とかに登らないでいて」と言われた。「なぜカーテンのレースを持ったらいけないの?」と私は母に尋ねた。母は「いつまた地震がくるかわからないから、カーテンのレース持っていたら危ないでしょ。カーテンレールごと落ちてきたり、レースに穴が開いたりするじゃない」と言って、掃除機をかけ終わった後に菓子パンを渡してくれた。大好きなクロワッサンの中にウィンナーが入っているパンだった。牛乳とそのパンの少し遅い朝ごはんを壁にもたれながら食べた。父は、電話がつながないと携帯電話で電話をかけていた。電話はかかるのに相手がでてくれないからなのか、何度もかけていた。電話の相手はいとこの家と母方の祖父の会社だった。舞子にあるいとこの家は、父が幼いころから住んでいた家だった。ちょうど、玄関の塗装をしなおしたばかりだった。そのおかげか、玄関は潰れることがなかったらしい。また、祖父は出勤途中に地震にあった。そのため、どこでどのようなになっているのかが、まったくわからない状況だったそうだ。

その夜。私たちは普通の生活を送っていた。ライフラインでとまったものは電気くらいだった。それでも、夜までには回復していた。電話がかからなかったのは、電話会社が制限をしていたためで、これも夜には平常に戻っていた。晩ご飯を食べながら今日の話をしていた。父は、地震が起きてすぐに食器棚を押さえに行ったそうだ。リビングと父母が寝ていた部屋は隣どうしなので、すぐに押さえに行けた

だろう。だが、すでに食器棚からは沢山の食器が床に落ちて、割れていた。父はとても寒がりで、普段から寝ているときも靴下を履いている。その日はなぜか、分厚い靴下を2枚も履いていたのだ。運が良かったのだろう。だから、何一つ怪我をしなかった。食器棚が倒れてくることもなかった。もし、食器棚が倒れてきていたなら、父はどうなっていたのだろう…。父は両手と頭を使って食器棚を抑えていたらしい。あの揺れの中で、両足で立って両手と頭で食器棚の扉を開かないように踏ん張っていたのはすごいと思う。しかし、その格好はとてもおもしろかっただろう。今となっては、ただの笑い話になっている。でも、父はどんな思いで食器棚を押さえていたのかな？と時々考える。また、父に聞いたこともあった。父はただ笑って「食器が全部割れたら大変やろ？」と言っていた。母は、「高価な食器ばかりが割れて…」と嘆いていた。枚数もきちんと買い揃えていたものが足りなくなってしまうたり、微妙にかけてしまっていたりして沢山の食器が捨てられた。普段、私の家にあるはずの大量のスーパーの袋が、このときばかりは足りなくなった。私の家で地震と食器の話がでてくると、必ず“モロゾフ”の名前がでてくる。あの地震の中、モロゾフの焼きプリンのガラスのカップだけは、床に落ちて割れてなかった。それどころか、ヒビが入ることも欠けることもなかった。だから今でも、あのモロゾフのカップは食器棚に並べられている。

テレビはどのチャンネルも地震のニュースと地震が起きた直後の映像が何度も流れていた。幼かった私にとっては、とてもつまらなかった。父母に「なんでなんよ！全部のチャンネルで同じことばかりしても仕方ないのに」と言ってすねていた。食器はとても沢山割れたはずなのに、いつもと同じだった。なぜかはわからない。ただ、高価な食器ばかりが壊れていつも使っている食器は壊れなかった。いつも通りのご飯も食べ終わり、地震の話も終わった。そして、その日も普通にお風呂に入れた。いつもより家族みんなが早く寝た。寝床は、父母がいつも2人で寝ていた場所。父母の2枚の布団に私と姉が入り、みんなで寝た。こんな寝方は何週間もつづいた。小さな余震があるたびに私は父に抱えられていたそう。みんなで寝ているので安心していただけ、ぐっすり深い眠りについていただけは分からないが、余震で目を覚ますことはなかった。

また、二世帯住宅の私の家は、1階に父方の祖父母、2階に私の家族が住んでいた。地震発生の日、いつもなら1階にいるはずの祖父母は、広島県の田舎へと帰っていた。そのため、祖父母は地震にあっていない。地震発生から2、3日後に色々な電車を乗り継いで帰ってきた。

・祖父母といとは...

地震発生から何日間後かに、明石に住む母方の祖父母の家といとこの家に行った。いとこの家はどのような状態になっているかを見に行った。だが、いとこの家にたどり着くまでの景色は、初めて見る光景ばかりだった。神陵台中学付近では色々な場所で火があがっていた。それは、ガス管が割れて地面にヒビが入り、ガス管にたまっていたガスが地面に入ったヒビから噴出しているので、そのガスに火をつけて燃やしているところだった。その火は、地面から40cm～50cmくらいの高さまで上がっていた。また、その火が上がっている道路は、全面車が通れないように遮断されていたため、かなりの遠回りをしなければならなかった。

また、祖父母の家ではご飯を食べながら地震の時の話をした。1月17日、祖母は地震を経験していない。祖母は、地震時に飛行機の中にいた。ハワイ旅行に行っていた祖母は、17日の夕方に空港に到着予定だったのだ。飛行機の機内放送で何度も地震の情報が流れたという。その情報も的確なものではなくあいまいなものだった。そのため祖母は、おおげさに言われていた感じがしたそう。夕方に空港に到着した祖母は、旅行会社が用意してくれたホテルに1泊した。当たり前かもしれないが、地震を経験していない祖母はどのような状況にいるのかなんて分かっておらず、飛行機内の情報だけしか頼るものがない。自分の家には電話もつながらず、ただみんなの無事を願いながらも、1人だけ生き残されたと思っていた祖母。次の日の18日。祖母は自分の家に帰ってきた。それも、色々な通れる道を探しながら走るバスに乗って。何時間かかったかは分からないと言っていた。だが、相当の時間をかけて帰って

きたのだろう。疲れきっているはずの祖母は、家に着いたとき、なによりもほっとしただろう。それは、祖父も叔父もみんな無事だったからだ。家もヒビが少しはあったくらいだった。祖母はすぐに私の家に電話をかけてきた。そして、無事に家に着いたと話してくれた。

祖父は会社にでかける途中の車の中で地震にあった。その時はまだ、舞子までしか来てなかったそうだが、阪神高速が倒れた時間帯にも近かったため、誰もが下敷きになったと勘違いしていた。祖父は、地震が起きて車が180度回転したと言っていた。しかし、何が起こったのかわからなかったからか、何を思ったのか、再び180度車を戻して会社へと向かったのだった。祖父は、会社へたどり着くまでの間に、どれほどの被害を見たのだろうか。きっと、あの地震の色々な場所の被害を誰よりも早く、自分の目で見たと思う。

そんな中、叔父はあの揺れにも気付かずに寝ていた。朝、いつも通り出勤するためにリビングに下りてきた叔父は、食器などが全部床に落ちているのを見て、泥棒が入ったと勘違いをしていた。そして、すぐに私の家に電話をかけてきた。状況を説明し、地震が起きたということを話した。電話が制限されていて、なかなかつながらなかった中がかかってきた叔父からの電話はびっくりした。そして、祖父の電話に連絡を取ってほしいと伝えられた。

・私の癖？

私は地震が起きたあの日から未だに直らない癖がある。だから、地震が起きたときと同じまま・・・。

私には、赤ちゃんのときから変な癖をいくつか持っていた。髪の毛を握って寝る癖。いつも使用しているタオルケットがないと寝られない癖。親指を吸わないと寝られない癖。真っ暗だと寝られない癖。そんな癖は保育園に通っている間もずっと続いていた。だが、来年から小学1年生という事もあって、父母が必死に直す努力をしてくれていた。だから、真っ暗の部屋だと寝られないという癖以外は直すことができていた。しかし、地震が起きたあの日以来、私は、親指を吸いタオルケットを持っていないと寝られなくなった。電気も豆電球ではなく、普通の蛍光灯をつけたまま寝ていた。母は必ず、私が眠ってしまったくらいの時間に寝室に来た。それは蛍光灯から豆電球にかえるため。私が寝たことを確認して、蛍光灯の明るい光を豆電球の薄暗いオレンジの光にかえていってくれる。父母は、私にそのような癖が再びついてしまったことに何も言わなかった。

地震発生から何週間もたって、もう余震もあまり気にならなくなった。私と姉はまた、子供部屋で寝るようになった。それでも母は、私の部屋へ必ず来て豆電球にかえていってくれた。あの日、私はいつも通り寝ようと布団に入った。しかし、すぐにいつものタオルケットがないことに気づいた。母に何度も尋ねたが『知らない』と言われ続けた。それでも一生懸命探した。布団を何度もどけて、タオルがまぎれてないかを見て、洗濯物も何度も確認した。それでもなかった。すると、姉が『逃げた時にタオルケットないとダメでしょ？だからお母さんが、逃げる時に一緒に持っていく鞆にいれていたよ』と教えてくれた。玄関まで行き、鞆からタオルケットを探して取り出した。私は、そのタオルケットをもって寢床へ行き、布団の中に入り寝た。しかし、朝になるとタオルケットがまたなくなっていた。そして、母がバスタオルくらいの大きさのタオルをくれた。「あのタオルケットの代わりにそれを持っておきなさい」そう言ってくれた。新品のタオルは硬く、さわり心地も良くなかった。だけど、それで我慢した。いつもと違うタオルに、私はなかなか寝られなかった。そんな毎日が続いた。だけど、そのうちタオルにこだわらなくなった。あのタオルケットがあれば安心して寝ることができる。でも、あのタオルケットがなくても寝られるようになっていた。地震発生日から、そんなに時間はたっていなかったと思う。

一番はじめに直し始められた癖がこれだった。ただ、親指を吸う癖や蛍光灯をつけていないと寝られない癖は直せていなかった。私は、毎日親指を吸って寝ていた。親指には吸いすぎの豆ができるほどだった。地震が起きてから、1ヶ月...2ヶ月...3ヶ月...小学校に入学しても親指を吸う癖はずっと直らなかった。ただ、父母には何も言われなかったので直そうという意識はしていなかった。地震から1年が過ぎ、2年が過ぎ...時間がどんどん過ぎ去っていった。そのうちに豆電球で寝られるようになっていっ

た。なぜかは分からない。ただ自然に豆電球で寝られるようになっていた。それでも、親指を吸う癖は直らなかった。

避難訓練や1月17日には、震災時のビデオを見せられた。そのビデオは全部同じで、避難の方法と阪神・淡路大震災時の映像だった。最初は時計の映像から始まり、揺れている建物の中の映像、ヘリコプターからとられた真っ黒な煙とところどころにでているオレンジの火の映像に、泣き崩れている人や不安そうな顔をした人の映像で、その人たちが何かを話している。神戸市役所の建物がまん中のフロアーだけ潰れる映像もなんども見せられた。そのビデオを見た日には必ず蛍光灯をつけて寝ていた。母は知らなかったのだろう。時たま、蛍光灯をつけて寝ていても消してくれていなかった。だから、そんな朝は蛍光灯の光で目を覚ました。

しかし、いつまでも指を吸い続けていられなかった。小学校3年生になったくらいに、父母に直すように言われた。「小学校5年生には自然学校もある。親指を吸っているところを友達にみられたら恥ずかしいでしょ？」そういうふうに言い聞かされた。しかし、そんなことを言われたくらいで簡単に直せるものではない。それから、また毎日のように母は私の部屋に来るようになった(小学校に入学して少ししてから、姉と同じ部屋ではなく、2段ベッドを解体して別々の部屋で寝ていた)。それはやっぱり、親指を吸わないようにするため。吸っていないかを確認に来ていたのだ。私は、初めの方、母が部屋に来るまでは寝た振りをしていた。母が部屋に来たのを確認してから、親指を吸って寝ていた。そうしないと、怒られるから。しかし、母が部屋に来る時間帯は、徐々にまちまちになり遅くなっていった。私は、母が部屋に来たことを確認できずに寝てしまっていた。そんな日の次の日には必ず、母から注意を受けた。それでも直るはずがない。生まれてきてからどれほどの間、指を吸いながら寝ていることか。しかし母は、直らないことにしびれをきらしていたのか、父からも注意をされるようになった。晩御飯を食べながら父はいつも注意をしてきた。「親指にからしを塗るぞ」や「親指に正露丸を塗るぞ」と言われ続け、「親指を吸えないように包帯を巻くぞ」なども言われた。それでも直らなかった。しかし少しずつ、親指を吸わなくても寝られるようにはなっていった。小学校3年生も終えようとしていた頃、ようやく親指を吸わなくても寝られるようになった。阪神・淡路大震災からもう3年が過ぎようとしていた。

それからは、学校の歯科検診で歯並びが気になるといわれていた。そこまで歯並びが悪かったわけではない。八重歯が2本あったくらいだ。しかし、長い間指を吸っていたせいで、少し出歯になっていたのだ。当時、歯の矯正が異様に流行りだしていたこともあって、私は歯の矯正をするようになった。小学校6年生になったころから、毎週のように矯正歯科に通った。中学校3年生になるまではずっと、矯正歯科に通っていた。矯正器具が歯肉にあたり痛くてご飯が食べられないときもあった。器具のせいでうまく話せないときもあった。歯の矯正するのは、人から聞くよりも辛かった。それでも、無事歯の矯正をし終えることができた。この時、すでに阪神・淡路大震災から9年がたっていた。それでも、阪神・淡路大震災から9年後にやっと、厄介な癖を直せたことになると思う。

だが、私は今も豆電球をつけて寝ることが多い。真っ暗な中で寝るときは、修学旅行や消防学校などの泊りのときと豆電球が切れているときくらいだ。だから、真っ暗な中で絶対寝られないわけではない。ただ、豆電球がついていれば薄暗くても部屋全体を見ることができる。それだけで私は、安心して寝られるのだ。阪神・淡路大震災から12年が過ぎようとしている。いつになれば真っ暗な部屋でも不安なく寝られるのだろう。そんなことをたまに思うが、私はあまり気にせずに豆電球をつけて寝ている。

・父母の仕事でも...

阪神・淡路大震災の次の日から父は仕事へと出かけた。母は、地下鉄も動いてないし幼かった私と姉を2人だけ家において仕事にいけないと何日間か休んでいた。

父の仕事は郵便局の保険課であり、当時は垂水郵便局に勤めていた。しかし、あの地震が起きてから1ヶ月ほどは、保険の仕事などしていらなかった。そのため、郵便配達の仕事を手伝っていたそう。

あの地震が起きてすぐに郵便！？なんて思うかもしれない。でも、ただの手紙やはがきを配達していたわけではない。多くの支援物資が避難所に届いたということは誰もが知っているような話だが、その支援物資を運んでいたのは郵便局である。垂水郵便局前には、毎朝大型トラックが何台も止まっていて、その荷物を降ろしても置く場所がないくらいだったという。そして、その荷物のほとんどが水だったそう。阪神・淡路大震災では、水がないという情報が多く流れたからだろう。大手の宅配業者も水などは配達できないと言って、依頼されたそのままの形に切手を貼って郵便局にその荷物を送ってきたという。そのため、郵便局ではレンタカーをかりて水などの支援物資を避難所から各家庭まで配達したそう。そのため、普段からそんな重労働をしていない郵便局員は、重たい水を何度もマンションの5階や6階まで運ぶのに苦労したと言っていた。

また、大阪からもあの赤い郵便局の單車に乗って、遠征に来たそう。朝早くから大阪の郵便局を出発し、17時18時になるとまた、乗ってきた赤い單車に乗って大阪まで毎日帰っていったそう。大阪から遠征で来てくれた郵便局員の人はこの地域の土地をまったく知らない。だが、地図を各個人に渡し少しの説明をただけで、手紙やはがきなどの郵便物をすぐに配達してきてくれたそう。そんな人たちを見て父は、「やはり郵便局員だからか、まったく知らない土地のはずなのに地図1つだけで配達にいけるのは本能的なものがあるのかな？土地勘がするどい」と言いながら、普段土日が休日のはずなのにこの時ばかりは土日関係なく毎日仕事に行っていた。

母は、何日間か仕事を休んでいたが、電話で呼び出されたという。阪神・淡路大震災では、多くの消防士や警察官が仕事のために家に帰れなかったというのもよく聞くはなしだが、電話交換という職業も朝から晩まで仕事場に缶詰にされ、常にかかってくる電話の対応をしていたそう。母は当時、衛生研究所で電話交換をしていた。仕事に呼び出されてからは、地下鉄が板宿までしか動いてなかったために歩いて兵庫にある職場まで通っていたそう。

・今

阪神・淡路大震災という地震は、沢山の人の命を奪い神戸に大きな傷跡を残した。そして、12年目を迎える今でも人々の心には癒えない傷が残っていると思う。しかし、その傷を引きずってばかりはいられない。だからと言って、忘れてもいけないし心の中に閉じ込めていてもいけない。今では、あの地震を知らない子供達も沢山いる。この舞子高校には環境防災科というあの地震が教訓となってできた学科もある。私はその学科に入学できてよかったと思う。なぜなら、地震などの自然災害は防ぐことができるという事を知った。ボランティア活動もなかなか手が届きにくく思っていた中学校のころとは違って、大きく足を一歩踏み出す事ができた。個人のプライバシーが厳重に保護されようとしているこの社会でも、やはり近所付き合いや人々のネットワークの大切さも、地域の助け合いがどれほど重要なことかも学んだ。この学科に入学してきたからこそ、阪神・淡路大震災の当時のことを思い出し、今語り継いでいく事ができたのだと思う。この学科に入学したから学べたことが私には、沢山ある。だから私は、この学科を卒業したからこそできることをしたい。そして、私が幼いころからもっていた夢。養護教諭になりたいという漠然とした夢でなく、養護教諭になった上での夢も持つ事もできた。それはやっぱりこの学科に入学し、いろんなことを学んできたからもてた夢だと思う。私は、その夢をかなえて、阪神・淡路大震災の経験と教訓を生かした仕事をしたい。

あの日の記憶

神戸市垂水区福田町

宮内 奈苗

- 1月17日 -

1995年1月17日阪神・淡路大震災が起きた。あの日は確か3連休明けだった。本来なら幼稚園があったはずだった。

<<ゴゴゴゴッ・・・・ドッカ————ンッ！！！！>>

当時私は幼稚園の年長組で、地震なんてものは、どんなものが全く知りませんでした。なので、ベッドの中で激しく揺れた時は、戦争が起きたのかと思いました。

地震の揺れで目が覚めると外はまだ薄明るく、カーテンから入ってくる外の明かりが薄気味悪いような気さえしました。地面から突き上げるような揺れのあと、父が隣の部屋から出てきました。「大丈夫！？下に（1階）降りるよ。」と声を掛けられました。父も少々困惑していた様な感じでした。2段ベッドで寝ていた私と妹は父の後ろについて、電気の点かない真っ暗で急な階段を下りました。

当時、私には6歳下の、生まれて5ヶ月になる弟がいました。母は弟を守るように抱きかかえて、家の一番太い柱の下にいました。父はまたホッとしたように「大丈夫？」と声をかけていました。

それから後、家族5人は家の前にある駐車場に一時避難しました。駐車場に行くとそこにはすでに近所の人たちが何人か集まりだしていました。近所には消防士の人が2人いましたが、もうその時点では2人はいませんでした。どうやら消防署に出動していたようです。

その後も震度5を超えるような余震が何度か続きました。余震が起きるたびに、駐車場に集まっていた人たちが「またや...」「あぁ～怖いわ...」と口々に言っていました。そのときに、妹と私はこれが地震なのだとすることを初めて知った記憶があります。

それから後、駐車場においてある車に乗り、垂水区の神陵台に住む祖父母の家に車の中から電話をかけました。しかし、回線が混雑していたためか電話は通じませんでした。そこで私たち家族は祖父母の家に向かうことになりました。その移動の最中もラジオをずっと流していたのですが、「近畿地方に大きな地震が発生しました。」という大まかな情報しか報道されませんでした。

そして祖父母の家に着きました。中に入ってみると、庭の石畳に亀裂が入っており、食器棚は戸がガラスだったため、中に入っていた食器は全て床に投げ出され、ガラスはほとんどと言っていいほど割れて飛び散らかっていました。私たちの家は、炊飯器が壊れたのと家の壁に亀裂が入っただけのため、祖父母の家の悲惨な状況を目の当たりにして、ショックをうけた覚えがあります。そして肝心なことに、そこには祖父母がいませんでした。あとで聞いてみると、祖父母も私たちのことが心配で福田に行っていたのです。行き違いになりましたが、祖父母が家に戻ってきたときは、みんなが安心して胸をなでおろしていました。

そして、祖父母と合流した後、父が、“会社の金庫が心配だ。”ということで母と一緒に、三宮にある会社に2人で向かいました。父に聞いた話だと、行きはとてもすいていたそうです。しかし長田の方に進むにつれて被害は悲惨なものだったそうです。会社に着くと周りのビルも完全に倒れていたり、半壊していたりしたそうです。父の会社も倒れかかっている、中にあるエレベーターはもちろん止まっていたそうです。そこで父は階段で7階まで上り、金庫から大事な書類や契約書などを持って帰ってきました。その時も余震はずっと続いていたそうです。帰り道、行きの時よりも道路は混んでいて、帰るのに

4時間ほどかかったそうです。そして、途中長田の町を通った時、父はすごくショックを受けたと言っていました。道路を挟んだ両側は火の海になっていて、救助に向かっていた消防の人たちもみんな放心状態で立ちつくしていたそうです。「今まで育ってきた神戸のまちが、一瞬にして姿をかえたことが本当にショックだった」と父は言います。

< 祖父母の家での生活 >

それから後、しばらくの間は祖父母の家で生活をしました。神陵台には水がなかったため父や母は交互に毎日水を汲みに行っていました。

祖父母の家から一番近い施設で給水することができるのは垂水区役所でした。私も何回か両親にくっついて水を汲みに行きました。やはり区役所は多くの人たちでごった返していました。中には水を汲む人ばかりではなかったと思います。

地震が起きた当日両親は父の会社に行ったりと、ばたばたしていたのでお風呂に入ることができませんでした。実際にお風呂に入ることができたのは地震が起きてから3日後でした。しかしお風呂に入るにも一苦労しました。福田の家で通じていたガスが、神陵台では通じていなかったのです。そこで電気がかろうじて通っていたので、区役所から汲んできた水をポットで沸かし、それをお風呂に溜めて入ったことを覚えています。

それから10日ほどは、ほとんど祖父母の家で過ごしていました。しかし、電気以外のガスや水道といったライフラインは全て止まっていました。ただ、その時はまだ地震がどれほどの規模で起きたかということ把握することができませんでした。またそれと同時にライフラインを信用しきっていたため、これからどうなるのかということさえ分からなかったし、心配もそれほどしていませんでした。

< 環境防災科に入って家族で防災（ライフラインのことなども含め）のことについて話をする機会が増えたのですが、震災当時の話を両親とすると、「本当にライフラインの重要さをあの時知った」と言います。 >

- 震災発生から2日目 -

祖父母の家では電気が通じていたため、テレビを見ることができました。両親は、会社や水を汲んでくると、まだ赤ちゃんだった弟の世話などで忙しかったため、地震が起きてから最初の何日かは祖父母に面倒を看てもらっていたのを覚えています。祖父母はテレビから流れてくる地震のニュースを見てよく「神戸はどうなるのだろうか...」とこぼしていました。私も日に日に増えていく震災で亡くなった人たちやケガをした人、行方不明になっている人たちのニュース、また高速道路が柱から折れ傾いている映像、長田の町の火災の状況・亡くなられた方の名前が呼ばれる放送を見て、まだ幼い子供ながらに、「すごく大変なことが起きている。悲しい...」という気持ちを持ちました。

それから後、両親は、今後の食料など生活していくのに必要なものを集めなければならないということで、買出しに行くことになりました。前の日に三宮に行ったとき、長田の方の被害がすごいということを知っていたため、逆方面に行こうということで、今はない二見のダイエーに家族みんなで買出しに行きました。

当時生活していく中で困ったことがありました。1つはガスが出ないこと。2つめには、弟のオムツでした。なので、ダイエーでオムツを大量に買いました。またガスボンベの予備も買ったと聞きました。

他の人も考えることは同じで、ガスボンベなどはすぐに売り切れになったそうです。その後も、いろいろな場面で制限される不自由な生活は続きました。

震災当日から父はとても忙しく動いていました。1つは家族を守るために、水を確保したり、食料を調達したりということでした。2つ目は会社でした。父は当時、会社にいる人たちの給料の面倒をみていました。25日までに400人分の給料を計算しなければなりませんでしたが、しかし、地震が起きてしまったため、会社にあるコンピュータはどれも使うことができません。そこで父は3日間ほど不眠不休で400人分の給料を電卓と紙で計算していました。

< 大阪での生活 >

- 地震発生から約1週間後 -

地震が起きてから1週間ほど経った後、父の会社では社員全員分の住むところを確保していました。そこで私たち家族は、余震がまだ続いていて不安な生活が続いていたため、父の会社が確保した大阪のマンションに一時引っ越すことになりました。

地震が発生してから約10日、大阪に引っ越すことになった私たち家族は神戸の家を残して、朝早くに出発しました。祖父母も一緒にいくことになったので車2台で行きました。車には布団や食器などの生活用品をたくさん乗せたのであまりスペースに余裕がなく車に乗ったのを覚えています。それから移動の途中、妹がトイレに行きたいと言って、途中にあるコンビニで借りようとしたのですが、開いてある店がありませんでした。それから途中にあるガソリンスタンドを訪ねても「トイレを貸すことはできない」と言われ貸してもらえませんでした。多分私たちにトイレを貸したら、他の人たちにも貸し出さないといけなくなるからだと思います。

大阪に行く途中で長田のまちも通りました。私と妹や祖父母は震災後にこんなに遠出をしたのが、姫路の二見以外にはなかったのが、震災で一番被害の大きかった町を見て私たちはショックを受けました。母は「大阪に着くまで寝ときなさい」と言いましたが、私はあまり寝ることができませんでした。辺り一面の家屋は倒れ、小学校や中学校は避難所になっていたため運動場には人がごった返していました。その後、結局大阪のマンションに着いたのは夕方でした。高速道路が一切使えず下の道を通ることしか出来なかったこともあり、朝の6時前には家を出たのにも関わらず、大方10時間は車に乗りっぱなしでした。

着いたマンションは外観が茶色で、ホールは白だった記憶があります。マンションは何階建てかあまり覚えていないのですが、自分たちが住む部屋にはエレベーターに乗っていったのを覚えています。ドアを開けて中に入ってみると、間取りは3つの部屋から来ていました。1つはダイニングキッチン、他の2つは4畳と6畳の部屋がありました。4畳の部屋は祖父母、6畳の部屋は私たち5人が使いました。今まで住んでいた家とマンションの雰囲気が少し違ったため、少々の戸惑いはありました。

その後電話が復旧したので神戸に残っている親戚の人や友達に連絡をとったりすることができました。それから祖父母は住み慣れた家の方が、環境が落ち着くということ1ヶ月ほどで神戸に帰りました。私たち家族5人は約2ヶ月の間、大阪でのマンション暮らしが続きました。

大阪にいる間も父は仕事をしていましたが、神戸の事務所が震災でつぶれてしまったため、大阪に急遽仮に建てた事務所にしばらくの間通っていました。

当時私は大阪のどこに住んでいるかということは全く知らなかったのですが、最近になって聞いてみると、天王寺に住んでいたと母は言っていました。

天王寺で住んでいるその2ヶ月間は神戸の幼稚園に通えなかったため、父が会社に行っている間は母と私たち兄弟は、毎日天王寺動物園やマンションの裏の公園で遊んだりしていました。母は車で移動すると経済的に負担がかかるということで、住んでいるマンションから徒歩でいけるところへ毎日連れ出してくれました。また駐車場が設備されていなかったため、駐車違反にならないように毎日違う場所に停めていました。

最近になって話を聞くと、母はその頃まだ幼かった3人の子供たちが、新しい土地で不安にならないように毎日人の多いところへ連れ出すなど、いろいろな面で気を遣ったと言っていました。現に私と妹はその2ヶ月間ずっと幼稚園に行けなかったのですが、母や祖母がぬり絵やアニメのビデオを借りてきたり、毎日楽しかったことを覚えています。

しかし不安なことも多々ありました。地震が起きてから2週間たっても3週間たっても余震は収まらなかったのです。余震が起きると一瞬ヒヤッと感ずるのですが、それほど怖いと思うことはありませんでした。

また、住んでいたマンションの裏に火事で半焼していた木造の一軒屋があったのですが、そこから毎「うう～…」という呻き声が聞こえてきていたのです。私と妹はその声がとても気味が悪くて嫌がっていました。母や父も私たちを一軒屋が見える部屋には入れさせませんでした。

今回この“語り継ぐ”を書くにあたって、両親や友人から震災の時の話をいろいろ聞くことが出来たのですが、母は震災の時の話を聞くと泣いていました。やはり震災という特別な環境の中で、父が会社に行っている間は、自分が家族を守らないといけないということや、まだ幼かった子供たちを不安がらせないためにも、自分がしっかりしなくてはという想いがある、毎日が緊張の日々だったと言っていました。

- 地震発生から2ヶ月後 -

私たち家族は神戸の家に帰ることが出来ました。私は幼稚園のお遊戯会にも卒園式にも出ることは出来ませんでした。妹は幼稚園に通いだして友達とも連絡をとることができました。父は神戸の会社に通勤していたのですが、電車が住吉までしか出ていなかったのも、そこからは代替バスをつかって母に迎えに来てもらい帰ってきていました。

大阪で暮らした日々は私たち家族にとって忘れられない2ヶ月間になりました。

- 今 -

そして今、私は舞子高校の環境防災科で多くのことを学んでいます。中学校の時に環境防災科に入ろうと思った初めのきっかけは中学校のときから盛んに行っていたボランティア活動をもっと活発に行っていきたいということ、そして、将来は防災や福祉方面など人の役に立つ仕事に就きたいという考えからでした。そういう考えが出てきたのは、やっぱり阪神・淡路大震災の経験があったからこそだと私は思います。地震が起きたことによって失ったこともたくさんありますが得たものもたくさんあります。

- 夢 -

私は今保育士になりたいと思っています。

昨年は、自然災害が多発し、高齢者など「災害時要援護者」という社会問題が広く認識された年でもありました。しかし、災害時要援護者問題の中でもっともおそろかにされているのが「乳幼児」だと私は思います。私は、このままでは乳幼児が、これからの災害時要援護者支援の対象にさえならないのではないかと不安に思います。実際に阪神・淡路大震災の時もそうでした。

高齢者、障害者、乳幼児らに対しては、平常時は福祉部門が対応していますが、災害は防災部門という業務分担のため、福祉部門には「防災」の観念や知識が乏しくなります。逆に、防災部門には福祉部門のノウハウがありません。災害時要援護者問題がなかなか進展しないのは、防災部門主導で対応しようとしている行政側の限界でもあります。この壁を打開するには、災害時要援護者の所在やニーズ、能力をよく理解している福祉部門と、防災に蓄積がある防災部門とが連携して、「災害時の福祉」という分野を確立することが大切だと思います。その際には、災害時要援護者自身と、行政関係者・ボランティア・支援者等を含む福祉・防災関係者双方のリスクコミュニケーションが不可欠ということも思いました。

そこで私は防災に観点をあおている保育士になりたいと思っています。

生きていこう

神戸市長田区上池田
森崎 龍太

地震直後

5時46分、長田区を襲った阪神・淡路大震災は僕に多くのショックや経験を与えました。僕はあまり記憶にないので母に聞いたところ、あの震度7の地震はまず初期微動が起き小さく揺れ、そこで母は目を覚ましました。そして、「ドーン！！」という言葉に表すことができないほどの音がしました。その時、地震とは違うテロとか爆撃だと思ったそうです。そして、数秒「シーン・・・」となり横揺れが始まったのです。しばらくして隣のOさんから懐中電灯がベランダ越しに僕たちのところへ渡ってきました。父は1階に家族の服を取りに行ったのですが、こんなときに洋服なんて選んでいる場合ではないし、真っ暗の中なので手に触れた服を適当にもって上がってきてくれました。僕たち子どもはパジャマの上から体操服を着てその上からジャンパーを着ましたが、父は手探りだったので背広を取ってきてしまい、パジャマの上から背広を着ていたそうです。近所の人たちに亡くなった方はいなかったけれど、頭から血を流してしる人はいました。避難所の中学校へ行く途中の道の地割れがひどすぎて驚きました。中学校へ着いたのはよかったのですが、まだ門が閉まっていた前で多くの人たちが待っていました。

当時、2階に兄と姉と3人で寝ていました。僕は強烈な縦揺れと同時に目を覚ましました。まだ、幼かった僕は何が起きたのか全くわからずとてもおびえていました。直後、母と父が飛んできて揺れがおさまるまで布団に入っていました。家の近所の付き合いが本当によかったからか、近所のおばさんが拡声器で「窓を開けてください」「大丈夫ですか？」というような声が聞こえてきて少しほっとしました。しかし、家の中はぐちゃぐちゃで、とても歩ける状態ではなかったので父がおぶって外まで出してくれました。1階はすごかったです。テレビはぶっ飛んでいるし、食器類はすべてとっていいほど棚から落ちてバリバリに割れて飛び散っていました。下駄箱の上で飼っていた金魚も金魚鉢が割れて外へ飛んでいました。大変なのは人間だけではないんだなとその時思いました。そんなにたくさんの被害が家の中で出ているにも関わらず1つだけ不思議に思ったことがありました。それはベッドです。当時は2段ベッドで下に姉が寝ていただけでした。そのベッドの1段と2段はねじもなにも使わずにただ1段の上に2段目が置かれているものだったけれど地震の揺れでもビクともしないで立っていたのです。ベッドより大きなタンスなどは、放り投げられたかのように飛ばされているのにとってもすごいと思いました。

外にはもうたくさんの人がいてみんなが無事でとても安心しているようでした。隣の家のお兄さんがラジオを持っていたのでみんなで聞き入っていたことを覚えています。僕の家は長田区の少し高いところにあるので新長田などを見下ろすことができますが、当時は悲惨な光景に変わっていました。あちこちで真っ黒な煙が上がっていて、上空には何台ものヘリコプターが見えました。新長田付近は火災がひどかったのでよく本など阪神・淡路大震災を象徴する写真として使われていますが、僕はそれを写真ではなく実物を見ていたのです。とても焦げ臭いにおいがして今も鼻に残って火事の臭いをかぐと震災がよみがえってきます。

当時の家の被害は半壊で壁にひびが入って、瓦が落ちて、ライフラインが途切れたぐらいでしたが家に戻るという発想は誰もしませんでした。

僕たち家族は一時近くの中学校に避難しました。僕たちが行ったらもう体育館はいっぱいだったので、急遽視聴覚室を空けてもらってそこに昼ごろまでいました。そこには、たくさん友達がいて子供の僕は友達といることだけで嬉しくはしゃいでいました。今思えばあそこは遊ぶ場面ではなかったなと反省しています。

祖母の家にて

家の全ての戸がしっかり閉まらない状態なぐらいゆがんでいました。家自体が沈んでいて、落ち着いてから床下に潜って土をいれてその問題点を改善させました。その作業には祖母は何百万もつぎ込んだようです。しかし、今になって聞いてみるとその値段の高さのわりにまだ今もしっかり全部は直ってないのでだまされた感があります。

祖母の家を出て少しいったら一方通行の道があるのですが、そこも震災のときは関係なく二車線になっていたようです。近くに崩れかけた崖があったのですが、それは国と県が協力してコンクリートで補強してくれました。

寝るときはみんな一緒に1階の畳の部屋で雑魚寝していました。みんないつ何が起こるかわからないのでパジャマを着て寝ることができず、いつでも動けて避難できる状態だったようです。

震災が起きた次の日かその次の日にはもう新聞がポストに入っていたというのだから驚きました。記事内容は当たり前この地震でいっぱいでした。その時点ではまだ死者は6000人と出ていなかったらしいけれど、今から死者が急増することぐらいはみんな知っていました。案の定日に日に死亡者は増えていきました。それを見て母は「まだ増えるか。災害って恐いなあ」と涙ぐんでいました。

地震がおさまり復旧期にはいったら東京のいところが手伝いにきてくれました。とても気持ちが楽になったと言っていました。そのいとこの1人が言うには、阪神・淡路大震災の前の日の月が異様なほどオレンジのようなピンクのような色をしていたということです。それが前兆だったのかはさておき、僕は今でもオレンジがかった月を見ると恐怖感を感じるときが多々あります。

前日が成人式の代休だったので、両親はそごうに買い物にっていました。そこではスーツを予約したのですが、次の日地震でごった返して母はもう多分注文した品は届かないだろうと諦め半分だったようですが、かなり経ってから家に届きました。そして、話は戻して前日晚御飯を家族一緒に食べ、暇になったので、母と父はビデオ屋で「ホームアローン」を借りてきて深夜2時ごろまで見ていたそうで、両親の就寝した約4時間後にあの地震が起こって一瞬にして、たくさんの人の命を奪いました。

昼を過ぎたら近くの祖母の家へいきました。その地域は、電柱が倒れていなかったのも電気が通っていました。しかし、祖母の家の近くの家を見たときに僕は驚きを隠せませんでした。それは、真二つになっていて中が丸見えになった家屋があったことでした。今はきれいな家になっていますが、その前を通ると当時の光景が頭をよぎります。当時潰れた家や壊されている家のあの独特の木の臭いみたいなものがそれもまた非常に鼻に残っていて、今でも工事現場などの前を通ったりしたら「うわぁー」と思い、当時の光景がよみがえって心が締め付けられるように痛くなります。あと、よみがえるといったら今もたまに震度1か2ぐらいの地震が起こるときがあります。起こったときそんな小さい揺れでも僕は冷や汗がでて心臓がドクドクいい、少しの時間その場から動けなくなるときもありました。そんなことでは環境防災科に入って学んできた防災が生かせないので、しっかり自分を持って、災害時、特に地震がきたときには自分が家族を守ってみせるぐらいの気持ちで行動していけるようにしていきたいです。

祖母の家に滞在したのは2ヶ月ほどで、その期間はずっと救援物資頼りの生活をしていました。朝一に僕と兄が近くの中学校へ救援物資ももらいにいきました。弁当やカップ麺、パンなどが主でした。僕は朝からカップ麺を食べていたので母に何度も注意されたのを覚えています。日がだんだん過ぎていくと家族の中で役割というのが自然に決まってきました。僕の仕事は、朝は救援物資をとりに行くのと、給水車が家の前まで来てくれるのでポリタンクを両手に持って行っていました。その給水車のナンバープレートは北海道ナンバーでした。全国から応援を受けていることをそのとき知りました。その給水車を担当する人は変わらずお兄さん4人ぐらいで毎日来てくれました。僕も毎日行っていたので親しくなり、その人たちとしゃべるのが楽しみで仕方なかったです。バレンタインの2月14日には明治のチョコレートをもらいました。いい人たちやなと思いました。

僕は自衛隊のお風呂にも入れさせてもらいました。長田区の今はない大橋中学校という中学のグラウンド内に、自衛隊がとても大きなお風呂を用意してくれて父と入りに行ったのを覚えています。それは緑

色のテントの中にあり、入ってみるともうたくさんの人が疲れを癒しにお湯に浸かっていました。そこにはいつもの笑顔が戻っていました。自衛隊には個人的にもう1つお世話になりました。それは、炊き出しです。近くの小学校に自衛隊が来て豚汁などを僕たち被災者に作ってくれました。そこにも人がいっぱいいて、最後のほうで行ったので少ししか食べることができませんでしたが、自衛隊の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。

少しの間保育園は祖母の家から通いました。保育園は新長田のほうにあったので母の自転車の後ろに乗っていた僕の目にも悲惨な光景が見えました。所々には空き地に花束が供えてありました。それを見るたびに母が泣ぐんでいたのを、僕は見ていて胸が締め付けられるような感じでした。震災前は保育園にいく道は何通りかありましたが、震災後はその道が家々に通せんぼされ、とても歩けるようなところではなかったです。その中でも1つだけましな場所があってそこを通過して保育園へ行っていたけれど、その場所も両側の家が道路に向かって崩れていて、僕と母は2つの家の瓦を足で踏んでいかなければなりませんでした。毎日「ごめんなさい」と言って踏んでいたのを覚えています。僕が通っていたその保育園も地震の影響で取り壊され今は住宅地になっています。取り壊されることを知って、みんなで取り壊し反対の署名を集めたこともありました。自分が行っていた保育園が地震のせいになくなってしまってとても悲しい思いをしました。保育園からの家が燃えて全焼したり、友達のバイク屋も全焼して当時焦げた硬貨を見せてもらいました。運がよかったといえいいのか僕の知っている人は地震で誰も亡くならずにすんでよかったけれど、やっぱり地震が残した傷跡はひどくまだ引きずっている人もいます。

僕の家はタクシー会社をしていますが、その会社も地震で駐車場を支える鉄筋が曲がったりなどしてひどく被害を受けました。会社が被害をこうむったために僕の家族や親戚はとても悲しいことに直面しなくてはなりませんでした。会社が家から近くにあるので、祖父はいつも会社で車を置いて帰ってきます。しかし、地震で会社のガレージが使えなくなったせいで車に乗って帰ってこなければなりませんでした。家のガレージは家の地下みたいなところにあって玄関とつながっていました。祖父はガレージに車を置き、何を思ったのかエンジンをかけたまま上へ上がってしまったのです。その後、排気ガスが出続けて戸の隙間から家の中に煙が充満し、祖母祖父ともに一酸化中毒で亡くなりました。それが、震災が起こった年の3月3日のことでした。その事故はニュースにも放映されて、僕はなんかそのとき地震に祖母や祖父が殺された感じがとてもして、その後地震をうらみ続けました。あの地震が起こらなければまだ生きているはずなのに...ととても悔しい思いです。

僕が通っていた保育園は西神戸 YMCA 保育園というところです。そこは日常的にもボランティアをはじめ色々なことをしている組織です。当時は、そこに全国各地から来られたボランティアの方々の本拠地的な場所となっていて、みんな紙に名前や団体名を書いて作業へ向かったといえます。僕たちが毎日使っていた体育館などは救援物資などでいっぱいでした。しかし、今その建物は姿を消しています。なぜかという地震被害による建物の老朽化もありましたが、大部分は区画整理が撤去理由でした。

この環境防災科ができたきっかけの1つも、僕がこの環境防災科に入学を志望した理由の1つもあの地震があったからです。この学科に入学してあの恐ろしい地震についてもっとたくさんのことを知って自分自身の知識にして、まずは身近な家族や友達にそれを伝え、またこのような災害が起きても少しでも被害軽減させることができるようなことをしたかったのです。

今年でもう震災から11年経ちました。僕は、人々を苦しめているあの地震からもう11年過ぎたのかと思うと、とても早く感じました。人によって感情は違うと思いますが、逆に家族などを亡くした人たちはまだあれから11年しか経っていないのかと思うと思います。僕は当時保育園の年長で、今年小学校に上がれるとウキウキしていた矢先に起こった阪神・淡路大震災ですが、今僕は大学受験を目の前にした受験生にまで成長しています。

地震が起こってから中学3年まで僕は全然環境防災科という存在も知らなかったし、この学科に入学することなど思ってもいませんでした。しかし、今は入学してよかったと思っています。なぜかという、正直言ってこの環境防災科に入学しなかったら、地震のことをまた一から思い出してどうこうして

いなかったと思います。この学科に入っていなかったら、どこかの普通科で毎日平凡な日々を過ごしているんだろうと思いますが、入学したらたくさんの特典がついてきました。普通科ではまず 100 パーセント体験できないライフライン・消防・警察・自衛隊・心のケアなど、いろいろな種類の人たちが僕たち相手に真剣に当時のことを思い出しながら話をしてくれました。専門の方たちばかりだったので、とても詳しく教えてもらうことができ、僕たちの興味心を惹きたててくれました。講師の方が来校してくれて話しているとき、僕たちだけのために大人たちが動いてくれているんだなと思って、とても優遇されていると思うのと貴重な経験をさせてもらっているのだなと思います。

僕は地震のことをそこまで鮮明に覚えていなかったのですが、両親に聞いてみました。父は震災が起こってから仕事とは別に新長田の商店街で復興活動に参加していたので、とても参考になることを教えてもらいました。母もいろいろなことを覚えていてためになりました。父の復興活動は 10 年を歯止めに関わりにしたと言っていたけれども、時々集まりに足を運んでいます。父が僕に言った言葉で心に残っている言葉があります。それは、「父さんは生きているうちに阪神・淡路大震災が起こったから生きかたが変わった。それを抱えてこれから生きていかなアカン」という言葉がとても印象に残っています。僕もそういうような生き方をしたいと思いました。

僕は小学校のときから『しあわせ運べるように』を歌っていました。あの歌詞にある「亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていこう」というフレーズに僕の心はものすごく動かされました。あの歌はこれからずっとあの地震と一緒に語り継いでいってほしいものと思います。

僕たちで震災を覚えている年代は最後といわれているのですが、この年代も僕たちのように専門的にやっていないかぎり当時のことを日に日に忘れていくと思います。20 年、30 年後に「あーそんなことあったんや」とかそういうことにならないように、僕はこの環境防災科で学んできたことをしっかり頭に記憶させて、将来の子供などにも真剣に当時のことを話し、本当の「語り継ぐ」を実現させたいと思っています。

僕の震災体験

神戸市垂水区南多聞台
山本 竜平

1995 年

1995 年。そのころは友達と遊んでいた記憶や幼稚園に行くのがとても嫌だったことくらいしか記憶にない。震災体験といっても垂水区に住んでいたので比較的被害も小さく、地震という現象もなぜ揺れているのか何がそんなに危険なのかもよくわからなかった。しかし 11 年たった今でも 1995 年の記憶として僕の中で阪神・淡路大震災は忘れられないものとなっている。

震災体験

阪神・淡路大震災が起こった 1995 年 1 月 17 日僕はまだ幼稚園の年長だった。父と母と僕の 3 人家族で、そのとき母のお腹の中には妊娠 8 ヶ月の弟がいてもうすぐ兄になるということを自覚し、なんでも自分でできるようにならなければいけないと思っていた頃だった。

地震が神戸のまちを襲った 5 時 46 分、僕はまだ布団の中で寝ていた。地震の揺れでは目が覚めず何か息苦しくなり目が覚めた。父親が僕と母親の上に覆いかぶさるようになっていたのだ。僕は何が起きたのかわからず母親に「どうしたん？」と尋ねた。母は「さっきから家が揺れているからじっとしとき」と答えた。僕はなぜ家が揺れているのかがよくわからなかったけど、何か大変なことが起こっているということは幼いながらに感じていた。そのときの恐怖感は今も覚えている。

揺れがこなくなり父が寝室のテレビをつけた。そしてそのブラウン管の中を見たときの映像は今でも鮮明に頭に焼き付いている。ほとんどの建物は倒壊し高速道路もひびが入り大変なことになっていた。父と母も最初は冷静だったが映っている映像が長田のまちと気づいてからはとても驚いており、その父と母の様子を見て僕の中の恐怖も大きくなっていった。僕の家は垂水区のマンションで被害はほとんどなかったが飾ってある置物などは床に落ちたりしていた。外が明るくなり父の仕事場が長田にあったので、父は「仕事場が気になる」と言って、家を出て行った。その間家の中でお腹の大きい母親と 2 人で、自分が母を助けられないといけないう責任感と、父がいない心細さでいっぱいだった。しかし父は渋滞と道が崩れていて仕事場まで行けずすぐに帰ってきてとてもほっとしたことを今も覚えている。

震災体験で一番印象に残っていることは近くの水道局まで父と水をくみに行ったことだ。母は妊娠 8 ヶ月で安静にしておかなければいけなかったのも、我が家の水汲みは僕と父の仕事だった。バケツを持ちながら長い行列に並んでいた。そのとき僕は普段は何も考えず使っている水でこんなに行列ができるということに驚き、水の無駄遣いをしてはいけないと思った。

父も会社に出勤し、地震で幼稚園が休みになった僕はおなかの大きい母と家の中で 2 人の生活が始まった。地震で揺れるので僕は外に遊びに行くこともできず家で退屈しながら過ごしていた。画質が悪くなっていたがテレビが映ったのが唯一の救いだった。テレビでも昼間震災のことばかり放映していた。見ていると死者の数、けが人の数に驚かされた。僕の家族や親戚などは誰も怪我をしてなかったので本当によかったと思った。買い物にも行けずガスが出なかったのも料理もできなかった。父の友人がインスタントの食料などを届けてくれたことを覚えている。

24 日の早朝、余震で妊娠中の母は破水をしてしまい救急車で運ばれた。父も一緒に乗り込み僕は早朝から近所の家に預かってもらうことになった。この出来事で僕の中での震災体験が少しずつつらいもの

となっていく。母は入院することになり父は仕事があるので、僕は母の両親がいる高槻に疎開することになった。まだ1人で親元を離れ泊まったことがなかったのでとても不安だった。祖母が電車で神戸まで迎えに来てくれて一緒に高槻へと向かった。高槻の祖父の家では父も母もいないのでとても寂しかったが、そのことで僕に気を使い祖父も祖母もすごく優しくしてくれた。テレビでは震災のニュースばかりで父と母の安全がとても心配だった。僕を楽しめるために祖父がレンタルビデオショップにビデオを借りに連れて行ってくれた。祖父の家でクレヨンしんちゃんのビデオをひたすら見ていたことが記憶に残っている。

29日の朝弟が生まれたと神戸から連絡があり祖母と神戸に帰ることになった。震災で破水し予定日より3ヶ月も早く生まれてしまった弟は、プラスチックのケースの中でいろんな管をつながれていた。その姿を見た僕はなんともいえなかった。未熟児で生まれた弟がこんなに頑張っているのに僕も頑張らないといけないなと思った。

僕は次に父の両親がいる鳥取に連れて行ってもらうことになった。高槻に行くときより不安で、鳥取の家に祖父が家の横の畑で野菜を育てていたので、行ったらまた僕の嫌いな野菜を食べなければいけないということも考えるととても憂鬱だった。

鳥取では疲れからか熱が出た。ソファに寝ながらテレビを見ていると熱のせいで視界が揺らいでいた。祖父が病院に連れて行ってくれた。病院の待合室にいるときに気分が悪くなってはいてしまった。とてもつらかったが祖父の家に帰ってからも泣かなかった。祖父は僕を心配し僕の好きな晩御飯を作ってくれた。祖父や祖母の前では涙を流さないようにしたが夜母親と電話したときには我慢していた涙がこぼれてきたことを覚えている。夜寝るときもとても寂しく心細かった。しかし鳥取ではトイレに行けば水を流せる、お風呂も入れる、ご飯もとても温かくおいしい。このような当たり前のことがとてもありがたいことに感じた。

普通の毎日

鳥取から帰省し、幼稚園に通うといった普通の毎日が始まった。友達に会えたことがとても嬉しかった。震災前と何も変わらない毎日が始まったがとても新鮮なものに感じた。しばらくたって弟も病院から退院してもよいということになり4人家族としての生活もスタートした。弟のことで父も母も手がいっぱいであり僕はかまってもらえなくなった。震災時も疎開していてかまってもらえなかったので少しストレスもたまっていた。そのストレスは友達とボールを蹴ったりして遊び解消していたのだと思う。

友達と遊んでいるときに地震の話になったことがあった。僕の家は特に被害はなかったけど同じマンションでも8階に住んでいた友達は炊飯器や食器棚が落ちてきたり移動したりしたというのを聞いて少し驚いた。

震災が起こったということは日経つに連れ薄れていって、家でも地震の話を家族でまったく聞いていいほどしなくなった。というより震災後家族で地震の話をした記憶がない。ただ母に、外で友達と遊んでいるときに地震が起こったらどこに逃げるかを言われたことは微かに記憶に残っている。

幼稚園では卒園式の練習をしている時期だった。小学生になるんだという期待を胸に毎日練習に励んでいた。

小学校入学

1995年4月に小学校に入学して友達もたくさんできて毎日楽しく過ごしていた。小学校で避難訓練を行ったときに友達とふざけていて先生に怒られてしまったことがあった。神戸で大きな地震がおこっ

たことなど、小学生にあがりたての僕たちはすっかり忘れていたのかもしれない。あの時避難訓練は「授業がつぶれるからしんどいけど我慢するか」程度に思っていたが、今環境防災科に入学し学校の避難訓練だけでなく地域の防災訓練にも参加して、避難訓練は学校で生徒1人1人の防災意識を高めるためにも、とても大切なものだと感じた。

出会い

小学1年生の3学期、僕のクラスに大阪からの転校生が来た。その子は震災時長田に住んでいて、家が全壊し大阪のおばあちゃんの家で暮らしていたらしい。震災で家を失った子と初めて出会い、その子と仲良くなり朝起きたら屋根の天井がなかった事や、近所で亡くなった人がいたなどの震災の話を聞いたりして、震災で大きな被害にあい被災者になった人の体験を聞いたこと初めてだったので驚き、こんな身近な学校の友達に聞けるということも当然思っていなかった。そして僕の中で阪神・淡路大震災というものの存在も少しずつ大きくなっていった。その友達と中学の3年間もたくさん遊んだり、話したりし、僕が環境防災科に入学するきっかけとなった。その友達こそが今舞子高校の生徒会長を務めている北野君だ。中学のころから比べると、環境防災科に入学しこの3年間でボランティア活動や防災訓練に参加し僕も彼もとても成長できたと思う。

環境防災科

環境防災科に入学してこの学科でしか経験できないような貴重な体験がたくさんできた。

環境防災科の行事の中で一番印象に残っているのは消防学校の1泊2日の体験入学。1年と2年で体験し、1年生の時は基礎的な訓練で、2年生では消防学校の方が本当にやっているのと同じような訓練やAEDの取り扱いを教官の方たちのもとで訓練させていただき、とてもしんどかったが本当に自分のためになったと思っている。

その次に僕の中で印象に残っているのが、1年生の時に、夏休みに富士常葉大学のオープンキャンパスに行き地元の静岡の学生と交流会をしたことと、2年のときの夏休みに高知東高校の学生たちと交流会をしたことだ。どちらの校外学習もとても自分のためになったし、参加して本当によかったと思っている。どちらの交流会でも僕たちが発表することや相手の学生や先生方に伝えなければいけないことは、もちろん阪神・淡路大震災についてだ。自分が発表する時に、相手の学校にわかりやすいように阪神・淡路大震災がどのようなものだったかや、自分の震災体験や環境防災科で学んでいることを相手にわかりやすく伝えるのが少し難しかったが、言いたいことは何とか相手に伝わったと思う。

環境防災科でなければ、このように違う県の生徒の前で発表する機会もなかったし、今みたいに震災体験や防災について全く人前で話したりできなかったと思う。高知東の生徒たちとは僕たちが阪神・淡路大震災について発表したあと、これから起こると予想されている南海地震について、どのような被害が出るか、被害を減らすようにするには、今からできる備えなどについてお互い意見を出し合い話し合った。やはり震災を経験した僕たちとまだ経験していない高知県の生徒では意見が異なることもあった。1年前の静岡県の学生と交流会をしたときよりたくさん自分の意見を言えたことで、その意見交換会によって環境防災科で学んできて成長したという事を少し実感することもできた。このような交流会によってお互いの生徒の防災に関する知識も意識も芽生えて成長していくのだと感じた。

垂水区の防災訓練や人と防災未来センターでの防災訓練もとても自分のためになったと思っている。特に人と防災未来センターで行った防災訓練はとても実践的で、近くの病院なども協力してくれて大規模なものだった。このような本格的で実践的な訓練をすることで本当に地震が起こった時に役に立つものになると思う。地域での防災訓練も震災が起こったときにしっかり対処することもできるし、地域の人たちの顔を覚えるといった点でもよい行事だと参加してみて感じた。

小学校への出前授業や小学生と地域を探検して一緒にフィールドマップを作ったり、レイテ島の地すべりのための募金活動にも参加したりした。その時たくさんの人が募金活動に協力してくれてとても嬉しい気持ちになった。外部講師に来てくださった専門家の方の方々のお話を聞く機会もたくさんあり、その中でも1年生の時に、兵庫教育大学の西村先生と六甲山のフィールドワークに行った授業がとても心のなかに残っている。六甲山周辺を歩き、天井川などの地形や断層、花崗岩、砂防ダムなどを見学して今まで授業で学んできた事を実際に体験に結びつけることができた。このような校外学習によって学ぶことのできる実践的な授業は舞子高校環境防災科でしか体験できなかっただろう。ここで述べた活動以外にもこの学科に入学したからこそ学んだり参加したりできたことがたくさんあった。

僕自身、本当にこの学科に入学して防災に対する知識も意欲も入学前とは、比べ物にならない程に成長した。そして、残り少ない高校生活、僕は環境防災科でたくさんの行事に参加し卒業までにもっと成長したいと思っている。

これから

今年で阪神・淡路大震災から11年がたった。阪神・淡路大震災のときに生まれた弟は11歳の小学校6年生、その時幼稚園の年長で何も1人ですることのできなかった僕は18歳の誕生日を迎えた。僕の弟は阪神・淡路大震災をまったく知らない。

震災から10年目の1月17日に、弟が震災のビデオを見た感想を家で感想文を書いてくるという宿題をしていた。ビデオを見て地震って怖いと思ったという文章を書いているのを見て、阪神・淡路大震災の恐怖をビデオなどでしか実感することができない世代なのだということに改めて気づかされた。たかが1時間学校で阪神・淡路大震災によるビデオを見せられただけで、小学生5年生の子供に阪神・淡路大震災の感想文を書けというのも少し無謀なことかもしれないなとも思った。実際に震災を体験していない世代にはどうしてもそのとき見たビデオの映像の感想になってしまう。阪神・淡路大震災時の、ライフラインがとまった状況や余震に脅かされる日々は味わうことのできない体験だ。その悲惨な体験が2度と起こらないため、伝えていくためにはビデオなどの映像ではどうも物足りない気がする。これからさらに阪神・淡路大震災を生まれる前の出来事として育ってくる子や、生まれていたが小さくて記憶にない子などには僕たち阪神・淡路大震災を経験した僕たちが語り部となって伝えていくことが大切だと思う。阪神・淡路大震災の体験を伝えられる世代はもしかしたら僕たちで最後となるのかもしれない。

これから環境防災科に入学してくる生徒たちは阪神・淡路大震災の体験が記憶として残っていないかもしれない。それでも阪神・淡路大震災の知識を持ち防災への意欲を持って、新たな語り部と成長してくれることを期待している。

環境防災科の活動のところで述べた募金活動などのボランティア活動は、震災によって被害を受けてボランティアによって助けてもらった経験のある僕たちが率先してしなければいけない活動だと思う。

震災から11年たった今、変わったもの、変わらないものがあると思う。その中でも震災を経験した僕たちは良いように変わらなければいけないと思う。前文で述べたように震災体験をたくさんの人に語り継ぐことや、ボランティア活動を僕たちが率先してやることによって、震災を体験していない人々の防災意欲も高まり災害に強いまち作りにもつながると思う。

僕は環境防災科で防災の大切さ命の尊さを学び将来も防災に携わっていきたいと考えるようになった。11年前に起きた惨劇「阪神・淡路大震災」から目をそむけずに、次そのような災害が起こったときにどうやれば防げるのだろうかということをすべての人たちに考えてほしいと思う。そして防災訓練などにも積極的に参加することしてほしい。そのような小さな行動が防災意識の向上につながると思う。

何度も言うようだが僕は環境防災科でもっと色んなことに参加し成長していきたいと思っている。そしてまたこのようなことが起こったとき僕は自分だけでなく、地域の防災リーダーとして周りの人や、大切な人を守る人間になりたい。

命と絆

神戸市須磨区白川台
山脇 茜

私はこの震災体験を書くことが、この環境防災科入学当時からの楽しみであった。「楽しみ」というと不謹慎な感じがするが、私は1人1人の震災体験を語り継ぐことが次への教訓へと繋がると信じている。阪神・淡路大震災は多くの被害と共に、私たちの生活を見直すきっかけをくれた。

「震災を覚えている最後の年代」といわれた私たちが経験したこと、感じたことを細かに記したい。鮮明に覚えていると言いはれ難いが、この体験だけは風化させてはいけない。これを読んで何かを掴んでくれる人がいてくれたら...と願っている。

～私の震災体験～

《カタカタカタ・・・》

私は小さな揺れでふと目を覚ました。隣に寝ていた母も目を覚まし、私に頭から布団をかけた。なんの為だか理解できなかった私は布団から顔を出したが、母は真剣な顔つきで私たちの上部に寝ていた兄姉を見つめていた。目を覚ましてからほんの数秒の出来事だが、私は今でもその顔をはっきりと覚えている。

当時住んでいた家は宿舎だったのでとても古かったし、狭かった。入所者が少なくなってきたので1世帯につき2軒まで借りられることになっており、父はもう1つの家で寝ていた。

大きな靴箱で狭くなった玄関を入るとすぐに台所。その奥に洗面所とお風呂があり、隣にベランダがついている居間がある。そしてふすまで区切られた小さな部屋。

私と母は居間に布団を敷いて寝ており、小さな部屋に兄姉が2段ベッドで寝ていた。

母はジッと兄姉を見つめるが、兄姉は寝ているまま動かない。私は理解できないながらも、いつも優しい笑顔を向けてくれていたはずの母の真剣な表情が気になって布団からこっそり見つめていた。

《グラッ・・・グラグラグラ・・・》

家が揺れた。なにがなんだかわからなかった。母に強く抱きしめられた。泣き虫だった私だが、なぜだか涙も声も出すこともなくジッと耐えた。兄姉も同様に、声を出さなかった。私のすぐ隣に置かれていたタンスの上部から小物が落ちてくる。足元の布団が重くなった。台所では食器の割れる音、そして何かが壁に当たるような音がする。

長く感じた揺れが収まった。母の腕の感触がふっとなくなる。私は無意識の内に目を閉じていた事に気づき、急いで上体を起こして母を捜した。案の定母は兄姉の所にいた。上階で寝ていた姉が泣きだし、母に抱き降ろして貰っていた。幸い2段ベッドは倒れなかった。

私は様子がすっかり変わってしまった部屋を見た。テレビ台から落ちたテレビが私の足元に転がっている。布団が重くなったと感じたのはこのせいだった。母に抱きしめられているとき、無意識に体を丸めていなかったら足の上に落ちていたと思われる位置だった。なんだか怖くて布団から出ることがで

きなかった。布団の上にはタンスの上に置いてあった小物が散乱し、私はボーっとそれらを見つめていた。

《グラグラグラ・・・》

小さな余震が来た。私は布団から出ることよりも母と離れている方が不安で母を呼び寄せた。兄妹を抱きかかえるようにして、母はこっちへ来てくれた。

《ガチャッ》

「大丈夫か！？みんな無事か！？」

父だ。当時私の家は鍵をかける習慣がなかった。県警の宿舎なので泥棒に入られる心配はほとんどなく、近所同士の信頼関係が築けていたからだ。

だが父は入ってこない。ドアを開ける音も、声もした。ガタガタと音もするのにどうしたのだろうと思っていると、父が窓を叩き、開けてくれと言う。母が窓を開けると窓から父が入ってきた。

「あかんわ、玄関が塞がって入られへん。将人も手伝ってくれ。」

父と母と兄が玄関へ移動し、残された私と姉も興味津々で見に行った。

小さな玄関に大きな靴箱。その靴箱が倒れて玄関を塞いでいたのだ。ふと台所を見ると食器棚の戸がすべて開き、入っていたものが床に散乱していた。食器はほとんど割れ、行く手を阻んでいた。

「あかで！あんたら怪我するから部屋におりなさい。」

靴箱を3人で元の位置に戻そうとしつつ、母が私と姉をたしなめた。私たちは素直に部屋に戻った。私は怖いというよりも、こんな事もあるねんなあ...という呑気な気持ちでいた。

靴箱を何とか元に戻し、私たち兄弟は3人で1つの布団に潜って遊んでいた。両親は神妙な面持ちで会話を続けていた。

夜が明け出した頃に出てきた近所の方々と両親は会話を交わしていた。

「なんかガスの臭いが2階からしてるねん。」

「この宿舎、横から見てんけど少し傾いてもてるわぁ。」

「ラジオでは被害は大きくないんやけど...。こんな大きい地震は非常事態に値するよなぁ...？」

「しばらく帰って来れんやろなぁ...。」

父はスーツに着替え、荷物をまとめ出した。私たちも暖かい格好をさせられた。暖房がつかないからだ。

「おとん、仕事行くん？」

「皆を守らなあかんからな。しばらく帰って来んから宿舎みんなで小学校行こか。」

私たちは近所の方と集合し、小学校へ避難しに行くことになった。幸い誰も怪我はなかった。トランプなどのカードゲーム、小さなボードゲームをかばんに詰めた。兄から寝袋を渡され、文句を言いながら持った。通学路が所々隆起し、それを見て私たち子供は騒ぎながら小学校へ向かった。

避難所にはすでに多くの人が集まっていた。宿舎の避難者は20人弱といったところだろうか。皆で固まって広いスペースを確保し、私たち子供は「遠足みたいだ」とはしゃいでいた。ふと気づくと母がいない。私はお母さんだったのになぜ気がつかなかったのだろうか。

「兄ちゃん、お母さんがおらへん...。あっちゃんのおばちゃんらも来おへんの??」

突然不安になり、兄に問いかけると

「お母さんらは家片付けなあかんから戻ったんや。みんなおるし遊んで待ってよか。」
と優しく返ってきた。一応保護者という形で交互に誰かの母親が近くにいた。

お昼ごろになると、母が大きな荷物を抱えて避難所へやってきた。毛布、それからおにぎりだった。私たちはそれを食べ、また遊ぶことに夢中になっていた。大人数だからか、初めての環境だからか、遊ぶことに飽きることはなかった。ゲームに負けては泣いていた私も、この避難所生活では泣いた記憶がない。

夜になって、近所のおばさんが持ってきてくれたご飯をみんなで食べ、私は眠りについた。

だが避難所の電気は消えることはない。大勢の人の話し声、犬が歩き回り、吠える声もする。しょっちゅう目を覚まし、母親の存在を確かめて、また眠りについていた。いつ目を覚ましても母は起きていた。この環境では眠れないのも無理はない。

「うるさいんや！静かにしてくれ！」

プライバシーも、時間も関係ない。

突然体育館に響く怒鳴り声。

常にどこからか聞こえてくるラジオの音。

赤ちゃんの泣き声で喧嘩する大人たち。

犬を連れた人が肩身狭そうに犬の口を抑えたり、躰の範囲内で犬を叩いたり…。

私たちの避難所ではダンボールで区切られていなかったのどこを見てもそんな光景が目に入ってきた。

2日もすると救援物資が配られた。壇上でボランティアの人がダンボールに入った物を並んでいる人に配っていく。おにぎりだった。母は私たちの分を抱えて持ってきてくれ、さらに周りの人にも配っていた。

「そんなんいらんわ！偽善でしてほしくない！」

中にはこんなことを言う人もいた…。

数日後、長田に住んでいた親戚と連絡がつき私たちは親戚の家へ避難しに行くことになった。移動手段は代行バス。大きな荷物を抱え、ぎゅうぎゅうになりながらなんとかバスを降りた。親戚の家はマンションの7階。地震のためエレベーターが使えずヒィヒィ言いながら階段を上った。家に着くなり親戚の伯父さんがベランダへと私たちを呼んだ。見てみると沢山の煙が出ている神戸の街だった。

「これはしっかり覚えとかなあかで。いっぱいの人が死んでるんやからな。」

伯父さんはビデオカメラを回しながらそう言った。私の心にこの光景と言葉が重くのしかかった。私たちに理解できるよう易しい言葉で言ったのだろうが、そのことが逆に私の恐怖を駆り立てた。

地震の怖さを分かっていなかった…。現実を目の当たりにすることがどれだけ怖いことか幼いながらに教わった。

幸い親類すべてに連絡がつき、震災で亡くなった方は周りには居なかった。伯父の家は山の中腹部にあるからか被害も少なく、電気も通っていたのでテレビを見ることもできた。ヘリコプターから映された見慣れたはずの神戸の町並みが一変していた。

「戦争みたいやな…。」

誰かがつぶやいた言葉は今でも覚えている。

やはりどこも同じで水は出ない。私たちはマンションの裏にある川に水を汲みに行くことが日課になった。7階まで重たい水を運び、風呂桶へ貯めていく。何度も何度も往復して、やっと風呂桶一杯になる。顔を洗ったりトイレを流したりするのに使っていたが、8人も居れば1日でその水はなくなる。お風呂にも入れないのでタオルを硬く絞り、体を拭いた。

親戚の彼氏が飲料水を大量に持って来てくれた。お隣さんがおにぎりをくれたので、私たちは水汲みを手伝ったりもした。

母は何度か宿舎と親戚の家を往復していたようだ。地震の際にガス管が破裂したようで、宿舎に帰れなかった私たちは、親戚の家から学校や幼稚園に通った。まだ日も昇らないうちに家を出て、幼稚園へ行く。眠たい目を擦りながら寒い中バスを待ち、やっと乗れたと思ったら押しつぶされそうになる。

幼稚園が終わり、またぎゅうぎゅうのバスに乗って帰ってきて、川へ水を汲みに行く。

給水車が来れば空きペットボトルを家族総出で持って並び、水を入れてもらう。

不便さは変わらなかったが避難所生活よりは遥かにマシだった。プライバシーが確保され、暖かいストーブがあり、トイレがあり、電気が自由に消せる。このときの生活で、やっと家族は安眠できたのではないかと思う。

一度、近所の銭湯が開店したと聞いたのでみんなで入りに行った。普段何気なく使っていたお湯だったが、自分で水汲みを経験したからか大切に使って体を洗った。周りの人も皆そんな風に使っていた。お湯が限りなくあるわけではない。助け合い精神や、周りの人を気遣いあうことが大切だと伯母さんが教えてくれた。

～震災から11年～

私が鮮明に覚えていることはここまでで、あとは徐々に普通の生活に戻っていったのだと思う。母に聞いてもあまり詳しく覚えていないという。この話を上手くまとめようとすればするほど、言葉が出てこなくなった。楽しみにしていた「語り継ぐ」作業はそれほど容易ではなかったのだ。1人1人体験が違い、1人1人感じたことも違う。当時感じた思いと、知識が入ってから見直した思いもまた違ってくる。できる限り当時の感じたことを書いたつもりではあったが、確実にそうとも言い切れない。

当時のことを思い返したり、テレビなどで報道されると今でも胸が熱くなる。この感覚を忘れたくない。当時私はPTSRにかかっていたのではないかと思う。幼いながらもいい子になろうとしていた気がする。本当によく泣く私が震災のときに泣いていた記憶がない。いつも我儘だった私が手伝いを進んでしていた気がする。だが周りの心優しい人たちのおかげで私はいつの間にか完治していたのだろう。

震災を経験し、私は本当に「助け合う」ことが大切だと思った。そして、震災を経験した私だからこそできる何かを見つけたくて入ったこの環境防災科で勉強していく中で、さらにその思いは強くなった。例えば淡路島では生き埋めになった人のほとんどが近所の方に救出され、助かっている。コミュニティがどれほど大切なのか、この話でわかっていただければと思う。

耐震補強についての知識も増えた。私の当時の家では耐震補強どころか家具の固定すらされていなかった。私の周りのどの家庭もそうだった。非常食なんかほとんど用意されず、被災してからあたふたと避難の準備を行っていた。家の窓ガラスは割れることはなかったが、もしあれが割れていたらどうなっていたのだろう…。タンスが倒れてきていたら…？2段ベッドが倒れていたら…？この震災で大切な人を亡くしていたのかもしれない。

私は正直、この環境防災科に入るまで震災を振り返ろうとはしなかった。私の家族に関しても同じことが言えると思う。だが私が入学し勉強していくにつれ、私だけでなく私の周りの人までもが防災やボランティアに興味を持ってくれた。人は人とつながっているのだと改めて感じることもできたし、このつながりがなくなってほしくない強く願う。「自分の命は自分で守る」ことはもちろん、「大切な人の命も守る」人になりたい。

震災が僕に教えてくれたこと

神戸市西区学園西町
横峯 誠悟

1. 地震発生直後

(1) 自分の記憶

僕の震災の記憶というのは非常にあいまいなものである。当時幼稚園児だった僕は地震という言葉も知らなかっただろう。しかし、地震の揺れとその直後にとった行動だけは不思議と今でも鮮明な記憶として残っている。揺れに関しては体が覚えているという方が表現としては適切かもしれない。今でも、地震の揺れを体が感じると、いいようのない恐怖が僕を襲う。どこに避難して、どのような生活をしたのかは記憶にない。しかし、揺れは覚えている。それほど強烈な揺れだったということだろう。

地震発生直後、両親に誘導されるままに毛布1枚で近くの公園に歩いて避難した。この時すでに道のあちこちに亀裂が入っていた。興味本位でその亀裂の下を覗くとその亀裂は地下深くどこまでも続くかのように見えた。

(2) 小学校へ避難

揺れが収まってからしばらくして、兄の通う小学校に避難した。僕たちがこの小学校に避難したときにはすでに避難所にはストーブがたかれ広いスペースも確保されていた。この迅速な行動には1人のおじいさんの力が関係している。このおじいさんは、いわゆるまちのドンと言われる人物だった。このおじいさんはまちでは“じっちゃん”とよばれ多くの組織の会長を務め、彼のまちに与える影響は非常に大きかった。個人的にも、僕は小学生の頃、サッカー部に入っていたのでそのことでお世話になった人物である。地震直後、このじっちゃんが小学校の門をいち早く開け、地震に対応したのだ。避難所の運営もすべて彼にゆだねられていた。避難してきた人もじっちゃんが言うならとその指示に反対する人はほとんどおらず、食料の配給や場所の配分など非常にスムーズに行うことができた。今ではこのようにまちをとりしきり、この人が言うならと思わせるような人物がまちに存在するというのは非常にまれである。何よりも個人の人権が尊重され、人々が近隣住民との交流を面倒がっているようにもみえる。まちがひとつの組織として活動するためにも、このじっちゃんのような役割を担う人物が必要なかもしれない。その人物は行政でも自治会の人でもかまわない。まず先頭をきってまちを引っ張っていくことができる、そんな人物が1人でもいるとまちの防災力は格段に上昇するのではないだろうか。

避難所では、助け合いの心をもった人々がたくさんいた。避難の際にお菓子やおにぎり、パンなどといった食料を家からもってきてまったく顔もしらない人に配給している人、車に乗ってスーパーに買出しにいくってくれる人、この人たちの優しさがどれだけ被災の恐怖や不安を取り除いてくれただろう。僕も飴玉をもらったり、話し相手になってもらったりと何度も被災のストレスを和らげてもらった。避難所という多くの不安をかかえる場所で、共感や同情という行為は心の応急手当なのかもしれない。

(3) 車で赤穂へ避難

小学校へ避難した後、車で赤穂まで避難した。赤穂では日常的な生活が行われていた。スーパーに行

き缶詰やカップメン、米といった食料を買えるだけ買った。電話回線が通じる状況ではなかったがそのときは、とにかく自分たちの安全を第一とし、親族の安否を確認する余裕すらなかった。

(4) 物資の配給

地震の後多くの場所で物資の配給が行われたことは、周知のことだろう。このとき場所によってその程度は大きく違っていたように思える。当時、私は西区の学園都市に住んでいたため、一番近い物資の調達場所となると、駅前のダイエーだった。そのダイエーでは、おにぎり1人2つ、毛布1人1枚の配給が行われていた。私の家は幸い被害をあまり受けなかったため、このような配給を受け取らず、自分たちでやりくりしていた。そんなとき非常に残念でならないことを私の母は目にした。それはダイエーがおにぎりの配給をしているときのことだった。本来、1人2つのおにぎりを、無料だからもらえるだけもらっておこうという考えで、大量に持ち帰る人がいたのだ。この一大事になっても人の痛みがわからない人がいるのかと思うと避難所での優しい人々とのギャップを感じずにはいられなかった。これは後からわかったことだが、当時ダイエー側も無料の配給をするのかどうか迷いがあったそうだ。しかし、店長の親切心から商品をただで配ることを決心しこの配給にいたったようだ。震災では、人のつながり、助け合いの心を感じることができたといわれているが、当時このような人間のエゴがあったことは今ではあまり話題にならない。この件はまだ小さなことだが、放火、窃盗と多くの被害も出ている。今後、大都市での地震発生後、被災者同士の争い、窃盗など多くの問題が浮上するのは当然のことのように思えてならない。

私たちの家族は、比較的早く、何度も買出しにいくことができた。ある時、ダイエーには商品があまり残っていないので近くの西神中央まで父が車でむかった。その時の父の感想はこうだった。「みんな、普通に買い物をしていて。特にあわてている様子もないし、まるで何もなかったかのようだった」この言葉には驚いた。私の印象からすると地震直後のスーパーといえばみんなが食料調達のために急いで品々をかごにいれ、売り切れの商品がどんどん出ている、という感じだった。しかし、現実はそうではなかった。つまり、地震が起きたからといって私たちが日常を変えることは不可能だということだろう。こんな話を聞いたことがある。毎日弁当とパンの生活をしていた避難所のある主婦が、何がほしいかと聞かれて包丁とまな板だと言ったそうだ。彼女は料理がしたかったのだ。日頃ずっと料理をつくっているのに、避難所では自分は何もせず受身的な立場となり生活するだけである。彼女にとっての日常はもちろんそのようなものではない。つまり私たちは被災後どんな状況においても日常により近い状況に身を置こうと考えるのだ。今後、避難所運営をする際は、是非このことを頭においておきたいものである。

(5) ボランティア

震災当時、母は物資の受け取り、配給のボランティアをしていた。このときも色々なことがあったそうだ。物資というのは、決していらないものをもらうのではない。当時送られてきたダンボールの中には汚れていて着られそうもない服、食べかけのお菓子、ひどい時には生ものが強烈な腐敗臭とともに送られてきたそうだ。誰がこんなものを他人からもらって喜ぶだろうか。何かしてあげたいと思うだけでは援助にならない。むしろゴミを増やすだけなら、何もしない方がましである。昔の人はものが少なかったせいか物を大切にすることが多く、今回の物資の中にはそんな昔から捨てるに捨てられなかったものが多く入っていた。このことにより本来なら浮上するはずのないゴミ問題が行政を悩ましたことは紛れもない事実だ。

配給に関しては母も困ったことが多々あったそうだ。特に一番頭を悩ませたのは食料の賞味期限問題

である。期限のきれた食料を配るか否か、この問題は非常に慎重にならざるを得ない。もし問題が生じれば誰に責任がいくのか、どう対応すべきなのか、わからない。こんなときボランティアがとれる方法はひとつ、個人の責任に任せるということ。そうすることで、すべてにおいて自己責任というかたちがとれ、無駄というものがさまざまな分野で解消されていく。行政の型にはめたやり方にはやはり限界がある。行政は期限切れの食料は一切配らなかった。これはある意味当然のことかもしれない。もし期限切れの食料を配って問題が生じれば責任は行政にかかる。行政は期限切れの商品でも食べたいという人と立場の責任とのいわばさみうちになるわけだ。つまり、私たちが被災者となったとき頼りにするのは自分自身しかいないということだろう。組織としてのつながりではなく、第一に試みるべきことは人間同士の柔軟なつながりである。

2. 復旧

(1) 親戚との同居

水道、ガス、電気とライフラインが早く回復したので私の家には親戚の3人が同居していた。いつ地震が再び起こるかかわからないからといって、炊飯器でとにかくご飯を炊き続けた。何をするときでも、地震に対する恐怖は絶えず、常に最悪の事態を考えた生活を母はしていた。

家のお風呂には多くの人が入った。親族、知人、知人の知り合いなど、お風呂に入るためだけにわが家を訪れた。なかには、小さな子供がいて銭湯にはいけないからと、全く知らない人から頭をさげられることもあった。お風呂というものがこれだけ生活のなかで必要不可欠な存在となっていることを母は初めて感じたという。

(2) 芦屋からの被災者

僕は学校が休みということもあり、家で親戚と1日中ゲームをしていた。当時は、子供心にその特別な時間を楽しんでいたようだ。学校は地震後、約1ヶ月して開始されたが、仮設住宅に引っ越してきた同級生の子とも仲良くなり不自由のない暮らしをしていた。その子は芦屋から父親を亡くした状況で仮設に移ってきた。子供の僕にとってはそのことが、どれだけ悲しいことであるかなど想像もつかず、その子を特別扱いすることはなかった。ただサッカーのうまい奴、という目でみていた。このことを今考えると子供の素直さというのは時に残酷なものだが、このときはその素直さがいい関係を作ることを可能にしたように思える。私は哀れみの気持ちよりも、常に自分本位の考えで行動していた。人にかわりそうだとか、哀れみの視線で見られるということは、最初はよくても、後になってくるとストレスになりかねない。そのことも含めて、被災時の子供の素直さというものに期待の心を持たずにはいられない。

(3) おじいちゃん、おばあちゃん

私の祖父は、当時尼崎に住んでいた。昔からの典型的な一戸建てで、家には大黒柱がある。地震の時、祖父の周りの家はすべて半壊、全壊と被害があったにも関わらず、祖父の家だけは何も被害がなかった。地理的な状況なのか否かは定かではないが、家が倒れなかったことは紛れもない事実。祖父の家を訪ねたとき、この大黒柱が家を支えてくれたのかと何か神様じみたものを感じてしまった。それだけ周りの状況はひどいものだった。

(4) 父の仕事

父は震災前から建設業の社長をしていた。そのため地震発生のと数日すると父は仕事に行き、それっきり何ヶ月も帰ってこなかった。当時は復旧作業の仕事が山のようにあり、建設業界も多くの利益を上げる絶好の機会であったので父もそれに遅れを取らないようにと必死で働いていた。テレビで見る報道だけでも被害の大きさを感じさせるのだから、実際の細かいところも考えると当時多くの建設業者が寝る間も惜しんで働き続けた結果が物理的な早期復旧を可能にした要因の1つであることは間違いないだろう。しかし、建設業者が儲かるということは行政がそのお金は支払っているわけで、10兆円とも言われる兵庫県の被災総額の一部をこの建設業が占めていることを考えると、仕方のないこととはいえ、1人の県民としては素直に喜べない気もする。

3. 復興とその後の備え

(1) 今もまちに残る震災の傷跡

阪神・淡路大震災の被災写真といえば、多くの人は長田商店街の火災映像が頭に浮かぶのではないだろうか。現在の長田のまちは当時の様子からは、かけ離れたような表情をしている。まだまだ建設途中のものもあるが、高層ビルやマンション、一戸建ての並んだ住宅などを見ると長田のまちの復興を感じることができる。もちろんそのまちづくりには、震災経験を生かした特徴的なものも多く存在する。例えばその1つに、住宅間の道路の幅を広くするというものがある。これは火災の肥大化の原因にもなった家屋の密設、または家屋倒壊による消火活動の制限などを教訓に考えられたものだ。このように外から見ると長田のまちは順調に復興してきているように見える。しかし、長田市民の方に話をきいてみると、意外な答えが返ってきた。「長田はまだ昔の活気を取り戻していない。」この言葉からどのようなことが想像出来るだろうか。なぜ市民がそのように答えるのか、その答えははっきりとしている。問題は、長田の人々にとってのまちというものがどのような存在なのか、このことだ。商店街を例に出して考えてみよう。いくらいい店がそろっていてもそこに人と人とのつながりがなければ、それはただの建物にすぎない。行きつけの店に行き、顔のしった仲間同士で話をする。ここに本当の意味での、長田のまちがあるのではないだろうか。現代において地域にこのような密着したような生活をとることは震災とは関係なく少なくなってきた。大型スーパーやコンビニといった店が増えたこともその理由の1つとっていいだろう。話がとぶようだが、つまり長田の人々が本当に求めるまちにするには建物などの物質的な復興だけでは不十分なのだ。長田に人の関わりが増え、つながりが生まれる。このとき初めて、長田の復興は成し遂げられたといえるのではないだろうか。

(2) 舞子高校環境防災科

11年前、幸いにも家や家族に被害を受けることのなかった僕にとって、震災の影響を最も受けたことといえばこの環境防災科にはいったことだろう。環境防災科は震災の教訓を生かすためにできた学科だ。僕はこの学科は専門的な防災の知識の吸収だけではなく多くのことを学ぶことができると思う。僕の場合、パソコンの使い方、プレゼンテーション能力など細かなことの成長もあるが、なにより物の見方、価値観が大きく変化したように感じる。今までの国語や数学など内向性の強い勉強と比べ、環境防災科での授業というのはより社会との関係を感じ取りやすい。自分がどんなまちに住んでいて、どのような暮らしをしているのかなど、防災という観点を切り口にして多くのことに気づくことができた。もしあの地震がなく、このような学科がなければ今の自分はなかっただろう。そのことを考えると代償はあまりに大きい震災が無駄でなかったと僕は言い切ることができる。多くの尊い命が奪われてから今年で

11 年が過ぎようとしている。今の神戸のまちは震災当時と比べると全く別世界のように見えるだろう。その復興の裏では多くの人の努力、苦悩が隠されているように僕は思う。僕が知っているのは本からの知識や授業など、ほんの一部のことだがそれだけでも、今まで知らなかった神戸の一面を知ることができた。

現代の日本政府の防災技術や意識の高さは世界の中でも劣るものではないだろう。しかし、環境防災科のような防災を専門的に学ぶ人は極端に少ない。隣の中国や欧米諸国では、大学、高校に防災の専門学科があるにも関わらず、この地震大国の日本に防災学習の場が少ないというのは不思議に思えるかもしれない。しかしそれは、日本に災害文化があるからこそそのものだと思う。日本人は昔から防災は学校で習うものではなく家で学ぶものという意識があるのではないだろうか。災害というのはその土地によって様々だ。だから自分の住んでいるまわりのことは知っているけど他の地域がどうか、世界がどうか、そんなことをしても何の役にも立たないと多くの若者は考えるのではないだろうか。僕はそんな人々に僕のように防災を切り口にしてみものごとを考えて見るのも悪くないと提言したい。

(3) 将来

僕は自分が生まれ育ったこのまち、神戸が好きだ。ファッションの発祥地でもあり、多くの外国人が住む国際的な都市でもある。神戸のまちを歩いているとき、僕はよく今のまちと震災直後のまちを比べる。傷跡はまだ少し残っているが、それでもその変貌ぶりはやはり見事だ。大きくなったら自分を育ててもらった神戸のまちに少しでも恩返しができればと思う。

現在、世界では様々な災害が起きそのたびに多くの死者が出ている。自然災害だけでなく、凶悪な殺人事件など人為的な災害も後を絶たない。そんな中で1人でも多くの命を守るために僕は生きてみたい。今、僕はそう考えている。

阪神・淡路大震災と僕

神戸市垂水区桃山台

吉田 傑

(1) 地震が起きた日

1月16日夜その日僕達は、夜ご飯は外食しいつも通りに家に帰った。父はいつもより疲れていたみたいで僕達より先に寝ていた。僕もその後すぐに寝ていたみたいだが、その時までの記憶はほとんど無い。そして僕が覚えている記憶は、ここから始まる。

1月17日午前5時45分、僕はベッドの上で時計を眺めていた。別にトイレに行きたいわけでもなく、寝苦しいわけでもない。ただ目が覚めて座っている。その時、地鳴りが聞こえてきた。僕は、てっきり大型トラックがマンションにぶつかったとしか思っていなかったし、まだ地震というものがあることすら知らなかった。地鳴りが鳴り始めてそんなに長くはなかった。突然、大きな揺れが僕とベッドと窓ガラスと色々な物を揺らしている。とにかく怖かったし、他の部屋にいる父親や母親のことが気になった。僕は、自分の部屋を出て隣の部屋にいる父と母の元に向かった。2人とも起きていたが「大丈夫か!」といきなり大きい声で話してきたかと思うと次は、「ここの部屋は、タンスがあって危ないし」とまた両親と一緒に自分の部屋に戻った。姉と妹は無事だった。姉も何が起きたのかわかっていなかったみたいで、とりあえず揺れがおさまるのをまった。揺れがおさまった後僕達は、長田と三宮にいる祖父や祖母のことが気になり電話をしたがつかない。とにかく車のある駐車場に向かった。マンションの住民は、「怖かったね～」など外で話をしている人もいた。僕達は、とりあえず車の中で少し待機した後新長田に向けて車を走らせた。

垂水と須磨を分ける長いトンネルを越えた時だった。車から見える大阪湾の方向は、花火をしているわけでもないのに、オレンジ色の光と黒色の煙とが混ざり合っているように見える。その先の道も土砂崩れが起きていたが、やっとの思いで前に進んだ。しかし、そこには警察の人が立っていてそこを通る車1つ1つに話し掛けていた。内容は「この先は危険です。命の保証はできません。お戻りください」だった。でも父は、戻らずに車を進めた。ちょうど山陽の月見山駅付近からだった。色々な家は、傾き、壊れ、住民の方々が毛布をかぶり自分達の家をボーッと眺めている光景が目についてくる。しかもそれは、東に行くほどひどくなっているように見えた。新長田に来た時、言葉を失った。もう太陽が出て明るくなってきているはずなのに火事による煙で辺りはとても薄暗く、火のパチパチという音が響いていた。祖父の家に着いた時、南の方角も西の方角も北の方角も炎を上げて燃えていた。近くにあった市場も燃えていて、車で通ることが不可能だった。近所の住民達は皆同じ所で集まっていた。大人の人達の中には、協力してガレキに埋もれた人々を救助しようとしている人もいたし、ただただ泣いている人もいた。なおも余震はひんぱんに起きていた。正直かなり怖かった、僕のいる桃山台からいうほど離れていない地域の景色が戦争をした後みたいになっているし、人々が泣いているしとにかく怖かった。

地震が起きても僕達の住む地域はこれといった被害もなく、地震発生の翌日には、ガス以外の電気と水は使えた。近くのコンビニも普通通りやっていて品物も普通にあった。こんな被害が少なくてすんだのは、山ということもあり地盤が固かったからだと思う。しかしその間にもテレビでは、「行方不明者、死者、交通情報、震災情報」がずっと放送されていた。次の日の夜にも僕達は、新長田へ行った。その時目にしたのが、警察の人がパトロールをしている様子で4～5人で歩いていた。泥棒などが多かったためだろうと思う。

震災から2日後には火災も落ち着いていたけど、僕の記憶に残っている町の雰囲気とは、まったくといっていい程変わっていた。近くにあったビルは焼け焦げ、目の前にあったタバコ屋は全壊、隣の家は半壊、近くの市場は8割近く焼けていて完璧に姿を変えていた。僕の生まれ育った町は、桃山台だったけど新長田で生まれ育った人にとっては、はかりしれない程の寂しさや悲しさがあったと思う。自分達

の思い出がたくさんある町がどんどん壊れていく様子を見るのは、とてもつらいことだ。

震災からある程度の日にながすぎた後、僕らの家にいとこを呼び少しの間一緒に住んでいた。全員年上だから親が留守にしている間も面倒を見てくれたし、その頃は大大地震も落ち着いてきていたから普通に生活していた。幼稚園が始まる頃には、いとも自分達の家に帰っていて震災前と同じ生活が始まった。その時僕の通っていた幼稚園では「阪神・淡路大震災でお亡くなりなられた方々に黙祷を捧げます」といったことを長い間やっていた。

（２）地震が残したこと、奪ったこと

最近思うのは阪神・淡路大震災は、僕達に何を残して何を奪っていったのかということだ。僕は、阪神・淡路大震災で身内のおじさんとおばさんを亡くしてしまった。もちろん近所の人々と協力し助け出そうと頑張ったみたいだが、まだ声がするのに助けることができなかったみたいだ。それは、僕達にとってとてもつらく悲しいことだったし、地震に対する怒りを倍増させる出来事となった。人を失い地震に奪われたというのは、誰でもわかることだけど、地震は他の何かを奪っていった。それは、地域の人々との絆だった。もちろん協力していっそう絆の深まった人もいるし、仲の良くなった人もいる。でもそれと同時に失ったのも近所の絆だ。何故なら、国の差別があった。朝鮮人ということで一部の人から差別的な態度をとられたからだ。もちろん差別をしない人はしないし、差別した人も謝りに来ていたみたいだ。しかし、国を１回でも差別され謝りに来てても簡単に許せるはずがない。これじゃ関東大震災の時と一緒にじゃないかと思う。その時も、何もしていないのにもかかわらず朝鮮の人々が大量に殺害された。これでは、震災で残されたもののの中に差別が入ってしまう。今は、差別をしない人々がかなりふえている。そこでまた阪神・淡路大震災のような大きな地震が来た時の課題、つまり地震が残していったものの１つは、差別を完璧に無くすことだと思う。みんなで助け合う社会を作るためにも。

地震が残したものはまだまだある。それは、間違いなく恐怖心だ。あの時体験した揺れは、はかりしれない程の大きな揺れだったし、それにより失ったものが多いからだ。ちょっとした揺れがあると今でも怖くなる時がある。それは、阪神・淡路大震災の揺れを体で覚えてしまっているからこそ感じてしまうことだし、仕方がないと思う。しかし、いつまでも怖がってはいけないということで、僕も神戸の人々も防災にとりくんでいる。それは、次にくる大きな地震によって色々なものを奪われたくないからだ。

地震が奪ったものもまだまだある。それは、なんの確信もない嘘の確信で、阪神・淡路大震災が来る２年前に北海道南西沖地震という大きな地震があり、その時神戸の一部の人達の間で、神戸に地震が来るわけない、神戸に来たら日本も終わり、などの嘘が流れていたみたいだ。その地震の２年後に起きたのがあの阪神・淡路大震災で、それは、大地震はいつどこで起きるかわからないというのを改めて確信させることとなった。地震が起きないという場所はまず日本ではないということを日本全国の人に伝えたいし、知ってもらいたい。

地震が奪うもの地震が残すもの、それは両方とも悲しいものが多い。だから人は、その悲しさを体験したくないからこそ防災という行動にでる。それは、とても大切で必要なことだ。

（３）今思うこと

僕の住んでいた桃山台は、地震が起きたということもあって家の中の被害やちょっとした地割れなどはあったけど、それ以外で困ったことや大変だったことはあまりない。実際に地震が起きて次の日には、テレビがつくし、余震もたいしてこないなど結構いつもとあまり変わらない日々が続いたと思う。ただ、ガスは少しの間使えなかった。だから、ガスを使える父の友人の家まで車で行きお風呂を借りたり、またある日は、有馬温泉の方まで行ったりもした。その時は、まだ僕も幼稚園の年長だったからただ楽し

いとか、なんで家のお風呂使わんのとかにしか思っていなかった。しかし今思うと親にとっては、すごく大変なことだったと思う。

当時僕は幼稚園の年長だったので地震というものの自体をあまり知らなかった。というより今みたいに防災に対して市民の方々があまり関心をもっていない時代でもあったから、大勢の方々が被害にあったと思う。今でこそ幼稚園の子供達にも防災を教えようという取り組みがあちこちで行われているが、それがもう少し早かったならば、少しでも被害を抑えられていたと思う。実際に僕の友達も何が何かさっぱりわからなくて、地震というのは揺れるという意味だけでもわかっていたら怪我をしなかったなどと言っている。確かにいくら防災をやったからといって全てがうまく行くわけでもない。ただ少しでも助かりたい、1人でも多くの人を助けたいと思っているなら、防災というのはとても必要なものになってくると思う。災害が起きてからではなく、災害が起きる前にという行動が大事だ。

現在は、神戸市のあちらこちらで防災について取り組んでいる。

- ・ 地域単位で総合防災訓練
- ・ テレビ、新聞、ラジオで地震についての放送や広告
- ・ まちづくり
- ・ 学校の授業の一環

などがあるがその中の大半は、地震後と地震前とは大きく異なっているものがある。

例えば、まちづくりだと利便性を重視していたところを道路の幅を広くする、地区ごとに防災訓練をする、など安全面とコミュニケーションを重視したまちづくりが増えていると思う。何故なら震災当時、道路が狭くて救急車や消防車が通れないとか、あの家には誰が何人住んでいるのかわからないなどの苦情がたくさんあったため、その教訓としてだと思う。そういったことをやり始めたのは非常にいいことだと思うけど、これがあと15年早ければとも思う。

最近、もし今あの時と同じような大きな地震が、神戸の街を襲ったとしたらどうなるのかと思うことがある。今の神戸の街は10年前とは違った街になっている。防災を取り入れた街、耐震補強をした数多くの家など、明らかに10年前の街とは違っている。しかし、本当に以前より被害を少なくすることができるのかと少し不安に感じる。正直、絶対に壊れないと言われていた高速道路もあっさりと折れ曲がり無残にも壊れてしまった。今度もそれと一緒に防災を取り入れたが、結局同じような被害になり「たくさんの負傷者をだしました！」みたいなことにならないのだろうか。他にも気になることはあるけど、住民は、行政、専門家、研究者などを頼るしかない。だからこそそういった機関の人々には、頑張っていただきたい。そうすると、多少のミスはあっても被害を最小限に食い止めることができると僕は思う。

僕達より後に生まれてきた人の中には、阪神・淡路大震災を体験していても覚えていない人が多くなってくる。しかしそれは、年齢的に仕方のないことだと思う。この先阪神・淡路大震災を知らずに生まれてくる子供達はどんどん増えていく一方で、阪神・淡路大震災を覚えている人々が減っていく。僕がそんな中で怖いと思うのは、阪神・淡路大震災の記憶が少しずつ薄れていき最後は、また同じことを繰り返してしまうのではと思うことだ。そうさせないためにも語り部の人による講演会があったりする。ただその話を聞いた人々の時代が来た時、その聞いた話をまた誰かに話してくれるかがとても気になる。戦争時代を生きた人々が、戦争のことを孫にまで話してくれるように次の世代、次の世代と語り継いでいってほしいと思う。

(4) その後(感想)

月日は流れ僕達の住む町にもたくさんの仮設住宅ができていた。小学校の前のとても広い公園も、仮設住宅でいっぱいだった。僕らの小学校生活も始まり、まるで地震がなかったかのように学校へ通っていたし今も高校へ通っている。でもそれはたまたまであり、もしかすると家がつぶれていたかもしれないなどを思うと、今でも寒気がする。「もうあんな大地震来るな」って言って来なかったらそれでいいけど、それはまずないことだからしっかりと次に来る大地震に備えたい。

また阪神・淡路大震災による体験は、長く続いたと思うし今現在も続いていると言ってもいい。というのも、地震によって僕達の住む町の景色が変わった、住民が大勢変わった、街の区画整理が多くなった、学校に防災の授業が入ったなど、もしこの神戸に阪神・淡路大震災のような大きな地震が来てなければ今僕が書いたことはなかったと思う。下町は下町のままで残り、住宅地も今まで通りで大きく神戸の生活を変えることはなかっただろう。そういったことを考えてみると今僕達が過ごしているこの日々は、震災が作った日々だと感じる。家族を亡くした人は今も震災を鮮明に覚えていると思うし、これから先も阪神・淡路大震災を忘れないだろう。だからこそ震災体験はまだ続いていると言いたい。

そんな阪神・淡路大震災は、僕の人生をも変えた。僕の住む第3学区には兵庫県立舞子高等学校があり、そこに環境防災科という学科がある。僕は、その環境防災科3期生として舞子高校にはいり、たくさんある防災を学び、色々な場所で学習し、さまざまな人々とも出会ったりもした。僕にとって環境防災科に入ったのは、阪神・淡路大震災による最後の体験だと思う。ここからは、次にくる大災害に対してどんどん防災を学んで行くのか、それとも普通の大学に進み普通に生活するのか、それとも何もしないで生きていくのか、自分で選択し新しい日々に向かって進まなければならない。でもそれは、新しい1歩であり悔いの残らないように進んでいきたいと思う。

ちなみに環境防災科にはいって僕は、色々な防災関係の行事に参加した。垂水区防災訓練では、地域の人々と一緒に力を合わせ防災に取り組み地域住民の人々との絆を深め、コミュニケーションの大切さを改めて理解した。長田区での防災訓練では、ケガ人の役をした。助けるばかりでなく助けを待っている人の立場になり、被災者(ケガ人)は何を考え、何を待っているのかなどを考えながら参加した。それだけでなく今度は、自分が震災や防災訓練などで体験したことや感じたことを高知県の高校生達と触れ合いながら話し合った。高校1年生の夏には、ネパール王国へも行き日本以外の国の防災をも勉強した。こういったことは、この先地震が多い国日本で生活していくうえでは、かなりのプラスだと思う。正直こういった経験は、専門的な学科の人達だけでやるのではなく、普通科の人達の授業にも1週間の内1時間だけでもいいから防災という授業をいれた方がいいと思う。自分の命を守るための授業だし大人になった時でもいざという時に使えるし行動できる。もちろん国語、数学、英語、理科、社会全て大切だけど、そこに「防災という授業がはいってもありじゃないかな～」と思う。

神戸の街で阪神・淡路大震災を体験した僕達は、ある意味選ばれし者でありこれからどうやって自分達が体験したことを伝えていくかが大きな課題となると思うし、それが今後の神戸に大きく影響してくると思う。また阪神・淡路大震災は、神戸にいた1人1人の心を変えた出来事となったけれど、それは深い悲しみだけではなく強い心と数多くの知識を僕達に与えてくれたと思う。これからも精一杯頑張って生きていきたい。

最後に今回「語り継ぐ」を通して感じたことは、親とかから話を聞くことで改めて震災の怖さや震災当時の様子などがわかりゾクッとした。ちょっとしか覚えていない僕の記憶と親から聞いた話を組み立てた時阪神・淡路大震災の恐ろしさを痛いほど感じた。